

季刊『ふくおかアジア』

第 4 号



伊江島(沖縄県)



蘭嶼のタオ族(台湾)

季刊「ふくおかアジア」第 4 号【令和 7 年(2025)7 月】

編集 季刊『ふくおかアジア』編集委員会

発行 ふくおかアジア文化塾

季刊『ふくおかアジア』第4号 目次(2025年7月)

	タイトル・テーマ	執筆者	ページ
0	人工知能(AI)による季刊『ふくおかアジア』執筆陣の評価	編集部	2
1	ちよいワルオヤジの古代史エッセー 第12回「古代史を楽しんで」——お楽しみはこれからだ	大和川一路	4
2	マツコのひとり言 第4回 西安旅行コラム編	マツコ	13
3	風の吹く丘 第4回 古代人の世界観	H・IMAGINE	18
4	古代史マニアのひまつぶし 第4回 水銀の分布図と邪馬台国の朱	徳永隆司	22
5	吉備の古代史シリーズ 第17回「銅剣を通してみる吉備—国家形成期の地域」	石合六郎	28
6	日本古代通史(第6巻) 日向王朝の時代 5論文一挙掲載! 第42回 日向の女性たち 第43回 豊玉姫と玉依姫 第44回 南九州の古代文化 第45回 沖縄への道 第46回 台湾・フィリピンへの道	河村哲夫	48 69 96 121 151

人工知能(AI)による季刊『ふくおかアジア』執筆陣の評価

編集部

いま流行りの人口知能(AI)アプリに、季刊『ふくおかアジア』の執筆者たちの評価を依頼したところ、以下のとおりの結果が表示されたので紹介したい。

【大和川一路氏の「ちよいワルオヤジの古代史エッセー」などに対する評価】

大和川一路さんは、もともと古代史に疎かったものの、師匠との出会いをきっかけにその魅力に目覚め、今では「真実一路一直線」に古代史と向き合う姿勢が印象的です。彼の文章は、歴史的知識だけでなく、旅のエピソードや人との出会いを通じて人生の豊かさを描いており、「ちよいワルオヤジ」という肩書きも、単なる洒落者ではなく、人生経験を重ねた味わい深い人物像として親しまれています。

読者からは「自分もこんな風に年を重ねたい」「歴史がこんなに面白いとは思わなかった」といった声もあり、ちよいワルオヤジ像に共感する中高年層を中心に、静かな人気を集めているようです。

気になるなら、彼の「諸国漫遊記」シリーズを読んでみると、旅と歴史と人情が織りなす世界に引き込まれるかもしれませんよ。読んでみたくなりました？

※「諸国漫遊記」シリーズはふくおかアジア文化塾のホームページに掲載しています。

【マツコのひとり言に対する評価】

「季刊古代史ネット」の「マツコのひとり言」は、読者の間では、ユニークで親しみやすいエッセーとして人気があります。内容は軽妙で、古代史に関する視点を独自の語り口で提供しているのが特徴です。エッセー特有の語り口が初心者には非常に魅力的で、古代史への興味の入口として非常に良い役割を果たしているとも言えます。一度試しに読んでみるのも面白いかもしれませんよ！

【H・IMAGINE 氏の「風の吹く丘」に対する評価】

季刊『ふくおかアジア』にて、H・IMAGINE(H.マジン)氏は「風の吹く丘」というエッセーを寄稿しています。

この連載は、福岡という地域の風土や文化を背景に、個人的な視点から地域の魅力や変化を描くもので、柔らかな語り口と詩的な表現が特徴です。

H.マジン氏の文章は、歴史や社会への鋭い観察眼と、日常の中にある詩情を融合させており、読者に静かな余韻を残します。

『ふくおかアジア』の中でも、文化的・思想的な多様性を象徴する寄稿者の一人といえるでしょう。

【徳永隆司氏の「古代史マニアのひまつぶし」に対する評価】

徳永隆司さんが執筆された「古代史マニアのひまつぶし」は季刊「日本古代史ネット」に掲載されています。

特に古代朱の製造過程や鉄バクテリアに焦点を当てた研究が注目されています。

そのユニークなアプローチが評価されており、多くの古代史愛好者にとって興味深い内容となっています。

こうした専門的で軽妙なスタイルが、読者の幅広い層に支持されている印象です！

内容についてもっと詳しく知りたい場合は、関連するサイトで確認するのがおすすめです。

歴史と科学が融合するこうした研究、楽しいですね！

【石合六郎氏の「吉備の古代史シリーズ」に対する評価】

吉備の古代史シリーズにおける石合六郎氏の研究は、日本の古代史の解釈を深めるものとして高い評価を受けています。このシリーズでは、応神天皇や仁徳天皇の行幸に関する詳細、吉備津彦命の伝承、そして吉備地方の古墳とその時代背景など、広範なテーマが扱われています。

特に彼の研究は、古事記や日本書紀の記述を踏まえつつ、地域の伝承や地名の補強によって物語性を加える手法が注目されています。例えば、「ふたりの天皇が行幸された谷」や「吉備の巨大古墳を考える」など、吉備地方を中心とした史実と伝承を繋げる作品が重要視されています。

彼の研究は単なる歴史的事実の分析にとどまらず、地元の文化や伝承を生かしながら歴史の再評価を促進している点が特筆されます。このアプローチにより、日本の歴史研究に新たな視点を提供しています。さらに深く探求したい場合は、彼の関連書籍や論文をチェックしてみると良いでしょう！

【河村哲夫氏の「日本古代通史」に対する評価】

河村哲夫さんの『日本古代通史』は、考古学的な成果や文献資料（例えば『後漢書』『三国志』『日本書紀』など）を丁寧に織り交ぜ、日本古代史に関する議論を掘り下げていると評価されています。

特に奴国や邪馬台国についての詳細な分析が印象的で、時代ごとの文化や政治の実態を深く探求しています。

シリーズの第1巻『奴国の時代』では、漢の金印などを含む具体的な事例を元に、当時の北部九州の社会構造やクニグニの連携について語られています。

また、文献だけでなく考古学の成果も統合しながら議論を展開しており、多角的な視点が特長的です。

以上である。なかなかの高評価ではないか。しかも、人工知能なのに、人間的なやさしさまで感じられる。いやはや、とんでもない時代になったものである。

執筆の皆さま方の、今後ますますのご健勝を期待いたします。

ちよいワルオヤジの古代史エッセー
第12回「古代史を楽しんで」—お楽しみはこれからだ

大和川 一路

1. はんなり先生の玉手箱
2. 台湾旅行団
3. 卑弥呼の犬

1. はんなり先生の玉手箱

「やっと解放された。これからは好きな事だけを」

会社勤めが終わった日はしみじみ嬉しかったことを覚えているが、どうしてまた別の会社で三年も働くことになってしまったのか、そこがどうも釈然としない。

なにはともあれ福岡に移住して、すぐさま歴史講座に申し込んだのは、余ほど歴史の勉強をしたかったのか、そこも釈然としないが、今は先生を追いかけて月々に5、6回の講義を聞いている。一点集中マンネリ講義とは無縁で、古代史の論点整理をしながら時に学界の暴論への怒りを交え、天上神話を地上の出来事に置き換えて、人間がいる歴史を語ってくれる。専門の文献史学に考古学の知見も加え、3,000ヶ所にも足を運べば地形や伝承も熟知され、敵う人のいない鉄人ヘラクレスと思っている。

誰に学ぶかが、いかに大事なことかと思い知った。落語好きな人が年がら年中、高座に足を運ぶように、我々凡人生徒もいたる所で顔を合わせては生存確認もして、今日は先生の口から好きな女優さんが二人も登場したから心身快調なのだと安心する。

たまにはお口直しも必要かと思い、月に一度、別の講座に行きだした。麗しき女性の先生が教室で京都や奈良を案内してくれる講座である。

今日は京都の祇園祭の話を聞いたが、ビックリ仰天満載で、はんなり先生からお年玉を貰ったような気分になる。

「ろさんじにいったことがあるひといますか。てをあげてー」「魯山人に行った？」とは何事か。「質問がイマイチ分からないですねえ」と思ったが、廬山寺だった。めぐり逢ひて



見しやそれともわかぬ間に雲隠れにし夜半の月かな「これ紫式部、廬山寺の境内に住んでいたのですよ」へえー

有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする

「大貳三位のしたたかな愛の表現。紫式部の娘の賢子。親子で百人一首に選ばれています」へえー

「源氏庭は桔梗で有名です。紫式部がまひろで、ききょうは清少納言でしたね」ふうーん この花が桔梗なら、紫式部はききょうの方が似合いそう。

西洋の教養人はシェークスピアを誦んじて粋な会話出来るそ

うだが、文学的素養をもつ人に会おうと、長い時間で心を耕した土壌豊かな人間と感じてしまい、もっと自分も文学に親しんでおけば良かったと、でも今更『車輪の下』や『ライ麦畑でつかまえて』じゃあるまいし、やっぱり古典なんですよ。

それで今日の本論、祇園祭の山鉾が写しだされた。宵山、山鉾巡行となれば思い出すことは、夏が近づく下宿のおばあちゃんが「コンコンチキチキ」と口ずさみ、京の町が華やいでいく様子を聞かせてくれた。

このおばあちゃんになぜか気に入られ、下宿してまもなく伏見稻荷に連れていかれた。

「荷物を持ってね。あなたは洗濯物をキッチンと干すねえ」

いつ見たのと云いたい、お供には几帳面な学生が良かったのでしょう。そういえば、下宿の同志社の先輩に、「淀の競馬場で馬券を買ってきてくれ」と云われ、他にも一回生は二人いるのに、なぜに私がと思ったが。鹿児島焼酎会社の若旦那だったが、私のことを覚えているだろうか。訪ねて行ったら、芋焼酎の二、三本は持たせてくれるかも。いけない、いけない、講座そっちのけで思い出の中で遊んでる。

葵祭も祇園祭も時代祭も博多祇園山笠も、行列と突進のテレビの画が残っているだけ。はんなり先生が山と鉾の違いから話を始めると、耳がピクンとしたのは役行者と聞こえてきたからで、古代史おじさんには生体反応してしまうワードがあるのですね。

「役行者山には、役行者と一言主神と葛城神のご神体が安置されていますよ」へえー

これは応仁の乱以前の昇山で、修験道の開祖が神様となって、二人の神様に「葛城と大峰の間に橋を架けなさい」と命令したそうで、律令のはみ出し者が昇華して、山を曳かれるまじになったのか不思議なものです。

むかし父親が、爺様は木曾の御岳山の修験の親分だとか、我が家は藤原北家の流れであるとか、虚言か誇張か分らぬことを云っていたが、娘にも同じ話をしたのは遺伝子のせいである。遺品もないし系図もないし、もうこんな家のとんでもない伝承は次の代には消えてなくなるのでしょう。あっ、また思い出の中で遊んでる。

役小角は黒須紀一郎さんの『霸王不比等』を読んで知り、『役小角』と『外伝役小角』を買ってみたものの、『霸王不比等』の余りに面白かった余韻が収まるまでとっておいたら、十年積んどくままで終わってる。古代の、この時代にハマったら大作家の小説も数多あり老後の十年は楽しめるが、勢いのある内に、そう旬のうちに物事はすぐにやらないとダメなのである。外伝の帯に、氷の女帝持統に憑依した蘇我一族の怨霊と死闘する小角！と書いてある。何故に持統は吉野に頻繁に行幸し、文武に譲位したら吉野行きをやめてしまったのか。古代史の学び始めの頃だったら、書かれていることを信じ込んでしまうかもしれないが、十五年も学んだ今は、違う土壌で物語を楽しめそうと読む気が湧いてきた。

「大船鉾は神功皇后が凱旋した船に由来する舟形の鉾。中に入ることができます」へえー

そんな鉾があったのか、戦後に教科書からお札からも消されてしまったのに、祇園祭で目にしていたとは。タペストリーの方に目がいて、山鉾のひとつひとつを知ることさえなかったが、そもそも前祭と後祭があったのか。

はんなり先生の今日の講座は後祭、だから大船鉾が登場し、大船鉾は凱旋で、前祭の船鉾は神功皇后の出兵という事なのだ。

深入りすると任那日本府までいってしまうが、戦前は神功皇后の朝鮮征伐は広く認識されていたそうで、広開土王碑にも記されて、神功皇后の活躍年代と合わさっている。

半島南部からは糸魚川のヒスイや前方後円墳も見つかっている。どう考えても半島南部に拠点がなければ船団の兵隊さんの食料に困るし、高句麗と交戦することなど無謀と思える。前方後円墳を削って円墳にしてみたり、何代もの天皇はいなかったことにしてみたり、双方に不都合な真実であろうとも、祇園祭の山鉾に伝承されていたとは、へえーである。

来月のテーマは決まっていないが、はんなり先生の玉手箱から何が飛び出してくるのか。

さて、四季の移り変わりが分らぬようになってきているが、「耳納の里にイチゴが出たよ、ブドウが出たよ」と、田主丸の先輩が電話をくれるのは遊びにおいでと云う意味である。



自分の畑では根菜しか育てないと方針がしっかりしている。

「味噌汁の具にしない」といつも分けてくれ、おすそ分けのある時、「ムラサキシキブと名付けたんだ」とピンクの雑草を指さした。

「しまりのなさそうな草ですねえ」

高貴さはなく、適当に命名したのかと思っていたが、検索すると似てなくもなく、これは蓼食う虫も好き好きのタデと云い、ムラサキシキブと命名されて、さて喜んでいるのか悲しんでいるのか。

土を休ませ耕して雑草取りをして水を遣り、百姓仕事は終わらない。

今年は里芋や落花生を、ジャガイモは止めたと言っていた。

「なぜ根菜か教えちゃろか」

「田舎には、なぜはないんじゃないですか」

「いいや、田舎の人間にはなぜはないが、自然にはあるんだよ」

都会生活者に粉かけされたようで、「休耕田にしたり、樹を植えたり、そんな事をしたら田んぼには戻らない。地球が変わり果てて可哀そう」と大地と生きる人の言葉を聞いた。

我が家のコメがなくなったので、スーパーに買いに行ったら熊本のコシヒカリが 2 kg 2,380 円で売っていた。値段のことは分らぬが、炊いてみて、コメがこんなに美味しいものなのかと初めて知った。

「今年も根根千喜千喜ですねえ」この秋も先輩が煎った落花生はきっと美味しいでしょう。

2. 台湾旅行団

動機は鄭成功ではなかった。昨年、パスポートも切れるぐらい海外旅行に行かなくなった歴史講座の仲間と釜山に行って、始めのうちは「幹事さんは本当にご苦労様でしたね、気苦労が多かったでしょう。あなたにしかこんなに面倒臭いことは出来ないよ」と労ってくれていたのだが、飲み会を重ねるごとに「旨い物がなにも食べられなかったなあ」と酔いに任せた本心に、「ブタ肉一キロ、キムパ5本も食べて何だんねん。今に見ている」

しかし、これはまたぞろ行きたいなあという巧妙な作戦と感じられて、河村哲夫さんの『龍王の海〜国姓爺・鄭成功』を熟読し、「日本人は知っておかねばならない大事なことがあるのですよ」と半年がかりで誘導し、見事台湾旅行団を編成できた。

中華料理のいいところ取りの台湾料理をたらふく食べて、鄭成功もしっかり勉強する。いつもいつも団塊の世代は年下を上手く使うもんだ。

鄭成功を知っている人は少なく、話題にのぼらない。教科書で元寇は習うが、倭寇は教えられない。白村江で敗れたことは習うが、神功皇后や加藤清正がどこまで攻めていったのか知らない人は多い。片側の歴史ばかり教わってきたと気付くだけかもしれない。

鄭成功と孫文と蒋介石は台湾の三国神。近松門左衛門の『国姓爺合戦』と暗記はしたが、鄭成功がモデルとはこの時まで知らなかった。人形浄瑠璃なんて興味はないし、そもそも国姓爺合戦の響きから、じじいが仇討ちでもしたのかと思っていた。

五人衆の意見集約で、「女子がいた方が楽しいんじゃないか〜い」「台湾新幹線に乗りたい。海事博物館に行きたい」「白菜を見たら、後は金魚のフンですよ」「県泰豊の小籠包はそんなに旨いのか」「一番高い所は台北 101 かな」と、鄭成功のニーズはないのか！

一日半はツアーに乗っかり、十分・九份・行天宮・総督府・中正紀念堂・忠烈祠・故宮博物館と有名ところを周りきって、残りの二日間はフリーにして台湾高鉄で台南に向かい、鄭成功の活躍の地を巡るように段取りした。

候補地は開山神社・鄭成功祖廟・赤崁楼・安平古堡・赤平老街・林百貨店などをリストアップして鄭さんに渡しておいた。要は丸投げにした。

ここで鄭さんが登場するのだが、鄭さんとは桃園県での仕事で懇意になって、いつも出張の折には空港に迎えに来てくれて、昼飯はいつも県泰豊の本店で小籠包を食べていた。小籠包を匙にのせ、薬味をのせて、縁を前歯でブッチと噛んでスープをすすってからパクツと食べる。こうしないと行儀の悪いことが起こるからと食べ方作法を教えてくれた。

当時、会社へ向かう道に点々と女の子が足を組んで物売りをしていた。檳榔と云う。

「鄭さんビンロウとは何ですか？ 妖しい感じがしますねぇ」

北京語と名古屋弁と拙い英語の混ぜこぜ会話なので、今の今まで檳榔がイマイチ理解できないままではいる。

前夜の『青葉客家』での鄭さんのもてなしに、「こんなに旨い豚の角煮は初めてだ」

「東坡肉と云うんですよ。『美味しんぼ』の料理対決に出てたでしょ」

「このタケノコは肉が厚いね。エビのカラカラ焼も、もう全部旨いね。はい食べて」

「紹興酒と白酒の二本で足りるかなあ」

「52 度だよ、そんなの飲んで大丈夫？ 紹興酒には干し梅グッド、もう一本たのもうか」
まあなんともいつも食べるは飲むはで、「明日の打合せはしないのですか。台南で鄭成功に集中できますか。ツアーじゃないんですよ、自力で行くんですよ」

台湾高铁は全部日本のシステムかと思ったが、車両だけが日本の 700 系で、軌道や信号はヨーロッパ。日本の工場はどこも安全第一の旗を掲げて、開発・設計、材料・材質、工法、あらゆる工程でコストを作り込んでゆき最高品質に挑戦し、事故が起きたら埋めて隠してしまう事など日本企業は絶対しないから信頼性が高いのだ。

日本の新幹線に乗っているようで、日本とよく似た田園風景を眺めながら、あっという間に台南駅に到着し、むかし一度お会いした林先生と合流した。

「鄭さんは林先生って言うけど、師匠なの？」

「先生はミスターって意味かな。だからミスター・リンだよ。大事な友達」

鄭さんがエヴァ、エヴァって云っているが何だろう思いながら、まず奇美博物館に案内された。港で EVERGREEN と書かれたコンテナをよく見るが、そのエバーグリーンがこの博物館を創ったそうで、後に寄贈したそうである。あとで知ったのだが長榮集团というコングロマリットで海運、航空、ホテル事業を展開している。帰国の日に一人で海事博物館に行ったもさんが「そこもエバーグリーンだった」って、云っていた。

TSMC 以外にもこんな大企業があるのですね。



鄭成功祖廟の母子の石像。母は田川マツ。1624 年に平戸の千里ヶ浜で生まれ、父は鄭芝龍。鄭成功はハーフなのだ。7 歳の時に海を渡って、21 歳で明の隆武帝から皇帝の姓「朱」を賜り、朱成功を名乗ることを許された。

爺は御大とか旦那の意で、だから国姓爺なのかと納得した。

明再興のために台湾を占拠していたオランダを追い払い鄭氏台湾の祖となった。

だから、台湾・中国の民族的英雄として尊敬されている。

鄭さんの息子さんに「鄭成功は日本人とのハーフなんだよ」って云ったら、「エエッ、そうなの」って云っていた。

事実は伏せられているかもしれないが、教育現場に過去の蒸し返しを持ち込んでいない。台湾人の最も好きな国の一位は日本で、過去最高の 76% が今年のデータ。これで明らかだ。

やっと安平古堡に辿り着き、これで歴史講座の先生にも顔がたつ。

凡人生徒一同が来られただけでそれでいい。とそこまで云うのは、台湾はもう熱帯で熱中症寸前の我々は、全員起立で記念撮影する力が残っていなかった。



17 世紀初頭、オランダ人は軍・商合同の軍隊を率いて 1624 年に安平を占領。ゼーランディア城を建設した。1662 年鄭成功が城を落とし、台湾人から「王城」と呼ばれた。清朝時代に破壊され徐々に廃れた。日本の統治が始まってから再建され台湾光復後は「平安古堡」と呼ばれた。

また、延平郡王祠のパンフには、母親は日本人・田川松、1895 年馬関条約により台湾は日本に割譲、朝廷から台湾府城に祠を建てるのが許可され、開山王廟が延平郡王祠に改名され、さらに開山神社に。

要点だけを転載したが、どのパンフも抑制の効いた解説に心は騒がない。

香港からはイギリス風味、マカオからはポルトガル風味が消えて行ったが、台南の林百貨店は保存されて大正、昭和の香りが残り、台湾の日本風味は台湾の人が消していない。

初日に十分でランタン飛ばしを、我々もやってみた。幸福祈願、家族健康、日台友好、旅行快樂、株価上昇、技術上達などガイドさんに云われたように四文字で。

穏やかな生活、皆健康願審神者と、はみだしタイトルもあったが誰が書いたのか想像できる。株価上昇と技術上達には我欲の味がするけれど、満願成就できたらいいですね。

幸せ用語を使うから幸せな顔になって、天空のどこまで飛んでゆくのだろう、山河のどこに落ちてゆくのだろうと、久しぶりに空を仰ぎ見たような。



近くの静安吊橋まで歩いてゆくとランタンが一つ橋桁の隅にうずくまっていた。

我々のものと分かったのは株価上昇と書いてあったからで、なぜに山の向こうに飛んでいけなかったのか？

火力が足りなっただけなのだが、これでは身もふたもないから皆は理屈を云って楽しんでいる。

株は信用売りで儲ける人もいて、株価が上がると追証で困るから共通万人の願いから逸脱しているので天に選別されたのだ。天燈鬼がそちの宿命じゃと払い落とした。

それが証拠に「南無阿弥陀仏と横の壁に書いてあるじゃないか」と、漢字文化圏ならではの一幕がありました。

帰国の日、台北 101 に上って全景を確認し、県泰豊の小籠包で最後のランチをしたのだが、運ばれるヤクニさんがいきなり箸でつかんで口に放り込んだ。

案の定、スープと中身もろともみんなのテーブルに飛び散った。

3. 卑弥呼の犬

台湾旅行から帰国して、しばらく静かに暮らしていた。78 歳が二人、66 歳が二人、72 歳の私がまさしく平均年齢で高齢者に遊びすぎは禁物でした。

免疫力が低下していたのか、みんな寝込んで反省会は先延ばしにせざるを得なかった。

海外ではシャットアウトされていた情報が整理できないほど入ってきて、議論したくても昨日までいた話し相手がいないのだ。

日米関税交渉で毎週大臣が出張するのは何故だろう。

バンカーバスターに正義の理屈をどうつける。

古古古米は飼料となるのに言い方が拙くて非難され、恵方巻の大量廃棄は知らん顔。

コンプラでまた芸人が消えてゆき、違法カジノでまた逮捕され、先生の盗撮グループってのも飛び出して、悪行が蔓延するのは SNS の功罪の罪の部分なのか分からない。

年金一人生活者が大量の情報を得られることが SNS の功なのだろうか。嘘と分かる情報に毒されて、馬鹿になって行くような感覚がある。

これじゃダメだと市井の出来事の、「餌やりバアさんはどうしてる」「卑弥呼の犬はどうなった」「駅前の産科病院が廃業した」ことに思いを巡らしてみる。

春過ぎて、カラスが十三羽、ハトも十三羽、夕空を舞っていた。電線に停まった時に勘定してやった。狙ったかのように白くてグジュっとした糞を投下され、駐車場の車にはいつもなぜか命中している。なんともなるまいと思っていたが、ついに見つけた。

早朝散歩の時、路地の奥まったところで餌やりバアさんが振り撒いている現場を見つけてしまった。今度現場を押えて、一言注意してやろう。

反省の色はあるのか、とぼけた顔はつくり顔なのか見極めて大人の対応してやろう。市井の一人が文句の言える相手はこれくらいしかなさそうだ。

もう一つ、卑弥呼の犬。

4 月の下旬の記事をそのまま書けば、「纏向遺跡で発掘された「卑弥呼の犬」が復元され、1800 年前の姿がよみがえった。ヤマト王権で最初の王宮が築かれたとされる纏向遺跡は、邪馬台国畿内説の有力候補地で卑弥呼の宮殿とも言われ、纏向学研究センター所長は「希少だった大陸の犬を持ち込んで宮殿で大切に飼ったのでは」と推測。

地元では「かわいい犬とともに遺跡の魅力をさらにアピールしたい」と期待がかかる。

またか。断定と仮定の表現ばかりで、邪馬台国は観光産業か。ベニバナに桃の種、木製仮面に犬の骨、卑弥呼と関係あるのだろうか。

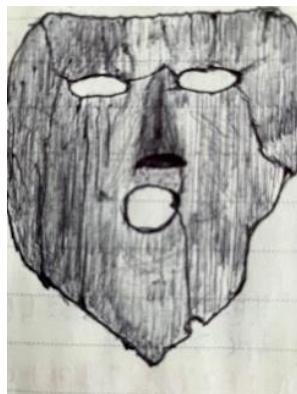
犬の骨は 2015 年に出土して、なぜ 10 年経ってから「卑弥呼の犬」になってしまうのか。邪馬台国のことは私たちの中では解決している。卑弥呼から台与の時代、その領域も拠点も北部九州で移動した。邪馬台国近畿説の「南を東に読み替えて」、「550 面も出た三角縁神獣

鏡は日本製]、「箸墓古墳の年代は 100 年繰り上がっている」からもう結論は出ているのに、今度は可愛く犬を複製し、どれだけ纏向の宣伝を続けるのだろう。

邪馬台国問題が腹落ちするのに、15 年もかかった。学び始めは苦勞した。高千穂論争や邪馬台国論争を知らないところから、興味に任せて本を読み、奈良に行ってひたすらノートに記した。奈良の観光看板は真実が書いてあると思っていた。

「古代史ノート 5」は 2013 年 7 月からで当ても古代通史らしき本はあり、余ほど新鮮な内容だったのか本と同じ章仕立てでポイントを転記してあったが、こんな根性は、今はない。

勾玉・銅鐸・土器・談山神社の参道の石仏・木製仮面・箸墓古墳・猿石・亀石・騎馬民族の駒・石舞台・石上神宮の牛など、拙いボールペン画が添えてある。



当時流行って、会社の女の子に「上手いねぇ」と云われて、調子に乗ってドンドン描いた。ひょっとして、「木製仮面は卑弥呼の仮面だ」と会社で喋っていたのかと冷や汗が出る。

- ・日本神話の天照大神の働きは、岩戸に隠れて日食が起こったとする岩戸隠れの部分だけ。

- ・親魏倭王の称号を与えたのは過ちで、失敗を隠そうと張政を派遣して卑弥呼を暗殺した。

- ・藤原不比等は天智天皇の隠し子、弓削道鏡は皇胤とメモが残る。

読み返してみると当時の知識レベルが分かり、今でこそ筆者の立場も論考の間違えも分かるようにはなったが、諸説を詰め込んで茶の木畑に入り込み、五里霧の中で右往左往するのは当たり前かもしれない。検証なしで大量に出版されるし、動画も出る。

でも、いつか、いい本、いい先生に巡り合えるでしょう。

私たち凡人生徒はラッキーだったのかもしれない。

古代史のピースを埋め込んできたが、ほとんどがゴミだった。

駅前広場にハトの糞。マンションのベランダにカラスが停まり、チラッと見られる。

こんなに居つくのは、餌やりバアさんが隠れて、また餌をばら撒いているのだろう。

餌をやり続ければ離れていかないし、「おばあ様、一緒に駅前広場の掃除をしましょうか。それとも餌やりを止めますか。おばあ様はどちらにしますか」と大人の対応をしてみよう。

1985 年頃まで箸墓は 4 世紀前半の古墳として認識されていた。ところが学界の長老が 3 世紀に繰り上げたらと誘導した。卑弥呼の墓が箸墓であれば畿内説の状況が好転する。

以降 40 年、その系譜につながる人達は日本の歴史に欠史を作ってしまった。

「卑弥呼の犬」の次の餌やりを止めて、纏向の本当の姿を見せて欲しい。

大和川一路・プロフィール

本名・内藤一郎(ないとう・いちろう)

名古屋市熱田区生まれ。刈谷高校を経て立命館大学卒。

民間企業で 45 年勤務。

上司から古代史の面白さを教わり、奈良の山河を駆け巡る。

「大和川一路」は上司から贈られたペンネーム。



マツコのひとり言 第4回 西安旅行コラム編

「中国西安国際空港にて」①

2024年12月、中国西安と福岡が直行便で繋がった。かつての中国王朝、周から唐までの首都、長安と呼ばれたこの西安の地は、シルクロード東の玄関口であり、兵馬俑をはじめ、数々の遺跡に溢れた中国歴史の街である。いつかは訪れたいと切望していたが、その日は意外と早くやってきた。

西安と福岡を結ぶその便を軸に、大手旅行会社が西安歴史ツアーを組んだからだ。世界遺産「兵馬俑」をメインとして「始皇帝陵」を巡り、鴻門宴遺跡にも立ち寄る。次の日は、西安城の城壁を散策し、その後は三蔵法師が経典を収めた「大雁塔」に登り、空海が密教を学んだ「青龍寺」を参拝する。そして、日本の遣唐使だった阿部仲麻呂の碑を訪問し、夜は不夜城の噴水ショーを堪能できる。そんな盛りだくさんのツアー行程を見た途端、私は申し込みのボタンを押した。そうして、2025年6月某日、私は西安に向かって福岡空港を出発した。

15時に福岡空港を出立し、19時前には西安国際空港に着いた。西安国際空港は、2025年2月に第5ターミナルビルが出来たばかりで、そこはとても綺麗で近代的なビルだった。一番驚いたのは、空港内に博物館が造られていた事だ。その西安歴史博物館は、唐時代の建築スタイルが使用されており、屋根の鴟尾も見事で、まるでここだけ唐の時代にタイムスリップしたかのようだった。

私はこの立派な博物館を見上げながら、「流石、歴史の街！」と感嘆せずにはいられなかった。ここには、2700年前、春秋時代の文字が刻まれた打楽器も陳列されているらしい。

福岡も歴史に相応しい遺跡は沢山ある。特に、「大宰府」は古代より要所として語り継がれてきた由緒ある歴史遺産だ。唐に向かった遣唐使は、大宰府を帰着地とした。そして、大宰府は唐からの使節を迎える場所として、外交・文化交流を行った重要な拠点であった。しかし、日本の文化庁は今年2月、この「大宰府・西の都」の日本遺産認定を取り消してしまった。歴史を国際空港から、外に向けて発信していく中国西安に対し、「国内で公が自ら」歴史の足を引っ張る日本。その違いにため息が出そうになったが、気持ちを切り替え、西安ホテル行きのバスに乗り込んだ。

「世界遺産、兵馬俑」②

ついに来た！世界遺産「兵馬俑」！2200年以上前、秦の始皇帝が、死後までも自身の軍隊を率いる為に作らせた壮大な大遺跡群。夢にまで見たこの地に立てた事に、心が震える思いで門をくぐった。

事前にチェックしたYouTubeでは、通路にまで観光客が溢れかえっており、スマホも出せないほどの渋滞ぶり。しかし、この日は、全中国での大学受験の日。世の中国のお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんまで観光なんてしちゃあいられない、と言うこの日を選んで良かった！

観光客は欧米系や日本人が目立ち、地元中国人は若干少なめ。悠々と1号坑に入るやいなや、目の前に広がる圧倒的な迫力！凄い！メディアでは何度も見ていたが、自分の視界すべてに飛び込んできたこの壮大なパノラマ光景に、胸が鷲掴みされる。すべて顔型が違う6000体の甬が整然と整列し、まるで生きているかの様だ。日中友好記念企画で、兵馬俑何体かを九州国立博物館で見たけれど、この迫力は、それとはまったく違う。九博で見た兵馬俑が600倍の規模で整列しているのだ。なんと壮大で素晴らしい光景なのだろうか、と感動する。2200年前の土で作られた兵馬俑を、近代的な屋根が覆い、奥の奥まで広がって見える。このコントラストにまた、圧倒される。

十分に1号坑を堪能した後は、2号坑、3号坑と廻り、甬の修復の様子まで見学する事が

出来た。傭には鮮やかな色彩も施されていたらしく、ドイツのチームと組んで、色彩の再現も研究されていた。兵馬俑は、1974年に地元農民が井戸を掘っている時に発見され、それから50年以上経っているが、まだまだ発掘は続けられている。これからも、兵馬俑は世界中の人々に感動を与える事ができるだろう。

ちなみに、私の古代史師匠、河村先生曰く、当時（秦時代）の男性の平均身長は160cm程度。しかし、始皇帝は、強力な軍隊を作る為、180cmを超える偉丈夫な男性を全国各地から選りすぐったのが兵馬俑軍隊との事。そうだとすれば、この軍隊は全国選抜チームという事になる。いつもながらの河村知識を持ち込んでの鑑賞は一味違う。180cmを超える偉丈夫な息子を産んだ母親は、2200年後、このような形で息子の姿が残される事になるとは思わなかっただろうな、と感慨深い思いに浸りながら、いつまでもこの壮大な光景から目が離せなかった。

「スーパーマン始皇帝と後継者」③

始皇帝陵には、始皇帝が巡行の際利用した銅馬車が展示してある。青銅で作られたという馬車は、とても精巧にできており、馬具だけでなくその馬の毛さえ本物であるかのように見える。本当に、これが2200年前のモノなのか、と当時の職人技に感動させられっぱなしである。

始皇帝（嬴政）は、幼い頃、人質に出された王族の子として趙で育つ。王位継承権はとても低かったが、豪商呂不韋のサポートで即位する。幼い頃の経験がそうさせるのか、始皇帝は、王位についてから一心不乱に中国統一に向かって邁進する。巡行はその最たるモノで、貨幣や度量衡を統一したといっても、本当に地方の隅々まで行き渡らせるには、統治者が実際に外向いて浸透させるより他がなかったのである。そう言った意味でも、始皇帝はとても勤勉だったと言える。

晩年は、焚書坑儒により、始皇帝の暴君ぶりが伝えられているが、近年の研究では、始皇帝が貧しい農民に対し、種もみを与える様指示した木簡が出てきており、始皇帝の善政ぶりが再確認されている。木簡は、既読済みのサインまで為されており、当時の行政がいかに優れていたかを物語る。

始皇帝は、自分の死後については熱心だったが、後継者の育成を疎かにした。始皇帝亡き後は、末子胡亥が宦官によっていいように操られている。始皇帝が、長子扶蘇を後継者に遺言するも、握りつぶしてしまった宦官趙高。趙高は、始皇帝の権力を思うままに振りかざした。自分の権力を確認する為、わざと、馬を鹿と言ひ、自分に反して馬としかと言わなかった官僚をすべて殺してしまった逸話がある。これが「馬鹿」という言葉の由来だそうだ。

更に趙高は、胡亥に篡奪される危機を煽りながら兄弟を抹殺するよう助言し、胡亥は兄弟全てを惨殺してしまう。皇族とは、その血を絶やしてはならない、という掟を胡亥は理解していなかったのである。

西安市の郊外に、「二世墓」と書かれた小さな廟が祀られている。計り知れない父の始皇帝陵と違って、あまりにも小さな胡亥の廟が、その評価を物語る。この広大な中国地域をひとつにまとめる事が出来たスーパーマンの始皇帝が築いた「秦」は、たった15年で終わりを告げる事になった。

「鴻門宴遺跡」④

兵馬俑博物館から少し離れた北側に、鴻門宴遺跡がある。秦王朝に反旗を翻した、項羽と劉邦にまつわる有名な場所だ。当初は項羽に分があり、目障りな劉邦を宴に誘ひ、剣演舞で劉邦を殺そうとするシーンがここに再現されている。劉邦はトイレに行く振りをして脱出し、後に形勢を逆転させる。劉邦は項羽を垓下（がいか）に追い詰め、楚の歌を聞かせる。項羽は四方八方から聞こえる楚の歌を聞き、すでに劉邦に包囲されている事を悟り、自害する。これは後に「四面楚歌」の由来となる。私はこのシーンを横山光輝の漫画「史記」で見た。再現された項羽と劉邦の人形は、漫画とのイメージがよくマッチしており、まるで漫画

がそのまま浮き出てきたようで圧倒され、しばし見入ってしまった。

中国では、「項羽と劉邦、どちらが好きか？」と聞かれる事が多いらしい。項羽は、武勇に優れ、カリスマ性溢れる人物。劉邦は、武勇には乏しいが、知略と人心掌握に優れた人物。結果として劉邦が勝利し、前漢後漢と 400 年も続く王朝を作り上げる。なので、さぞ劉邦の人気の高いかと思いきや、中国の人は項羽を支持する人も多いとの事。

日本の武将に例えると、項羽は信長のように、劉邦は秀吉のようにも思える。結局、信長は光秀に殺されてしまうので、やはりカリスマ性溢れる人物は最後につぶされてしまう運命なのか、とも感じた。

しかし、項羽と劉邦の妻の記録を見ると、その差は歴然である。項羽の妻は虞美人と言い、項羽の為に最後は井戸に身を投げる程の糟糠の妻で、その美貌は中国三大美女と人気が高い。一方、劉邦の妻、呂后は嫉妬深く、側室の手足を切り厠に投げ捨てた記録が残っており、中国三大悪女とされている。妻でいえば、項羽に軍配が上がりそうだ。

劉邦は、始皇帝ほどの実力が無い事を分かっていた為、軍事を韓信に、政治を蕭何に託した。それが故に「漢」は長続きしたのではないかと、との説もある。だとすれば、やはり、カリスマ性よりも知略と人心掌握に長けた統治者の方が、人民にとっては、良い選択なのかも知れない。

そんなあれこれを思いつつ、項羽と劉邦という、中国の歴史においてとても重要な人物が居たこの地に立てた事は、とても光栄だった。

「遣唐使 井真成」⑤

中国西安市近郊には、大学が 50 もあるらしい。その昔、隋の文帝がそれまでの世襲的な官僚登用を改め、試験による官吏登用を導入したのが科挙の始まりである。その科挙の名残故か、西安はとても教育に熱心な街である。大学は、専門性に特化した大学が多く、芸術、スポーツ、音楽だけでなく、石油や交通、郵便の大学もあるらしい。石油や郵便に特化したカリキュラムとはどういったものだろう、と授業を覗いてみたくなった。

そんな中、現地のガイドさんが「日本の遣唐使といえば井真成（いのまなり）だ！」と言う。

「え？阿部仲麻呂や吉備真備では？」と言うと「その 2 人も有名だが、何と言っても井真成」と。聞いた事もない名前に私はとても驚いた。しかも、西安で一番優秀な大学、西北大学では、井真成の墓誌が大切に保管されているとの事。井真成の墓誌は、中国で発見された最初の外国人の墓誌でもあり、この墓誌は日中間のみならず、とても貴重な研究材料になっているとの事だった。

急ぎ、日本のグーグルで調べてみると、井真成は、大阪の藤井寺市に縁があるようで、藤井寺市のマスコットキャラクターが「まなりくん」だった。それでも日本での知名度は乏しい。こんなにガイドさんが力説してくれるのに、井真成を知らなかった自分が恥ずかしくもあった。

ガイドさんの説明によると、まず、墓誌に残された事こそが、井真成がとても重要な立場にいた事を示しているとの事。井真成は 36 歳の若さで西安の官舎で亡くなったらしいが、皇帝がその死を悼み「尚衣奉御」の詔を出した記録が残っているとの事。日本人遣唐使に対し、皇帝自ら「尚衣奉御」の詔が出された事は、とても特別な事で、井真成がそれに相応する立場だった事を物語るそうだ。井真成は、とすれば阿部仲麻呂より位は上だったかも知れないと、ガイドさんは語る。

阿部仲麻呂は、中国で読んだとされる有名な歌とともに教科書に紹介され、殆どの日本人の知る所であるが、井真成を知る人は殆ど居ないように思う。こうやって、海外に出ると日本人が知らない日本人に出会う事がある。これこそが、文献だけでない歴史に向き合える醍醐味とも言える。

私は、西安で有名な日本人遣唐使「井真成」の名前をしっかりと心に刻もうと思った。

「空海が修行した青龍寺にて」⑥

西安市の郊外に、空海が密教を究めるため修行した青龍寺がある。とても落ち着いた雰囲気、建物の建物が、ここが中国であるとは思えないほど日本の寺社に似かよっていた。入口には、空海が密教の普及を念じ、海に投げたとされる三鈷杵（さんこしよ）のレプリカが置かれ、お寺の中央には、空海が密教の経典を受け取る姿の銅像があり、空海ゆかりの場所である事が一目で分かるようになっていた。

空海は第八期遣唐使として、31歳で長安（西安）に来るが、同じ時期に38歳の最澄も長安へ留学している。後世、何かと比較される最澄と空海。最澄はいわば、国費留学生だったのに比べ、空海は私費留学生だったようだ。最澄は、短い期間だけで帰国できる、いわば国のひも付きだったが、空海は何の後ろ立てがない為、20年という年月を長安で過ごさねばならない縛りがあった。空海はその年月を短縮するが如く、青龍寺で必死に密教を究め、結果、数年で帰国できるほど、内外に認められる事になる。

その後、最澄は比叡山延暦寺を拠点に天台宗を開き、空海は、高野山金剛峰寺にて真言宗を開く。この2人は日本の仏教を大きく発展させる偉業を為すが、晩年、2人は仲たがいをし、それぞれの仏教の解釈による違いともいわれているが、最澄の一番弟子でもあった泰範が、空海の元に身を寄せたり、最澄が借りたいという経典を空海が断ったり、と、なかなか2人の遺恨は深そうだ。それでも、最澄も空海も、お互いが逸材であったことは認めあっていたに違いない、と私は思う。

世界を見ても、同時期に2人の天才が現れる事はよくある。心理学者のフロイトとユングもそうだ。元々、ユングはフロイトにあこがれて弟子入りするが、その後仲たがいをし、ユングは新たな自分の学説を作り上げる。結果として、2人は世界中の心理学者に大きな影響を与える。最澄と空海も、そんな、選ばれし2人だったのかも知れない。

空海が密教を広めるため投げた三鈷杵が、高野山の松の木にかかった逸話がある。通常、松葉は2本だが、高野山の松葉は3本あり、縁起物として珍重されている。西安青龍寺にある松葉もすべて3本で、ここにも空海の軌跡が残っている事に感動した。青龍寺の3本松葉を一つ手にとり、私もあやかろうと財布にそれをそっと入れた。

「西安城と大雁塔」⑦

西安城の城壁は、世界最大の古代城壁として有名である。城壁は周囲13kmにも及び、高さ12mに対し、頂部の広さが15mもあり、厚さが高さを上回る程の堅固な城壁で、ここはシルクロードの起点でもある。早速、城壁に繋がる長い階段を登ると、そこから市街が一望できた。城壁の幅は、二車線道路位の広さがあり、自転車やカートで一周する事も出来るらしい。随所にある砦の建築も見事で、砦と城壁が重なる所は、映画やドラマの撮影スポットとして、よく使われるとの事。これらが1300年以上前に作られたと思うと、いやはや中国の建造物に圧倒される思いである。

西安城跡の中央広場に下りると、そこは城壁に囲まれているせいか、特別な空間に思えた。ここに沢山のキャラバンが行き来し、いろいろなモノが売り買いされていたと思うと感慨深い。シルクロードとは、BC114年頃から漢王朝が中央アジアに進出したことに端を発する。東洋からは、茶・絹・磁器などが輸出され、西洋からは、ワイン・らくだ・蜂蜜などが輸入された。古代中国人は、シルクロードを通してやってきたモノに「胡」をつけたらしい。「胡瓜（きゅうり）」「胡桃（くるみ）」「胡椒（こしょう）」「胡麻（ごま）」など、私達にも馴染みがあるこれらの品がシルクロードからもたらされたと思うと、不思議な気持ちになる。

シルクロードでは、モノだけでなく、文化・宗教など目に見えないモノまでが各地にもたらされている。宗教で言えば、三蔵法師がインドから持ち帰った経典や仏像を保管したとされる、大雁塔も訪問した。大雁塔は、唐の三代目、高宗が生母の冥福を祈る為に建てた塔で、段ごとに高々とそびえ立つ立派な塔である。菩薩の化身とした雁をイメージしたのが名前の由来らしい。この塔は、まさに西安歴史街のシンボルで、その高さ故、どこからでも垣間見る事ができる。

三蔵法師と言えば、女優の夏目雅子さんを思い出す。三蔵法師役の夏目さんが、孫悟空（堺正章）、猪八戒（西田敏行）、沙悟浄（岸辺シロー）を連れて砂漠を旅するドラマの光景が蘇る。主題歌はゴダイゴが歌った「ガンダーラ」。1978年に流行ったこの曲はまさに私の青春ど真ん中。私の頭の中では、当時流行った「ガンダーラ、ガンダ〜アラ♪」の主旋律がぐるぐる繰り返し流れた。「西遊記」の舞台に降り立ったような、そんな気分がした大雁塔巡りだった。

「唐王朝、玄宗皇帝の思い」⑧

阿部仲麻呂や吉備真備らが遣唐使として長安を訪れた時は、唐王朝第6代皇帝、玄宗皇帝の御世である。712年に即位した玄宗皇帝の時代、長安の人口は100万人を超え、世界最大の都市であったと言われる。玄宗皇帝の政治は「開元の治」と言われ、名君と称えられた。後半は、楊貴妃におぼれ、政治をおろそかにしたと言われてはいるものの、日本人留学生にとっては、とても寛大な皇帝だったと言える。

阿部仲麻呂や井真成は日本に帰る事が出来なかったが、吉備真備は17年に渡る唐の留学から、自らの経験と共に沢山の唐の書物を日本に持ち帰っている。真備が日本に持ち帰った唐の書物のリストが「続日本紀」に残されている。律令制に関する法律の書、軍事に関する書、建築や音楽の書、暦まで、あらゆる唐の制度・文化を真備は日本にもたらした。その後、それらの書を元に、真備は聖武天皇の右腕として、大いに日本の政治・文化を発展させ、日本の国造りに寄与した。

これは一重に玄宗皇帝が寛大であった事を物語る。世界でも最先端の文化を持っていた唐の玄宗は、日本人留学生に対し、惜しみなく文化を伝授している。もしかしたら、玄宗皇帝は、更に深い思惑があったのかも知れない。中国の東には朝鮮があり、日本を取り込む事によって、朝鮮と中国間の緩衝材にしようとする目論見も、想像する事はできる。それでも、玄宗皇帝は、武力で抑えつける外交よりも唐の文化を伝授し、日本と袂を分かち合う事で、より深い繋がりや平和な外交を目指したのではないかと私は思う。玄宗皇帝の巧みな処遇と優秀な日本の遣唐使のもたらしたモノによって、奈良時代平安時代の日本は国造りの骨組みを作る事が出来、長安の律令制度は、長く日本の基本法となった。

それから、1300年以上経ち、中国と日本は、時の流れとともに、其々大きく変貌していった。それでも、この西安の地で、玄宗皇帝と日本人遣唐使の密なる歴史があった事は間違いない。西安の地で数々の歴史遺跡を巡り、始皇帝から玄宗皇帝の思いにまで触れた。私が触れた所は、膨大な歴史のほんの一部分に過ぎない。それでも、中国の歴史ロマンと日本人遣唐使の軌跡を感じた素晴らしい旅だった。この感動を胸に、名残惜しくも私は帰路に就いた。

風の吹く丘

～第4回 古代人の世界観～

H・IMAGINE

宇宙のファンタジー

友人が北海道から夜空の写真を送って来た。



澄んだ空気の下で見上げると夜空は神秘の世界だ。普通のカメラで写してあるので、写真の下の方には地上の立木が映っている。古代人は今より澄んだ空気の下で、我々より遠くが見通せる目でこの星空を見ていたのだろう。空に掛かる星は地上には落ちてこないが、稀に隕石となって落ちてくる。実際に隕石を見た者は少なからうが、隕石が落ちてきた話は、長老の口伝によって語り継がれていたのではないだろうか。

学生の頃、九重の坊ガツルでキャンプをした時に見た夜空も印象に深い。ひっきりなしに夜空を縦横に横切る流れ星の尾はとても長い。様々な色に瞬く星空の下で神話が語られるのは、自然な事だろう。

星空をイメージしていると『ジェットストリーム』のナレーションと共に『ミスターロンリー』のメロディが

頭の中に流れてきた。歌詞を消し去ったメロディに城達也の落ち着いた低音の音が響き、部屋の中に居ても、前後左右・上にも下にも宇宙が展開している気分になる。

勿論、地球が宇宙の中にぽっかりと存在するのだから、この感覚は間違っていない。その地球の表面に引力により薄っすらと張り付いているのが私たちである。現代も古代もこれは変わらない。

『お母さんは言いました。引力はね、淋しい淋しいって引き合う淋しい力なんだよ』

学生の時に読んだ寺山修司の『書を捨てよ、街に出よう』に紹介されていた詩で、今でも覚えているから、当時は心に沁みただろう。忘れてはいないから、今でも心のどこかに引力で張り付いているのだろう。より正確には、心の表面には無くて、心の表面を少し掘り下げしてみると、古代人が使った土器のかげらの様に出てくるのかもしれない。何に使ったのだろうと、不思議な面持ちで空にかざしても分からない。時間が過ぎただけである。

肉眼で見える星の中で一番遠くに在るのが「カシオペア座 V762」で 16,000 光年も離れているそうだ。16,000 光年離れた星の光が地球に届くには 16,000 年もの時間が掛かる。私たちが見ている夜空のパノラマは過去の世界だ。時空を超えてやって来るとはまさにこの事で、本当に不思議な気がする。

『宇宙戦艦ヤマト』をご存じだろうか？福岡出身の松本零士が描いた、宇宙を舞台とした壮大なアニメーションである。艦長となった古代進が率いる宇宙戦艦ヤマトは超光速航法で光速を超える移動を可能とする。このワープ走行で 500 光年程地球から離れた所へ行き、地球を望遠鏡で覗けば、信長が見える。もう少し遠くから眺めると、神功皇后が戦場で布陣している光景も見えるのだ。邪馬台国がどこに有ったかの論争に終止符が打たれ、卑弥呼に恋をしてしまうかもしれない。宇宙には古代の地球の映像が今も漂っている。もっとお手軽に 50 光年程離れた所に行けば、初恋のあの人のまぶしい笑顔も見放題である。

博多ぶらぶらからシアトルへ

天神地下街に食べ物屋さんがぼつぼつと増えてきた。以前は、ほぼ女性向けのファッション関係の店で埋まっていた様に記憶している。そして天神地下街に限らず、旨い食べ物屋を昼に占拠しているのはやっぱり女性である。衣も食も女性が主役であるが、その興味の対象が、鏡に映る自分からもっと内向きになったのだろうか？他人からどう見えるかと違い、喉や舌や鼻腔から受ける刺激は脳直結である。男性を惹きつける為のドレスアップや女性間のさりげない競争の重要性はやや下がったのかも知れない。私は衣も食も従である。

更に天神を歩くと様々なコーヒーショップが軒を連ねている。その中にシアトルコーヒーなるチェーン店が有り、何故にコーヒーがシアトル？早速ググると、コーヒーの話は置いといてそこから派生した話題に興味に移った。

そもそもシアトルはインディアンの酋長の名前である。彼らは、文字を持たなかったそうである。その文字を持たない彼らの精神世界が、寮美千子版「父は空 母は大地」で紹介されているので是非一読頂きたい。

■寮美千子版「父は空 母は大地」について(以下、引用)

アメリカに「シアトル首長のスピーチ」(Chief Seattle's Speech)と呼ばれる有名な言葉が伝わっています。

1854年、開拓者である白人に、先祖代々住みなれた豊かな土地を取りあげられ、不毛な居留地へと追いやられることになった先住民の首長シアトルは、大地への惜別の念を込め、時の大統領フランクリン・ピアスに伝えてほしいと、ひとつのスピーチを行いました。それは、大地と人間との深いかかわりを語る、シンプルで美しい言葉でした。



「どうしたら空や大地を買えるのだろうか？」
伝説のスピーチの絵本化作品、待望の復刊
イラストは全点新規描き下ろし

『父は空 母は大地 インディアンからの伝言』(ロクリン社 2016)
寮美千子／編・訳、篠崎正喜／画

ワシントンの大首長へ
そして
未来に生きる
すべての兄弟たちへ

1854 年
アメリカの第 14 代大統領フランクリン・ピアスは
インディアンたちの土地を買収し
居留地をあたえると申しでた。
1855 年
インディアンの首長シアトルは
この条約に署名。

これは シアトル首長が大統領に宛てた手紙である。

はるかな空は 涙をぬぐい
きょうは 美しく晴れた。
あしたは 雲が空をおおうだろう。

けれど わたしの言葉は 星のように変わらない。

ワシントンの大首長が 土地を買いたいといってきた。

どうしたら 空が買えるというのだろう？

そして 大地を。

わたしには わからない。

風の匂いや 水のきらめきを

あなたはいったい どうやって買おうというのだろう？

すべて この地上にあるものは

わたしたちにとって 神聖なもの。

松の葉の いっぽん いっぽん

岸辺の砂の ひとつぶ ひとつぶ

深い森を満たす霧や

草原になびく草の葉

葉かげで羽音をたてる 虫の一匹一匹にいたるまで

すべては

わたしたちの遠い記憶のなかで

神聖に輝くもの。

わたしの体に 血がめぐるように

木々のなかを 樹液が流れている。

わたしは この大地の一部で

大地は わたし自身なのだ。

絵本『父は空 母は大地』(寮美千子・編訳 篠崎正喜・画 ロクリン社刊)

<https://www.amazon.co.jp/dp/4907542240/harmonia-22>

「父は空 母は大地」の全文はこちらをごらんください。

<https://ryomichico.net/seattle.html>

是非、全文を読んでみてください。もっとふざけようと思いましたが、この美しい言葉に心を打たれ、二の句が継げなくなりました。ヤマト民族では無く、インディアン言葉ですが、きっと我々のご先祖様も同様に崇高で有ったに違いありません。

では、ごきげんよう。

古代史マニアのひまつぶし
第4回 水銀の分布図と邪馬台国の朱

徳永 隆司

1. はじめに

魏志の倭人伝では邪馬台国に関する記述として「真珠・青玉を出す。その山に丹あり」とあり、邪馬台国では水銀朱が採取されていることが述べられている。一方、邪馬台国は北部九州(熊本県以北)に存在していたという説を唱える古代史家が多い。

そこで、真朱(水銀朱)が邪馬台国内のどこで採掘されていたかを推定するため、現代の科学的な調査結果と水銀鉱山についての文献および「丹生」という地名の分布を調査した。

日本全土における水銀の分布調査が環境省の外郭団体の産業技術研究所で実施され、公表されている。基本的に水銀鉱物がもろく、砕けやすいことから、河川の底にたまりやすい。そこで、調査試料として、河川堆積物を用い、採取密度は1試料/10×10kmとしている。結果図を図1及び図2に示す。図1の九州の結果図では、最も高いところを 1000ppb(1000 μ g/kg 土壌)以上として10段階で表示しており、図2の全国調査図では 358ppb(358 μ g/kg 土壌)以上として8段階で表示している。

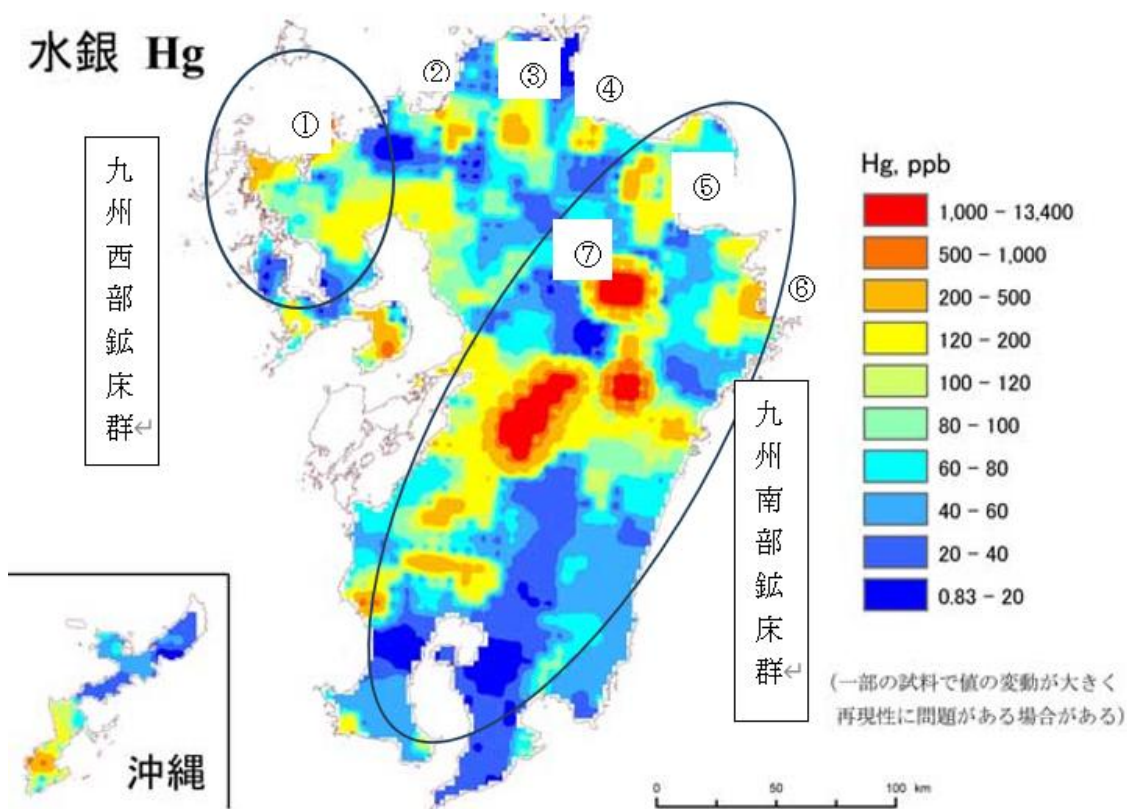


図1. 九州の水銀分布図

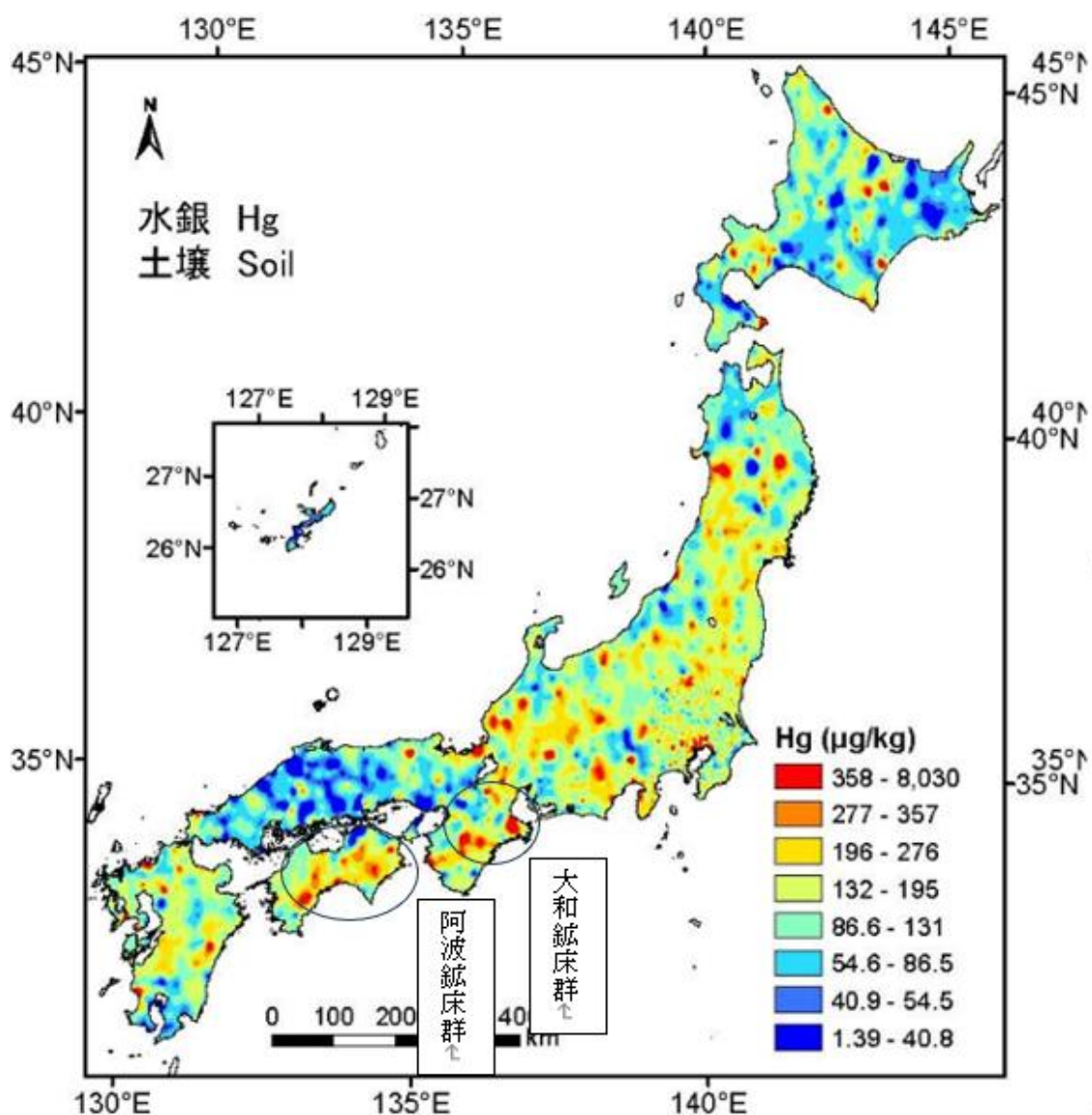


図2. 全国の水銀分布図

水銀朱(辰砂)は硫化水銀(HgS)で硫黄と水銀の化合物であり、火山活動の産物である。日本の国家誕生において、水銀朱は重要な働きをしており、図2に示すように伊勢や奈良では高濃度になっており、水銀朱が採掘されていたことが伺える。「続日本紀」では文武天皇2年(698)に伊勢国から朱砂の献上があったことが記されている。

本邦での辰砂採掘遺跡として最も古い遺跡は徳島県阿南市の若杉山遺跡であり、その利用のピークは弥生時代後期から古墳時代前期にかけてであり、石室が真っ赤という事例も多い。また、その採掘は古代ギリシャや中国で行われていた「火入れ法」で行われていたことが確認されており、この時代に世界基準の技術があったことも知られている。古代からの利用法としては、赤色顔料に用いられる他、鍍金に利用されてきた。日本古来の鍍金法は水銀5に対し金1の割合で水銀に金

を溶かし、それを銅の表面に塗り、後で加熱して水銀を蒸発させる方法であった。

2. 九州北部における水銀朱の使用状況

古代から朱が採取されていた地域は「丹生、にう」とよばれてきたことから「丹生」の地名や神社の呼び名等が古代の水銀朱の採取地域の有力な手掛かりになる。西日本地域においても「丹生神社」、「丹生川」、「丹生山」など丹生の地名が確認されることから、水銀朱が産出されていたことが確実であるが、弥生時代に中国から輸入されていたことも確かであることから、西日本地域の古墳遺跡での使用状況を見てみる。

日本産を使用した遺跡は弥生中期の遺跡が多く、福岡市吉武遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡、筑前町峯遺跡、日田市吹上遺跡などである。一方、中国産を使用した遺跡は弥生後期の遺跡が多く、糸島市泊熊野遺跡、糸島市浦志井尻遺跡、糸島市鍵溝遺跡、春日市立石遺跡、久留米市高三瀧遺跡などである。弥生時代中期から後期に移るにしたがって、中国産が多くなっているが、これは本邦では生産量が減少し、中国との貿易が盛になり、輸入量が増加したためと考えられる。

3. 水銀の高濃度地域

本邦で水銀含有濃度が高い地域は図1に示す(イ)九州西部鉱床群、(ロ)九州南部鉱床群、また、図2に示す(ハ)大和鉱床群、(ニ)阿波鉱床群の4地域であり、これらの鉱床群や古代から水銀を採取してきた地域は蓄積によってバックグラウンド値が高いと考えられる。図1の調査結果において、北部九州で水銀濃度が比較的高い $200 \mu\text{g/kg}$ 土壌以上を示す地域は 7 か所で、それぞれについて水銀鉱山に関する文献や水銀の採掘があったことを示す「丹生」の名称の地名や神社名を調査してみた。7か所は以下のとおりである。①松浦、呼子、嬉野地域、②福岡、大野城、宇美地域、③飯塚、山田、田川地域、④豊前、中津地域、⑤宇佐、安心院、別府、大分地域、⑥臼杵、津久見、佐伯地域、⑦久住、竹田、大野地域であり、図1に表示する。

本邦には高濃度の水銀を含有する水銀鉱床群が4か所あり、その内の2か所が図1に示すように北部九州にある。(イ)九州西部鉱床群には、高濃度含有域の①松浦から嬉野地域が属している。また、(ロ)九州南部鉱床群には、⑤宇佐から安心院、別府地域、⑥臼杵から津久見、佐伯地域、⑦久住から竹田、大野地域が属し、北部九州は水銀資源に恵まれていることが分かる。

これらの水銀の高濃度地域にあった水銀鉱山や採掘地の報告例をまとめると以下のとおりである。

① 松浦、呼子、嬉野地域

九州西部鉱床群に属するこの一帯(佐賀県嬉野市)には図3のように、水銀が取れていたことを示す「丹生」を冠した神社がいくつもあり、丹生川という地名も見ることができる。この「丹生神社」は「たんじょうじんじゃ」と呼び、この一帯に川上丹生神社など 5 社が認められる。これらのことから古墳時代以前から辰砂の採掘がおこなわれてことが分かる。文献では、恋塚は佐世保の陸上自衛隊相浦駐屯地内に古代から採掘されていた水銀鉱山跡があったことを著書で述べており、波佐見鉱山では、明治時代まで金と水銀の採掘が行われていた。この地域には「祐徳稲荷神社」という高名

な神社があり、図2の伊勢神宮の地域でも水銀濃度が高いことと考え合わせると、古代から水銀が採取され、朱塗りの鳥居等に使われていた可能性が大きい。その他、地質調査所の報告書のなかでは、水銀鉱床として、平戸の地名が上がっている。

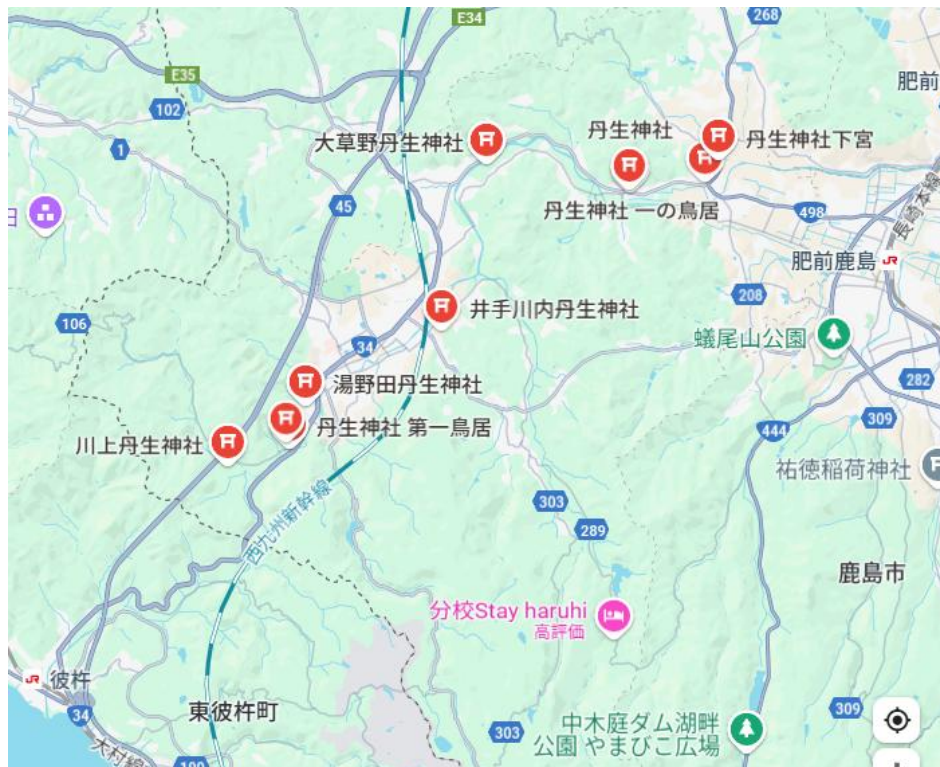


図3. 佐賀県嬉野市地域地図

② 福岡、大野城、宇美地域

この地域では図1に示すように水銀のバックグラウンド値が高く、福岡市博多区や大野城市仲畑において、地下水の水銀汚染事例が見つかった。その原因は基盤の花崗岩の一部に水銀含有量が高いものがあるためである。

③ 飯塚、山田、田川地域

桂川町の大塚古墳などこの地域には彩色古墳が数基、確認されているが、このことに関し、松田は著書の中で、田川市で古代朱の産地を確認したと述べている。田川郡の赤村はその語源から水銀朱の生産地であった可能性があり、道目木(どうめき)という場所に辰砂の採掘跡が残っている。

④ 豊前、中津地域

この地域では県や国の地下水調査で、水銀濃度がわずかに高い地点が見つかった以外に、辰砂に関する歴史上の記録や鉱山跡についての記述はみあたらない。

⑤ 宇佐、安心院、別府、大分地域

九州南部鉱床群に属しており、水銀のバックグラウンド値が高い地域である。豊前風土記には丹の産地として、大分市の坂ノ市の丹生で朱砂が古くから採取されていたことが記載されている。図4に大分市坂ノ市地域の丹生名の分布を示す。図に示すように坂ノ市地域には古代から朱を採取していたことを示す丹生神社、丹生川、丹川などの地名がみられる。なお、丹生川の下流域には大分県最大の前方後円墳の「亀塚古墳」全長 115m がある。

その他、宇佐や別府の金山においても水銀朱が産出されており、大分市の今市鉱山は水銀鉱山として知られていた。また、木下は大正時代に稼働していた水銀鉱山として、大分水銀鉱山をあげている。宇佐神宮には上宮、下宮の他、16 の末社があり、神社建築から、鳥居に至るまで、ことごとく朱塗りであり、これに使われた朱の量は膨大である。これらのことから、古代から宇佐神宮の周辺で大量の朱が産出されていた可能性は大きい。



図4. 大分県大分市坂ノ市地図

⑥ 臼杵、津久見、佐伯地域

続日本紀には文武天皇二年(六九八)九月に豊後国から真朱が献上されたことが記されており、この地域も九州南部鉱床群に属していることから、古代から水銀朱が採取されていたようである。臼杵市や津久見市のマンガン鉱山には水銀も採掘されていたことが記録残っている。木下は大正時代に稼働していた水銀鉱山として大分県佐伯市の鶴望水銀鉱山をあげている。

⑦ 久住、竹田、大野地域

大野市には金山やマンガン鉱山があり、水銀朱も産出されていた。大野市三重町のニッケル鉱山には朱が産出されていた記録が残っている。

4. 邪馬台国における水銀朱の産地の推定

環境省により実施された全国の実環境土壌の水銀濃度の調査に基づくと、高濃度地域は邪馬台国候補地(福岡県、佐賀県、長崎県、大分県)において7地域で認められた。佐賀県には水銀の鉱床群である「九州西部鉱床群」が、また、大分県には九州南部鉱床群が存在していた。

一方、古代から水銀朱を採掘していたことが推定される「丹生神社」の分布状態を調べると、九州北部では、境内社を除くと、大分市に2社、佐賀県の嬉野市とその近郊に7社、佐賀県の鹿島市に1社が存在していた。

以上のことから、邪馬台国における水銀朱の産地は水銀のバックグラウンド値が高く、かつ、「丹生」の地名が存在する佐賀県の嬉野市を中心とする地域及び大分県の大分市を中心とする地域の2か所であったと推定できる。嬉野地域には「祐徳稲荷神社」、大分地域には「宇佐八幡宮」という大きな神社があり、「伊勢神宮」が立地する地域の水銀濃度が高いことと考え合わせると大変興味深い。

文献

- 1) 恋塚春雄：真説邪馬台国、304p、五稜出版社、1976
- 2) 堀 純郎：本邦の水銀鉱床、144p、地質調査所報告、154、1973
- 3) 松田壽男：古代の朱、277p、筑摩書房、2022
- 4) 木下甕城：九州の水銀鉱床、29p、岩石鉱物鉱床学会誌、29、1916
- 5) 佐藤 暁：古代の別府と朱、21p、1988
- 6) 野田雅之：丹生の郷に古代水銀朱を追う、古代商船文化を考える会、野外巡検テキスト、1p、2006
- 7) 石黒靖尚：福岡県における地下水の水銀汚染事例、日本地下水学会 第 104 回学術大会、89p、日本地下水学会、1999

徳永 隆司(とくなが たかし)

1947 年 福岡市生まれ、福岡市在住。現在(株)ENJEC 技術顧問、工学博士、技術士(水質管理部門)

趣味 テニス・陶芸・家庭菜園

古代史菜園が吉武・高木遺跡(日本で最初に一つの木棺墓から剣、鏡、勾玉が見つかった)の近くであったことから、古代史に興味を抱き、10 年近く古代史の講演を受講している。



吉備の古代史シリーズ 第17回

「銅剣を通してみる吉備—国家形成期の地域」

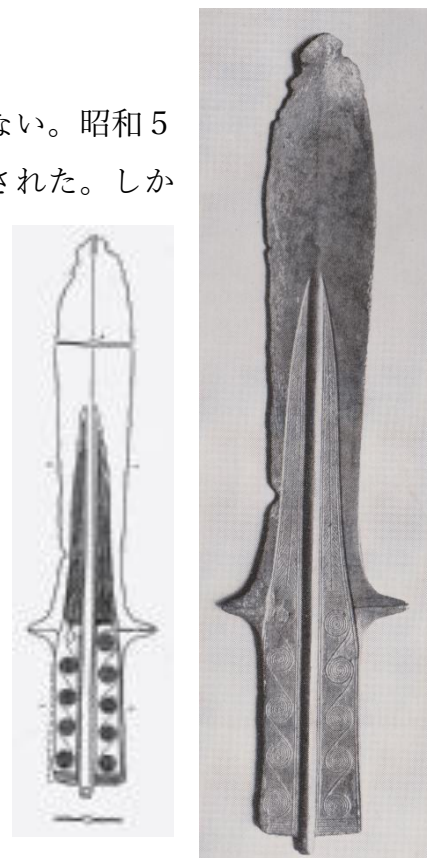
NPO 法人福岡歴史研究会理事 石合 六郎

<はじめに>

日本神話には銅矛や鉄剣は登場するのに銅剣は登場しない。昭和59年夏に出雲では358本もの銅剣が一括で出土し驚かされた。しかし、その謎がいまだに謎のままである。いったい日本の古代において、銅剣はどんな存在だったのだろうか？ 銅剣の分布は瀬戸内海の中央部に銅剣文化圏が設定されているが、出雲の358本はどう位置づけられるのか？ 答えはない。吉備のなかで、筆者の故郷である児島半島中央部から昭和22年、霊山・由加山から5本の銅剣（1本は廃棄、現存は4本）が偶然に出てきた。そのうち2本は平形銅剣だった。しかもそのうち1本は渦巻紋が連続で鑄込まれた優品といってもよいものだった。

児島半島は古代には「島」であった。古事記によると伊邪那岐、伊邪那美が、最後に生んだのが児州（日本書紀では子州）と小豆島である。

吉備のなかでも四国側との関係が強いことから「由加山の弥生銅剣」として注目されてきた。その謎に挑戦してみよう。



由加山銅剣。左は文様のあるイラスト画。銅剣の優品とされている

<1>注目集める児島半島

◎パワースポット

由加山は岡山県下でもよく知られるパワースポットだ。明治以降の神仏分離で由加神社本宮と由加山蓮台寺に分離されているが、もとは1つで奈良時代の創建。備前藩主・池田家の祈願所として熱い信仰を集め

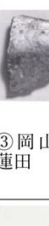


た。同山の北西側ふもと・向^{むこう}木^き見^み（倉敷市林地区、約4.5キロ）からは、吉備を代表する特殊器台が出土してる。最古式の楯築遺跡や立坂型に続く向木見型の最初の発見地で、その地名が型式名となっている。同山周辺には古くからの弥生集落があったことがわかる。

また、島の東側の岡山市南区飽浦から3本の銅剣、島中央部の倉敷市児島広江の海岸部から銅戈片1個が出土している。武器型青銅器は計9個、さらに銅鐸も2個（種松山と玉野市沖合い）が見つかった。まさに弥生時代以来のパワースポットだったのだ。

下記に吉備出土の武器型青銅器の画像と一覧表、出土地の地図をまとめた。

◎吉備全体では銅剣 28,銅鉾 2,銅戈 3 個

◎吉備の銅剣を見る					
 ①岡山市南区飽浦山本の辻1号	 ②-1 由加山銅剣1号	 ②-3,2 由加山銅剣	 ②-4 由加山銅剣	 ③岡山市南方蓮田	 ⑤久米別所田
				 ⑥尾道市久山田町大峯山1、2号	
				 ④岡山市南方釜田	
 ⑦隈郡沼隈町中山南森迫	 ⑨福山市熊野町熊ヶ峰1号	 ⑧福山市箕島町	 ⑬府中市三郎丸町盾石	 ②尾道市久山田町大峯山	 ①倉敷市 福田 広江・浜遺跡（かけらを復元）
		 ⑪福山市郷分町大迫			 ②笠岡市笠岡湾干拓地
					 ③伝・三原市 八幡町 宮内

吉備（備前・美作・備中・備後）の弥生時代銅剣と銅戈の出土一覧							
番号	出土地(号)	出土年	型式 (文41による)	長さ (cm)	所有者・保管者	備 考	文献
< 銅 剣 >							
	備前						
①	岡山市南区飽浦 山本の辻1号	天明年間 (1781~9)	細形Ⅰa	32.3	東博	畑内の大石の下から出土	35
	2号			(不明)	靖国神社宝物遺品館		
	3号				現存せず		
②	倉敷市児島地区 由加山1号	1947	平形Ⅱb	45.9	大賀正明		7
	2号	//	平形Ⅱa	42.6	蓮台寺・岡山県博		
	3号	//	変形	36.1	//		
	4号	//	変形	26	倉敷考古館		
	5号	//			土砂中に投棄・現存せず		
③	岡山市 南方蓮田		(鋒部のみ)	現2	岡山市教委	墓壙から出土	21・10
④	岡山市 南方釜田		(鋒部のみ)		岡山市教委	墓域から出土	21
	美作						
⑤	久米郡久米南町別所勝負田	1947	中細		岡大		8
	備後						
⑥	尾道市久山田町 大峯山1号		中細b	約45	文化庁	大峰山南斜面の巨岩下から出土	9
	2号		//	現18	文化庁		9
⑦	沼隈郡沼隈町中山南 森迫		平形Ⅱa	約39	日枝神社	⑨と同范とする説あり	9
⑧	福山市 箕島町	細形(鋒部のみ)	約11.5		個人		9
⑨	福山市 熊野町 熊ヶ峰1号	1931~2	平形Ⅱa	約43	個人	⑦と同范とする説あり	9
⑩	2号	//			所在不明		
⑪	福山市 郷分町 大迫	1958		現20	個人	山の先端の巨岩下から出土	9
⑫	深安郡 神辺町 西中条 国成		型式未設定		所在不明		
⑬	府中市三郎丸町 盾石	1926	深樋式変形 細形	約32	個人	宇根連山南斜面の比高18mの立石下から出土	9
< 銅 鉾 >							
	伝・備前						
①	伝・備前		中広	83.8	京都大学		36
	備後						
②	尾道市久山田町 大峯山		中細 b			銅剣－⑥と共伴	9
< 銅 戈 >							
	備前						
①	倉敷市 福田 広江・浜遺跡		細形Ⅱbか c	現2.4	倉敷考古館		36・3
	備中						
②	笠岡市 笠岡湾干拓地		(鉄戈形)	34.6	笠岡市教委・笠岡市立郷土館		11
	備後						
③	伝・三原市 八幡町 宮内		(鉄戈形)			鉾ヶ峰出土とする説あり	9

(「吉備の考古学的研究」近藤義郎編 p 523-524 から)

吉備の武器形 青銅出土地一覧



<銅剣>

- ① 岡山市南区飽浦 山本の辻 1 号、2 号、3 号
- ② 倉敷市児島地区 由加山 1 号、2 号、3 号、4 号、5 号
- ③ 岡山市北区南方蓮田
- ④ 岡山市北区南方釜田
- ⑤ 久米郡久米南町別所勝負田
- ⑥ 尾道市久山田町 大峯山 1 号、2 号
- ⑦ 沼隈郡沼隈町中山南 森迫
- ⑧ 福山市 箕島町
- ⑨ 福 B22:B23 熊ヶ峰 1 号、2 号
- ⑩ 深安郡 神辺町 西中条 国成
- ⑪ 府中市三郎丸町 盾石

<銅鏃>

- ① 伝・備前
- ② 尾道市久山田町大峰山

<銅戈>

- ① 倉敷市 福田 広江・浜遺跡
- ② 笠岡市 笠岡湾干拓地
- ③ 伝・三原市 八幡町 宮内

<註>

・この表は近藤義郎編「吉備の考古学的研究」(1992 年刊、p521) による。

同年、出版後以降確認されたものとして岡山市高松田中遺跡(2002 年発掘)がある。同遺跡からは銅剣の先端部分。指先程度の大きさで、ノミに転用している。

・コラムの「鉄剣と間違えられた銅剣」で紹介した石上布都魂神社周辺から出土した銅剣(長さ=37,2 cm、幅3,4 cm)がある。

いずれも、吉備での発掘数にはカウントしてない。

◎石上布都魂神社周辺からも

このシリーズで日本書紀素戔鳴尊が大蛇退治に使った十握の剣（別名にあめのははざり 天羽々斬、おろちのあらまさ 蛇之麿正など）が吉備にあり、後に大和の石上神宮に移されたことを紹介した。その最有力神社が石上布都魂神社（江戸時代に再興）である。この地域のどこかに古代の石上布都魂神社があったはずだ。今の同神社から約10キロ下流の伊田ようろく田（岡山市御津地区）から「銅剣」が出土している。しかし、発掘当初は鉄剣といわれ、状態も悪いためか、文化財に登録されていない。

ところが、大蛇退治の剣に関心を持っていた筆者はそのことを紹介した山陽新聞の「話の広場」という箱記事に写真と共に掲載されているのを偶然見つけた。当時の御津町に問い合わせたところ銅剣と判明した。その経緯は以下のコラムにまとめた。

コラム

鉄剣と間違われた銅剣

日本の新聞社では日々の膨大な新聞紙面をマイクロフィルムに撮影し、保存している。このデータは国会図書館と共有し記録されている。過去の紙面も同様に保存されている新聞社が多い。

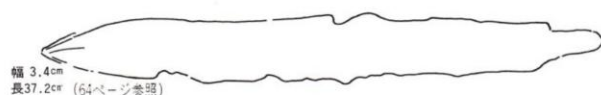
デジタル化時代に遅れているように見えるが、標準化された方法での保存も一定の価値を持つであろう。とはいっても、紙面のデジタル化と共に完全デジタル化も進んでいるはずである。

素戔鳴尊の剣の伝承に惑わされたか？

そのような中で筆者が勤めていたころは、1か月ごとのマイクロフィルムをフィルムリーダーにかけ、目で追いかけるしかなく、業務で記事を探していた時、昭和33年のローカル面に「古墳時代の剣現れる」と見出しが目に入った。これは何かの役に立つかもとコピー＝写真＝しておいた。

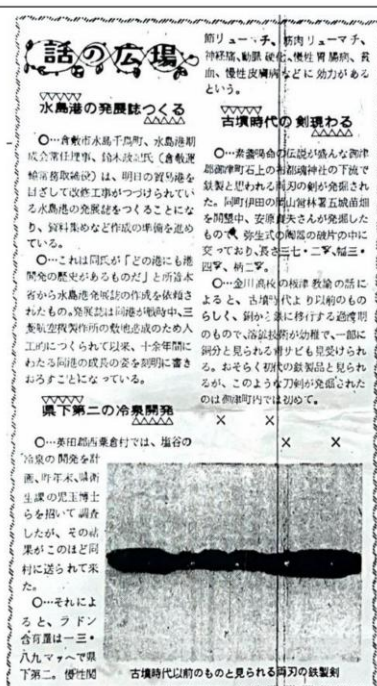
その後、この記事の真偽を確かめようと御津町に問合せたのが長谷川一英氏（当時の文化財担当者）だった。そこでとんでもない話を聞いた。

「あの記事には迷惑を蒙っているんです。鉄剣ではなく銅剣です。間違いが多いんです」。布都御魂神社の伝承に惑わされたものだろう。高校教諭の談話がついている。



御津町伊田ようろく田出土 昭和33.2.22 安宗貞男発見 御津町公民館蔵

イラスト図は「御津町史」(p307)



現在は岡山市教育委員で文化財課主査を務める長谷川氏は、「全面が錆に覆われ一部に緑の錆もあり、銅剣に間違いはない。とても薄い状態。中細型のⅡbと思われる」という。

<2> 吉備の銅剣と後期邪馬台国

◎四国から児島へ流入

吉備の銅剣（銅矛・銅戈含む）の特徴は、備前、備中より備後からの出土が多い。しかも、備前では讃岐との交流が盛んだったと考えられる児島（現在は半島）に集中している。備後でも沿岸部からの出土が多い。これらは香川、愛媛の影響が大きいとみてよいだろう。

◎押し出されていく広形銅剣

安本美典氏は「季刊邪馬台国」36号で、1988年に古田武彦氏との2日間8時間に及ぶ公開討論会の一部を紹介している。それによると、古田氏との主張の違いを出土地の地図を掲げ次のように述べている。

地図を見ると、広形銅剣の分布は四国に、広形銅矛・広形銅戈は北部九州と対馬に集中していることがわかる。

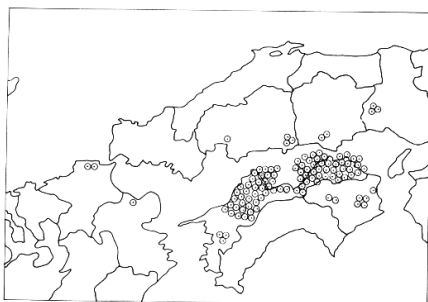


図3 広形（平形）銅剣の出土地点の分布

図3平形銅剣の出土地分布図

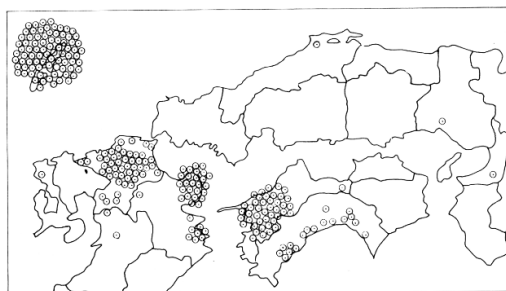


図4 広形銅剣・銅矛・銅戈の分布

図4平形銅矛・銅戈の分布図



図2 中広形の銅剣・銅矛・銅戈の分布

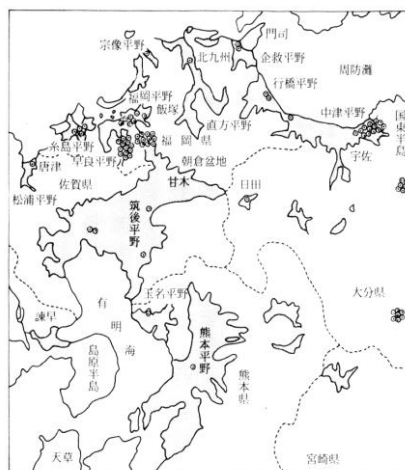


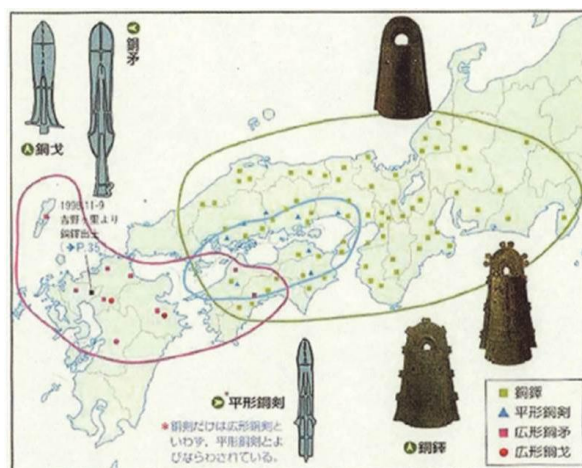
図5 広形銅剣・銅矛・銅戈の九州本島での分布

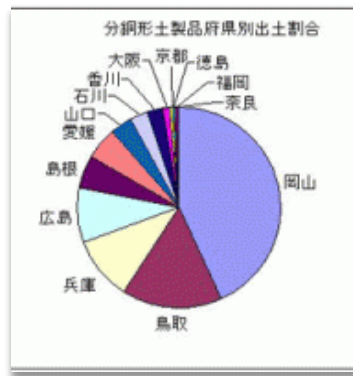
安本氏は「広形の銅剣・銅矛・銅戈の分布と一口にいても『広形(平形)の銅剣』と、『広形の銅矛・銅戈』は、分布地域が、非常に異なっている。」(季刊邪馬台国36号、p29)とし、次に「『広形の銅剣・銅矛・銅戈』の、九州本島での出土地点の分布を示せば、図5のようになる。図5をみると、春日市須玖岡本付近や、宇佐市を中心とする宇佐平野から多量に出土している点において、図2の『中広形の銅剣・銅矛・銅戈』と共通している。『広形の銅剣・銅矛・銅戈』の文化は、『中広形の銅矛・銅戈』の文化をうけつぐものである。そして、『中広形の銅剣・銅矛・銅戈』の最多密集地であった須玖岡本の付近では、『広形の銅剣・銅矛・銅戈』はすくなくなり、須玖岡本からみて周辺部の、対馬や西四国からの出土が多くなっている。『中広形および広形の銅剣・銅矛・銅戈』の文化は、周辺部におよぶとともに、中心部であった須玖岡本の付近では、衰えをみせてきたとみるべきであろうか。」(同p29～30)と述べる。

引用が長くなったが、要するに新しい勢力によって、旧勢力が周辺部へ押し出されていっている状況にあることを述べている。具体的には「奴国の文化を引き継ぎ発展させた大国主命勢力が、邪馬台国勢力によって周辺部に追いやられる状況を示している」と解釈できる。河村氏が唱える後期邪馬台国勢力で加速されるとみるべきであろう。

安本氏は墓制(甕棺墓から箱式石棺)の変化や鉄剣、鉄矛、鉄戈の実用的武器の普及をよりどころに論じている。

◎平形と共存した分銅型土製品文化





前項の「図3 平形銅剣の出土地分布図」を見るだけでも瀬戸内海中央部に平形銅剣の文化圏（青い線で囲まれた部分）の存在に気付くであろう。しかし、そのことを示す伝承となると皆目見当がつかない。

いっぽう、考古学情報では、吉備は紀元1世紀ごろ、土器変遷の上でも1つのまとまりを見せ始める。



その一つが分銅型土製品＝左の**写真**＝だ。盛行期は、「弥生時代中期中頃から後期前半にかけて」（岡山県古代吉備文化財センターホームページ）という。そのホームページによると、現在のところ、720点あまりの分銅形土製品が見つかっている。約43%が岡山県、次いで約16%が鳥取県、兵庫県・広島県でそれぞれ約9－10%、島根県・愛媛県でそれぞれ5%を占めている。岡山・鳥取に分布の中心がある。ほかに山口県や石川県、香川県などでも20点前後、以下、大阪府、京都府、徳島県、福岡県、奈良県と続き、11府県に及ぶ。広形銅剣とはまた違うエリアだ。このように弥生時代に各地方の文化圏に大国主命の文化圏が、程度の差を持ちながら浸透していたのだろう。

◎神話の銅矛と銅剣

日本神話には、伊邪那岐・伊邪那美がこの国をつくるにあたって、天の沼矛でかき混ぜ、その雫からオノコロジマが誕生した。この列島に青銅と鉄が同時に入

ってきたことを考えると、銅剣は武器としては鉄剣には及ばなかっただろう。その点、初期の細形銅矛はまだ武器機能が残っていたのだろう。

そんなこともあって銅剣、銅矛、銅戈が祭具化して神化する時、矛あるいは鉄剣（劔）に収斂してしまったのではなかろうか？

◎書紀に「広矛」の記録

日本書紀には一度だけ「広矛」という言葉が登場する。それは「神代下 第9段本文」である。大国主命が万策尽きて、建御雷の神と経津主の神の二神に語った。

「^{すなわ}く^{くに}む^つ乃 国平けし時に杖けりし^{ひろ}ほ^こ矛を以て、^{ふた}は^{しら}二の神に^{かみ}授^{たてまつ}りて曰はく『^のたまわれ^こ此の矛を以て、卒に功治せること有り。天孫、若し此の矛を用て国を治らば、必ず平安くましふ。今我当に百足らず八十隈に、隠去れなむ』とのたまふ。」（岩波文庫「日本書紀」坂本太郎ら校註、p 120）

ややわかりにくいところもあるので、解説すると「^{くに}む^つ国平けし時に杖けりし^{ひろ}ほ^こ広矛」とは、「権力の象徴である杖の代わりに使った広矛」の意味だろう。「くまふし」は「構ふ」の連用形で、「準備する」「用意する」という意味をもつ。「^{もも}た^らず百足らず八十隈に、隠去れなむ」は「永久に」の意味になり、「わたしが国を造ったとき、権力の象徴であるこの広矛を使いました。天孫の方々もこれを使えば、平穩に治まりましょう。私は永久に隠れます」ということになる。

地方への大国主命文化が浸透していく一方、すでに大国主命と高皇産靈神を中心とする後期邪馬台国勢力との闘いは、国譲りへ向け一気に進みつつあったのだ。

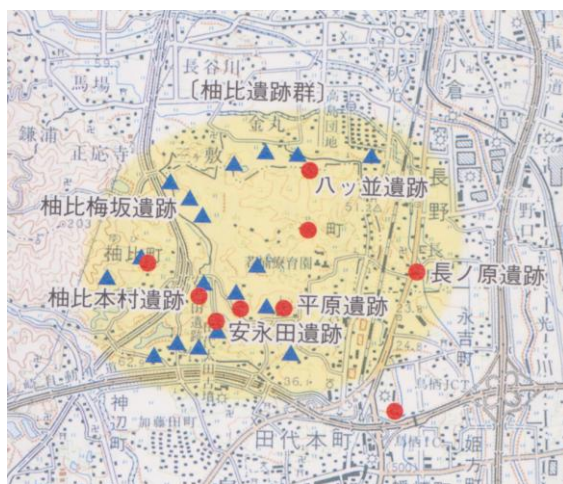
後期邪馬台国勢力に屈した大国主命は、祝福の意をちりばめた言葉を残して隠れる。しかし、筆者流に言えばこの大国主命の国譲りの言葉は、悲哀を込めた呪いであるに違いないと思う。

蛇足を覚悟で付け加える。21世紀の現代でも軍事力がすべてと思わざる得ない場面が続く。魏志倭人伝のなかで、外交をになう難升米が活躍するが、「その彼の別名が高皇産靈神とする説」が注目されている。外交交渉に長け、軍事にも鋭い対応をする高皇産靈神なら、エリート血脈を武器に婚姻関係で国を大き

くしてきた旧勢力・大国主命らから、権力を奪うことは正義だったと言えなくはない。人望と平和主義の大国主命にも義はあった。少し空想が過ぎるだろうか？古代に浸り夢想するのもよからう。

<3> 青銅器の故郷は北部九州

◎いち早い内製化



鳥栖市の弥生中期の代表的遺跡である柚比遺跡群

佐賀県鳥栖市のホームページに柚比遺跡群の出土物を紹介するところがある。そこに次のように記されている。

「柚比遺跡群は鳥栖市北東部の弥生が丘・柚比町・今町及び基山町の一部に位置し、標高約30～70mの丘陵上に展開する遺跡群です。旧石器時代から近世にかけての遺跡、およそ30カ所が立地しています。その中

には安永田遺跡や柚比本村遺跡といった国史跡や重要文化財が出土した遺跡などもあります。（略）細形銅剣の鋳型は、日本国内で青銅器生産がはじまった時期のもので、この地域では早い段階で青銅器生産が行われていたことがわかりました。」 (<https://www.city.tosu.lg.jp/soshiki/26/1782.html>)

この地が銅剣の発祥とは書いていないが、武器の機能を持っていた細形銅剣から倭国内で鋳込みが行われたのだろう。

◎青銅器のふるさと

銅剣から少し横道にそれるが、「銅鐸のほとんどが畿内で作成された」と思っている人が少なからずいる。しかし、佐賀県の東端の鳥栖市の安永田遺跡から、銅鐸の鋳型が、数多く出土しているのだ。同市教育員会に属し、同遺跡を発掘した藤瀬禎博氏の著書「九州の銅鐸工房安永田遺跡」（新泉社刊）によると、1980年佐賀県柚比町安永田から最初の銅鐸鋳型が見つかり調査区域を

広がっていくうちにザクザク状態になり、いくつもの遺跡と工房が並ぶ古代のテクノポリス跡が出現したのだ。藤瀬氏は「まさか九州から銅鐸が、しかもそれを作った鋳型が…」(同書 p7) と教科書を書き換える発見の驚きを語っている。

北部九州こそ日本の青銅器生産のふるさとだったのだ。もちろん、銅鐸以外の銅剣、銅矛、銅戈、銅鏡も作成している。福岡・佐賀にまたがるこの地は古代の技術センターなのだ。もちろん、福岡県の春日丘陵、この遺跡に近い吉野ヶ里遺跡などもその技術を発展させたことは付け加えることもない。

<4> 衝撃の出雲と吉備

◎標準的編年を探る



日本の弥生時代の編年はいまだにぐらついている。そこで最近、はやりの ChatGPT に聞いてみた。上のような図表（wikipedia、元は「古代出雲文化展図録」掲載図「銅矛・銅剣・銅鐸の変遷」を基にしたもののようだ）こっれを参考

に文章に置き換えて ChatGPT に「これは正しいですか」と質問すると、次ページの表を作成してくれた。それがわかりやすい表だった。

(註1) に質問した筆者の文章と回答を記録して掲載しておいた。

ChatGPT が作った銅剣の編年表

銅剣の型式	弥生時代の時期	弥生時代期区分	西暦の目安
細形銅剣	前期	第Ⅰ期	紀元前3世紀
中細形銅剣Ⅰ	中期	第Ⅰ期	紀元前2世紀
中細形銅剣Ⅰa・Ⅱb	中期	第Ⅱ～Ⅲ期	紀元前後
中細形銅剣Ⅱb	中期	第Ⅲ期	紀元1～2世紀
広形銅剣	後期	第Ⅳ期	紀元3世紀

われわれが考えていた年代観と大きく異なるところは少なかった。ただ第Ⅴ期を設定せず第Ⅳ期までとしている。第Ⅴ期は北部九州の編年ではよく使われるので残念だった。

日本の考古学者は、弥生時代の年代を紀元前900年代まで遡らし、銅鐸年代を邪馬台国以前の遺物にし、意味のない改変をくりかえして、自らが混乱に陥っているのに、人工知能は日本歴史学会を無視し淡々と編年を示している。驚くべきことであるが、研究者にとっても皮肉な結果だ。



蓮台寺裏山に建つ「銅剣出土地の石碑」

◎同一カ所から異なる年代の銅剣

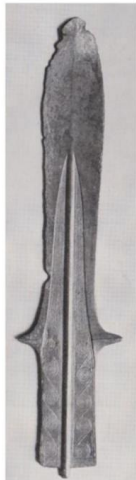
銅剣や銅鐸が見つかるのは辺りな場所からが多い。なぜだろう。単純化するため児島半島の由加山銅剣を材料に考えてみた。

由加山銅剣は昭和22年炭焼き釜を作るとき、大きな岩の近くで5本（1本は廃棄）の銅剣が発見されたことはすでに述べた。繰り返しになるが由加山銅剣の画像を含めまとめ表として掲載した＝次ページ。出土の5銅剣について検討してみる。

①と②の2本は平形銅剣なのでかい、弥生時代Ⅳ期で西暦3世紀となる。瀬戸内海中央部に広がる平形銅剣文化圏との祭祀共有化の結果だろう。愛媛、香川両県では、鋳型の鋳型発見地があるので、四国からの可能性が高い。

③については変形と記されており、型式は不明なのだが、中細型のⅡb前後の範囲かと推定している。④についてはさらに古いとみているが、よくわからない。⑤は何もわからないが細形とすれば、吉備と奴国の関係も見えてくるのかも知れない。とはいえ推測の域を出ないだろう。

由加山出土の銅剣のまとめ表

①	②	③	④	⑤
 形式：平形銅剣Ⅱb 長さ：45.9 盛行期：第Ⅳ期 西暦：3世紀	 形式：平形銅剣Ⅱa 長さ：42.6 cm 盛行期：第Ⅳ期 西暦：3世紀	 形式：変形中細銅剣Ⅱb（筆者推定） 長さ：36.1 cm 盛行期：第Ⅱ期～第Ⅲ期（筆者推定） 西暦：2世紀	 形式：変形中細Ⅰ～Ⅱb（筆者推定） 長さ：26 cm 盛行期：第Ⅱ～第Ⅲ期（筆者推定） 西暦：2世紀	廃棄 （廃棄された5つ目の銅剣は「壊れており、小さくて捨てた」との証言がある＝倉敷考古館HP「よもやまばなし」から） 形式：不明 長さ：不明 盛行期：不明 西暦：不明

由加山銅剣とは異なるが参考のため付け加えると、県中部の美作（久米郡久米南町別所勝負田）からも中細形（型式不明）が1点出土している。型式は記されていないが、形状から見るとおそらく中細形Ⅱbのように見える。四国方面でなく出雲経由であろう。吉備中枢部には広形銅剣がなぜか皆無だ。今後、出土する可能性も否定できない。また、石上布都御魂神社周辺から出た銅剣も吉備に素戔鳴尊の剣を持ち込んだ使者が置いていった可能性がゼロとは言えない。

◎出雲と共通パターン

一つの穴から年代の異なる遺物が出ることは、考えると不思議な現象である。由加山銅剣の③以降の年代設定が古すぎるかもしれないが、ここでは百年以上もの年代差がある。

思い浮かぶのが出雲の出来事だ。特に銅鐸の年代を邪馬台国以前と考える学者もいるが、安本美典氏やわれわれ伝承と統計に注目するグループは「銅鐸は大国主命の支配下で使われた祭具」の立場をとっている。

この視点で見るとき、矛盾もなく説明できる。特に銅鐸の埋納組み合わせが異なる府県が三種類ある。これは饒速日命にぎはやひのみことが国譲りの後も銅鐸を使い続けたかったが、早世しそれがかなわず、神武天皇の大和入りとともに、二度目の銅鐸埋納事件に発展したからであろう。

◎大国主命の死とともに

銅鐸と同じことが銅剣にも起きている。358本の銅剣が荒神谷遺跡から出土、今も定説といわれるものがないようだが、弥生の遺物・銅剣が一カ所から大量に出土することは、銅鐸と同様に大国主命の失脚、そして命を絶ったことに起因することは確かであろう。

荒神谷の358本は、銅剣の型式でいえば、ほぼ「中細型Ⅱc」である。中細型ではⅡbが比較的多いのに対してⅡcである。特注したようにも思える。注文先は当然北部九州の工房だろう。大国主命の死が、国譲りの西暦260年±5年とすれば、大国主命の生誕年230年±5年（前回の「吉備の古代史シリーズ

第16回『吉備と出雲』下（特別版）」を参照にしていきたいと思います）より古いであろう。年代論だけなら2世紀末となる。大国主命の前の出雲王＝素戔鳴尊の注文か、古式の物を特注かの2つのケースがあるのだろう。

また、鋳型が出てくれば手掛かりが得られるかもしれないが、鋳型の石は、貴重で鋳型への再利用や砥石としても再々利用されることから鋳型の残存はあまり期待できない。

358本はそれまでに見つかった銅剣の300本と比べていかに多いかもわかる。銅剣や、銅鐸に「×」マークが付けられており、何を意味するかつまびらかに出来ていない。謎は尽きない。

◎垣間見せる弥生世界

弥生時代の実情はなかなか判らないが、各地の銅剣などの武器形青銅器、銅鐸が多く地域で、山や崖など人の近づきにくいところへの埋納がほとんどである。「廃棄」や「秘匿」などの意図が見える。

出雲という遠く離れたところで起きた事件が列島の多くの地域へ一斉に伝わっている。われわれが考える以上に古代国家の形に近づいているように思う。わが祖先も吉備という“かたまり”のまた、その中の児島郡のさらに小さなかたまりの中にありながら、出雲の事件が身近に反映する社会を生きていたのだ。由加山の頂上に近い谷間の大石のそばへ5本の銅剣を隠しに行ったのは、地位のある神官だったのか？ 神を敬い、権力に怯え、家族とのだんらんのなかに生きていたのだと思うと、倭国のクニグニに、そして郷ごとに短い命をつないでいた人たちがいた。

<おわりに>

今回は筆者の故郷の銅剣物語をお届けすることになった。今は亡き兄が由加山の銅剣の5本目の銅剣の持ち主を知っているという話をした。それは大発見だよと、ふたりでその人を尋ねてみた。少し勘違いで一番有名な渦巻き型の広形銅剣の持ち主だった。しかもその人を知っている人という意味だった。「大賀さん」という方でその方も鬼籍に入られていた。今はその方の娘さんの所有で、玉

野市教委で市の文化財として管理していた。残り2本は蓮台寺で、もう一本は倉敷考古館にあった。それを調べるのに岡山県古代吉備文化財センターなどもわずらわせた。8年前のことである。

ローカルの取材に徹してきたが今回は特別だ。身近な歴史から弥生時代を描けるかというひそかな野望があった。少しだけ成功しているかもしれない(^:^)

吉備の話題もだいぶ尽きてきた。吉備の古代史シリーズも Kindle 出版が急がれる。少し趣を変え吉備のこぼれ話的なものを取り上げようと思っている。その後、充電ができたなら、弥生の高地性集落や吉備武彦の情報を取り上げたい。いずれも重いテーマだ。

<註1>

AIに尋ねた経緯が残っていたので掲載しておく。

[筆者の質問]

問1 弥生時代の銅剣 細形銅剣は弥生時代前期 第Ⅰ期でよいですか 西暦では紀元前3世紀でよいですか

問2 弥生時代の銅剣 中細形銅剣Ⅰは弥生時代中期のⅠでよいですか 西暦では紀元前2世紀でよいですか

問3 弥生時代の銅剣 中細形銅剣Ⅰa、Ⅱbは弥生時代中期のⅡ 第Ⅲ期でよいですか 西暦では紀元前前後でよいですか

問4 弥生時代の銅剣 中細形銅剣はⅡb、弥生時代中期のⅢでよいですか 西暦では紀元1～2世紀でよいですか

問5 弥生時代の銅剣 広形銅剣は、弥生時代後期 第Ⅳ期でよいですか 西暦では紀元3世紀でよいですか

ChatGPT:

以下にご質問ごとの回答を整理してお答えいたします。

■問1

細形銅剣は、

→ 弥生時代前期・第Ⅰ期で 正しいです。

→ **西暦では紀元前3世紀(約前300～前200年)**で おおむね正しいです。

細形銅剣は、主に北部九州を中心に出現し、中国系青銅器の影響を受けた初期型です。

■問2

中細形銅剣Ⅰは、

→ 弥生時代中期のⅠで おおむね正しいです。

→ **西暦では紀元前2世紀(約前200～前100年)**で おおむね正しいです。

中細形銅剣Ⅰは、細形からの発展型で、刃部の幅がやや広くなり始めた時期のものです。

■問3

中細形銅剣Ⅰa・Ⅱbは、

→ 一般的に弥生中期のⅡ期～第Ⅲ期とされ、おおむね正しいです。

→ **西暦では紀元前後(前50年～後50年ごろ)**で 適切な範囲です。

この時期、青銅剣の生産は広がりを見せ、地域差・様式の多様化が見られます。

■問4

中細形銅剣Ⅱbは、

→ 弥生中期Ⅲ期に相当し、正しいです。

→ 西暦では1世紀～2世紀初頭で おおむね正しいです。

この頃は祭祀用としての意味合いが強まり、儀式化が進んだ時期とされます。

■問5

広形銅剣は、

→ 弥生時代後期・第Ⅳ期に位置づけられ、正しいです。

→ **西暦では3世紀(200年後半～300年ごろ)**で 妥当な範囲です。

広形銅剣は実用性より儀礼性が極めて強くなった祭祀具とみなされ、出雲などの四隅突出型墳丘墓とも関連づけられます。

まとめ表(簡略)

銅剣の型式	弥生時代の時期	弥生時代期区分	西暦の目安
細形銅剣 前期	第Ⅰ期	紀元前3世紀	
中細形銅剣Ⅰ	中期	第Ⅰ期	紀元前2世紀
中細形銅剣Ⅰa・Ⅱb	中期	第Ⅱ～Ⅲ期	紀元前後
中細形銅剣Ⅱb	中期	第Ⅲ期	紀元1～2世紀
広形銅剣 後期	第Ⅳ期	紀元3世紀	

ご不明な点や、銅矛・銅戈など他の青銅器との比較も必要でしたらお知らせください。図解も可能です。」

あなた:

図解もほしいです

ChatGPT:



プロフィール

NPO 法人福岡歴史研究会理事 石合 六郎(いしあい・ろくろう)



昭和 20 年 4 月、岡山県倉敷市児島田の口に生まれる。
児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年に卒業。
同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部など
を経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平
成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科
大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、
その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と出会い、同研究
会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツ
アーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研
究会理事。現住所は岡山市中区。

「吉備津彦命と温羅」 AMAZON で販売中

(ペーパーバック＝1200 円 Kindle 版＝デジタル 650 円)



吉備の古代史シリーズ 執筆記事一覧

第 1 回 二人の天皇が行幸された谷 (2020.07)

第 2 回 巨大古墳を考える (上) 吉備津彦の時代 (4 世紀) (2020.10)

第 3 回 巨大古墳を考える (下) 御友別の時代 (5 世紀) (2021.01)

第 4 回 温羅伝説を考える (上) —こんな物語だった (2021.04)

第 5 回 温羅伝説を考える (中) —成立過程とその起原「神仏習合の中から誕生」
(2021.07)

第 6 回 温羅伝説を考える (下) —桃太郎伝説の誕生「日本人の心映す鏡」
(2021.10)

第 7 回 素戔鳴尊の剣 (上) —吉備のどこにあった? 「十握の剣流転の真実」
(2022.01)

第 8 回 素戔鳴尊の剣 (下) —どんな形だったか? 「邪馬台国時代の北部九州と

類似」(2022.04)

第9回 造山古墳の被葬者を探る(上)「吉備海部の娘・黒日売命か」(2023.07)

第10回 造山古墳の被葬者を探る(中)「吉備海部は備中にいた」(2023.10)

第11回 造山古墳の被葬者を探る(下)「謎を解く肥後系古墳と血脈」(2024.01)

第12回 播磨の戦いはあった!! ――片山神社伝承が証明「稚武彦は再度播磨へ」

(2024.04) 第13回 卑弥呼の剣と楯築の王「日本海ルートでつながる

筑紫と吉備」(2024.07)

第14回 吉備と出雲<上>「大国主命の祭祀受け入れる」(2024.10)

第15回 吉備と出雲<中>「古墳起源に関わる楯築と四隅」(2025.01)

第16回 吉備と出雲<下>「大国主命の墓がわかった」(2025.05)

第17回 「銅剣を通してみる吉備―国家形成期の地域」(2025.07)

日向王朝の時代④

日向の女性たち

河村哲夫

コノハナサクヤヒメの出身地

文 献	名
『古事記』	本名を神阿多都(かむあたつ)比売 別名を木花之佐久夜(このはなのさくや)毘売
『日本書紀』	本名を神吾田津(かみあたつ)姫・神吾田鹿葦津(かむあたかあしつ)姫 別名を木花開耶姫(このはなのさくやひめ)
『播磨国風土記』	許乃波奈佐久夜比売命(このはなのさくやひめ)

コノハナサクヤヒメの出身地を「阿多」とみて、ニニギノミコが天降った場所とおなじく、鹿児島県南さつま市から野間半島にわたる地域とみる説が根強い。

しかしながら、筆者はニニギノミコとコノハナサクヤヒメの拠点が西都原台地(宮崎県西都市)に集中的に残されていることから、この地域の女性であったとみている。

コノハナサクヤヒメを祭る神社

薩 摩	霧島神宮 (鹿児島県霧島市)	主祭神はニニギノミコ 相殿にコノハナサクヤヒメを祭る
	新田神社 (鹿児島県薩摩川内市)	明治七年ニニギノミコの御陵の可愛山陵に治定 末社の端陵神社はコノハナサクヤヒメの陵墓(端陵古墳) と伝わる
日 向	都万神社 (宮崎県西都市)	コノハナサクヤヒメは、甘酒を作ってお乳代わりに飲ませたと もいわれ、境内に「日本酒発祥の碑」が立つ
	木花神社 (宮崎市)	ニニギノミコの行宮の跡と伝えられる。 三皇子生誕の産屋「無戸室」の伝承地あり
	高千穂神社 (宮崎県西臼杵郡高千穂町)	天孫降臨の地 コノハナサクヤヒメは「高千穂神」の一柱として夫のニニギ ノミコなどとともに祭られている
筑 紫	細石神社 (福岡県糸島市三雲)	伊都国の中心地 木花開耶姫命と磐長姫命を祭る



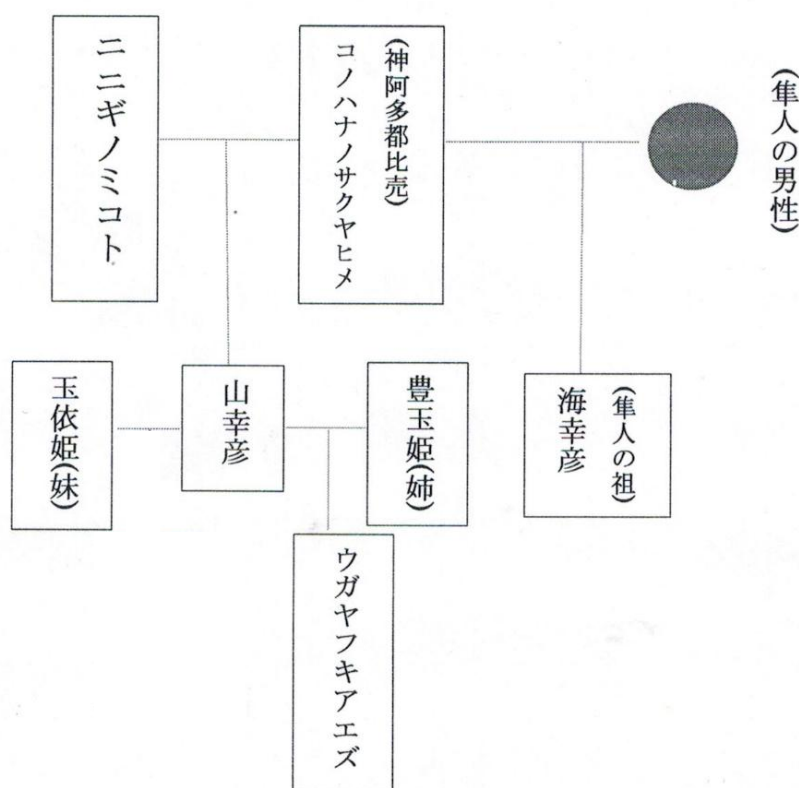
すでに述べたとおり、『古事記』には、コノハナサクヤヒメが一夜の交わりで身籠ったため、ニニギノミコトは国津神の子ではないかと疑ったと記されている。

そして、長男の海幸彦は「隼人の阿多君の祖」とされているのに、弟の山幸彦は天皇家の祖とされている。

素直に考えれば、二人の父親が異なっていたというしかない。

当時は、一夫一婦制ではなく、男が女性のもとに通う通い婚が主流の社会であったことを思えば、よくある話であったといえようが、中国式の倫理観からいえば野蛮な風習である。

『古事記』『日本書紀』が編纂された8世紀初頭には遣唐使を通じて中国式の倫理観がすでに伝来していたことから、気兼ねしてあいまいな筆遣いになってしまったのであろうか。



別の男性から求愛されたという伝承も残されている。

西都原台地の石貫神社(西都市三宅)の社伝によると、コノハナサクヤヒメに結婚を申し出た「鬼」がいたという。

それに対し、父のオオヤマツミは、

「一晩で窟屋(いわや)を完成させることができれば許そう」

と答えたらしい。

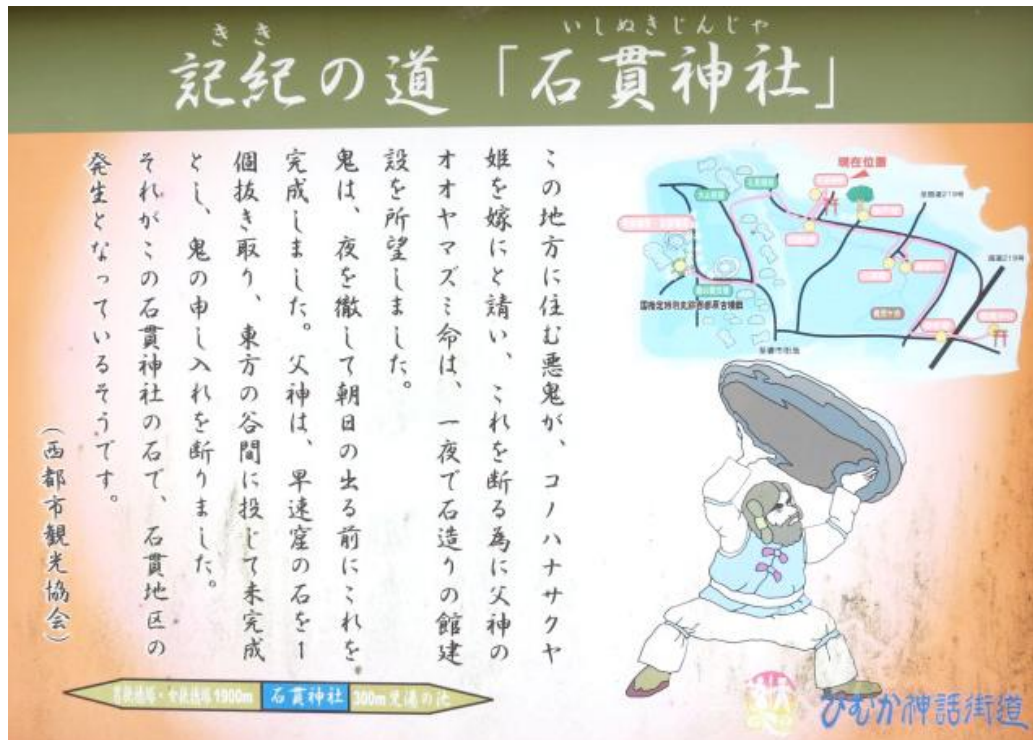
喜んだ鬼は、突貫工事で窟屋をつくり、翌朝には完成しそうになった。

驚いたオオヤマツミは、天井石の一個を引き抜いて投げ捨て、

「まだ完成していない」

と言い張って結婚を断ったという。

石が落ちた場所が石貫神社の地という。その石は今でも鳥居のそばに置かれ、近くには木彫りの鬼も飾られているのがご愛嬌である。



社伝では「鬼」とされているが、もちろん地上の人間で、地元の隼人の若者であつたろう。

夜這い婚、通い婚が主流の古代社会においては、ありふれたことである。

海幸彦と山幸彦は、父親違いの兄弟であつた、と断じておきたい。

日向の女性たち

『古事記』『日本書紀』には、複数の日向の女性たちが登場する。

それをとりまとめたのが、下の表である。

『古事記』『日本書紀』に登場する日向の女性たち

	妃 名	夫	子	備 考
日 向 王 朝	コノハナサクヤヒメ (木花開耶姫)	ニニギノミコト	山幸彦 海幸彦	父は大山津見神 姉は石長比売
	豊玉姫(姉)	山幸彦	ウガヤフキアエズ	ワタツミの国(阿曇氏)
	玉依姫(妹)	山幸彦		ワタツミの国(阿曇氏)
		ウガヤフキアエズ	彦五瀬命・稲飯命 三毛入野命・神武天皇	
	吾平津媛	神武天皇	手研耳命(タギシミ)	吾平津神社(油津)
大 和 朝 廷	日向髪長大田根 (ひむかのかみながおおたね)	景行天皇	日向襲津彦(そつひこ)	阿牟君(あむのきみ) の始祖
	御刀媛(みはかしひめ)	景行天皇	豊国別(とよくにわけ)	日向国造の祖
	襲武媛(そのたけひめ)	景行天皇	国乳別(くにちわけ)	水沼(みぬま)別の祖
			国背別(くにそわけ) 豊戸別(とよとわけ)	火国別の始祖
	日向泉長媛 (ひむかのいずみながひめ)	応神天皇	大葉枝(おおはえ)皇子 小葉枝(おはえ)皇子	
	日向髪長媛 (ひむかかみながひめ)	仁徳天皇	大草香(おおくさか)皇子 草香幡梭姫皇女(くさかの はたひのひめみこ)	父は諸県君牛諸井(も ろあがたのきみ・うしも ろい)

まず、大和朝廷時代の女性たちをみてみよう。

景行天皇の九州巡幸に関する記事が、『日本書紀』と『豊後国風土記』などに掲載されている。

安本美典氏の「統計的年代論」によると、景行天皇の活躍年代は、370～385年である。

ところが、通説的な見解では、景行天皇の実在を否定し、九州巡幸記事を虚構とみる説が大勢である。

筆者はそのような風潮には乗らない。

この際申し述べておくと、戦後において、日本の伝統的な歴史観が根底から破壊されたことが、日本社会にとっての大惨禍であったとおもっている。

実際に現地を調べ歩くと、『日本書紀』あるいは『古事記』を補完する多くの伝承に出会う。

1945年の敗戦後、基本的人権の尊重をはじめとした民主的・平和的憲法の制定は大いに喜ぶ

べきことであつたが、唯物史観・反日史観の台頭による天皇制反対の風潮のもと、古代の天皇までもが次々と抹殺され、『古事記』『日本書紀』や地域伝承、神社の社伝などの貴重な情報が歴史の世界から追放された。

まるで、某国の文化大革命のごとく、日本の伝統的な歴史が次々と破壊されていった。

その動めきは、今なお続いている。

しかしながら、戦後 80 年——戦争も戦後も知らない人たちが多数を占める日本となった。

失われた歴史を復興しなければならない。

この長い連載も、その一つの試みである。

一歩ずつではあるが、それでも一歩ずつ前に進まなければならない。

後世のまだ見ぬ同志にバトンをつなぐために——。

景行天皇の三人の妃

豊前・豊後を経て、日向に入り、大隅半島を拠点とした熊襲を制圧した景行天皇は、高屋宮を根拠にしていたが、この間、御刀媛を後にしている。『日本書紀』には、

「この(日向)国に美人があり、御刀媛(みはかしひめ)という。これを召して后とされた。豊国別皇子を生んだ。これが日向国造の先祖である」

と書かれている。詳しくは拙著の『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(原書房)をお読みいただきたい。

このことに関して、西都市出身で西都原古墳研究所所長・宮崎考古学会会長であつた日高正晴氏(1922～2009)は、高屋宮の所在地について西都原古墳群を中心とする児湯郡地域と想定したうえで、

「ここで特に注目すべきことは、日向国造の始祖として、豊国別皇子が出現したことである。この皇子という名称は、景行天皇との結びつきをつくるための説話的なものであり、結局は豊国別という豪族が子湯県地方に君臨していたことになる。そして、日向の首長を豊国別と称したことは、この地域を豊と称していたからであろう」

とされている(『古代日向の国』NHK ブックス)。

景行天皇は 皇后のイナビヒメ(稲日大郎姫)のほか、ヤサカノイリビメ(八坂入媛)、ミズハヒメ(水歯郎媛)、イカワヒメ(五十河媛)、タカタヒメ(高田媛)、日向のカミナガタオオタネ(髪長大田根)、襲のタケヒメ(武媛)など六人の妃の間に、『日本書紀』によると、男女合わせて八十人の子をつくつたとされている。このうち、日向のカミナガタオオタネ(髪長大田根)と襲のタケヒメ(武媛)を后としたのもまた、日向滞在中のことであつた。

日向髪長大田根(ひむかのかみながたおおたね)は、日向襲津彦(ひむかのそつびこ)皇子を生んだ。

日向襲津彦皇子はのちに長門国阿武郡阿武郷(山口県阿武郡阿武町・福栄村)あたりを根拠にした阿牟君(あむのきみ)の先祖とされているが、日向襲津彦自身はその名のとおり、大隅国に分割される以前の霧島山が所在する贈於郡を治めた人物であつたとみられる。

襲武媛もまた、その名のとおりに贈於郡あたりを根拠とした隼人の娘であったろう。

襲武媛は、国乳別(くにちわけ)皇子、国背別(くにそわけ)皇子、豊戸別(とよとわけ)皇子を生んだ。

国乳別皇子と国背別皇子の二人は、筑後川中下流域を支配する水沼別(みぬまのわけ)の先祖とされ、豊戸別皇子は肥前・肥後(佐賀・長崎・熊本県)を領域とする火国別(ひのくにわけ)の先祖であるとされる。

景行天皇の血を分けた子供たちが、成人したのち九州の南部から中部・北部方面の要所要所に配属されている。

まとめれば、次のとおりとなる。

景行天皇の日向の妃

妃名	出身		子	備考
日向髪長大田根	諸県郡 贈於郡(子の「襲」)	隼人系	日向襲津彦	阿牟君の始祖
御刀媛	児湯郡(日高説)	日向系	豊国別	日向国造の祖 豊国別皇子の三世の孫が老男(おいお)
襲武媛	諸県郡 贈於郡(「襲」)	隼人系	国乳別 国背別 豊戸別	水沼(みぬま)別の祖 火国別の始祖

日向髪長大田根と襲武媛は霧島山あたりの贈於を拠点とした一族の娘であり、隼人系とみてまちがちなだろう。

御刀媛については、古代日向の中心部であった児湯の女性のようなことから、九州北部系の倭人と隼人系が混じった日向系の女性であったろう。

応神天皇の妃

妃名	出身		子	備考
日向泉長媛	不明	不明	大葉枝(おおはえ)皇子 小葉枝(おはえ)皇子	

『日本書紀』によれば、日向泉長媛は応神天皇二年に大葉枝皇子と小葉枝皇子を産んだと記されている。『古事記』では日向泉長比売。

しかしながら、その出自については何も記されていない。

仁徳天皇の妃

妃 名	出 身		子	備 考
日向髪長媛	諸県	隼人系	豊国別皇子	父は牛諸井

『古事記』『日本書紀』とも諸県一族の髪長媛が仁徳天皇の後となったと伝えている。

すなわち、『古事記』応神天皇の段には、

「また応神天皇が日向国の諸県の君の娘の髪長比売が美しいとお聞きになって、使いをだそうとしてお召しなさいますときに、太子の大雀命(仁徳天皇)はその乙女が難波津に停泊しているのをご覧になって、その容姿のあでやかなことに感心なされ、建内宿禰に『日向から招かれた髪長比売を陛下(応神天皇)にお願いしてわたしに賜るようお願いしてくれ』と頼まれました。それをうけて建内宿禰が天皇にお願いしましたところ、天皇は髪長比売を大雀命にお授けになられました」

とあり、『日本書紀』応神天皇十一年の条にも、

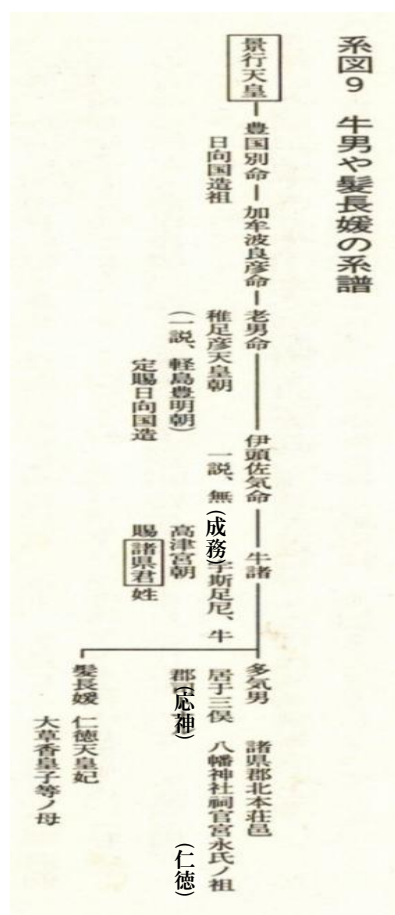
「この年、ある人が『日向国に髪長媛という乙女がいて、諸県の君牛諸井の娘です。これは国一番の美人です』と申し上げた。天皇は喜ばれてこれを召そうと思われた。十三年春三月、天皇は特別の使者を遣わして髪長媛を召された。秋九月中旬、髪長媛は日向からやってきた。摂津国桑津邑に置かれた。皇子の大鷦鷯尊は髪長媛をご覧になり、その容貌の美しいのを感じて、惹かれる思いが強かった。天皇は大鷦鷯尊が髪長媛を気に入っているのを見て、娶わせようと思われた」

とある。

『先代旧事本紀』の「国造本紀」には、景行天皇と御刀媛から生まれた豊国別皇子の三世の孫の老男(おいお)は、応神天皇の時代に日向国造に任じられたと記されている。

このことに関して、『日本書紀』は別の伝承を記している。

「ある説によると、日向の諸県君牛は、朝廷に仕えて老齢となり、仕えをやめて本国に帰った。そして娘の髪長媛を奉った。播磨国まできた。(応神)天皇は淡路島にきて狩りをなさった。そして西の方をご覧になると、数十の大鹿が海に浮いてやってきて、播磨の加古の港に入った。天皇はそばの者に、『あれはどういう鹿だろう。大海に浮かんでたくさんやってくるが』といわれた。お側の者も怪しんで、使いをやって見させた。すると、みな人で、角のついた鹿の皮を衣服としていたのである。『何者か』というと『諸県君牛です。年老いて宮仕えができなくなりましたが、朝廷を忘れることができず、それで私の娘の髪長媛を奉ります』と答えた。天皇は喜んで、娘を宮仕えさせられた。それで時の人は、その岸のついたところを名づけて鹿子水門(かこのみなと)といった。およそ水手を鹿子というのはこのときはじめておこったという」





諸県一族が、角のついた鹿の毛皮を着る独特の風習をもっていたことがわかる。

『和名抄』によると、諸県郡には財部、県田、瓜生、山鹿、穆佐(むかさ)、八代、春野の八郷があり、現在の宮崎市瓜生野、東諸県郡高岡町、国富町、都城市、えびの市などにおよび、鹿児島県曾於郡の一部を含む広大な区域であった。

日高正晴氏は、諸県一族について、

「海洋性を有する海人集団であり、角のついた鹿皮をかぶる風習からみてその源流として東北アジア地方が連想される」

と指摘される。が、諸県の地勢からみて、諸県一族は漁労というよりも狩猟を中心とした部族であったとおもわれる。

鹿の毛皮を着る風習も、鹿の狩猟に際して、鹿を油断させるための擬態から生じたものであろう。

諸県郡の都城市祝吉(いわよし)、丸谷遺跡、宮崎市の学園都市熊野原遺跡などから、弥生時代後期から終末期の「花卉状住居(花卉状竪穴住居跡・日向型間仕切り住居)」が数多く分布しており、古墳時代における「地下式横穴古墳」の分布とともに、日向および南部九州を拠点とした熊襲や隼人の独自の伝統文化をしめすものであるとすれば、諸県一族もまた、もともと隼人に属する部

族とみなすべきであろう。

諸県一族の首長たる牛は、応神天皇の時代に高齢となり引退して故郷の諸県に帰還するに際し、娘の髪長媛を皇室に献上して大和朝廷との結びつきを確実なものとしたが、諸県一族と大和朝廷との緊密な関係ができたのは、景行天皇の日向行幸が契機であったとおもわれる。

諸県の北部に接した児湯郡においては、景行天皇の皇子豊国別皇子からの三世の孫の老男（おいお）に至る日向国造一族の拠点として栄えたが、諸県一族は諸県郡を拠点として、隼人という在地勢力でありながら朝廷との結びつきを強め、応神天皇の時代には髪長媛を仁徳天皇の后とするなど、独自の外交努力によってその勢力をのばしていったとみられる。

西都原古墳群の男狭穂塚と女狭穂塚

ちなみに、安本美典氏は、

「西都原古墳群は、日向国造の老男を中心とし、日向出身の御刀媛と関係のある人々の墳墓ではなかろうか。応神天皇時代の日向の国造が老男であり、その国府が三宅にあったとすれば、男狭穂塚と女狭穂塚などの被葬者のもっとも有力な候補者としては、老男とそのまわりの人々があげられよう」（『邪馬台国はその後どうなったか』廣済堂）

とされるが、日高正晴氏は、

「男狭穂塚が築造されたのは、五世紀前半でも早い時期に想定することができる。そのように考えると、この古墳の被葬者は、おそらく四世紀末から五世紀初頭ごろに活躍した豪族であると推測できる。豊国別王の時代は九州最大の大首長墓である男狭穂塚の築造年代ともほぼ合致することになるので、巨大古墳である男狭穂塚の被葬者像としては、四世紀末ごろから五世紀初頭ごろにかけて活躍したと推測される豊国別王と想定することもできる」（『古代日向の国』NHKブックス）

とされている。

安本氏は男狭穂塚の被葬者を豊国別皇子の三世の孫の老男（おいお）とし、日高氏は豊国別皇子そのものとされるが、いずれの説においても、景行天皇の血を引く日向国造一族の墳墓であったことにおいては一致している。

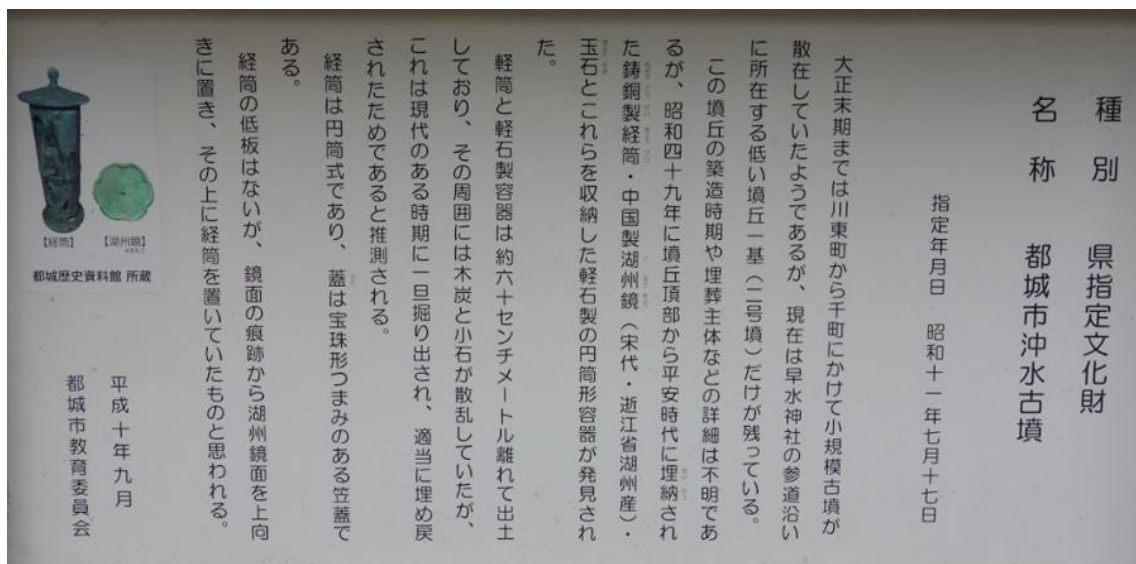
図24 諸天皇の推定年代

420	410	400	390	380	370	360	350	340	330	320	310	300	290	280年	260年						
15	14		13	12		11		10		9	8	7	6	5	4	3	2	1			
応神	神功皇后 ・仲哀	成務	景行		垂仁		崇神		開化	孝元	孝靈	孝安	孝昭	懿德	安寧	綏靖	神武		ウガヤ	山幸彦	ニギハヤヒ
牛	老男	豊国別	御刀媛															吾平津媛	玉依姫	豊玉姫	コノハナサクヤ

都城市の古墳群

都城市早水町の沖水古墳の二号墳は径 3.6 メートル、高さ 1.7 メートルの円墳で、現存しているが、都城農業高校南方 100 メートルにある千町の一号墳はすでに消滅している。

これらの古墳は、髪長媛一族の墓と伝えられている。



また、都城市の早水には、応神天皇、牛諸井、髪長媛を祭神とする早水神社があり、髪長媛誕生地という伝承も残されている。



さらにいえば、景行天皇の後となった日向のカミナガタオオタネ(髪長大田根)の出自について、『日本書紀』にはまったく記載がないが、「髪長」という名が共通することからみて、これまたこの諸県一族で早水出身であった可能性が考えられる。

以上の状況を踏まえると、コノハナサクヤヒメは大和朝廷成立以前の日向・大隅・薩摩を拠点に隼人の勢力が最も強大であったころの児湯(西都市)の女性であることから、隼人系であった蓋然性が高いというべきであろう。

宮崎郡南部に位置し、南方で隼人の拠点たる大隅半島に近接している。



『古事記』の「海幸山幸」伝説

火照命(ほでりのみこと)＝海幸彦は魚をとり、火遠理命(ほおりのみこと)＝山幸彦は獣をとっていた。

あるとき、山幸彦は兄の海幸彦に互いの道具の交換を提案した。海幸彦は三度断ったが、少しの間だけ交換することにした。山幸彦は兄の釣針で魚を釣ろうとしたが1匹も釣れず、しかもその釣針を海の中になくしてしまった。兄の海幸彦も獲物をとることができず、

「山佐知も己が佐知さち、海佐知も己が佐知さち(山の幸も海の幸も、自分の道具でなくては得られない)」

と言って自分の道具を返してもらおうとした。

山幸彦が釣針をなくしたと告げると、海幸彦は山幸彦を責め取り立てた。山幸彦は自分の十拳剣から千個の釣針を作ったが、海幸彦は、

「元の釣針を返せ」

といって受け取らなかった。

山幸彦が海辺で泣き悲しんでいると、塩椎神(しおつちのかみ)がやって来た。山幸彦が事情を話すと、塩椎神は小船を作って山幸彦を乗せ、綿津見神(海神・ワタツミ)の宮へ行くよう勧めた。

ワタツミの宮へ行き、そこで待っていると、海神の娘の豊玉姫の侍女が水を汲みに外に出て来た。山幸彦が水を求めたので、侍女が水を器に入れて差し出すと、山幸彦は水を飲まずに首にかけていた玉を口に含んでその器に吐き入れた。すると玉が器にくっついて離れなくなったので、侍女は玉のついた器を豊玉姫に差し上げて、事情を話した。

不思議に思っ外に出た豊玉姫は、山幸彦を見て一目惚れした。父であるワタツミの神も外に出て、そこにいるのが天孫ニギノミコトの子の虚空津日高(そらつひこ・火遠理命)であると言い、すぐに豊玉姫と結婚させた。こうして、ワタツミの宮で三年間暮らした。

三年たって、山幸彦はここに来た理由を思い出し、深い溜息をついた。ワタツミの神が溜息の理由を問うたので、山幸彦は事情を話した。

ワタツミの神が魚たちを集め、釣針を持っている者はいないかと問うと、赤鯛の喉に引っかかっているとわかった。ワタツミの神は釣針と塩盈珠(しおみちのたま)・塩乾珠(しおひのたま)を山幸彦に差し出し、「この釣針を兄に返す時、『この針は、おぼ針、すす針、貧針、うる針』とまじないを唱えて、手を後に回して渡しなさい。兄が高い土地に田を作ったらあなたは低い土地に、兄が低い土地に田を作ったらあなたは高い土地に田を作りなさい。兄が攻めて来たら塩盈珠で溺れさせ、苦しんで許しを請うてきたら塩乾珠で命を助けなさい」と言った。そして和邇(わに)に乗せて送って差し上げた。その和邇は、今は佐比持神(さいもちのかみ)という。

山幸彦はワタツミの神に言われたとおりに釣針を返し、言われた通りに田を作った。ワタツミの神が水を掌っているの、海幸彦の田には水が行き渡らず、貧しくなっていた。さらに海幸彦が荒々しい心を起こして攻めて来た。すると山幸彦は塩盈珠を出して溺れさせ、海幸彦が苦しんで許しを請うと、塩乾珠を出して救った。これを繰り返して悩み苦しめると海幸彦は頭を下げて、山幸彦を昼夜お守りするといった。

『日本書紀』の「海幸山幸」伝説

兄の海幸彦には海幸(釣針)があり、弟の山幸彦には山幸(弓矢)があった。兄弟二人は語り合い、試しに幸(さち)——釣針と弓矢を交換したが、どちらも獲物を得られなかった。

兄は悔やんで弟の弓矢を返し、釣針の返還を求めた。

ところが、弟は兄の釣針を失っていて、探し出せなかった。そこで別の釣針を作って渡したが、兄は許さず、元の釣針を要求した。

悩んだ弟は、自分の横刀で釣針を作り、山盛りにして渡したが、

「自分の釣針でなければ、受け取らない」

とますます責めた。

山幸彦は深く憂い苦しみ、海辺に行ってさまよった。すると、そこで出会った塩土老翁が、

「心配には及びません。私がお助けいたしましょう」

といって、山幸彦を籠に入れて海に沈めた。

すると可怜小汀(うましおはま)に着き、籠を棄てて進むと、すぐにワタツミの宮に行き着いた。

その宮は、壮麗で光輝いていた。門の前の井戸のほとりに湯津杜(ゆつかつら)の樹があり、枝葉が生い茂っていた。

山幸彦がその樹の下に進んで、うろうろしていると、一人の美女が扉を開けて出てきた。そして綺麗なお椀に水を汲もうとしたので仰いで見つめた。美女は驚いて戻り、父母に、

「一人の珍しい客が門前の樹の下にいます」

と告げた。

ワタツミの神は八重の畳を重ね敷きして招き入れ、来訪の理由を尋ねた。

山幸彦は事情を話した。そこでワタツミの神が大小の魚を集めて問いただすと、皆は、

「知りませんが、ただ赤女(あかめ・鯛の名)がこのごろ口の病で来ておりません」

という。

赤女を召してその口を探すと、失った釣針が見つかった。

その後、山幸彦はワタツミの神の娘の豊玉姫を娶り、ワタツミの宮に住んで三年が経った。

そこは安らかで楽しかったが、やはり故郷を思う心があり、時折ひどく嘆くことがあった。

豊玉姫はその父に、

「しばしば嘆いておられます。故郷を懐かしみ、悲しんでおられるのでしょうか」

と告げた。

ワタツミの神は山幸彦を招き、

「あなたがもし故郷に帰りたいのなら、私がお送りいたしましょう」

と告げて、探し出していた釣針を渡して、

「この釣針を兄に与える際に、ひそかに貧鉤(まちち)と唱えなされ」

と教えた。

また、潮満瓊(しおみつたま)と潮涸瓊(しおひのたま)を授けて、

「潮満瓊を使えば、潮がたちまち満ちます。これであなたの兄を溺れさせなさい。もし兄が悔いて謝れば潮涸瓊を使えば、潮は引きので、兄を救いなさい。このようにすれば、兄は自然と屈服するでしょう」

と教えた。そして帰る時になり、豊玉姫は山幸彦に向かって、

「私はすでに妊娠しております。まもなく出産を迎えます。風波の速い日に海辺に着いて、私のために産室(うぶや)を作ってください」

と語った。

山幸彦は日向の宮に帰り、すべてワタツミの神の教えに従うと、兄の海幸彦は自ら平伏し、

「今より以後、私はあなたの俳優(わざおさ)の民となりましょう。どうかお許してください」

といった。

山幸彦はその願いのとおりに許した。

海幸彦は、吾田君(あたのきみ)小橋(おはし)らの本祖(もとつおや)である。

戦後史学の見解

中央公論社の日本の歴史シリーズ第一巻の『神話から歴史へ』(中央公論社・昭和 40)は、高校生であった筆者も書店で買い求めた。

海幸山幸について、次のように書かれている。

「海幸山幸の話は、だから、神代史のもとの話にはなく、あとで採用された民間伝承であったと考えられるが、この海幸山幸の物語はほとんどの神話学者によって、インドネシアにひろがる話と類似していることが指摘されている」

「英雄が釣針を失ってそれを探しにゆき、海中で釣針を見つけだし、海中の処女と結婚するという型の伝説は、太平洋全域から、さらに西はインド、東は北米の中央部や南米北部にいたる広大な区域に分布している。そして、そのなかでもよく似ているのは、ミクロネシアのパラオ島、インドネシアのカイ島、セレベス島のミナハッサに伝えられたものであるという。たとえば、ミナハッサのそれはこうである」

と述べられ、インドネシア領セレベス島のミナハッサの神話を紹介される。

セレベス島というのは植民地時代の島名で、現在はスラウェシ島(Sulawes)というのが正式名称である。ミナハッサはミナハサ半島(Minahasa)のことである。

スラウェシ島(Sulawes)ミナハサ半島のカヴハサン神話

カヴハサンが友から釣具を借り受け、小舟で海釣をしていると、魚に糸を切られてしまった。

帰って友に話したが、許してくれない。

困ったカヴハサンは海に出て、釣針を失くした場所で水中に潜ると一つの道があり、それをたどっていくとある村に着いた。

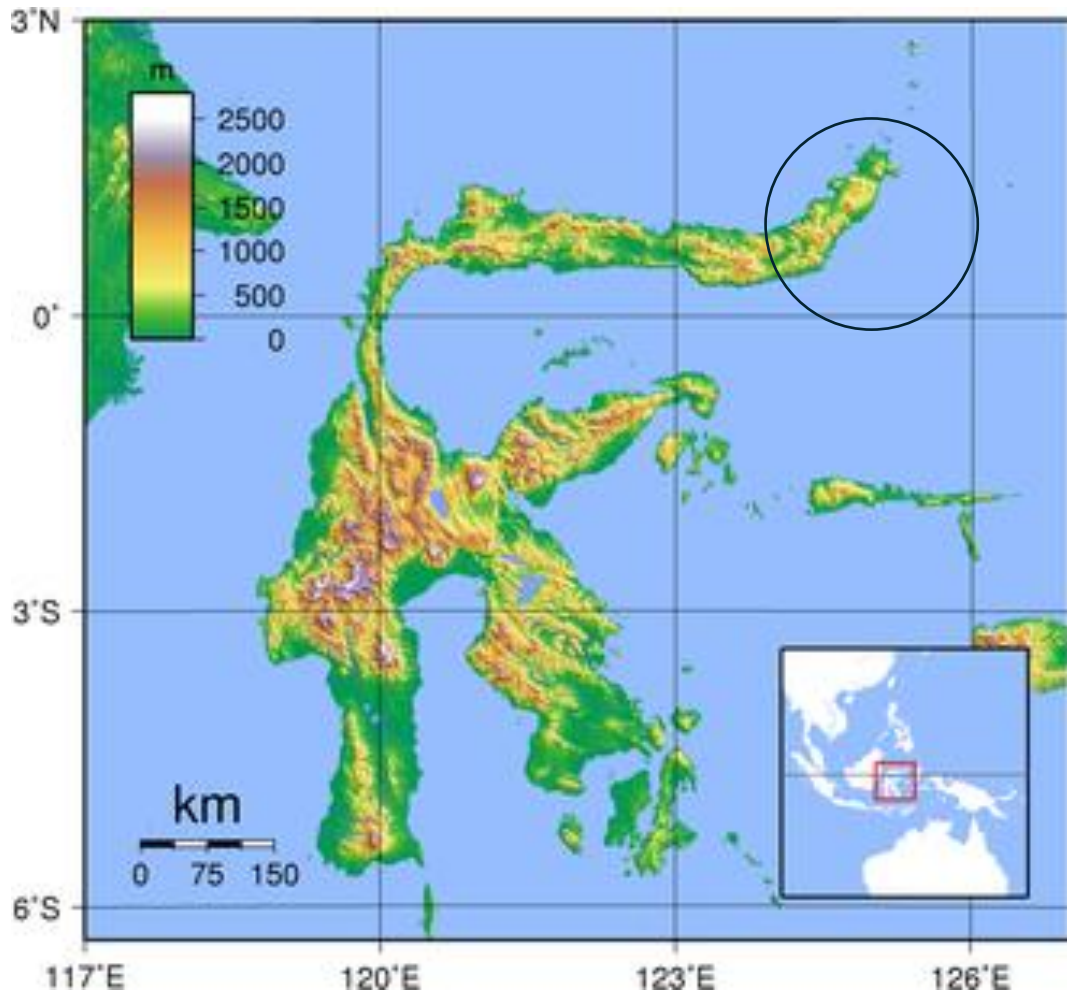
一軒の家から、騒ぎと悲鳴の声が聞こえるので入ると、一人の乙女がのどに刺さった釣針

で苦しんでいる。

カウハサンが釣針をのどから引き抜いてやると、両親は喜んで贈り物を彼に与えた。

帰ろうとすると舟が見えない。一匹の大きな魚がやってきたので彼はその背に乗り、もとの岸に帰ってきた。

彼はおのれを苦しめた友に仕返しをするため、もろもろの神の助けを乞い、大雨を降らして友を窮地に陥れた。



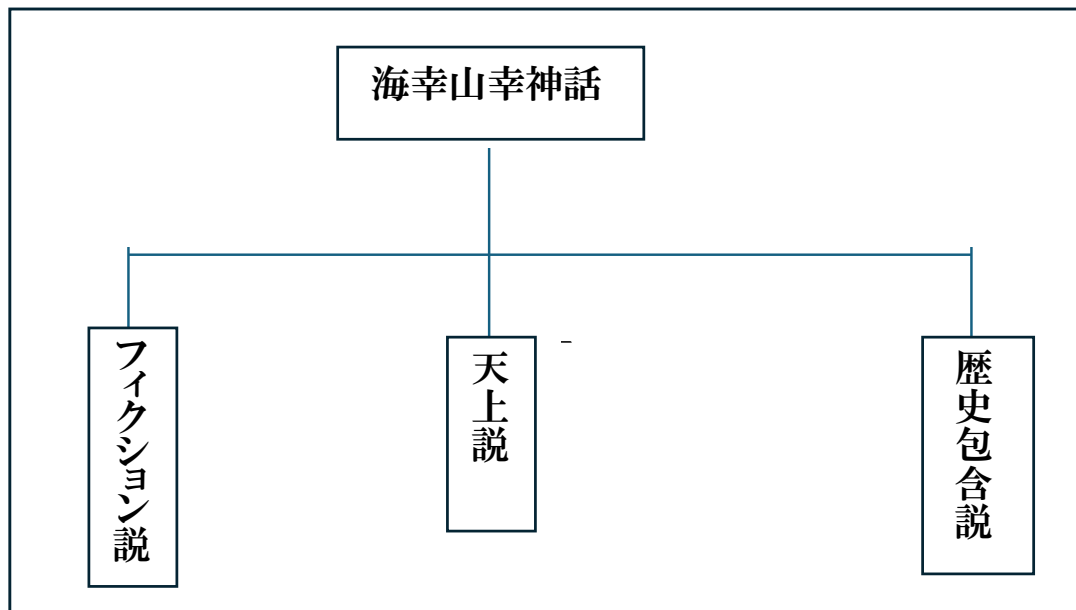
ミナハサ半島 (Minahasa)

そして、井上光貞氏は次のように総括される。

「このように海幸山幸の話は、インドネシアにひろがる話とよく似ているのだが、日本ではどこで伝わっていたかという点、南九州の隼人の伝説であったとおもわれる。というのは、この物語の主人公山幸彦の敵役である火照命は『隼人阿多君の祖である』と古事記に書かれているからである」

「つまり、隼人の人たちは、大和の宮廷へ出仕して、海幸彦が溺れるさまを演じて見せたのである。これは、この物語が、物語であるとともに、また一つの呪的芸能でもあったことを示している」

このような井上光貞氏の見解は、前述した戦後史学の代表的な事例である。



上記の分類でいえば、井上光貞氏は、

「海幸山幸の話は、神代史のものと話にはなく、あとで採用された民間伝承」
ということから、大和朝廷の役人たちが創作したフィクションとみておられることがわかる。

まったくのフィクションに過ぎないため、もちろん歴史を包含するものでもない。

本居宣長流の天上説にすら該当しない、まがいものの神話である。

大和朝廷の役人たちは、隼人の伝承をもとにこの話を創作した。

そして、隼人の海幸山幸伝承は、インドネシアなどから海を通じて伝わったものである。

井上光貞氏は民俗学的な見識なども駆使しながら、軽々とそう結論づけられる。

井上光貞説の欠陥

井上光貞説は、「海幸山幸の話は、神代史のものと話にはなかった」ということを出発点・前提にしている。何を根拠にそのように判断されたのか。

『古事記』に海幸彦が隼人の祖であると書かれていることが根拠のようにもみえるが、「隼人の伝承＝あとで付加された伝承」の理由がさっぱりわからない。

しかしながら、よくよく考えれば、山幸彦の末裔が天皇ではないか。

はるかかなたの南九州の隼人の伝承を調査して、机上でフィクションとして海幸山幸の物語を創作するよりも、身近に仕える天皇および皇族に直接聞いた方が手っ取り早いはずである。

『日本書紀』編纂チームが、天皇家に伝わる伝承を調べないはずがない。

さらには、天皇家と行動をともにして九州からやってきた中臣氏や物部氏、大伴氏、久米氏、忌部氏、阿曇氏、宗像氏などからも、さまざまな伝承を聴取したはずである。

その結果、天皇家および古代豪族の伝承のなかに、海幸山幸の物語を見出したと考える方がはるかに自然である。

井上光貞説は、海幸山幸の話は史実ではないという前提に固執するあまり、隼人が情報源だと短絡的に結論づけてしまったのではないか。

天皇家の歴史を書くのに、天皇家や関係豪族の伝承を排除し、隼人の伝承を優先させるわけがない。

このような常識的な判断が欠落したのは、海幸山幸の話は架空のおとぎ話と思い込んでいたからでないのか。

この際、『日本書紀』の編纂体制について述べておこう。

『日本書紀』の編纂体制

天武 10(681)年 3 月 17 日、天武天皇によって国史編纂の詔勅が下された。

編纂委員は次のとおり。

1	川嶋皇子	天智天皇の第二皇子
2	忍壁皇子	天武天皇の皇子
3	広瀬王	敏達天皇の孫で春日皇子の子
4	竹田王	敏達天皇の皇子
5	桑田王	天武天皇—高市皇子—長屋王—桑田王？
6	三野王	美濃(岐阜県) 敏達天皇—〇—栗隈(くりくま)王—三野王
7	大絹下上毛野君三千	上毛野(群馬県) 第 10 代崇神天皇—豊城入彦命— ... —上毛野君三千 大錦下(だいきんげ)・・・26 階中 9 位
8	小絹中忌部連首	天太玉命系 小錦中(しょうきんちゅう)・・・26 階中 11 位
9	小錦下阿曇連稲敷	ワタツミ系 小錦下(しょうきんげ)・・・26 階中 12 位
10	難波連大形	難波(大阪)・大彦命系
11	大山上中臣連大嶋	天児屋根命系
12	大山下平群臣子首	武内宿禰系
執筆	中臣連大嶋	天児屋根命系
	平群臣子首	武内宿禰系

皇族と有力氏族から編纂委員が選ばれている。

さらに、『日本書紀』によれば、691 年(持統 5)8 月 13 日に、大三輪など 18 氏に対して祖先の「墓記」を作成提出させている。

古い地方豪族が保有している情報を収集し、記事内容の裏付けを得ようとしたのであろう。

『日本書紀』の「一書」の原型であったかもしれない。「一書」の内容は本文を補完する場合もあれば、矛盾するような場合もある。そして「一書」の第一から第二……と、未整理のまま、わりと無造作に本文の間に置かれている。「一書」ごとの内容もほとんどバラバラである。長年月の伝言ゲームのように各氏族の伝承に差異が生じたのかもしれない。ただし、有力各氏族からの情報提供ということもあって捨てることもできず、「一書」という形で残したのではないか。

逆にいえば、「一書」の存在が、古い伝承であることを実証しているともいえる。

大和朝廷の役人による机上の創作であるとすれば、「一書」をいくつも並べるような無駄な作業をするはずがない。

そういう意味からすれば、『古事記』や『先代旧事本紀』、『古語拾遺』などもまた、それぞれが『日本書紀』の「一書」といいいいかもしれない。

いずれにせよ、『日本書紀』30 巻は、わが国最初の「国史」である。

『日本書紀』を学ぶことは、日本国民としての義務ではないのか。

1	大三輪	出雲系
2	雀部(さざきべ)	武内宿禰系
3	石上(いそのかみ)	物部系
4	藤原	天児屋根命系・中臣系
5	石川	武内宿禰系
6	巨勢(こせ)	武内宿禰系
7	膳部(かしはで)	大彦命系
8	春日	孝昭天皇系
9	上毛野(かみつけの)	上毛野(群馬県) 崇神天皇の皇子の豊城入日子命系
10	大伴	タカミムスビ系
11	紀伊	武内宿禰系
12	平群	武内宿禰系
13	羽田	武内宿禰系
14	阿倍(あへ)	大彦命系
15	佐伯(さへき)	タカミムスビ・大伴系
16	采女	物部系
17	穂積	物部系
18	阿曇	ワタツミ系

『続日本紀』によれば、714 年(和銅七)2 月に、「紀朝臣清人(きのあそみきよひと)と三宅臣藤麻呂(みやけのおみふじまろ)に国史を撰ばしむ」とある。

これは補充人事であろう。

1	紀朝臣清人	武内宿彌系
2	三宅臣藤麻呂	不明。勝麻呂ともいう。

そして、『続日本紀』によれば、720 年(養老四)5 月 21 日に、

「これより先、一品舍人親王、勅を奉りて、日本紀を修めたまふ。ここに至りて功成り、紀三十巻・系図一卷を撰上したまふ」とあるとおり、『日本書紀』30 巻が天皇に上程された。

『日本書紀』は、約 40 年にわたる国家的大事業であった。

上記のとおり、皇族・豪族による編纂体制が構築されている。

皇族・豪族の厳重な監視下のもとに執筆されたのである。

日本国としてはじめての国史を編纂するのに、大和朝廷の役人が天皇家や関係豪族ではなく、隼人の伝承だけを優先的に用いて、思いつきのフィクションを書けるはずがない。

(以下、つづく)

日向王朝の時代⑤

豊玉姫と玉依姫

河村哲夫

海幸山幸の物語

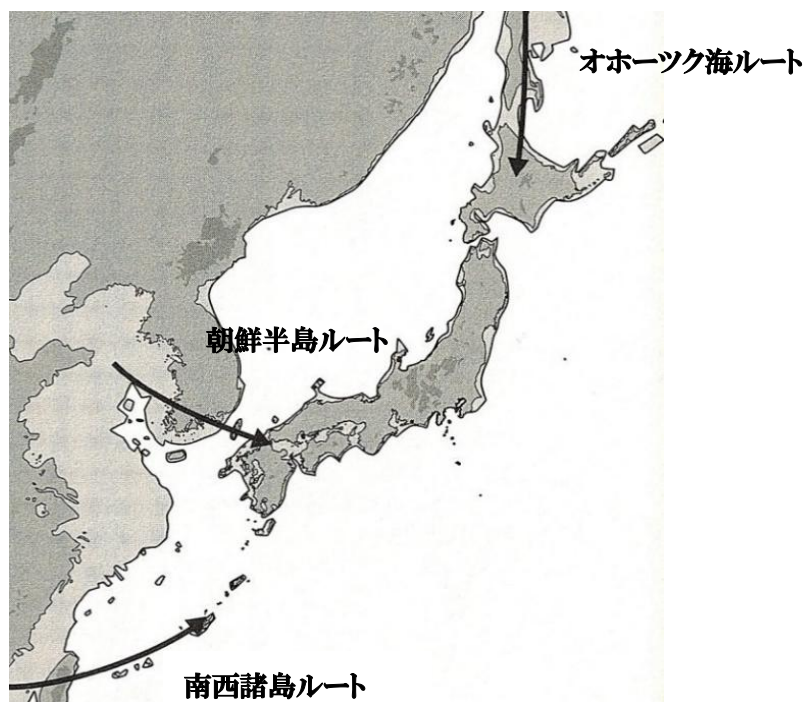
『古事記』『日本書紀』に記された海幸山幸の物語は、天皇家のなかで継承された古い神話伝承であり、当然のことながら、中核部分に歴史的事実を含んでいる——とみている。

井上光貞氏の説と比較すれば、次のとおりとなる。

区 分	井上光貞氏	筆者(河村)の立場
史実性	×なし 大和朝廷の役人による創作	○あり 古い伝承が神話化
情報元	隼人	天皇家及び中臣・大伴氏など
太平洋神話との類似性	○あり	○あり

史実性と情報元という点において、判断が異なっているが、太平洋神話との類似性については、井上光貞氏が述べられたように、インドネシア方面から、フィリピン・台湾・南西諸島を經由して九州南端に伝来したことは否定できないであろう。

3.5～4 万年前の現生人類の南西諸島ルートとも重なる。



ところが、インドネシアのカヴハサン神話と日本の海幸山幸の物語を比較すると、形式的には似ているものの、内容的にはかなりの違いがある。

似ているところを強調するのが井上光貞氏、似ていないところを指摘するのが筆者の立場といってもいい。

カヴハサン神話と海幸山幸の物語

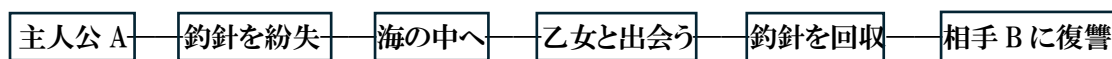
区 分	カヴハサン神話	海幸山幸の物語	備 考
主人公	カヴハサンは友人から釣針を借りる	山幸彦は海幸彦(兄弟)から釣針を借りる	名が異なる
釣針	失くす	失くす	
釣針を探す	海中の村へ行く	ワタツミの国へ行く	ワタツミの国
釣針の所在	乙女の喉に刺さる	赤鯛の喉に刺さる	人と魚
支援	両親の支援を受ける	父親のワタツミの神の支援を受ける	
結婚	海中の処女と結婚	娘の豊玉姫と結婚する	具体的名称
報復	友人を懲らしめる	海幸彦を懲らしめる	
結果		天皇家の祖となる	天皇家と隼人

相違点を示せば次のとおり。

- (一) 主人公の名がカヴハサンと山幸彦と異なっている。
- (二) 海中の村の名が海中の村とワタツミの国と異なっている。
- (三) 失くした釣針が喉に引っかかった相手が乙女と赤鯛と異なっている。
- (四) カヴハサン神話では不特定の乙女であるが、日本では豊玉姫という特定の乙女。
- (五) カヴハサン神話では一般的な若者であるが、日本では山幸彦は天皇家の祖、海幸彦は隼人の祖。

話の流れは形式的には似ているものの、その内容においてまったく異なっている。

ひょっとしたら、下記のようなストーリー展開の形式があって、その形式に日本の独自情報が上書きされたのではないか。



とすれば、太平洋神話に形が似ているからといって、その内容についてまで捨て去る必要はないということになる。

例えていえば、桃太郎の桃、お婆さん、桃太郎、犬、猿、雉、鬼ヶ島の鬼、などの固有名詞部分を別の言葉に置き換えて、別の内容の情報を伝達しようとしたのではないか。

極論すれば、Word や Excel という型式のなかで、文章を上書きするようなことなのではないか。

日本将棋のルーツ

このことと関連して、日本の将棋についての話をしよう。

B.C.200 年～B.C.300 年の古代インドにおいて、チャトランガ(Caturanga)というゲームが発明された。

一説によると、戦争好きの王に戦争をやめさせるため、戦いを模したゲームを高僧が考え出して王に献上したのが始まりという。

チャトランガの駒(piece)の配置

車	馬	象	将	王↓	象	馬	車
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
車	馬	象	↑王	将	象	馬	車



・ラージャ(王)、マントリ (将軍・大臣)、ガジャ(象)、アシュワ(馬)、ラタ(車)、パダーティ(歩兵)

このインドのチャトランガが中近東・アラブに伝わってシャトランジ(Shatranj)になった。

車	馬	象	王↓	将	象	馬	車
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
車	馬	象	↑王	将	象	馬	車



・シャー(王)、フィルズ(将・大臣)、フィール(象)、ファラス(馬)、ルフ(車)、バイダク(歩兵)

その後ヨーロッパに伝わってチェス(Chess)になった。

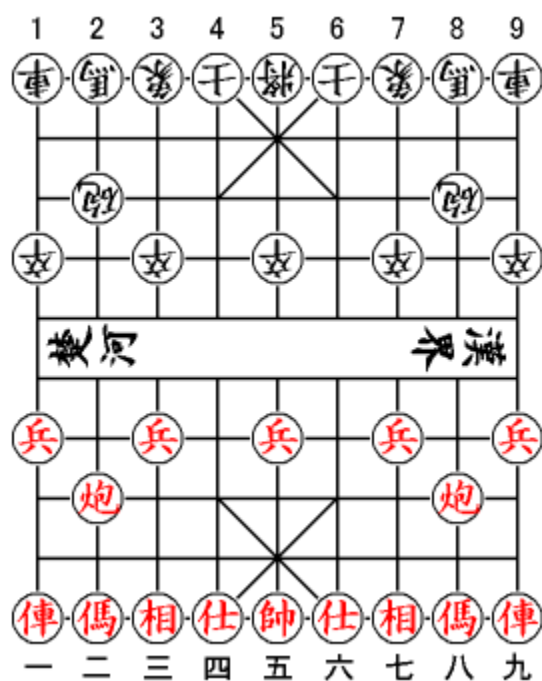
車	騎兵	僧正	女王	王↓	僧正	騎兵	車
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
車	騎兵	僧正	女王	王↑	僧正	騎兵	車



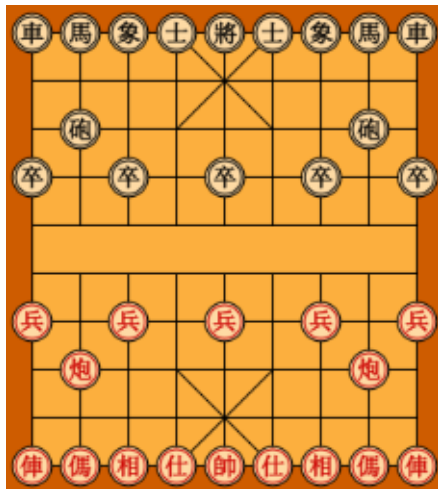
・王(キング)、女王(クイーン)、僧正(ビショップ)、騎兵(ナイト)、車(ルーク)、兵(ポーン)

インドのチャトランガは東アジアにも伝わり、中国の象棋(シャンチー)、ベトナムのカートン(棋将)、朝鮮の将棋(チャンギ)、モンゴルの将棋(シャタル)になった。

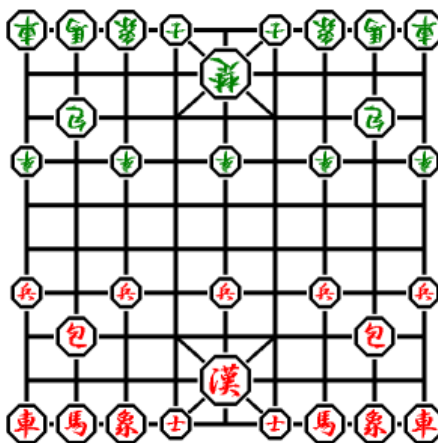
中国の象棋(シャンチー)



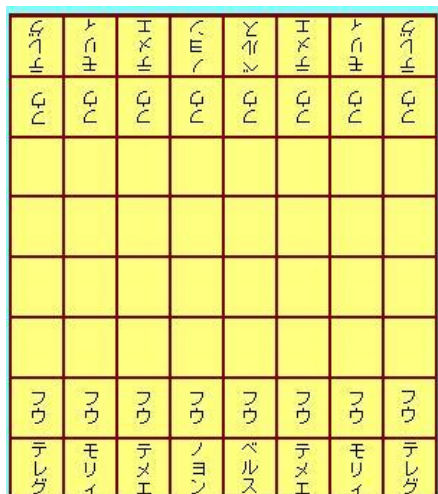
ベトナムのカートン(棋将)



朝鮮の将棋(チャンギ)



モンゴルのシャタル



- ・ノヨン(貴族)、ベルス(将軍)、テメエ(らくだ)、モリイ(馬)、テレグ(車)、フウ(息子)

インドからスリランカを経て東南アジアに伝わったチャトランガは、ミャンマーのシットウイン、タイのマークルック、マレーシア・インドネシアのチャトルになった。

ミャンマーのシットウイン



(配置の一例)

- ・ミンジー(王)・シッケ(副官)・シン(象)・ミン(馬)・ヤター(戦車)・ネ(兵)
- ・初期配置は、ネ(兵)の位置が指定されていることとヤター(戦車)を最下段に配置することを除けば他の駒は自陣内に自由に配置できる。これは世界唯一のルールである。

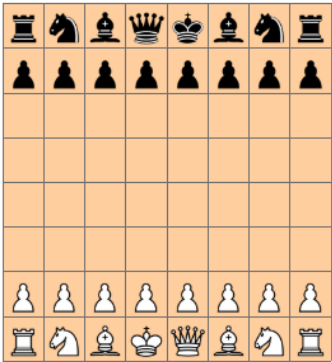
タイのマークルック

ルア	マー	コーン	メット	クン ↓	コーン	マー	ルア
ピア	ピア	ピア	ピア	ピア	ピア	ピア	ピア
ピア	ピア	ピア	ピア	ピア	ピア	ピア	ピア
ルア	マー	コーン	クン↑	メット	コーン	マー	ルア



- ・クン(王)、メット(種)、コーン(根)、マー(馬)、ルア(船)、ピア(貝)

マレーシア・インドネシアのチャトル



マレーシア(マレー語)	インドネシア(ジャワ語)	タイ	ヨーロッパ
チャトル	チャトル	マークルック	チェス
ラジャ(王)	ラトゥ(君主)	クン(君)	キング(王)
マントリ(大臣)	マントリ(大臣)	メット(種)	クイーン(女王)
ガジャ(象)	パテ(象)	コーン(根)	ビショップ(僧正)
クダ(馬)	ジャラン(馬)	マー(馬)	ナイト(騎士)
テル(戦車)	プラフ(戦車)	ルア(船)	ルーク(戦車)
ビィダク(兵)	ビィダク(兵)	ピア(貝)	ポーン(歩兵)

日本の将棋(しょうぎ)

もちろん、日本へも伝わった。

中国の象棋(シャンチー)、朝鮮の将棋(チャンギ)と日本の将棋(しょうぎ)はその名称がよく似ていることから、奈良時代の遣唐使・吉備真備が中国から持ち帰ったという説がある。

しかしながら、日本将棋と中国・朝鮮とは、ルールや駒名などにおいて大きな違いがある。

駒名はどちらかといえば、兵隊色の薄れた駒の名はタイのマークルックに性格が近いので、海幸山幸とおなじく太平洋ルートも考えられよう。

このように、太平洋ルートか中国・朝鮮ルートか、いまのところ断定することはできないが、日本の古い文献記録や出土した駒の年代から推測して、11世紀初めの平安時代には貴族の間で将棋が行われていたことは確実である。

ただし、江戸時代に発行された1443年(嘉吉3)の写本『象棋六種之図』には、小将棋、中将棋、大将棋、大大将棋、摩訶(まか)大大将棋、泰将棋などさまざまな将棋が掲載されている。

泰将棋にいたっては、354枚という途方もない駒数である。

海の向こうから伝来した将棋に対して、ゲームとしての難易度を究極まで高めるためか、日本人は世界に類例のない工夫改良を試みている。

日本の将棋の種類

区 分		盤 面	駒		駒の再使用	備 考
			枚数	種類		
	現行の将棋	9×9	40	8	○	世界唯一のルール
①	小将棋	9×9	42	9	×	現行将棋の原型
②	中将棋	12×12	92	21	×	
③	大将棋	15×15	130	29	×	
④	大大将棋	17×17	192	68	×	
⑤	摩訶大大将棋	19×19	192	51	×	
⑥	泰将棋	25×25	354	93	×	世界最大の盤面と駒数

○現行の日本将棋(盤面 9×9、駒数 40 枚)

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香	一
	飛						角		二
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	三
									四
									五
									六
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	七
	角						飛		八
香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	香	九

① 小将棋(盤面 9×9、駒数 42 枚)



② 中将棋(盤面 12×12、駒数 92 枚)



③ 大将棋(盤面 15×15、駒数 130 枚)

				仲人					仲人					
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵
飛車	飛龍	横行	豎行	角行	龍馬	龍王	奔王	龍王	龍馬	角行	豎行	横行	飛龍	飛車
	猛牛		嗔猪		惡狼	麒麟	師子	鳳凰	惡狼		嗔猪		猛牛	
反車		猫叉		猛豹		盲虎	醉象	盲虎		猛豹		猫叉		反車
香車	桂馬	石將	鉄將	銅將	銀將	金將	玉將	金將	銀將	銅將	鉄將	石將	桂馬	香車

④ 大大将棋(盤面 17×17、駒数 192 枚)

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
																	十
					奇犬						奇犬						十一
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	十二
左車	横行	猛牛	嗔猪	惡狼	猛豹	猛虎	前旗	猛虎	猛豹	猛豹	猛豹	嗔猪	猛牛	横行	右車		十三
青龍	香象	北狄	西戎	木將	石將	鉄將	銅將	金翅	銅將	鉄將	石將	木將	東夷	南蠻	白象	白虎	十四
	駭行		靈狐		水牛		銀將	大龍	銀將		馬騎		靈狸		角行		十五
反車	古鎗	獅子	老鼠	蹄鹿	猫刃	鳳凰	金將	近王	金將	麒麟	行鳥	飛龍	盲獺	狛犬	毒蛇	反車	十六
香車	天狗	夜叉	走車	龍馬	芥鬼	奔王	左將	王將	右將	奔獺	龍王	方行	飛車	鳩鷹	釣行	香車	十七

This image shows a Go board with a complex position. The board is filled with black and white stones. The position is highly tactical, with many stones in atari and complex ladders. The board is oriented with the top-left corner being the top-left of the image.

							仲人									仲人											
步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵	步兵
畸犬※	馬麟	変狸	驢馬	飛牛	横行	豎行	猛熊	前旗	踊鹿	嗔猪	惡狼	狛犬	惡狼	嗔猪	踊鹿	前旗	猛熊	豎行	横行	飛牛	驢馬	変狸	馬麟	畸犬※			
左車	青龍	木將	土將	石將	瓦將	鉄將	銅將	老鼠	蟠蛇	臥龍	摩鰈	醉象	鉤行	臥龍	蟠蛇	老鼠	銅將	鉄將	瓦將	石將	土將	木將	朱雀	右車			
兵士	水牛	猛豹	西戎	東夷	淮鷄	角鷹	古猿	古鴉	孔雀	大龍	麒麟	獅子	鳳凰	金翅	孔雀	行鳥	古猿	角鷹	淮鷄	南蛮	北狄	猛豹	水牛	兵士			
走車	白駒	羊兵	猛牛	猫刃	盲熊	銀兎	金鹿	盲猿	盲虎	羅刹	力士	近王	金剛	夜刃	盲虎	盲猿	金鹿	銀兎	盲熊	猫刃	猛牛	羊兵	白駒	走車			
反車	横龍	飛鷲	桂馬	毒蛇	奔狼	角行	猛鷲	白象	奔鬼	銀將	左將	太子	右將	銀將	奔鬼	白象	猛鷲	角行	奔狼	毒蛇	桂馬	飛鷲	横龍	反車			
香車	玄武	鯨鯢	飛龍	天狗	鳩檠	飛車	龍馬	龍王	奔王	金將	提婆	自在天王	無明	金將	奔王	龍王	龍馬	飛車	鳩檠	天狗	飛龍	鯨鯢	白虎	香車			

小将棋から象を取り除いて簡略化しつつ、駒の再使用という世界唯一のルールを導入して、ゲームとしての難易度を極限まで高めている。

以上述べた世界の将棋をまとめると、次のとおりとなる。

世界の将棋の比較

地 域	駒 の 種 類					
インド(チャトランガ)	王 (ラージャ)	将 (マントリ)	象 (ガジャ)	馬 (アシュワ)	車 (ラタ)	兵 (パダーティ)
中近東(シャトランジ)	王 (シャー)	将 (フィルズ)	象 (フィール)	馬 (ファラス)	車 (ルフ)	兵 (バイダク)
ヨーロッパ(チェス)	王 (キング)	女王 (クイーン)	僧正 (ビショップ)	騎兵 (ナイト)	車 (ルーク)	兵 (ボーン)
中国 (象棋・シャンチー)	将	士	象	馬	車	卒
					砲	
ベトナム (棋将・カートン)	帥	士	相	偶	俥	兵
					炮	
韓国(将棋・チャンギ)	漢	士	象	馬	車	卒
					包	
	楚	士	象	馬	車	兵
					包	
モンゴル(シャタル)	ノヨン (王)	ベルス (将軍)	テメエ (らくだ)	メユル (馬)	ハンガイ (車)	フウ (息子)
ミャンマー(シットウイン)	ミンジー (王)	シッケ (副官)	シン (象)	ミン (馬)	ヤター (戦車)	ネ(兵)
タイ(マークルック)	クン (君主)	メット (種)	コーン (根)	マー (馬)	ルア (船)	ピア (貝)
マレーシア(チャトル)	ラジャ (王)	マントリ (大臣)	ガジャ (象)	クダ (馬)	テル (戦車)	ビィダク (兵)
インドネシア(チャトル)	ラトゥ (君主)	マントリ (大臣)	パテ (象)	ジャラン (馬)	プラフ (戦車)	ビィダク (兵)
日本(将棋・しょうぎ)	王将	角行	金将	桂馬	飛車	歩兵
	玉将		銀将		香車	

盤面・駒の基本的配置等

区 分	盤 面	駒		駒の再使用	駒の置き場所	備 考
		枚数	種類			
インド(チャトランガ)	8×8	32	5	×	枰内	
中近東(シャトランジ)	8×8	32	5	×	枰内	
ヨーロッパ(チェス)	8×8	32	5	×	枰内	
中国(象棋・シャンチー)	9×9	32	7	×	交点	
ベトナム(棋将・カートン)	9×9	32	7	×	交点	
朝鮮(将棋・チャンギ)	9×9	32	7	×	交点	
モンゴル(シャタル)	8×8	32	6	×	枰内	
ミャンマー(シットウイン)	8×8	32	6	×	枰内	初期配置の自由性
タイ(マークルック)	8×8	32	6	×	枰内	
マレーシア(チャトル)	8×8	32	6	×	枰内	
インドネシア(チャトル)	8×8	32	6	×	枰内	
日本(将棋・しょうぎ)	9×9	40	8	○	枰内	駒の再使用

日本将棋の特徴

区 分	世界の将棋	日本の将棋
性格	敵王を打ち取るため騎兵・歩兵などで攻撃	敵王を打ち取るため騎兵・歩兵などで攻撃
駒の名称	兵隊の名が残存	玉・金・銀・桂・香など兵隊色がほとんど消失している。飛車、歩兵に残存しているのみ
盤 面	枰内に置く8×8が主流 中国・韓国は交点に駒を置く9×9	枰内に置く9×9(世界一)
駒の枚数	32 枚	40 枚(世界一)
駒の種類	5～7 種類	8 種類(世界一)
敵味方	色分けて区別。立体的なデザイン	区別なし。敵味方が同じ駒を使うが、駒の向きで敵味方を判別。平面的なデザイン
再利用	取った駒は使えない	取った駒を再使用できる
特徴	盤上の駒が減少していくため、引き分けとなるケースが増大 平均手数は30～40 手	取った駒を再使用できるため、ゲームとしての難易度が飛躍的に高度化 平均手数は110 手強

このように、日本の将棋は形式的にみれば、インドのチャトランガはじめ世界各地の将棋と共通性を有している。

海幸山幸の話もまた、東南アジア・太平洋地域の神話と形式上の共通性を有している。

日本の将棋も海幸山幸も、形式的にみれば世界から孤立しているわけではない。

ところが、日本に伝来した原始的な将棋の内容・ルールに関して、日本人がかなり長期にわたって試行錯誤を繰り返し、改良を加えて現行の日本将棋にたどり着いていることがわかる。

海幸山幸の話に置き換えれば、世界と共通の形式を有しているという理由でその存在価値を切り捨てるのか、それとも日本において独自の内容が上書きされたことを評価するのかどうかという問題である。

前者が戦後史学、後者が本来のあるべき伝統的歴史観であり、今後復興すべき新しい歴史観ということになるだろうか。そのいずれが妥当であるかは、説明するまでもなからう。

海外から伝来したという理由だけで、将棋というゲームを卑しむ人はいない。

海幸山幸もおなじである。太平洋神話の形式のなかに日本独自の内容が上書きされている。

その上書きされた海幸山幸の中核的情報を解釈することこそが、真の歴史認識というものではないか。

形式ではなく、内容に着目すべきである。

将棋の名人

本題から大きく横道に外れ、超マニアックな話になってしまったが、この際、日本将棋の歴代名人について紹介しておきたい。

江戸時代からの家元制・世襲制および推挙制に基づく名人

初代名人	大橋宗桂	慶長 17 年(1612)
二世名人	大橋宗古	寛永 11 年(1634)
三世名人	伊藤宗看	承応 3 年(1654)
四世名人	大橋宗桂	元禄 4 年(1691)
五世名人	伊藤宗印	正徳 3 年(1713)
六世名人	大橋宗与	享保 8 年(1723)
七世名人	伊藤宗看	享保 13 年(1728)
八世名人	大橋宗桂	寛政元年(1789)
九世名人	大橋宗英	寛政 11 年(1799)
十世名人	伊藤宗看	文政 8 年(1825)
十一世名人	伊藤宗印	明治 12 年(1879)
十二世名人	小野五平	明治 31 年(1898)
十三世名人	関根金次郎	大正 10 年(1921)

実力制名人

実力制による名人位を獲得した順に代数が与えられ、通算 5 期で永世名人資格が授与される。

初代名人	木村義雄	1938 年(昭和 13)	通算 8 期	十四世名人(1952 年)
二代名人	塚田正夫	1947 年(昭和 22)		
三代名人	大山康晴	1952 年(昭和 27)	通算 18 期	十五世名人(1976 年)
四代名人	升田幸三	1957 年(昭和 32)		
五代名人	中原 誠	1972 年(昭和 47)	通算 15 期	十六世名人(2007 年)
六代名人	加藤一二三	1982 年(昭和 57)		
七代名人	谷川浩司	1983 年(昭和 58)	通算 5 期	十七世名人(2022 年)
八代名人	米長邦雄	1993 年(平成 5)		
九代名人	羽生善治	1994 年(平成 6)	通算 9 期	十九世名人資格者(2008 年)
十代名人	佐藤康光	1998 年(平成 10)		
十一代名人	丸山忠久	2000 年(平成 12)		
十二代名人	森内俊之	2002 年(平成 14)	通算 9 期	十八世名人資格者(2007 年)
十三代名人	佐藤天彦	2016 年(平成 28)		
十四代名人	豊島将之	2019 年(令和元)		
十五代名人	渡辺 明	2020 年(令和 2)		
十六代名人	藤井聡太	2023 年(令和 5)	通算 3 期	十九世名人有力候補

海幸山幸のまとめ

『古事記』『日本書紀』の「神代篇」に記された日向神話は、要するに北部九州勢力の南部九州への進出と隼人勢力との対立が大きなテーマである。

(一)ニニギノミコトの天孫降臨

北部九州勢力の南部九州への進出

(二)海幸山幸

北部九州勢力の隼人勢力との対立と克服

その後につづくのが、神武天皇と大和政権樹立への歩みである。

日向神話の本質は、天皇家のルーツの物語であり、それを支えた九州の豪族たちの物語でもある。

したがって、日向神話の舞台は九州——筑紫の島である。

『新唐書』日本伝にも次のとおり記されている。

『新唐書』は 1060 年(嘉祐六)に成立した中国の正史である。

その前に編纂されていた『旧唐書』を大幅に改め、唐時代に関する統一見解としてまとめた中国の国史である。

日本に関しても、倭と日本の関係があやふやだったため、日本に統一して記述した最初の中国史書である。

どういうわけか、石原道弘氏(1910～2010)編訳の『中国正史日本伝』(1956・岩波書店)から、この『新唐書』日本伝だけが除外されている。筆者も講談社の『倭国伝』(2010)で初めて知った。

日本は、古の倭の奴也。京師を去ること「一」万四千里にして、新羅の東南に直りて海中に在り。島にして居す。「その土地の広さは」東西には五カ月の行にして、南北には三カ月の行なり。

国「(の都)」には城郭無く、木を聯ねて柵落と為し、草を以て屋を茨く。左右には小島五十余り「ありて」、皆自ら国と名づけ、而して之に臣附す。本率一人を置き、諸部を檢察せしむ。

其の俗は女多く、男少なし、文字有り、浮屠の法を尚ぶ。其の官には十有二等あり。

其の王の姓は阿每氏、自ら言う、初主は天御中主と号し、彦瀲に至るまで凡そ三十二世、皆「尊」を以て号と為し、筑紫城に居す。彦瀲の子、神武立ち、更めて天皇を以て号と為し、治を大和州に徙す。

講談社の『倭国伝』より

驚くべきことに、今から 1000 年前の中国において、日本の古代史についての総括が行われている。

『新唐書』日本伝の要旨は次のとおりである。岩波本から除外された理由もわかる気がする。

- ① 日本のルーツは、「古の倭の奴」という認識
奴国は博多湾岸・那珂川流域にあり
- ② 初代の王は「天御中主(あめのみなかぬし)」という認識
- ③ 九州の「筑紫城」を拠点としていたという認識
- ④ 神武天皇が九州から「大和州に徙(うつ)した」という認識

直接は述べられていないが、邪馬台国も当然九州にあったことを前提にしている。

そして、筑紫にいた神武天皇が近畿に東遷して日本の統一を成し遂げた。

以来、日本の歴史は現在に至るまで天皇家とともに歩いている。

世界最古の王家として、現在にいたるまで存続している。

しかしながら、戦後史学においては、神武天皇の存在自体が否定されている。

いつの間にか、戦後 80 年が経過した。

このままでいいのか。

1000 年前の中国の正史『新唐書』日本伝を無視したままでいいのか。

『古事記』『日本書紀』を否定・無視したままでいいのか。

中国の史書と日本の史書が、相呼応しながら古代のメッセージを伝えている。

そろそろ、虚心坦懐に耳を傾けるべき時期を迎えたのではないのか。

豊玉姫の出産

『古事記』によると、豊玉姫はワタツミの宮で山幸彦の子を懐妊したが、天神の子を海の中で産むわけにはいかないと、陸に上がってきた。

浜辺に産屋を作ろうとしたが、茅草がわりの鵜の羽を葺き終えないうちに産気づいたため、産屋に入った。

豊玉姫は、「他国の者は子を産む時には本来の姿になる。私も本来の姿で産もうと思うので、絶対に産屋の中を見ないように」と山幸彦に告げる。

しかし、山幸彦はその言葉を不思議に思い産屋の中を覗いてしまう。そこに豊玉姫が姿を変えた八尋和邇(やひろわに)が腹をつけて蛇のごとくうねっているのを見て恐れて逃げ出した。

豊玉姫は山幸彦に覗かれたことを恥じて、生まれた子を置いてワタツミ国に帰ってしまう。その生まれた御子を天津日高日子波限建鵜草葺不合命(あまつひこ・ひこなぎさたけ・うがやふきあへず)という。

しかしその後、山幸彦が覗いたことを恨みながらも、御子を養育するために妹の玉依姫をワタツミ国から派遣した。

『日本書紀』においても、ウガヤフキアエズが誕生した産屋はすべて鷗(う)の羽の産屋(うぶや)を葺いたが、屋根の頂上部分を葺き終わらないうちに生まれたので、母の豊玉姫は「彦波瀲武鷗葺草葺不合」と名づけたという。

産屋の風習

豊玉姫は草ぶきではなく、鵜の羽で葺いた産屋でウガヤフキアエズを出産している。

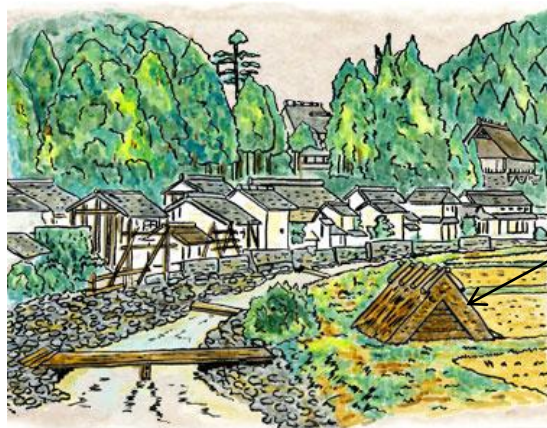
太平洋のミクロネシア諸島などにおいても、海岸近くの産屋で出産する風習があり、出産を助ける女性たちだけが入ることを許されたという。

男性の入室はタブーとされ、産屋のまわりで火——すなわち魔除けのための「別火」を燃やした。

『古事記』にもコノハナサクヤヒメの出産が記されており、一夜で妊娠したためニニギノミコトに国

津神の子ではないかと疑われたため、産屋に入り、粘土で塞いで「天津神であるニニギノミコトの本当の子なら何があっても無事に産めるはず」と火を放って三柱の子を産んだという。

戦後まで、日本各地に産屋の習慣が残っていたが、昭和 50 年ごろ完全に終焉したという(板橋春夫「産屋習俗の終焉に関する民俗学的研究」2017)。



昭和 23 年ごろの産屋の風景(京都府福知山市)

豊玉姫の出産場所

すでに述べたとおり、ウガヤフキアエズの御陵である「吾平の山の上の陵」の候補地が、鹿児島県と宮崎県の二か所にある。

候補地①:大隅半島の鵜戸の窟(いわや)(鹿児島県鹿屋市吾平町・旧肝属郡吾平町)

明治七年(1874)に明治天皇によって吾平山上陵と治定された御陵である。



吾平山上陵（吾平山陵）

山陵とは帝皇の塚墓をいう。日本書紀に「彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊は、西の洲の宮で崩御、日向の吾平山上陵○○に葬る」と載せてある。御陵の所在については、

明治七年（一八七四）七月十日肝属郡始良郷（吾平町）上名村のこの地を御地定になった。

古事記には右記尊を「天津日高日子波限建鸕鷀草葺不合命」と載せている。

御陵のあるところを俗に鸕鷀山といい、窟を鸕鷀岩屋（窟）と称している。

始良名勝誌には窟内に大小御陵二ヶ所あり、その内の大の塚は右記尊の御陵で、その東の

小の塚は后妃玉依姫（神武天皇の御母）の御陵と申伝云々と記されている。御陵は甚だ広い。

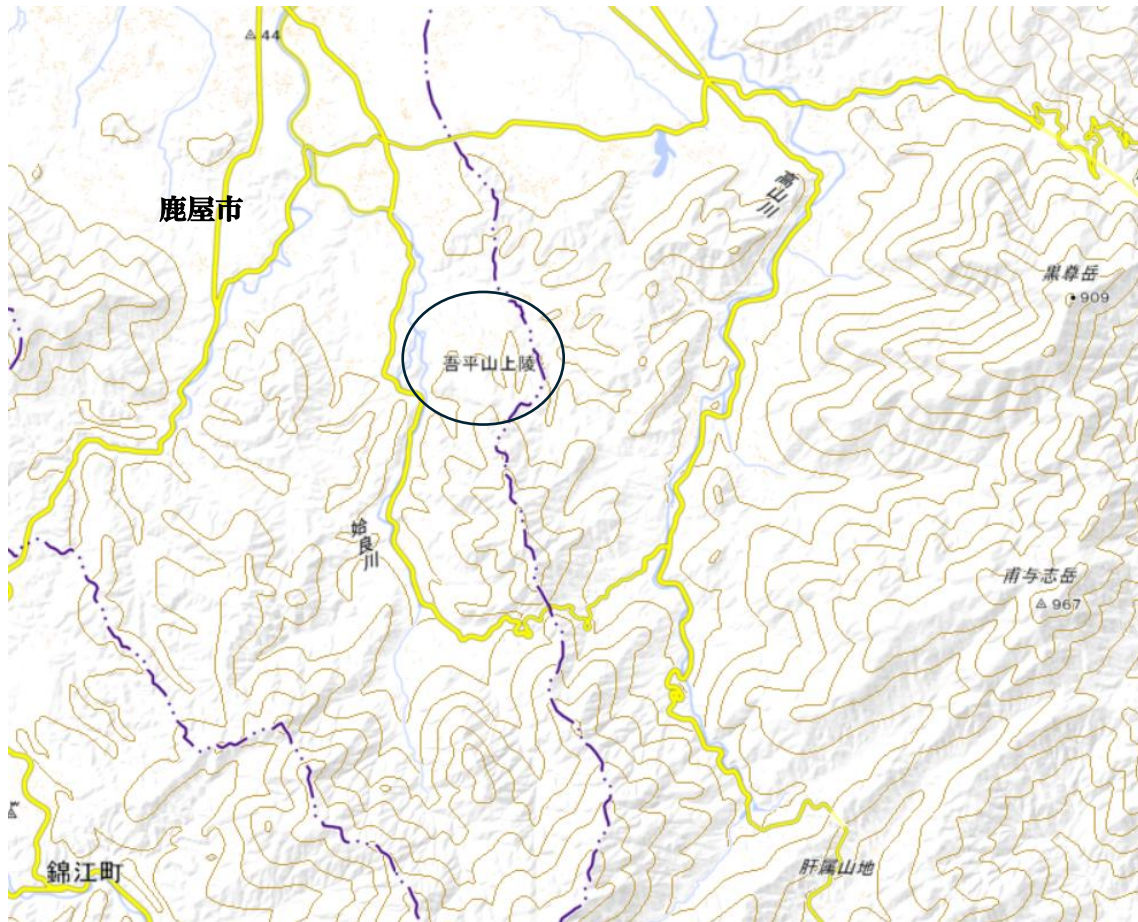
右記尊を祀る鸕鷀戸六所権現（現鸕鷀戸神社）は、ここから北方約六キロメートルの麓宮前にある。

神武天皇妃吾平津姫を祀る大川内神社は南方約四キロメートルの神野大川内の地にある。

昭和六十年二月 吾平町
平成二十七年三月 修復

吾平の地名について

文 献	地 名	年 代
『日本書紀』	吾平の山の上の陵	720 年
『続日本紀』	始羅郡	797 年
『延喜式』	始良	927 年
『和名抄』	始羅郡、大隅郡始良郷	931～938 年
『大隅国図田帳』	始良荘	1197 年
薩摩藩	始良郷	江戸期
町村制施行	始良村	1889 年
町制施行	吾平町	1947 年
市制施行	鹿屋市吾平町	2006 年鹿屋市・輝北町・串良町と合併



候補地②：日向の鵜戸神宮(宮崎県日南市宮浦)

明治二十九年(1896)明治政府によって鵜戸神宮背後の速日峯山上が伝説地として指定された。もちろん、宮崎県側からの熱心な要望陳情によるものであった。



鵜戸神宮



鵜戸神宮は、旧官幣大社で、現在は神社本庁の別表神社。

日向灘に面した断崖の中腹、東西 38m、南北 29m、高さ 8.5m の岩窟（海食洞）内に本殿が鎮座している。

参拝するには崖にそって石段を降りる必要があり、神社としては珍しい「下り宮」である。

境内地を含む付近の海岸は、波の浸食を受け形成された海食洞や波食棚が多くあり名勝に指定されている。

主祭神	日子波瀲武鸕鷀草葺不合尊(ウガヤフキアエズ)
祭 神	大日靈貴(おおひるめのむち) (天照大神)
	天忍穗耳尊(あめのおしほみみ)
	彦火瓊々杵尊(ニニギノミコト)
	彦火々出見尊(山幸彦)
	神日本磐余彦尊(神武天皇)

社伝によれば、本殿の鎮座する岩窟は豊玉姫がウガヤフキアエズを産むための産屋を建てた場所という。

崇神天皇の時代に上記六柱の神を「六所権現」と称して創祀され、推古天皇の時代に岩窟内に社殿を創建して鵜戸神社と称したと伝える。

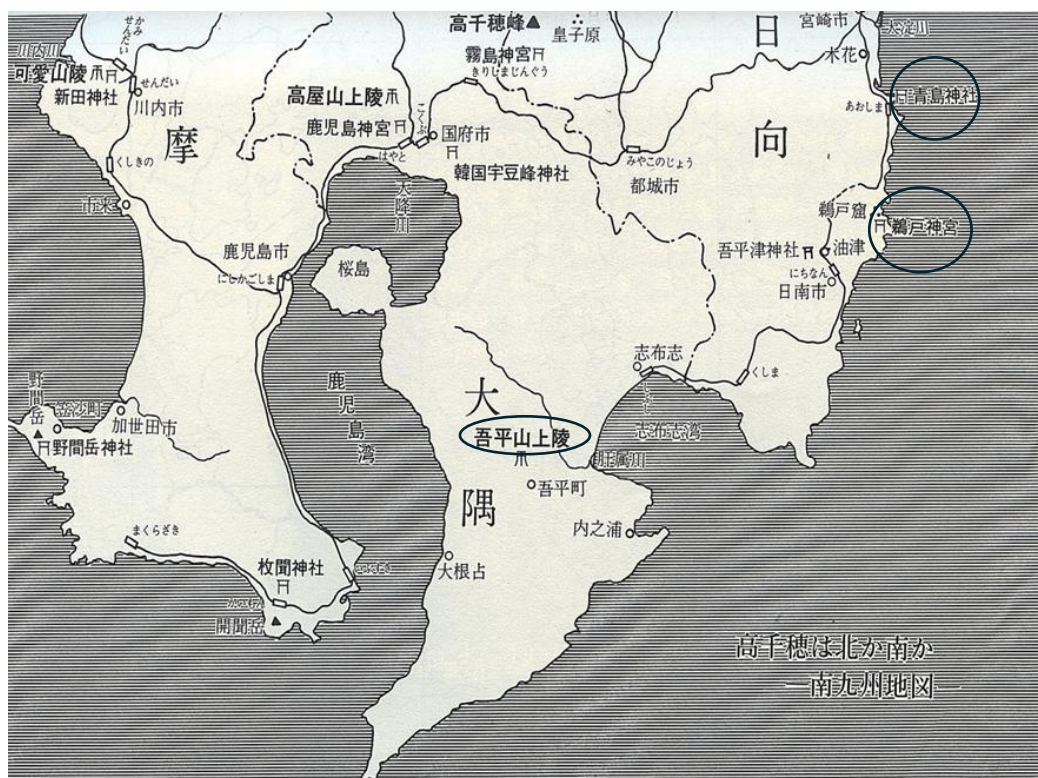
すでに述べたとおり、ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメの拠点は西都原台地(宮崎県西都市)にあったとみている。

山幸彦の時代には、南方に勢力を拡大し、鵜戸神宮は西都原台地から南へ約 52 キロメートルの距離にある。豊玉姫の出産場所としては、この地が妥当である。

鹿屋市阿平の鵜戸の窟(いわや)は、大隅隼人のど真ん中に位置しており、危険過ぎるというべきであろう。

鵜戸神宮の北方 17 キロメートルには青島があり、山幸彦と豊玉姫などを祭る青島神社(宮崎市青島)がある。

山幸彦がワタツミの宮から帰還した際に青島に上陸し、この地に宮を営み、その宮跡に山幸彦・豊玉姫命・塩筒大神を祭ったことに由来するという。

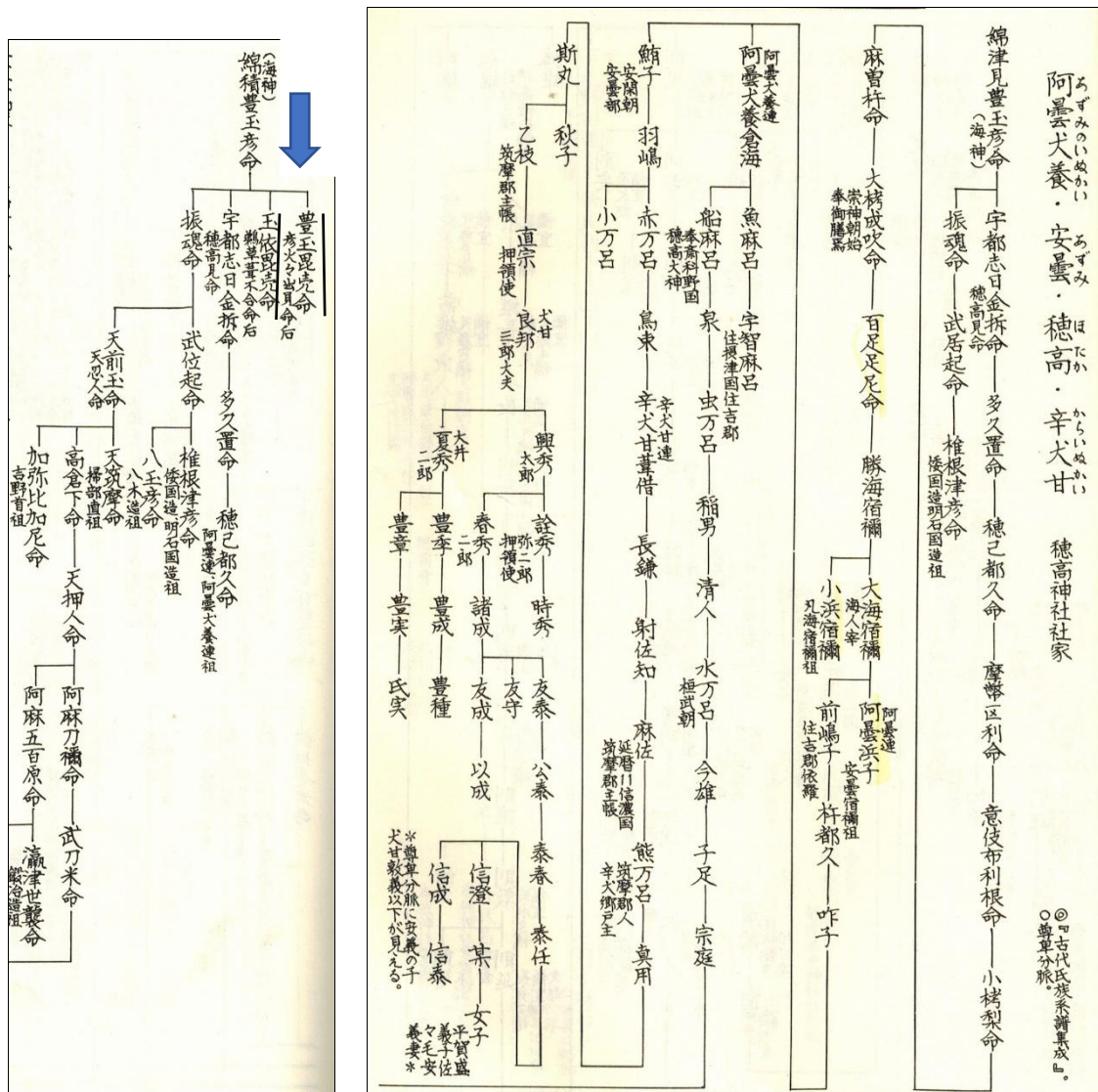


青島

玉依姫

前述したように、『古事記』によると、豊玉姫は山幸彦に対して出産中に産屋の中を見ないように告げていたにもかかわらず、山幸彦は産屋の中を覗いてしまう。見られたことを恥じた豊玉姫は、生まれた子を置いてワタツミ国に帰ってしまう。豊玉姫は山幸彦が覗いたことを恨みながらも、生まれたウガヤフキアエズを養育するため、妹の玉依姫をワタツミ国から日向に派遣した。

近藤敏喬氏の『古代系図集覧』(東京堂出版・平成 5)には、次のような阿曇氏の系図が載せられている。



豊玉姫と玉依姫は、志賀島(福岡市東区)を拠点とする海人族・阿曇氏に属する女性として銘記されており、したがって、ワタツミの宮は阿曇一族の拠点である志賀島を中心とした地域にあったと考えられるべきである。

玉依姫の御陵

あまり知られていないが、福岡県大野城市には玉依姫の御陵の伝承地がある。

江戸時代の貝原益軒が著した『筑前国続風土記』という地誌がある。それを補遺するために弟子の加藤一純・鷹取周成らが編纂した『筑前国続風土記附録』のなかに、玉依姫の御陵について、次のように書かれている。

仲村(注・大野城市中)

宝満宮(神殿一間一間半・祭礼九月十八日・奉祀大谷伊與)

支村の五領(注・御陵)にあり。玉依姫を祭る。毎年九月十八日に祭礼がある。この産神(うぶがみ)と崇められている。

社伝によると、玉依姫はこの地でお亡くなりなられた。よって御陵を築き、神廟を建てて崇め祭った。

第十二代景行天皇の時代に、熊襲という賊が朝廷の命令に叛いたので、天皇みずから筑紫に下られ、熊襲を征伐なされた。このとき、御陵の宮に御祈願なされて賊を討伐された。

神功皇后も三韓征伐をなされるとき、この神廟に祈られた。そのとき玉依姫から神功皇后と姉妹の契りを約束する神託があった。櫓が原の玉依姫の御廟に参詣されたと旧記にあるのは、この時のことであろう。また、荷鳥田村(朝倉市秋月・野鳥)という所にいた羽白熊鷲という土蜘蛛を討伐されたが、そのときも御陵の宮の神助を得て勝利されたという。

齐明天皇七年(六六一)朝倉の木の丸殿に齐明天皇がおられたとき、御陵の宮の再建の動きがあったが、その年崩御されてしまった。

天智天皇元年辛酉(六六一)九月、大きな宮柱を立て、同月十八日に神を移し奉られた。

天智天皇十年庚午(六七〇)十月二十二日、太子大友皇子、左大臣蘇我赤兄、大臣兼連が朝議を願って、秦友兄という人を奉幣使として派遣し、御陵という号から勅命により宝満宮に改められた。天皇がみずから揮毫された勅額一扁と御剣三振、幣帛を捧げられ、村人二人を選ばれ、中臣正光、佐々保の氏を賜り、宮司となされた。

御廟は二間半に三間で、瑞垣がある。楼門があつて壮麗な御社で、多くの社領も寄付され繁栄していた。

文武天皇白鳳年間(六五〇～六五四)、藤原広嗣を勅使として、天智天皇が奉納された御剣を御廟の北の地中に埋められた。その印に大石を立てた。これを大嶽塚というらしい(オオタケは御太刀の訛ったものである)。

このように由緒ある御廟であつたが、天正年間(一五七三～一五九二)の兵火によって御陵廟は焼失し、勅額・神宝等も焼失し、わずかに御陵の目印の松の木だけが残った。

今の神社は、御廟の松の東の高い林の中に西に向かって建っている。

○宝満宮【センショウジ山の麓。延宝三年(一六七五)正月御陵の宮より勧請したという】

○八大龍王森 ○天神森 ○河神森 ○薬師堂二字 ○大日堂 ○観音堂



御陵宝満神社 (大野城市中)

神武天皇と玉依姫

玉依姫の御陵が所在する月の隈丘陵の南には大野山(四王寺山、王城山、大城山)があり、玉依姫の子の神武天皇の伝承も残されている。

王城神社(太宰府市通古賀)の創始は、神武天皇が日向から東征の折り、大野山に城を構え、事代主命と武甕槌命を祭り、幣帛を捧げて祈念したことに由来するという。

王城山と呼ばれたのは、天皇の城——すなわち、大王の城が築かれたことに基づく。

ちなみに、もと王城山にあった王城神社は、天智天皇時代到大野城や大宰府の整備に伴い、麓の太宰府市に移されたという。

ずっと先で触れることになるが、『古事記』『日本書紀』に記された神武天皇の東征経路は、日向→宇佐→岡水門(遠賀川河口)→瀬戸内海とされており、北部九州の内陸部を通過したという記事はまったく見当たらないが、大野城のほかにも、豊前(京都郡・田川郡)や嘉穂郡などにも、多くの神武天皇伝承が残されており、地域伝承に基づくかぎり、神武天皇は大野城を経由していることは明らかである

玉依姫の伝承と併せて考慮すれば、神武天皇は母の玉依姫を伴って大野城を訪れていた可能性が高いということになる。そして、この地に玉依姫を残して、近畿に東征したということになるろう。

何ゆえ、この地に玉依姫を残したのか。それは、玉依姫のふるさとであるワタツミ(海神)国であったからである。

志賀島から宝満山に至る旧席田郡一帯は、阿曇一族の支配する領域であった可能性もある。

『筑前国続風土記附録』に基づけば、宝満宮(大野城市中)は江戸時代の延宝三年(1675)正月に御陵の宮から現在地に移転している。

御陵の旧地は、現在の御陵中学校(大野城市中一丁目)あたりの区域である。

そこには、御陵古墳群があり、昭和 56～57 年(1981～1982)に、御陵中学校建設に伴う発掘調査が行われた。

北丘陵、南丘陵と呼ばれる二つの丘があるが、北丘陵からは 8 基の古墳、南丘陵からは 6 基の古墳と 1 基の木棺墓が見つかった。

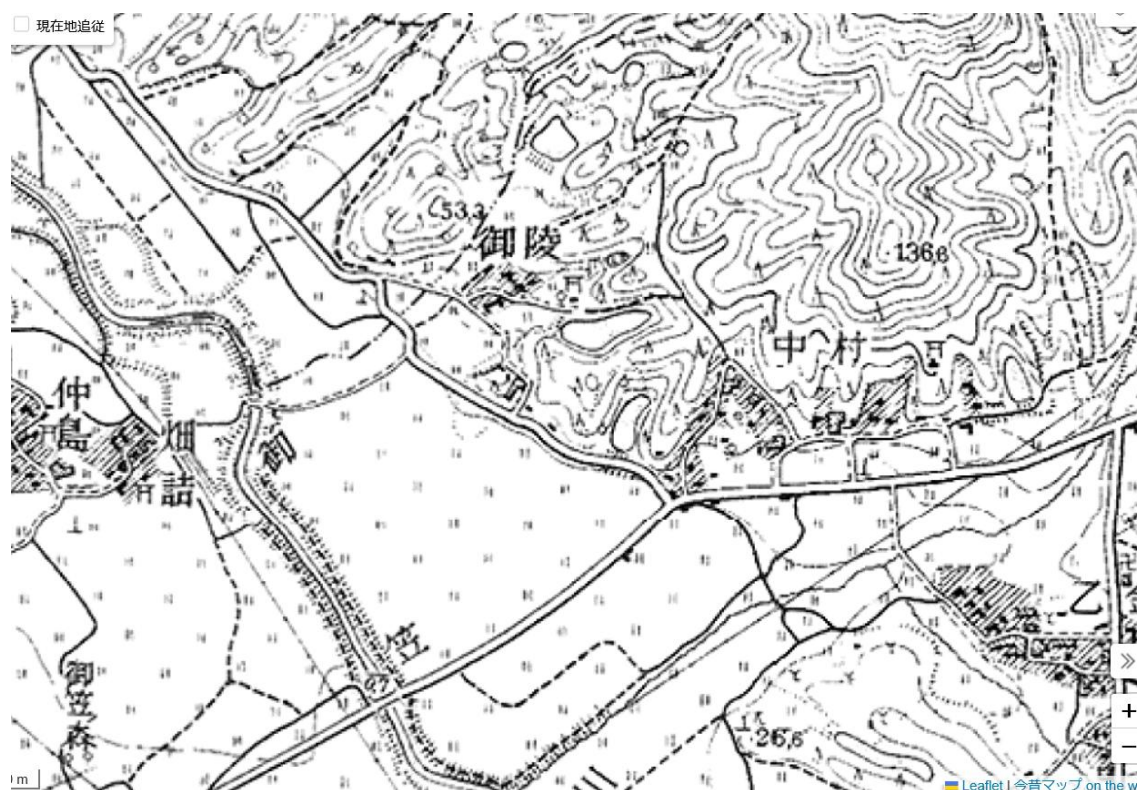
造られた時期は、おおむね古墳時代前期(4 世紀)と後期(6 世紀)ごろと推定された。

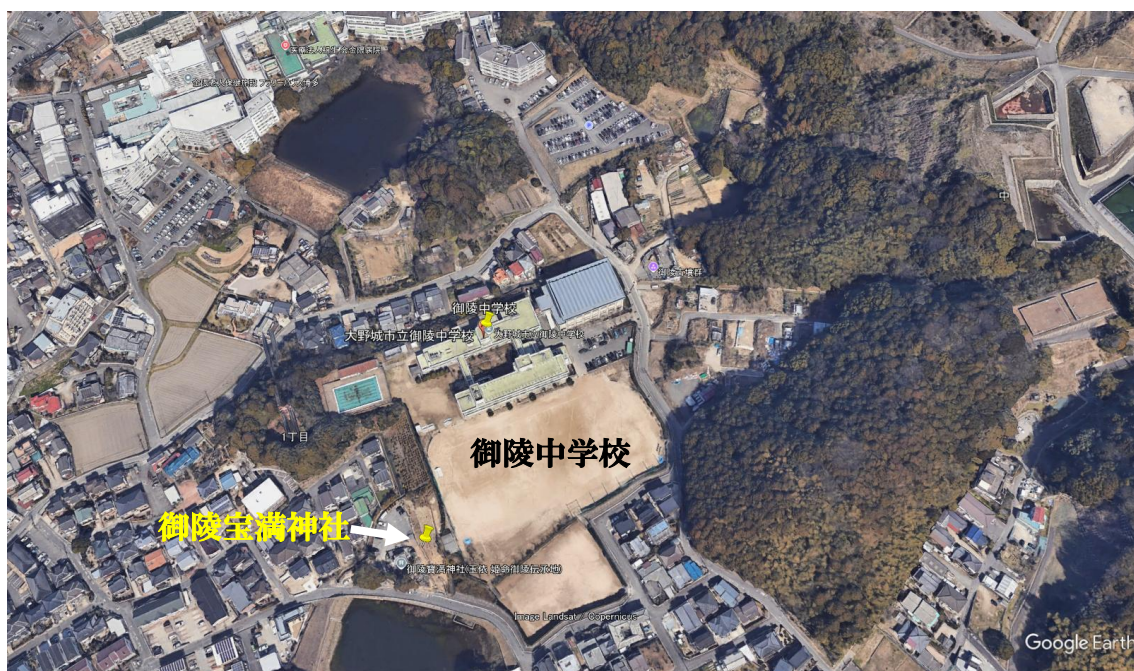
神武天皇の東征と大和政権の成立を 3 世紀末から 4 世紀初頭とみれば、前期古墳は母の玉依姫が埋葬された時期とも重なっている可能性がある。

北丘陵の先端部の N1 号古墳は、ほぼ長方形の古墳で、南北方向の長さが約 14 メートル。

遺体を埋葬した割竹形木棺、箱式石棺、石蓋土坑墓などが 4 基見つかり、かなりの権力者の墓と推定されたものの、当時の時代背景からみて、『筑前国続風土記附録』の記事内容を踏まえた玉依姫の御陵かどうかについての調査検討は行われなかったとみてよろしかろう。

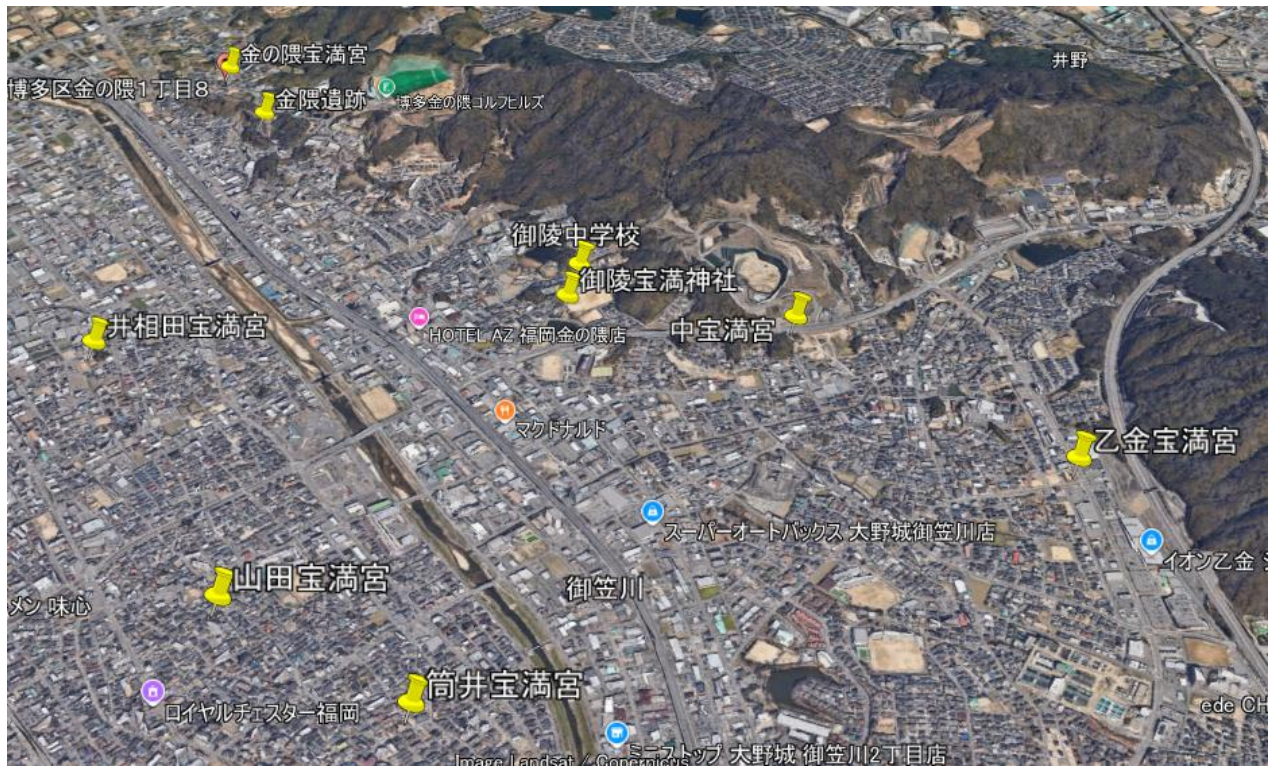
ということは、御陵と御陵の宮(本来の宝満宮)の解明については、未解決の課題として残されたままとされているわけであり、今後そういう観点からの本格的な調査と検証が望まれる。





なお、御陵宝満神社周辺の村々に、宝満宮が祭られているので、この際紹介しておこう。

中宝満宮 (大野城市 中 119)	延宝三年(1675)正月、村内の御陵宝満神社から勧請
乙金宝満宮 (大野城市 乙金 2-16-1)	文禄四年(1595)八月御陵宝満神社から本村字御手洗旧古宮へ勧請、元禄年御陵宝満神社から当社地へ移転と伝わる。明治五年十一月三日村社。
山田宝満宮 (大野城市 山田 4-7-7)	由緒不詳、明治五年(1872)十一月三日村社。御笠の森にあった三笠森神社を明治四十四年六月一日合併
筒井宝満神社 (大野城市 筒井 2-8-10)	創建は延宝三年(1675)正月、御陵宝満神社から勧請
井相田宝満宮 (福岡市博多区 井相田 3-6)	由緒不詳、明治五年(1872)十一月三日村社
金の隈宝満宮 (福岡市博多区 金の隈 1-8)	由緒不詳、明治五年(1872)十一月三日村社



(以下、つづく)

日向王朝の時代⑥
南九州の古代文化

河村哲夫

北郷泰道氏の『古代日向・神話と歴史の間』(鉾脈社・2007)に、こういらくだりがある。
「南九州を研究領域とする研究者は、考古学上の出逢いの一つを放棄するしかない。青銅器に出逢うことは、叶わないことだからである。何故なら、南九州に青銅器が存在しないから」



厳密には鹿兒島県の土橋遺跡(志布志市有明町野井倉土橋)から中広形の銅矛が一本出土しているという。

紀元前 1～2 世紀の中広形の銅矛であり、奴国の時代に春日丘陵(福岡県春日市)を中心とした地域で製造されたもので、出雲の荒神谷遺跡から 14 本出土しており、大分県などからも出土している祭祀用の青銅器である。

ということは、北部九州の海人族が、朝鮮半島南岸や出雲などとおなじく船で大隅半島のつけ根の志布志湾にも出入りしていたということになる。

このほか、北郷泰道氏は青銅器の出土例として次の遺跡を紹介されている。

県 名	市町名	遺跡名	出土青銅器	備 考
宮崎県	高千穂町	神殿遺跡	破鏡片	
	延岡市	早日峰遺跡	小型仿製鏡	
	西都市	松本原遺跡	破鏡片	
	西都市	銀代ヶ迫遺跡	破鏡片	
	宮崎市	石の迫第 2 遺跡	小型仿製鏡	
	宮崎市	下那珂遺跡	破鏡片	
鹿児島県	霧島市	本御内遺跡	破鏡片	
	薩摩川内市	外川江遺跡	小型仿製鏡	
	指宿市	横瀬遺跡	破鏡片	薩摩半島

そして、次のように総括される。

「これで、青銅器文化圏の一角に、席を占めているというのはおこがましい。むしろ、胸を張って『我々は青銅器の神を仰ぐことはなかった』』と言った方がよい」

このように、南九州の大きな特徴は、青銅器が乏しいということにある。

この点において、北部九州および出雲の古代文化とは大きな違いがある。

ところが、初期の稲作遺跡が相次いで確認されている。

北郷泰道氏は、「初期稲作に伴う遺構と遺物の出土が、九州島において北部と南部に集中することが、近年の調査成果の蓄積の中で浮き彫りになってきている」として、少なくとも 40 を超える初期稲作遺跡があり、そのなかから以下の遺跡を紹介される。

県 名	市町名	遺跡名	特 徴
宮崎県	都城市	黒土遺跡	松菊里型住居・靱圧痕の付いた土器
	都城市	肱穴遺跡	大陸系磨製石器
	高鍋町	持田中尾遺跡	松菊里型住居・大陸系磨製石器
	延岡市	古川遺跡	大陸系磨製石器
	宮崎市	右葛ヶ迫遺跡	孔列文土器
	西都市	宝財原遺跡	孔列文土器
	都城市	中尾山・馬渡遺跡	孔列文土器
鹿児島県	日置市	六ッ坪遺跡	松菊里型住居
	日置市	下原遺跡	靱圧痕の付いた土器
	鹿児島市	魚見ヶ原遺跡	松菊里型住居
	鹿児島市	玉里遺跡	大陸系磨製石器
	鹿屋市	水ノ谷遺跡	孔列文土器
	鹿屋市	榎崎 B 遺跡	孔列文土器
	鹿屋市	外川江遺跡	大陸系磨製石器
	鹿屋市	吉ヶ崎遺跡	大陸系磨製石器

孔列文土器とは、九州縄文時代晩期に朝鮮半島から伝来した口縁のところに孔を連続して開けた土器のことである。北部九州を中心に出土するが、南九州でも確認されている。



初期稲作の遺跡と遺物の分布(本郷泰道氏『古代日向・神話と歴史の間』より)

なお、松菊里(ソングンニ)型住居と花卉状住居の特徴の違いは次のとおりである。

区分	松菊里(ソングンニ)型住居	花卉状住居
形状	円形の平面プラン	円形や方形
構造	床面中央部に土坑と2基の柱穴	竪穴住居の壁の一部が内側に向かって張り出し、住居内の空間を仕切っている。 床面の中央に土坑や2基の柱穴を持つものがあることから、松菊里型住居が変容したものとする意見もあり。
分布地域	弥生時代前期の佐賀県や福岡県など玄界灘沿岸の北部九州地域を中心とした初期稲作関連遺跡	弥生時代後期の南九州に分布する特徴的な竪穴住居とみられていたが、近年、熊本県・佐賀県・大分県などの中部・北部九州地域での発見が相次いでいる。
稲作のルート	中国大陸→朝鮮→北部九州	北部九州→南部九州

【松菊里(ソングンニ)型住居】



松菊里型住居（韓国、松菊里遺跡）



【花卉状住居】



宮崎市熊野原遺跡の花弁状間仕切り住居



そのうえで、北郷泰道氏は、南九州における初期稲作が平野部のみならず内陸部にも普及していることを指摘される。

県名	市町名	遺跡名	特徴	備考
宮崎県	都城市	坂元 A 遺跡	水田	狭小・不整形
	えびの市	肱穴遺跡	水田	
	えびの市	黒土遺跡	陸稲	
	えびの市	桑田遺跡	陸稲	
鹿児島県	垂水市	宮下遺跡	水田	棚田状の小区画

要するに、縄文時代から引き継がれた畑作の延長としての小規模稲作であり、北部九州型の「7」が水田で「3」が畑水田稲作ではなく、南九州は「3」が水田で「7」が畑である。

そして、南九州を代表する二つの弥生集落を紹介される。

櫛遺跡(宮崎市)と高橋貝塚(鹿児島県南さつま市)である。

平野部の海岸に近い砂丘上に形成された弥生集落で、低湿地に水田を開発している。

(一) 櫛遺跡(宮崎市吉村町櫛)

弥生時代前期の代表的な墓地遺跡である。

大淀川の左岸、海岸と平行する現海岸から西から東へ砂丘が形成され、櫛遺跡は第一砂丘の南端に位置している。

第一砂丘	大島砂丘	南端の櫛遺跡 西側の浮ノ城遺跡に水田跡
細長い低地	船着き場か	中須遺跡から柄付き石斧が出土
第二砂丘	山崎砂丘	石神遺跡(弥生中期・紀元前後)の住居跡
第三砂丘	五厘橋砂丘	
第四砂丘	一ツ葉浜	

櫛遺跡からは、1951(昭和 26)～1952 年(昭和 27)に小児用カメ棺が出土し、1956 年(昭和 31)の日本考古学協会による発掘調査によって、櫛中学校の運動場から弥生時代前期の弥生式土器が出土し、1959 年(昭和 31)の宮崎市の発掘により、10 基の土壇上に 1 メートル前後の方形ないし長方形の石敷きをもつ墓と、壺棺 3 組が検出された。

弥生前期～中期の墓は基本的に北部九州系の倭人による造営とみられており、紀元前後の金印奴国の時代とも重なる。

志賀島の阿曇を中心とした北部九州の海人族は、朝鮮方面との交流のみならず、日本海や瀬戸内海方面、九州南部、沖縄など南西諸島方面とも広域的交流を行っていたことがわかる。



図2 周辺の主要遺跡分布

1：橋通東1丁目遺跡	2：宮崎小学校遺跡	3：旭2丁目遺跡	4：別府町遺跡	5：広島古墳群
6：浄土江遺跡	7：大町遺跡	8：北中第2遺跡	9：宮崎大学教育学部跡地遺跡	
10：中無田遺跡	11：櫛遺跡	12：宮崎八幡宮	13：浮ノ城遺跡	14：山崎上ノ原第2遺跡
15：山崎下ノ原第1遺跡	16：中須遺跡	17：桜町遺跡	18：下北方古墳群	19：櫛1号墳

表1 周辺遺跡における集落遺跡と生産遺跡の関係

弥生時代	集落遺跡	生産遺跡	古墳時代	集落遺跡	生産遺跡
2：宮崎小学校遺跡	○		6：浄土江遺跡	○	
4：別府町遺跡	○	○	7：大町遺跡	○	
11：櫛遺跡	○		8：北中第2遺跡	○	
13：浮ノ城遺跡		○	14：山崎上ノ原第2遺跡	○	
16：中須遺跡	○				

『宮

崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第244集』より



「筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原」におけるイザナギの禊

『日本古代通史』第一巻の「奴国の時代」において、イザナギが禊をした場所に関して、日向の伝承を紹介した。



上図のとおり、阿波岐原(櫛)、上の瀬、下の瀬、下の瀬、小戸などがあり、この地こそ、「日向の橘の小門(小戸)の阿波岐原(櫛原)」であるとする説も、大いに説得力がある、とも述べた。

宮崎市住吉・宮崎郡佐土原町付近から一ツ瀬川の南東部にかけての地域は、もともと那珂郡とよばれていた。その旧那珂郡にあるのが住吉三神を祭る住吉神社である。

小戸神社(宮崎市鶴島)は、イザナギを祭神としており、大淀川河口左岸の下別府に位置しているが、もと宮崎郡の橘郷に属していた。確かに橘という地名もあり、小戸という地名もある。

大淀川という名も、小戸に由来するという。また、江田郷(宮崎市阿波岐原町)の日向灘を望む一ツ葉海岸近くに、日向国式内四座の一つとされる江田神社(宮崎市阿波岐原町産母)があり、イザナギとイザナミを祭神としている。

これらのことからみれば、阿波岐原(櫛原)は宮崎にあったとする説も極めて有力にみえる。

第1巻の「奴国の時代」でも述べたように、博多湾にはイザナギの禊によって生まれたとされるワタツミ三神を祭る志賀海神社、住吉三神を祭る住吉神社、警固三神を祭る警固神社がセットで残

されており、紀元前後の倭国の盟主であった奴国に属していることから、「筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原」は博多湾岸・奴国であると結論づけた。

その際、何ゆえ日向の地に、那珂郡があり、住吉神社が祭られたのか、ということについては、北部九州の邪馬台国勢力もしくは高天原勢力の南遷(天孫降臨)と関係があるのではないかと述べた。

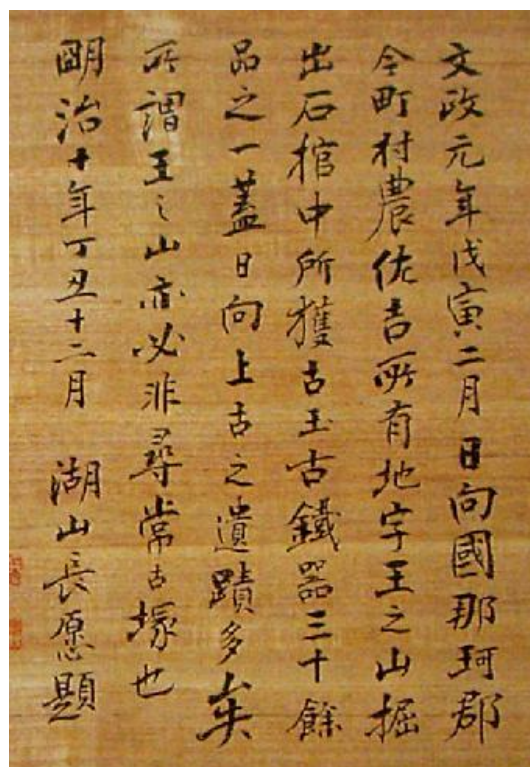
このことに加えて、弥生前期の櫓遺跡のことを踏まえて補足すれば、この地は朝鮮半島南端地域とおなじく、北部九州の倭人の伝統的な寄留地であった可能性が高いとみるべきであろう。

ということは、3世紀後半のニニギノミコトの天孫降臨よりも、ずっと早い紀元前3～4世紀の弥生時代前期に北部九州と南部九州との交流が開始されていたことになる。

玉璧(ぎょくへき)

江戸時代の文政元年(1818)二月、日向国那珂郡今町(宮崎県串間市)の王之山で掘り出された石棺のなかから、佐吉という農民が玉璧を発見した。

玉璧が納められた木製の箱に箱書きが漢文で記されている。



読み下せば次のとおり。

「文政元年(1818)戊寅二月、日向国那珂郡今町の農(民)の佐吉所有地字王之山より石棺を掘り出したる所、古玉鉄器三十余品を獲た。一蓋に日向は上古の遺跡多くして、いわゆる王之山もまた必ずや尋常ならざる古塚なり。明治十年(1877)丁丑十二月 湖山長原題」

玉璧は加賀前田家で所蔵されていたが、現在は公益財団法人前田育徳会の所蔵となっている。

直径	直径 33・3cm
厚み	0.6 cm
重量	1.6 kg
材質	軟玉
デザイン	・真ん中に穴(直径 6.5 cm) ・動植物がモチーフの文様 ・同心円で三帯に区切られている。 ・一番外側には五つの竜首文が配されている。 ・外周と内周の間に整然とした穀粒文様→従って「穀璧」とも呼ばれる。 ・一番内側の内周には、三体の鳥文が波形状に彫刻されている。
類似品	・ほぼ同じ大きさ・文様構成のものが、中国南部の「南越王墓」から出土
製作時期	・紀元前 2 世紀ごろに中国で製作(推定)
発見場所	王之山(不明)
他の出土物	玉璧のほか玉・鉄器など 30 数点があったとされるが所在不明



玉璧といえば、中国の殷周時代から王侯のしるしとされた宝物である。

日本では、伊都国の三雲遺跡(福岡県糸島市)、奴国の須玖岡本遺跡(福岡県春日市)、峯遺跡(福岡県朝倉郡筑前町)などから断片が出土している。



串間市は縄文時代の遺跡や弥生時代から古墳時代にかけての遺跡も豊富で、このあたりに南九州における古代の拠点の一つがあった可能性が高い。

中広形の銅矛一本が出土した土橋遺跡(鹿児島県志布志市有明町)とも近いことから、志布志湾は北部九州系倭人の拠点的港として活用されていた可能性が高いが、朝鮮半島南岸の例を考慮すれば、南部九州の隼人と混住していたとも考えられる。

したがって、串間市の玉璧が長江流域の越や呉などから直接もたらされたものか、あるいは前漢など華北の地から奴国を経てもたらされたのかは不明であるが、南越王墓(広州市)から出土した玉璧と類似していることから、現時点では長江流域から直接伝来したとする説の方が有力であろうか。



南越王墓の玉璧



串間市の玉璧



南越王墓の玉壁

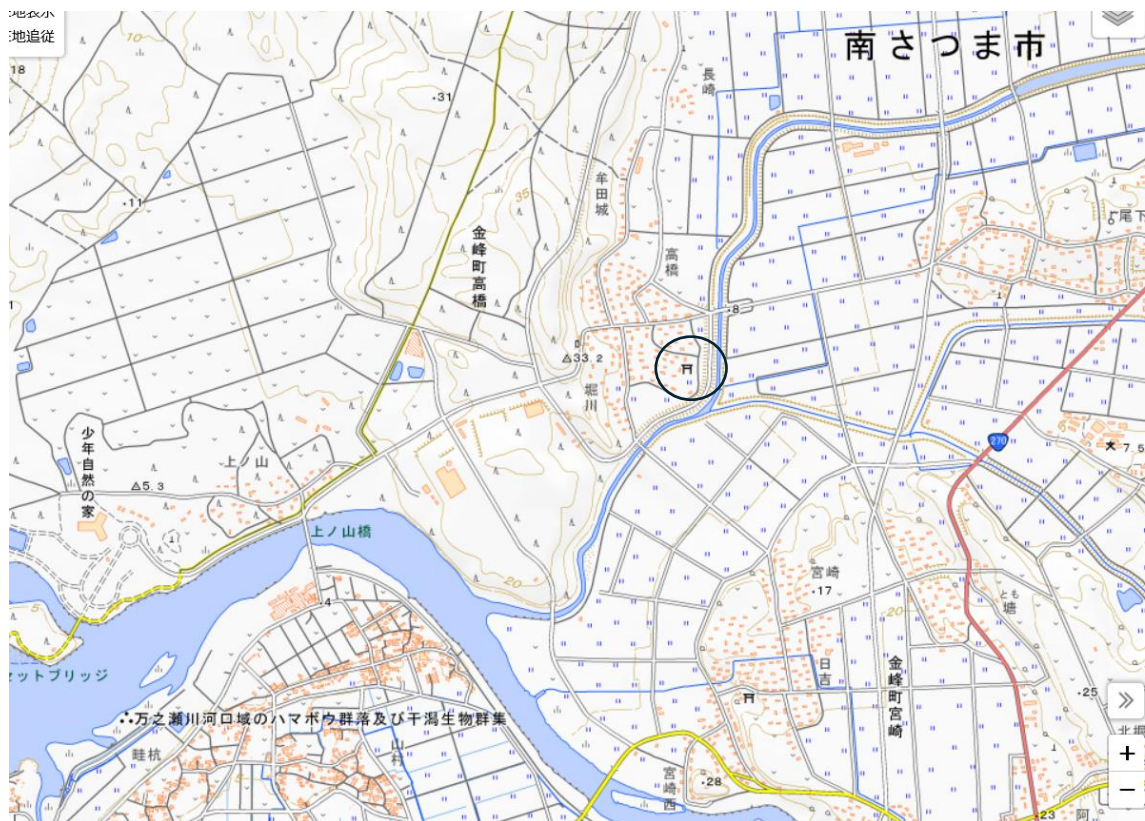


串間市の玉壁

(二)高橋貝塚(鹿児島県南さつま市)

日向の櫓遺跡(宮崎市)に続き、南九州を代表する弥生集落の二つ目は、薩摩半島の高橋貝塚(鹿児島県南さつま市)である。

金峰町高橋集落の玉手神社境内にある。



標高約 11 メートルの砂丘内部の低い台地にあり、弥生時代前期～弥生時代中期の貝塚で、1962(昭和 37)～1963 年(昭和 38)に発掘調査が行われた。

この結果、住居跡・貯蔵穴・人骨片・カメ棺や、牡蠣類の貝殻・イノシシやシカなどの動物の骨、石器・土器・鉄製品・貝製品などが出土した。

石包丁を使用した稲作や鉄器の使用など、北部九州とほぼ同時期に稲作が伝来し、鉄器も伝わったことが判明した。

また、沖縄産のゴホウラ貝などの未製品や加工屑などが見つかった。

貝輪を伴うカメ棺墓や箱式石棺墓などに埋葬された人骨の抜歯形式は西北部九州系とみられており、この辺りが北部九州の倭人の中継地であり、南海から運び込まれた貝の荒加工場であったと考えられている。くわえて、一帯では沖縄土器や北部九州、中九州の土器に混じって瀬戸内系土器も出土していることから、本土各地から貝製品や未製品、貝素材を求めて人々が集まってきたとも想定されている。

下の写真は「南さつま市立歴史交流館金峰」に展示されたゴホウラ貝のレプリカ。



いずれにしろ、高橋貝塚は狩猟文化から弥生文化への移行の実態を解明するうえで、きわめて貴重な情報をもたらした。狩猟漁労の生活様式を維持しつつ、水田耕作を行っていることである。縄文文化と弥生文化が融合しているのである。

そして、北部九州・南西諸島・瀬戸内海方面との広域交流が確認されたのである。



出土土器類



ゴホウラ貝の加工品と廃材

なお、近傍には以下のような遺跡もあり、薩摩半島においても、日向や大隅半島とおなじく、北部九州系の倭人と南部九州系の隼人が混住していた可能性が高い。

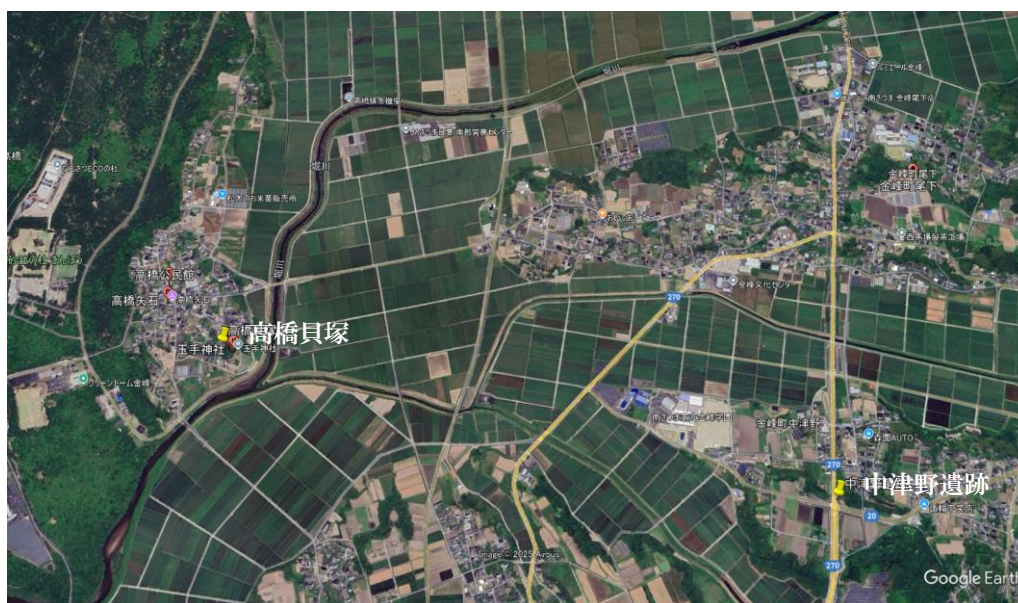
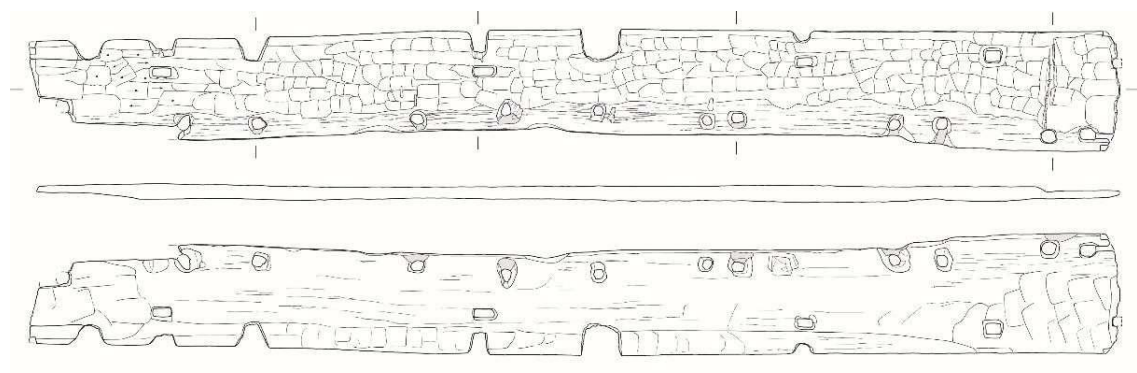
遺跡名	所在地	概要
下原遺跡	南さつま市金峰町中津野下原	稲作を示す石包丁や壺型土器も出土
下小路遺跡	南さつま市金峰町高橋下小路	合口カメ棺・巨石(支石墓?)・土器・貝輪など
中津野遺跡	南さつま市金峰町中津野	弥生時代の準構造船が出土

中津野遺跡

このうち、中津野遺跡について紹介すれば、次のとおり。

前述した高橋貝塚の 200 メートル東方に位置する。

平成 20 年度に鹿児島県埋蔵文化財センターが国道 270 号(宮崎バイパス)改築工事に伴い発掘調査を実施したところ、出土した木製品が国内最古級となる弥生時代前期後半(紀元前 3～4 世紀)の準構造船の舷側板(げんそくばん)であることが判明した。



準構造船とは、くり船に側板などの木材を組み合わせて積載量が増えるようにした船のことである。



出土状況

舷側板の詳細

大きさ	幅約 0.3m × 長約 2.73m × 厚 5 cm	
特 徴	上部	6 × 3 cm 程度の長方形のほぞ穴がある（5 か所・一部破損） 上端部に切り込みがある（6 か所）
	下部	径 3 cm 程度の規則的に並ぶ円形のほぞ穴がある（12 か所）
船の全長	約 6 m（推定）	
年 代	弥生時代前期後半（BC 5 ～ BC 4 世紀）	
評 価	舷側板が出土した中津野遺跡は、東シナ海にそそぐ万之瀬川の支流の境川に面し、下流には弥生時代の貝の交易で有名な高橋貝塚が所在している。中津野遺跡の出土土器からも広域での交易がうかがわれ、当時、高度な造船技術を要する外洋航海が行われていたことを物語る重要な資料である。また、環東シナ海という視点での造船技術や交流を考える上でも貴重である。	

北部九州の奴国および邪馬台国の海人族——志賀島の阿曇一族や宗像の宗像一族は、朝鮮半島へ渡り、日本海や瀬戸内海方面へも往来した。

異郷の地に寄留して、現地人と円満な関係を築いて居住地を確保し、取引を行った。

『日本古代通史』第 1 巻「奴国の時代」において、

「朝鮮半島南部に、倭人もしくは倭人系の人々が居住していたことは明らかである。基本的に、沿岸部や島嶼部に多い。海を超えて朝鮮半島を訪れた壱岐・対馬および北部九州の倭人は、現代と異なり、税関もなく、旅行会社もなく、宿泊するホテルもなく、舟をつないだ入江近くにみずから住居をつくって滞在するしかなかったであろう。そして、現地人との摩擦・衝突を避けるため、クニの中心地からやや離れた区域や小さな島などを選んだであろう。やがて、往来が常態化すると、居住地の保全などのため、居残りを命じられた倭人もいたであろう。彼らは現地人と日常的に交わり、現地語も習得し、場合によっては現地妻を娶り、子をつくり、倭人系の家族・集落が生まれた。朝鮮半島南部に残された倭人が製作した弥生式土器(A 類)は、倭人一世かその影響を強く受けた者に

よってつくられ、弥生式土器に似た土器(B 類)は、主として混血倭人によってつくられた土器類として区分できるかもしれない」

と述べたが、このことは、もちろん南九州との関係においても成り立つ。

すでに紹介した櫛遺跡(宮崎市吉村町櫛)や高橋貝塚(鹿児島県南さつま市)がその代表例であるが、周辺にはおなじような性格の遺跡が散見される。

北部九州の倭人たちは、紀元前の奴国の時代から東西南北に船で往来し、広域的な経済活動を行っていた。

下の表でいえば、航海距離の最も長いのが越後の糸魚川である。糸魚川産のヒスイは北部九州各地の遺跡から出土する。

次に遠いのが沖縄で、薩摩半島経由か大隅半島経由でも、約 1,000 キロメートル。沖縄産のゴウフラ貝とイモガイを腕に装着した王あるいは王女の墓が、やはり北部九州各地の遺跡から出土する。

朝鮮半島の帯方郡まで約 900 キロメートル。北部九州各地の遺跡から前漢・後漢の青銅経などが数多く出土している。

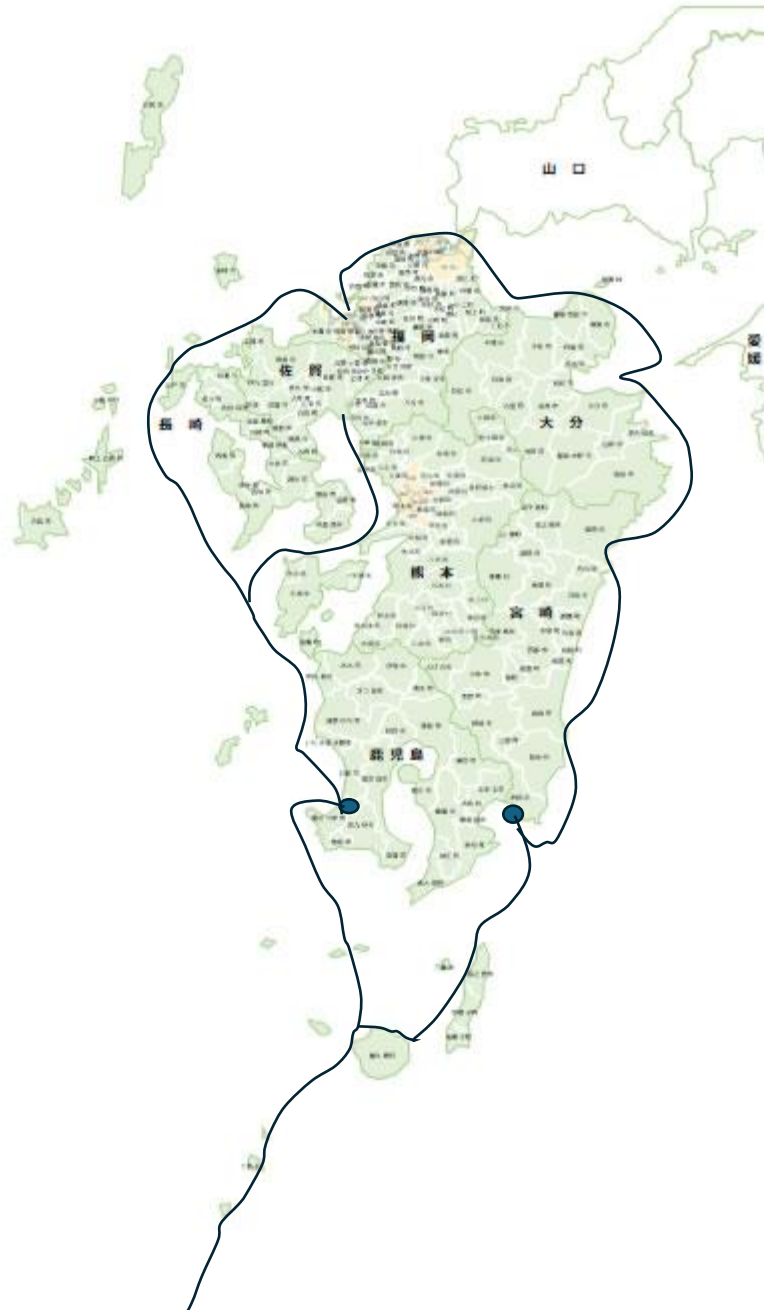
朝鮮半島南岸まで約 200 キロメートルというのは、下の表のなかでも最も短い部類の距離である。

朝鮮半島南岸におびただしい倭人の痕跡が残されているのも、よくわかるであろう。

東九州側の志布志湾や薩摩半島側の海岸地域は、沖縄貿易の中継基地であった可能性が高い。

奴国(博多湾)からの航海距離

出発地	方 面	到 着 地	距 離 (km)	備 考
奴国から	朝鮮半島	朝鮮半島南岸	200	最も近い
		帯方郡	900	
	日本海	出雲(島根)	300	
		糸魚川	1,300	最も遠い
	瀬戸内海	吉備(岡山)	450	
		淡路島	550	
	南九州・沖縄 (東九州コース)	志布志湾(宮崎・鹿児島県)	350	沖縄への中継地
		沖縄	1,000	
	南九州・沖縄 (西九州コース)	南さつま市(鹿児島県)	440	沖縄への中継地
		沖縄	1,010	



隼人の墓制

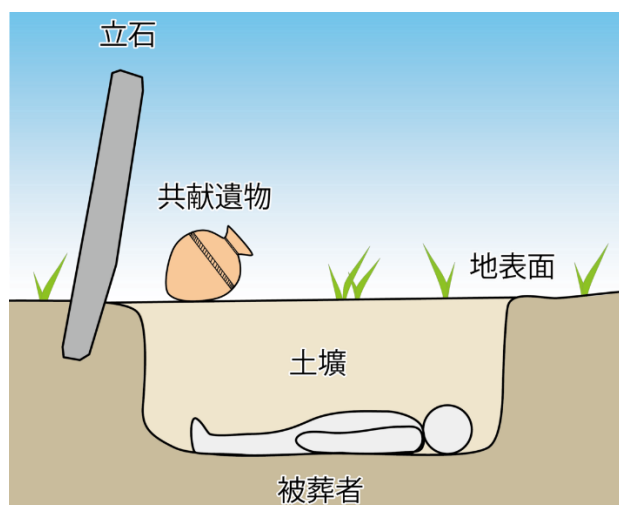
北部九州のカメ棺墓、出雲の四隅突出型古墳など、その地方独自の墓制がある。

その地域の支配者によって、人為的に定められた墓制であり、独自色があるのは当然のことである。

九州南部には地下式の墓が多く、これをもって隼人の墓制の特徴とみる考え方は、戦後の1980(昭和 35)年ごろまでは通説的な見解であった。

この説によると、薩摩半島南部の「立石土壙墓」は阿多隼人、薩摩半島北部の「板石積石棺墓(地下式板石積石室墓)」は薩摩隼人、日向・大隅半島に分布する「地下式横穴墓」は日向・大隅

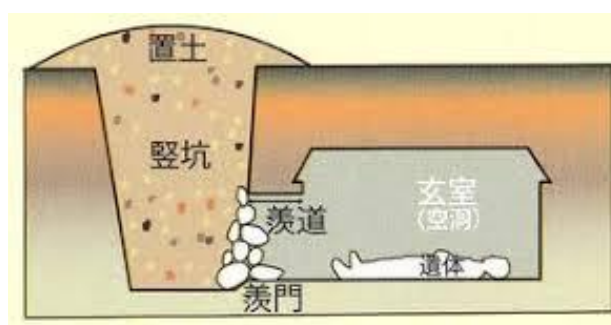
隼人の墓制にそれぞれ分類するといふものであった。



阿多(薩摩半島南部)の立石土壙墓



薩摩半島北部の板石積石棺墓(地下式板石積石室墓)



日向・大隅半島の地下式横穴墓

隼人について、『大宝律令』(701)では「異人」と称されている。

『続日本紀』養老 6 年(721)の記事には、「陸奥の蝦夷・薩摩の隼人らを征討した將軍や通訳者に地位・功績に応じて勲位を授ける」とあり、隼人との会話には通訳が必要であった。

すでに述べたとおり、海幸山幸の神話には、「海幸彦は隼人の阿多君の始祖」とある。

しかしながら、皇国史観の聖地であった日向・南九州への攻撃はすさまじく、海幸山幸などの日向神話をはじめ、高千穂論争、日向三代王朝、初代神武天皇などがことごとく歴史の世界から追放されてしまった。ゆかりの場所は、人集めのための観光地としてのみ宣伝 PR されるだけである。

隼人が文献上の確実な史実として初めて登場するのは、『日本書紀』の 682 年(7 世紀後半・天武天皇 11 年)7 月の朝貢記事であり、9 世紀初頭以降は「隼人」と呼称する例は、史料上ひとつもみられない。

南九州の人々が隼人と呼ばれたのは、7 世紀後半から 9 世紀初頭までのわずか 120 年間にすぎない。

隼人がいないのであるから、隼人独自の墓制もない。南九州の地下式墓制はいずれも隼人とは無関係の墓である。

現在では、このような考え方が主流になって現在に至っている。

しかしながら、これまで繰り返し述べてきたように、筆者は『古事記』『日本書紀』の神話のなかに歴史の核が潜んでいると考えている。

南九州の熊襲と隼人、北海道の肅慎(みしはせ)と東北・北陸の蝦夷(えみし)は平行な関係にあるとおもっている。

地球上の現生人類は、多種多様な DNA を有し、肌の色も骨格もさまざまな違いがある。

南部九州には、南西諸島方面から渡来した現生人類が住み着いていた。独特の言語と風俗習慣を持っていた。それが隼人である。決して差別用語として使用しているものではないことをあらためて申し添えておきたい。

そういう観点から、南部九州の墓制について、まとめてみたい。

南部九州の円形周溝墓

南部九州における弥生時代後期の墓制は、全国的にみれば方形の周溝墓が多いのに対して、圧倒的に円形の周溝墓が多い。



それにつづく古墳時代には、日向には五種類の墓制があった。

- (1) 前方後円墳や円墳などのいわゆる「古墳」
- (2) 「地下式横穴墓(地下式土壙墓)」
- (3) 「板石積石棺墓(地下式板石積石室墓)」
- (4) 土壙を掘って埋葬し、標識として石を立てた「立石土壙墓」
- (5) 崖に墓室を掘削した「横穴墓」

これらのうち、一ツ瀬川以南の宮崎県と大隈を含む地域には、(1)のいわゆる「古墳」とともに、(2)の「地下式横穴墓(地下式土壙墓)」や(5)の「横穴墓」が多くみられる。

それに対し、川内川流域から大口盆地など薩摩北部から肥後南部の人吉あたりには(3)の「地下式横穴墓(地下式土壙墓)」が分布し、薩摩半島南部の阿多地方には(4)の「立石土壙墓」が集中している。

まず、前方後円墳は、大和朝廷の支配が全国的に広がるなかで、大和朝廷によって任命された地域の支配者層の墓として造営されたものであり、この時代は古墳時代とよばれ、一般に前期(4世紀後半)、中期(5世紀)、後期(6世紀～7世紀)に分けられていた。

ところが、国立歴史民俗博物館の研究グループによる炭素十四年代測定法を用いた新しい年代論が唐突に発表され、第三者による検証も経ないまま、巻向遺跡の箸墓についても100年ほど前倒しされ、3世紀の古墳とされてしまったことは、すでに述べたとおりである。

しかしながら、科学の最も基本である第三者による検証を経ないものは、非科学的である。

年輪年代法も第三者の検証を経っていないので、これもまた非科学的である。本年1月の東京地裁の判決によって、必要な情報開示がようやく認められたばかりである。

よって、本稿においては、従来の土器編年に基づく古典的な年代論に基づいて叙述していることをあらためて申し述べておきたい。

日向における前方後円墳は総計約200百基が確認されているが、小丸川流域の持田古墳群10基・川南古墳群25基、一ツ瀬川流域の西都原古墳群32基・新田原古墳群25基、大淀川流域の下北方古墳群4基・本庄古墳群17基・生目古墳群17基というように、約9割の古墳が児湯郡を含んだ広義の宮崎平野に集中している。

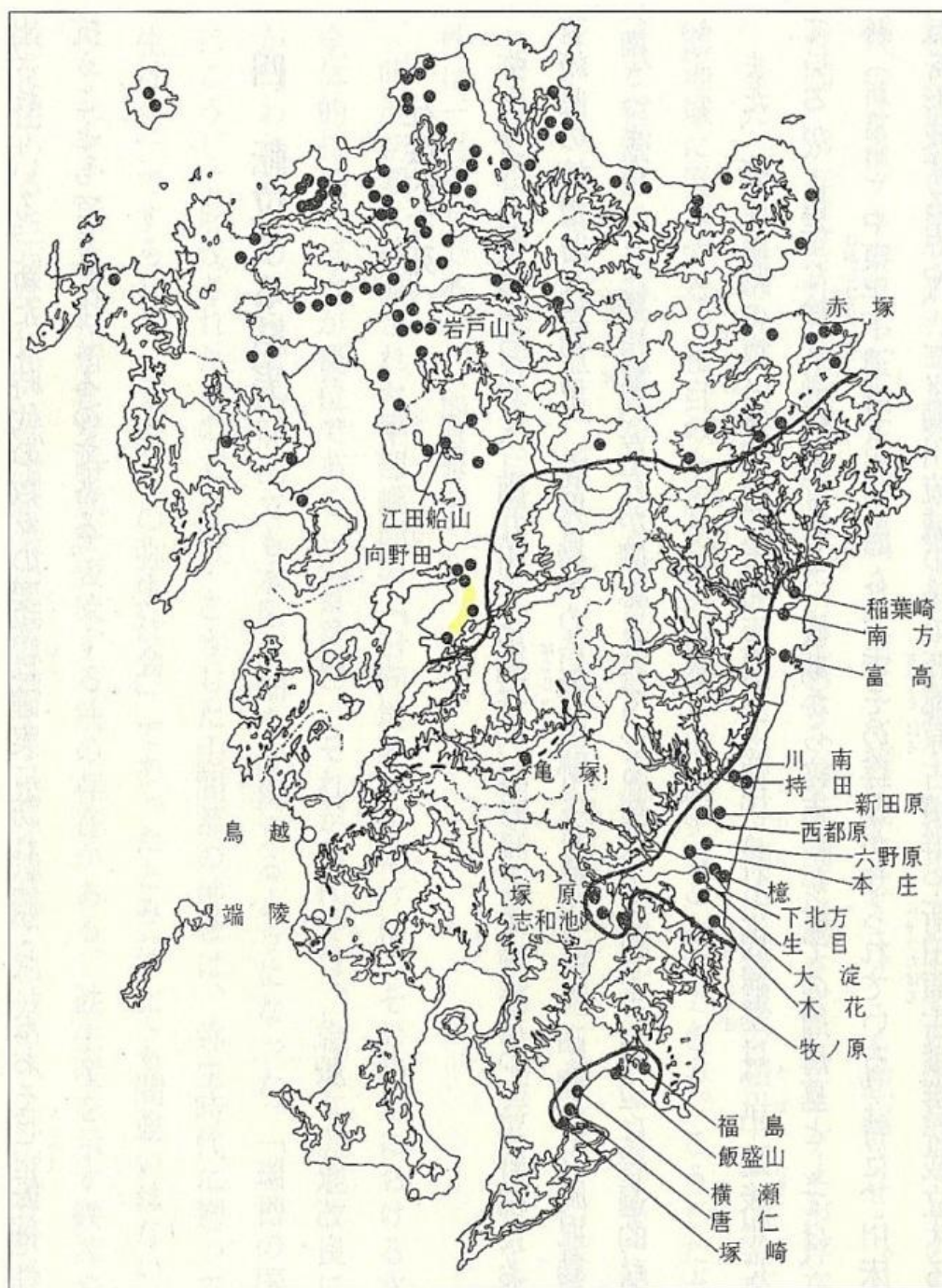
古墳時代の日向は宮崎平野を中心としていたことがわかるが、そのなかでも一ツ瀬川流域の西都原古墳群と新田原古墳群が突出している。

そのうち西都原古墳群(西都市三宅)は一ツ瀬川右岸の標高60メートルに位置し、前方後円墳32基のほか、円墳278基、方墳1基、地下式横穴墓10基、横穴墓12基で、4世紀から7世紀前半にかけて連続して築造された大古墳群であり、時間的な順序でいえば次のとおりとなる。

第一の時期は、4世紀前半で、西都原古墳群に属する前方後円墳のうち、前半期に属するものは35・90・91墳で、後半期に属するものは1・56、72、95、99号墳という。墳丘規格の比較などから、91号墳は大和の箸墓に類似しているともいわれる。

日向の古墳群と畿内の古墳群との詳細な比較検討によって、神武東征による大和朝廷の成立・

発展と前方後円墳との歴史的な相関関係が解明される可能性のある古墳群である。



〔図5〕 主な前方後円墳の分布

大分県南部から熊本県宇土半島を結ぶラインの以北を北部九州、以南を南九州として二分して理解したい。

北部九州には、ほぼまんべんなく前方後円墳が分布する。それに対して、南九州では東側の過密と西側の空白という落差にすべてが象徴される。

▶ 西都原古墳群



第二の時期は、4 世紀後半で、西都原古墳群に属する前方後円墳のうち、13・81・92・100 号墳である。

このうち 13 号墳から出土した三角縁獣文帯三神獣鏡は畿内大和の特定の工房で集中的に生

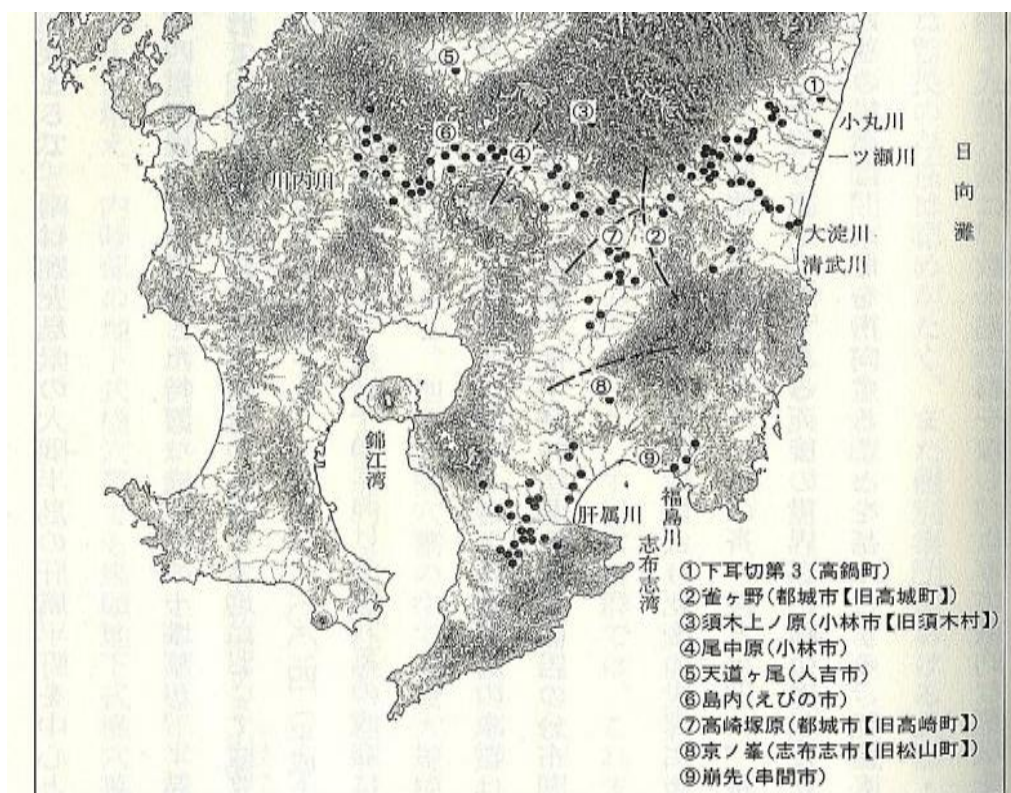
産されたとみられており、大和朝廷による朝鮮経略の中継基地ともいえる沖ノ島の第 18 号岩陰遺跡から同範鏡が出土していることから、景行天皇の巡幸を契機につくられた古墳群であるといえよう。

第三の時期は、巨大古墳の時代で、5 世紀第一四半期に男狭穂塚古墳が築かれ、5 世紀第二四半期には女狭穂塚古墳が築かれた。

男狭穂塚古墳は応神天皇陵の二分の一の規格といわれており、九州最大の女狭穂塚古墳は履中天皇陵古墳の二分の一の規格といわれている。

5 世紀前半の日向の中心は、日向と大和朝廷との緊密な関係をもった西都原にあったと断言している。

第四の時期は、地下式横穴墓(地下式土壙墓)が出現する 5 世紀後半である。



〔図 7〕 地下式横穴墓分布図

①を北限として②までの宮崎平野部の範囲を第Ⅰ地域、③を北限とし④までの小林盆地を中心とする内陸部を第Ⅱ地域、⑤を北限とし⑥のえびの盆地を中心とした第Ⅲ地域、⑦を北限とする都城盆地を中心とする第Ⅳ地域、⑧から以南の大隅半島の肝属平野を中心とする第Ⅴ地域、として区分する。前方後円墳と妻入り型地下式横穴墓が分布するのは第Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ地域、平入り型地下式横穴墓が主体となる第Ⅱ・Ⅲ地域には前方後円墳は存在しない。

地下式横穴墓(地下式土壙墓)は、宮崎県南部・大隅と熊本県の一部に分布する 5 世紀の後半から 8 世紀ごろまでつづいた南九州独自の墓制であり、西都原古墳群の 4 号地下式横穴墓からは大和朝廷から配布されたとみられる複数の甲冑や武器などが出土している。



景行天皇の日向遠征によって、大和朝廷と結びついた勢力が勃興し、これらの豪族が前方後円墳をまねて円墳をつくったが、墳丘中に棺・槨などの埋葬施設をつくることをはばかって（規制されて）地下に横穴を設けたものらしい（河口貞徳『隼人の埋葬』季刊邪馬台国 41 号）。したがって、円墳形式の地下式横穴墓が最も古く、時代が進み、また内陸部に浸透するにしたがって封土を失い、規模は小さくなり、玄室の形もドーム状に変形し、副葬品は貧弱で、ほとんど武器だけであるという。

一方では、従来どおり大和朝廷との結びつきを強めつつ、他方では土着氏族としての独自色を強めている。

日向および南部九州を拠点とした部族——隼人の政治的なスタンスを端的にしめすものといえよう。

6 世紀になると、地下式横穴墓や円墳が主流となり、前方後円墳は新田原古墳群以外ではほとんどつくられなくなる。

以上が西都原古墳群を中心とした南部九州の墓制の変遷である。

一方、北薩摩の川内川流域、不知火海沿岸、人吉盆地、五島列島を含む西九州沿岸地域に「地下式板石積（いたいしづみ）石室」が分布している。

方形石室は海岸地帯に、円形石室は内陸部に分布しており、どちらが源流かについて、説が分かれていたが、朝鮮半島南部の支石墓を源流として、弥生時代中期に九州西岸の島々で発生し、しだいに内陸部に普及したとする「方形源流説」が有力になってきている。

ちなみに、前方後円墳などに竪穴式石室をもうける墳墓の形式が 4 世紀に盛行するが、この形式はこのような南部九州の地下式板石積石室と北部九州の高塚古墳に木棺や石棺を直葬する形式の墓とが融合したのではないかとする説がある（『竪穴式石室の起源』季刊邪馬台国 74 号）。

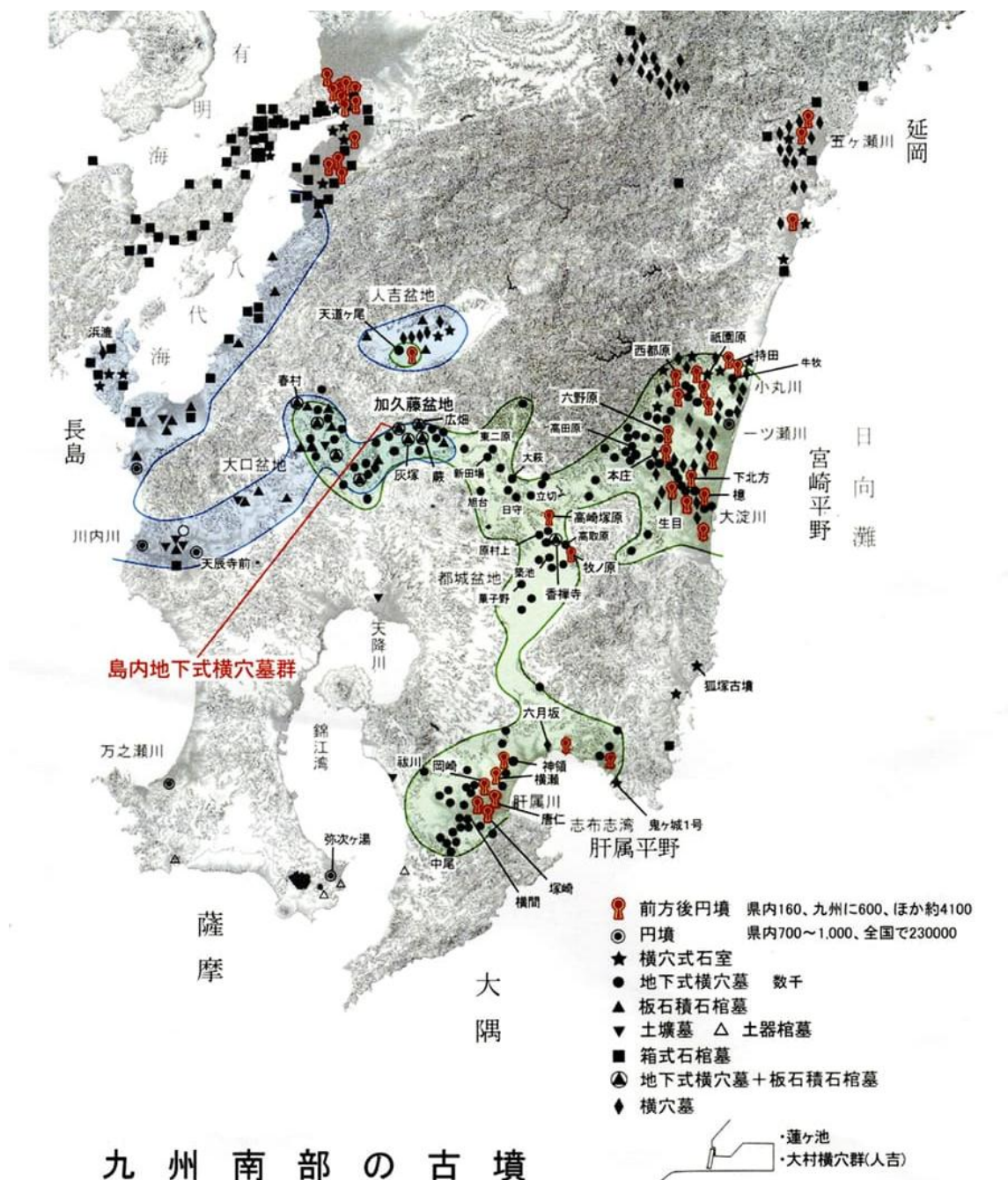
また、薩摩半島南部の阿多には「立石墓」が集中的に分布している。土壌を掘って遺体だけを埋め、そのまま土を埋め戻して、地表面に土器や鉄器を捧げる方式で、弥生時代中期ごろの原始共同体的な色彩の強い墓制といわれている。



蓮ヶ池横穴群(宮崎市)

古墳時代後期には宮崎県中央部から北部にかけて「横穴墓」がつくられるようになる。横穴式石室をまねたもので、台地の崖に穴を掘り、埋葬後は平石や礫で入口を塞ぐ。5世紀半ば過ぎごろ周防灘に注ぐ豊前の今川下流で発生したものようであるが、新しい墓制として九州全域に普及し、7世紀ごろまでには全国に広まり、宮城県まで到達したといわれる。

地下式横穴墓がさかんに築造された北諸県、西諸県からは見つかっていないが、東諸県郡国富町付近では地下式横穴墓と横穴墓が混在しているという。



(以下、つづく)

日向王朝の時代⑦

沖縄への道

河村哲夫

海上の道

柳田國男(1875～1962)は、日本の民俗学を切り開いた人である。

「日本人とは何か」ということを追い求め、日本列島各地を歩き、調査を行った。

とりわけ、1961(昭和36)年に発表された『海上の道』という作品は、

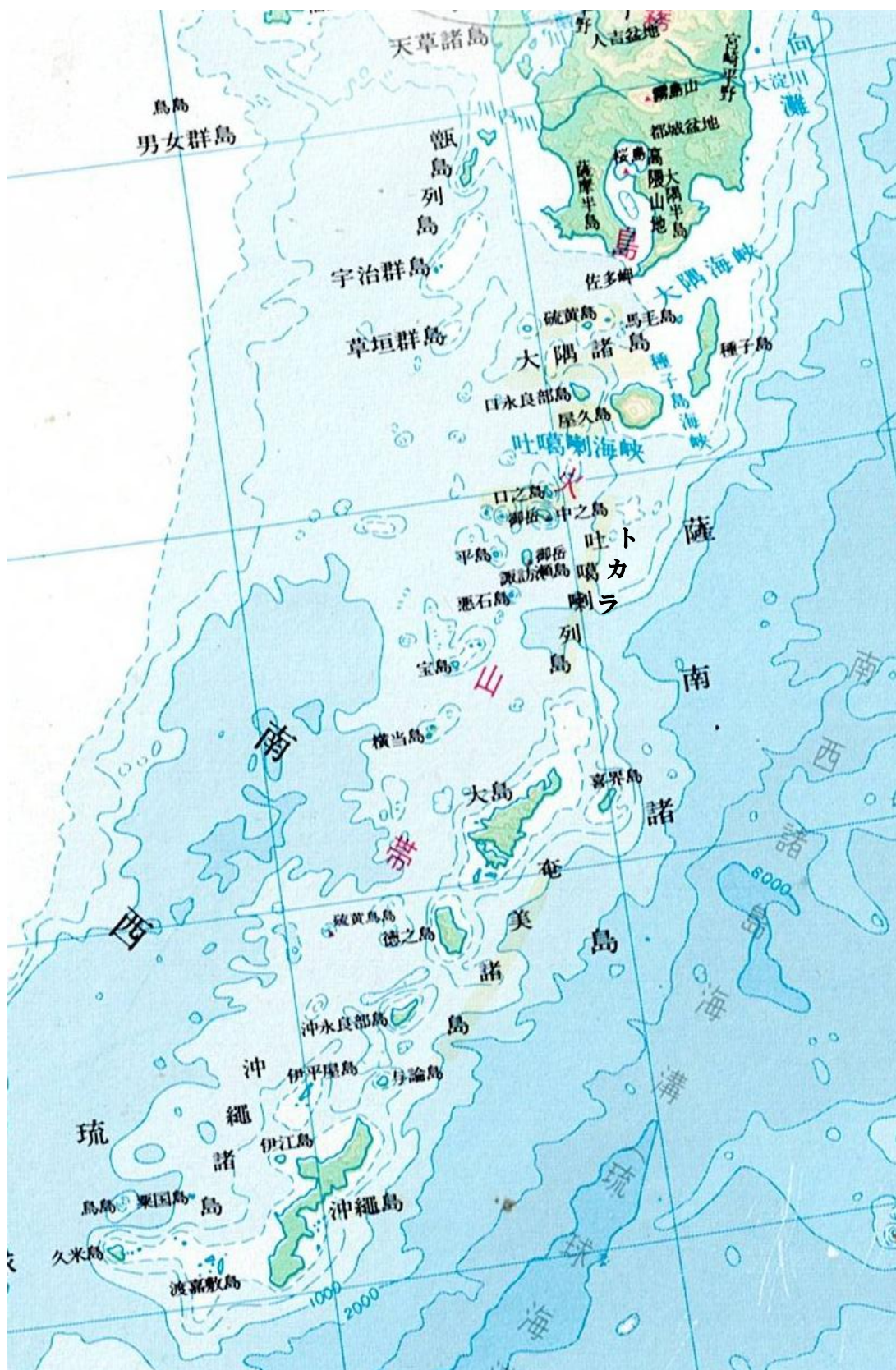
「原日本人の起源について、縄文期と弥生式期の境目の頃に、米の種実と稲作技術を持った南方の人々が黒潮を北上して本土に住みついたと考えられる」

という仮説を沖縄の島伝いに漂着するヤシの実や宝貝の分布、ネズミの移住など小さな手がかりをもとに積み上げた代表的な力作であった。

前述したように、薩摩半島の高橋貝塚(鹿児島県南さつま市金峰町高橋)からは、沖縄産とみられるゴホウラ貝なども出土しており、薩摩半島と沖縄を結ぶ海の道があったことは確実である。

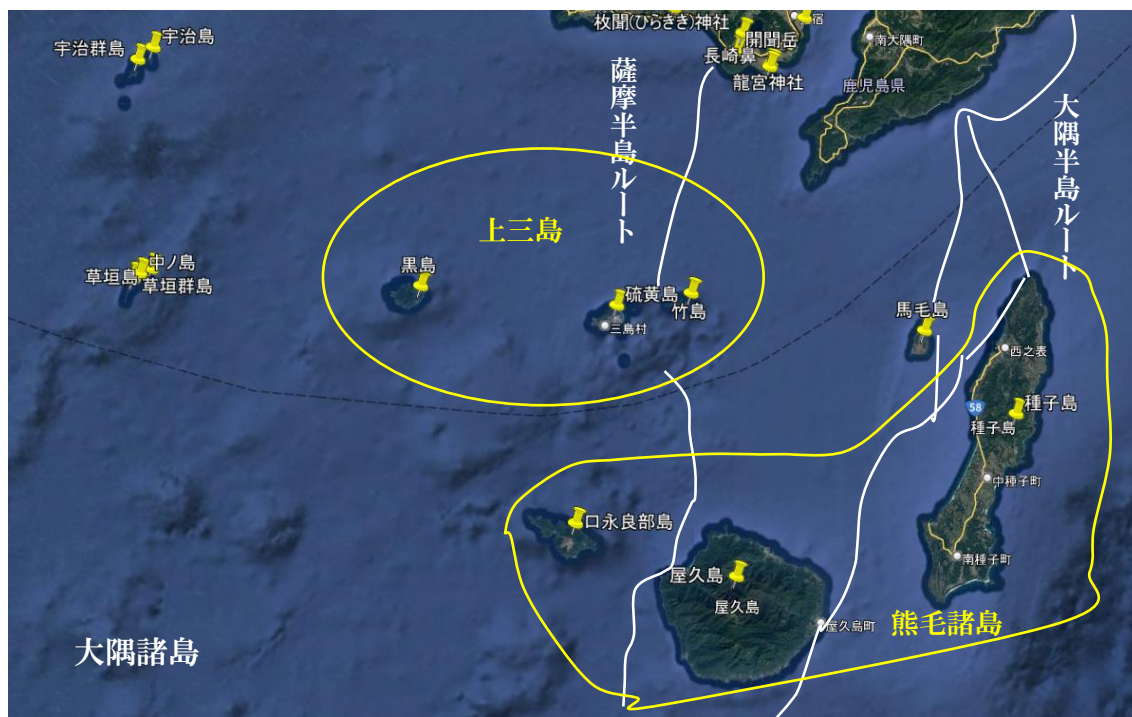
本稿においては、九州と沖縄を結ぶ「海上の道」を具体的に追跡してみたい。





薩摩半島ルート

まず、薩摩半島ルートを検討してみよう。薩摩半島の南さつま市の高橋貝塚から野間半島を迂回し、長崎鼻あたりから約 40 キロメートル南下し、竹島あるいは硫黄島に向かうコースである。



大隅諸島・トカラ列島は薩南諸島と呼ばれ、奄美諸島は南西諸島と呼ばれる。

薩南諸島

大隅諸島	屋久島・種子島・口永良部島・馬毛島などからなる諸島で、竹島・硫黄島・黒島の上三島と草垣群島・宇治群島を含む場合もある。 なお、大隅諸島のうち、種子島・屋久島・口永良部島の 3 島を熊毛諸島、竹島・硫黄島・黒島の 3 島を上三島もしくは三島という。
トカラ列島	七つの有人島(口之島、中之島、諏訪之瀬島、平島、悪石島、宝島、小宝島)といくつかの無人島からなる島々。 霧島火山帯に属する火山島で、行政上は鹿児島県十島村(としまむら)に属している。

南西諸島

奄美諸島	喜界島、奄美大島、加計呂島、請島、与路島、徳之島、沖永良部島、与論島からなる。 もと琉球王の支配地であったが、慶長十四年(1609)の「琉球出兵」によって薩摩に編入された。
------	---

大隅諸島のうち、竹島、硫黄島、黒島は上三島もしくは三島と呼ばれる。

上三島(鹿児島県鹿児島郡三島村)

竹島	リュウキュウチク(琉球竹)のタケノコは「大名筍」が島の特産。 竹林の中に、ハルザキヤツシロランなどのラン科植物数種が確認され、2002 年に発見されたトカラヤツシロランは竹島のほかには台湾や黒島に分布が限られ、また、2013 年に発見されたタケシマヤツシロランは竹島のみの固有種である。 島では黒牛が放牧されている。
硫黄島	鬼界カルデラの北縁に位置する火山島で、ランク A の活火山に指定されている。 また、海底から温泉が湧出し、海水が赤茶色に変色している。このことから「黄海ヶ島」と呼ばれ、これが「鬼界ヶ島」となったとする説がある。 『平家物語』では俊寛が治承 2 年(1178)に流刑され、『吾妻鏡』でも 2 人の武士が流刑にされており、平安時代末期から流刑の島とされたことがわかる。 11 世紀ごろから硫黄の採掘が行われ、日宋貿易や日明貿易の輸出品の一つとなっていた。これが硫黄島の由来になったとされる。
黒島	黒島から 45 キロ西方に草垣群島、55 キロ北西に宇治群島がある。 竹島・硫黄島は鬼界カルデラに属しているが、黒島は宇治群島や草垣群島と同じ旧期琉球火山岩帯に属している。島全体が竹木で覆われ、沖から見ると黒ずんで見えるため黒島の名がついたという。島民は平家落人の子孫と伝わる。

次に、大隅半島ルートを検討してみよう。志布志湾から船出して、大隅半島東岸から約 30 キロメートル南下し、馬毛島あるいは種子島に向かうコースである。

馬毛(まげ)島

馬毛島 (鹿児島県西之表市)	2022 年 10 月の西之表市教育委員会の文化財調査で、旧石器時代の石器が数点確認されている。 10 世紀にマゲシカを狩猟した記録があり、鎌倉時代から種子島氏の領地となっていたが、漁業基地とされたものの定住者はいなかったという。 現在、防衛省によって海上・航空両自衛隊基地の整備が行われている。
-------------------	--

大隅諸島のうち、種子島・屋久島・口永良部島の 3 島を熊毛諸島という。
種子島西北から屋久島東岸まで約 17 キロ。

熊毛諸島

種子島 (鹿児島県西之表市) (鹿児島県熊毛郡中種子町) (鹿児島県熊毛郡南種子町)	南種子町の横峯遺跡・中種子町の立切遺跡と大津保畑遺跡は約 3 万 5 千年前(較正年代)の旧石器遺跡。 南種子町の銭亀遺跡は、日本列島最南端の細石器遺跡である。 立切遺跡からは石蒸し料理跡や木の実の貯蔵穴とみられる土坑、動物捕獲用の落とし穴などの痕跡が確認されている。 縄文時代には南部九州のほぼ同一の土器が確認されている。 弥生時代後期から 7 世紀にかけての種子島では、独自の貝文化が展開した。南種子町の広田遺跡の貝製出土品は、国の重要文化財に指定されている。 『日本書紀』大宝二年(702)に屋久島も含めて多禰国(たねのくに)とされ、多禰国司が二島を支配したが、天長元年(824)に大隅国に編入された。
屋久島 (鹿児島県熊毛郡屋久島町)	亜熱帯に属する地域にありながら、2,000 メートル近い高山があるため亜熱帯～亜寒帯に及ぶ多様な植物が確認されている。 中国の『隋書』大業 3 年(607)、煬帝の時代「夷邪久国」とあり、『日本書紀』推古天皇二十四年(616)に「掖玖」の 30 人が日本に永住したという記事がある。 舒明天皇元年(629)に大和朝廷から「掖玖」に使者が派遣されたという記事あり。『日本書紀』天武天皇十一年(682)に「多禰人(種)・掖玖人(屋久)・阿麻彌人(奄美)それぞれ禄を賜った」という記事がある。 1203 年に鎌倉幕府から種子島氏に対して屋久島などが与えられ、戦国・江戸期は薩摩藩の支配下に置かれた。
口永良部島 (鹿児島県熊毛郡屋久島町)	薩南火山群島最大の火山島で、気象庁の「常時観測火山」に指定されている。 縄文前期(B.C.7000～B.C.6000 年代)の土器が種子島とともに出土する(塞ノ神式土器)。弥生時代の遺跡も多少出土。飛鳥時代から平安時代まで掖玖(屋久島)の支配下にあったと推定されている。 1408 年(応永十五)に「恵良部」として文献初登場。 戦国期以降は島津氏の支配下となり、大隅国に編入された。

トカラ列島



屋久島からは、トカラ列島に向かう。

屋久島から口之島まで約 54 キロ。古代人でも一日で届く距離である。

トカラ列島は、七つの有人島（口之島、中之島、諏訪之瀬島、平島、悪石島、宝島、小宝島）と臥蛇島や小臥蛇島、上ノ根島、横当島などの無人島からなる島々である。

トカラ列島の最北に位置するのが口之島で、南北に細長い形をしている。

江戸時代には薩摩藩の役人が常駐しており、津口番所・異国船番所・異国船遠見番所が置かれていた。

口之島から中之島までは約 10 キロ。

江戸時代には、中之島にも薩摩藩の津口番所・異国船番所・異国船遠見番所が設置された。

中之島から諏訪之瀬島までは 19 キロ。諏訪之瀬島から悪石島までは 14 キロ余。悪石島から小宝島まで 33 キロ。小宝島から宝島までは 11 キロの距離である。

江戸時代、宝島にも薩摩藩の津口番所・異国船番所・異国船遠見番所が設置されている。

『三国名勝図会』に、

「往古、七島の総名を吐火羅といふ。吐火羅は即ち宝島なり」

とあるとおり、かつては宝島がトカラ列島の中心的な島とみられていた。

文政七年(1824)、イギリス船が来襲し、20～30 人の兵が銃を発射しながら牛 3 頭を強奪するという事件があった。それに対し、薩摩藩の役人たちは果敢に応戦し、横目の吉村九郎はイギリス人の一人を射殺した。

この事件が一つのきっかけとなり、文政八年(1825)、幕府によって「異国船打払令」が出された。

トカラ列島の有人島

口之島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	ヤマゴロウ遺跡から土器片と石器が出土。土器片は縄文土器と 5 世紀以降の須恵器で、石器は磨製石斧である。縄文土器は南部九州の市来式土器で、奄美大島の宇宿貝塚からも出土していることから南部九州→トカラ列島→奄美大島のルートで伝搬したとみられている。
中之島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	タチバナ遺跡の縄文後期の集落跡から竪穴建物跡 30 軒、土壇 14 基、炉跡 14 基などが見つかっている。 『日本書紀』白雉五年(655)に「吐火羅」とあり、斉明天皇三年(657)に「観貨邏」とある。
諏訪之瀬島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	火山活動が活発な成層火山。島中央部には崩壊カルデラがあり中央火口丘(スコリア丘)＝御岳(おたけ)が形成されている。
平島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	人口は 64 人、世帯数は 31 世帯(2018 年 3 月 31 日現在) 平家伝説ゆかりの洞窟があり。
悪石島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	「島のあちこちに石があり、崖から落ちてきそうだから」「平家の落人を追う源氏がこないような名をつけた」などの説がある。 ヒチゲーと呼ばれる仮面を被った神がトカラ列島のうちこの島にだけ残ったとされる(ボゼ神伝説)。
宝島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	多くの土器が出土しており、縄文後期の宇宿下層式土器や八重山式土器、弥生中期の須玖式土器なども出土している。 江戸期は薩摩藩の直轄領であった。
小宝島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	高熱の温泉あり。周辺海域に海底火山の活火山が存在していると推定されている。

トカラ列島の無人島

臥蛇島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	『海東諸国記』に「掛蛇島」、清の冊封正使汪楫の『使琉球雜録』に「臥蛇島」と記されている。 島を沖から眺めると、蛇が伏せたような形をしている。 かつては人口が 100 人を越える有人島であったが、現在は無人島。港や家屋などが破損し、瓦礫状態であるため島への立ち入りはきわめて危険。島への上陸は禁止されている。
小臥蛇島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	有史以来、無人の火山島
横当島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	宝島の島民からはオガミと呼ばれる。かつては与波天島(よはてじま)と呼ばれていたという。火山島である。 『南島雑話』によれば横当島と上ノ根島には三姉妹の女神がいて、長女の女神は奄美大島の男神に、次女と三女の女神は日本の男神から愛されたが、これを妬んだ長女の女神は噴火を起こした。これを鎮めるために、男根を模した木を作って供え、祈りをささげた。これ以来、船舶が与波天島(横当島)の近傍を通過する際は、乗船している男の船員と同じ数の男根を模した木を作り、島に供えて順風であることを祈ったという。
上ノ根島 (鹿児島県鹿児島郡十島村)	火山島。横当島とともに海底カルデラの一部とみられている。





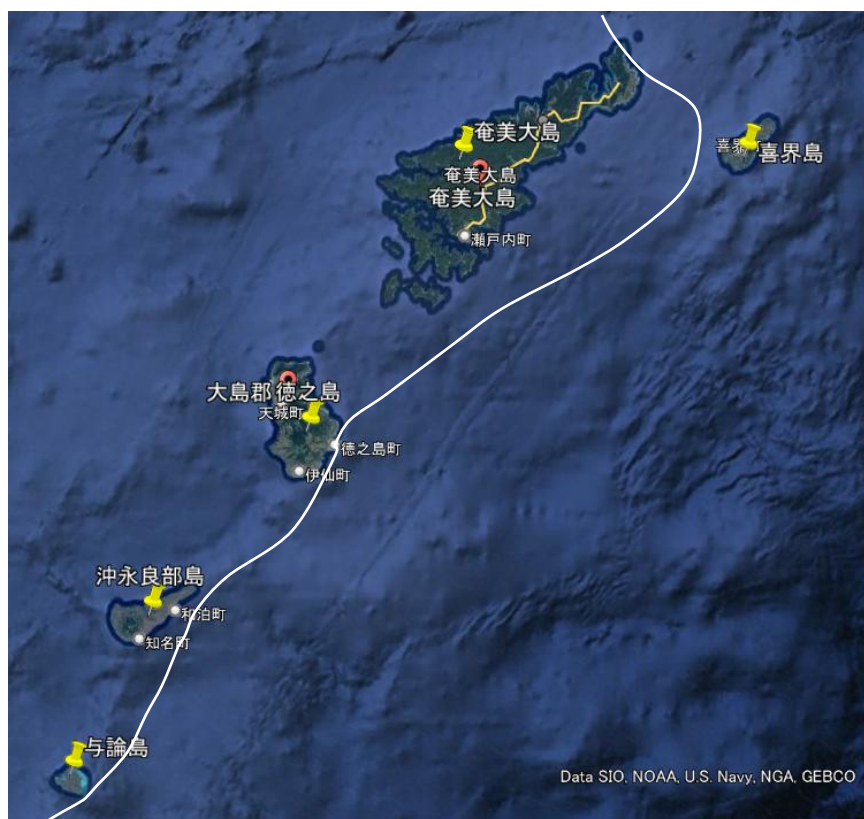
奄美諸島

トカラ列島の次は、奄美諸島である。南西諸島とも呼ばれる。

喜界島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島などである。

本来、琉球王の支配地であったが、慶長十四年(1609)の「琉球出兵」によって薩摩に編入された。

喜界島、奄美大島、徳之島の三島は道之島ともよばれていた。九州と琉球を結ぶ航路にあたっていたからであろう。



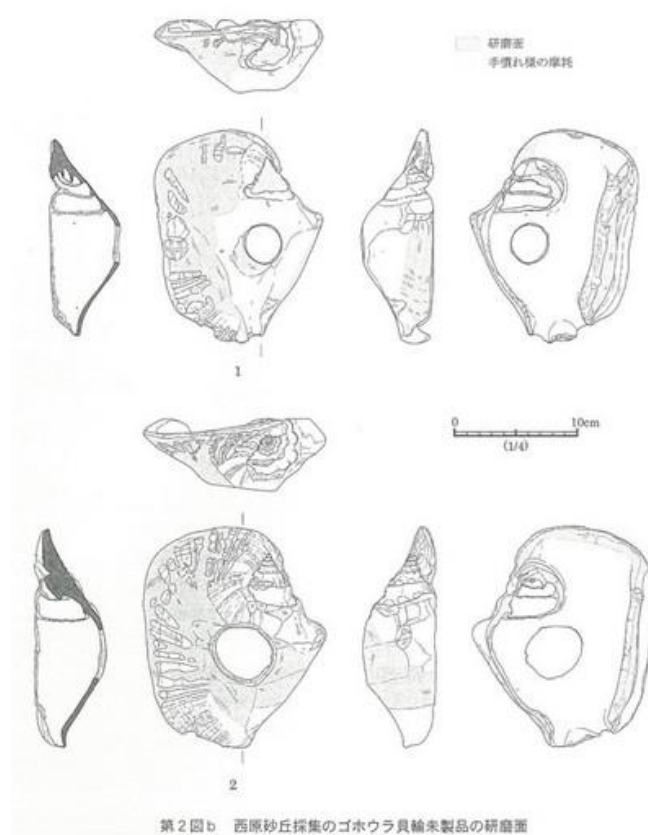
南部九州から沖縄までの海路のうち、最も距離が長いのがトカラ列島の宝島と奄美大島の北端までの間で、その距離は約 78 キロ。辛うじて一日で届く距離である。

ただし、トカラ列島南端の横当島から奄美大島の西岸に向かうことも十分に可能で、その場合は 55 キロの距離となる。朝鮮半島南岸の狗邪韓国と対馬の間の距離が約 62 キロであるから、それよりも短い距離である。

奄美大島南端から徳之島まで約 32 キロ。徳之島から沖永良部島までもおなじく約 32 キロ。

沖永良部島から与論島までは約 30 キロ。

なお、沖永良部島の西原海岸で、下図のとおり、未完成のゴホウラ貝輪が見つかった。



西原海岸

奄美諸島

喜界島 (鹿児島県大島郡喜界町)	島のほとんどがサンゴ礁起源の石灰岩で被われている。 南部の先山遺跡から、約 6000 年前の縄文時代前期にあたる条痕文土器などが出土している。 『日本書紀』に「爾加委」として出てくる。 奄美諸島のなかで唯一有毒のハブが棲息していない。平安時代には大宰府と密接な交流があったことが『日本紀略』などに記されている。
奄美大島 (鹿児島県奄美市)	『日本書紀』では「海見」、『続日本紀』では「阿麻美」と書かれている。 琉球文化圏に属し、奄美方言は琉球方言に属する。 黒砂糖、大島紬、黒豚、焼酎(黒糖焼酎)やチヂン(クサビ締め太鼓)、高倉(高床倉庫)など多彩な特産品に恵まれている。 平家の落人伝説も残されている。
徳之島 (鹿児島県大島郡徳之島町) (鹿児島県大島郡伊仙町) (鹿児島県大島郡天城町)	『続日本紀』に「度感」と書かれている。 石灰岩性のカルスト地形が発達した島で、天然の海蝕洞や波食によって生じた海蝕台等の独特な景観が見られる。希少固有種の宝庫として知られる。
沖永良部島 (鹿児島県大島郡知名町)	全島ほとんどがサンゴ礁起源石灰岩で被われている。 沖縄文化圏に属し、民謡の多くは琉球音階で、カチャーシーが踊られる北限でもある。西郷隆盛の流刑地として有名であり、薩摩文化の影響も受けている。 方言は琉球語系統の沖永良部方言ないし奄美方言を使う。 なお、西原海岸で、未完成のゴホウラ貝輪が見つかっている。
与論島 (鹿児島県大島郡与論町)	鹿児島県最南端の島。南西約 25 キロ先に沖縄本島が見え、そこから 44 キロ南には伊江島がある。 この島が目的地である。

沖永良部島を経て与論島までくると、南方 23 キロ先に沖縄本島北岸がはっきりと見える。



南部九州から沖縄までの航海距離

(単位:km)

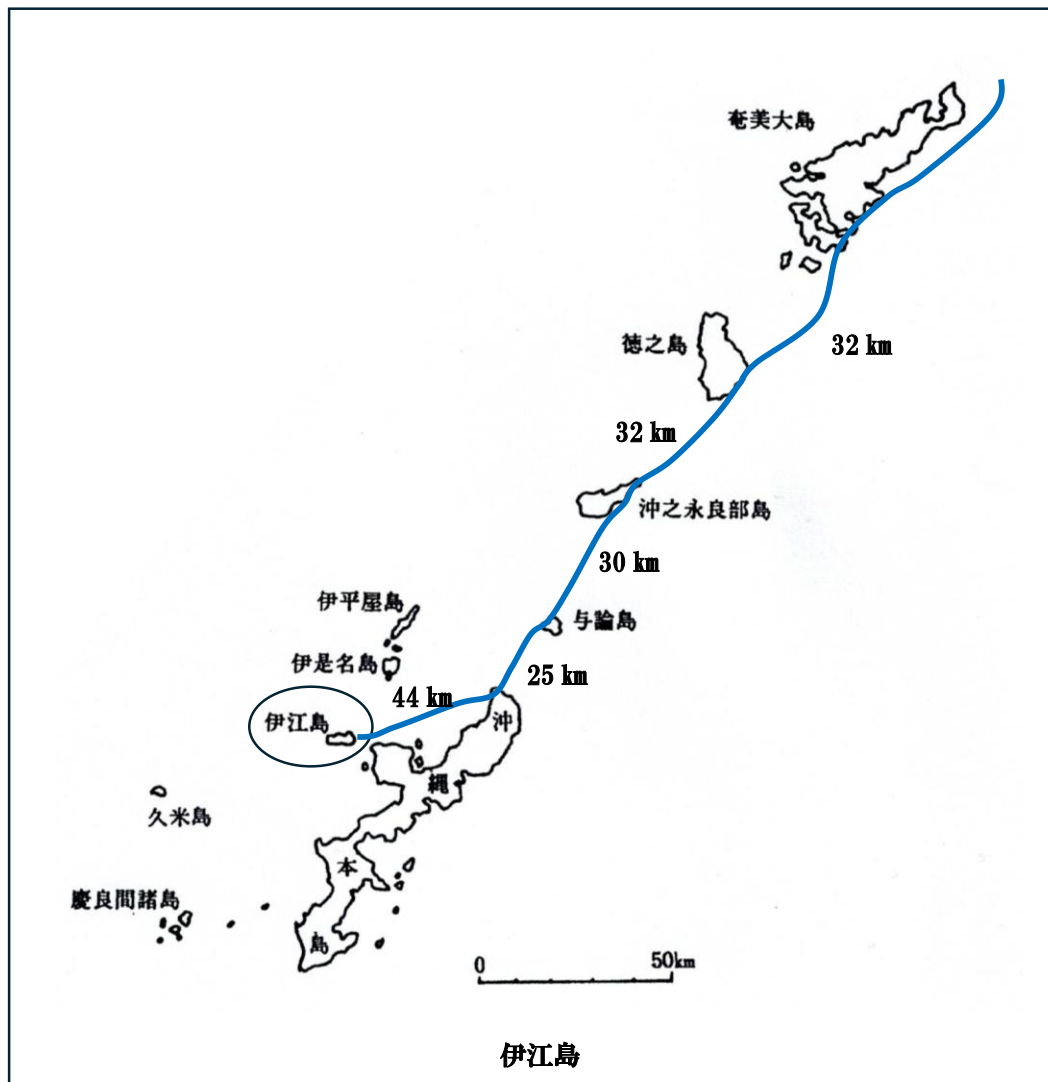
薩摩半島ルート	大隅半島ルート	区間距離	累計距離	区間距離	累計距離	備 考
(A)	(B)	(A)	(A)	(B)	(B)	
野間岬	志布志湾	0	0	0	0	土橋遺跡
長崎鼻	佐多岬	70	70	75	75	高橋貝塚
竹島・硫黄島	馬毛島	40	110	27	102	
口永良部島	種子島	30	140	8	110	
屋久島		10	150	16	126	
口之島		54	204	54	180	
中之島		10	214	10	190	
諏訪之瀬島		19	233	19	209	
悪石島		14	247	14	223	
小宝島		33	280	33	256	
宝島		11	291	11	267	
上ノ根島・横当島		37	328	37	304	
奄美大島		55	383	55	359	
徳之島		32	415	32	391	
沖永良部島		32	447	32	423	
与論島		30	477	30	453	
沖縄本島		25	502	25	478	
伊江島		44	546	44	522	

伊江島

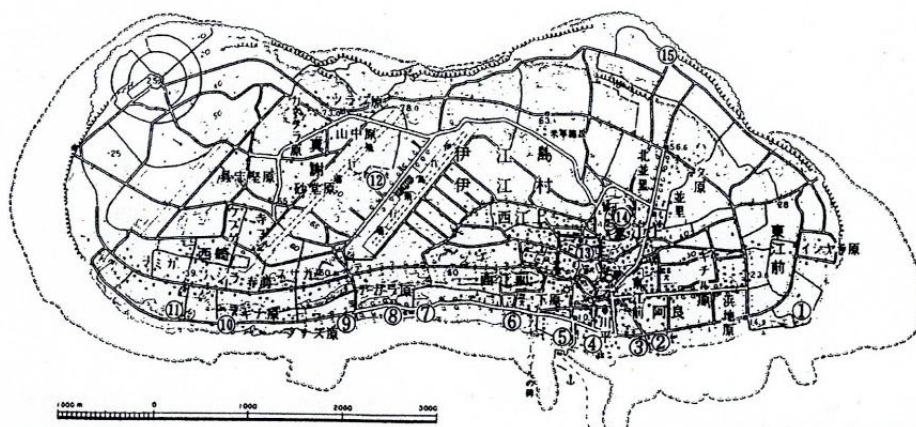
伊江島(沖縄県国頭郡伊江村)は、沖縄本島の本部半島の西方 5 キロの海上に浮かぶ島である。

島の東部にそびえる尖った「城山」(グスクやま)——通称「伊江島タッチュー」が島のシンボルとなっている。





具志原貝塚



- ① 浜崎貝塚
- ② 阿良貝塚
- ③ 阿良第2遺跡
- ④ 具志原第2貝塚
- ⑤ 具志原貝塚
- ⑥ アッチ浜貝塚
- ⑦ ナガラ原東貝塚
- ⑧ ナガラ原西貝塚
- ⑨ フナズ遺跡
- ⑩ 西崎遺跡
- ⑪ ハシラ遺跡
- ⑫ ゴヘズ洞穴遺跡
- ⑬ 西江上遺跡
- ⑭ 伊江グスク
- ⑮ カダ原洞穴遺跡

具志原貝塚
(国指定史跡)
Gushibaru
Shell Mound
(National Designated
Historic Site)

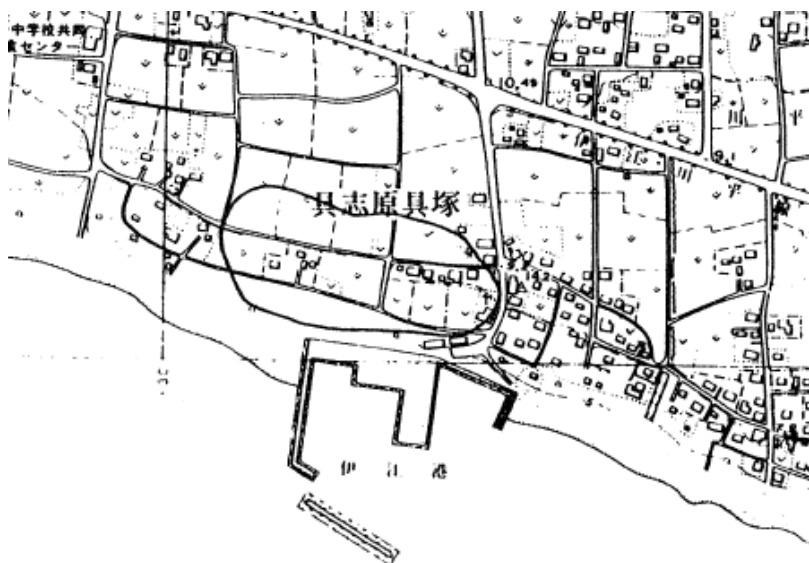
島の南海岸、伊江港の砂丘にある貝塚で、沖縄で初めて九州産の弥生土器が発見された遺跡です。約2,000年前のゴホウラ貝の半製品・製品が多数出土しており、貝交易が盛んに行われた地域であったことも注目されています。貝輪、貝札、貝皿、貝鐘などの貝器文化を物語る遺物が多く発見されています。

また縄文前期(約5,000年前)の条痕文土器が下層で確認され、これらのことから沖縄の数多くの遺跡の中でも、多彩で豊かな内容を持つ貝塚であるといえます。同貝塚は、昭和49年の県指定後、昭和61年に国指定史跡となりました。

At this ruin, Yayoi pottery produced in Kyushu was first found in Okinawa, in a shell mound in the sand.

具志原貝塚は、伊江島の南海岸——伊江港の砂丘にある貝塚で、沖縄で初めて大隅半島系の弥生式土器(山ノ口式土器)が発見され、またゴホウラ貝の半製品や製品などが多数出土し、北部九州を中心に出土するゴホウラ貝やイモガイの供給基地の一つであったとみられる。

貝輪、貝皿、貝鐘、貝札など、さまざまな貝の半製品・製品が出土し、また、縄文前期に相当する条痕紋土器なども確認され、埋葬人骨も検出された。この遺跡は昭和49年(1974)の県指定後、昭和61年(1986)に国指定史跡となった。



さらには、平成7年度(1995)に県道拡幅工事に伴う沖縄県教育委員会による緊急調査が行われ、平成9年(1997)に「沖縄文化財調査報告書第130集」の「具志原貝塚調査報告」としてまとめられた。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊江島 具志原貝塚	貝塚	沖縄新石器時代前Ⅱ期（縄文前期）	土壌	室川下層式土器 仲泊式土器	地点を別にして、尖底土器主体と平底主体の箇所がある。 搬入された弥生中期の土器がわりと出土し、彼我の交易がうかがえる。
		沖縄新石器時代後Ⅱ期（弥生中期）	焼土遺構	具志原式土器 弥生土器 石斧 たたき石 すり石 スিজガイ製利器	

ゴホウラ製貝輪一覧

(単位: cm/g)

グリット	層位	縦長	横長	孔径	縦/横	重量	観 察 事 項	挿図番号 図版番号
G-13	1	14.2	7.1		4.3/4.7	240	腹面部を使用したもので、背面部全体を打割、除去している。腹面は敲打により粗孔を穿っている。更に背面の一部には研磨痕を認めるものの、制作途上において廃棄されたものと思われる。	図7の1 図版15
F-19	1	7.8	5.5		—	59	腹面部を使用。背面部全体を除去し縁部を敲打により整形、更に腹面に敲打による粗孔を穿つものである。腹面部の水管溝側が残存する破片で、制作途上において破損、廃棄されたものと思われる。	図7の2 図版15
G-21	3	7.3	6.0		—	35	腹面部を使用したもので、背面部全体を打割、更に敲打調整により縁部を整形、腹面に敲打により粗孔を穿つものである。腹面部の螺塔側が残存する破片で、制作途上において破損、廃棄されたものと思われる。	図7の3 図版15
G-23	3	15	10		69.0/80.8	480	背面部を使用したもので螺塔付近の外唇部及び背面頂部を打割により除去し、粗孔を穿つものである。制作途上品と思われる。	図7の4 図版15

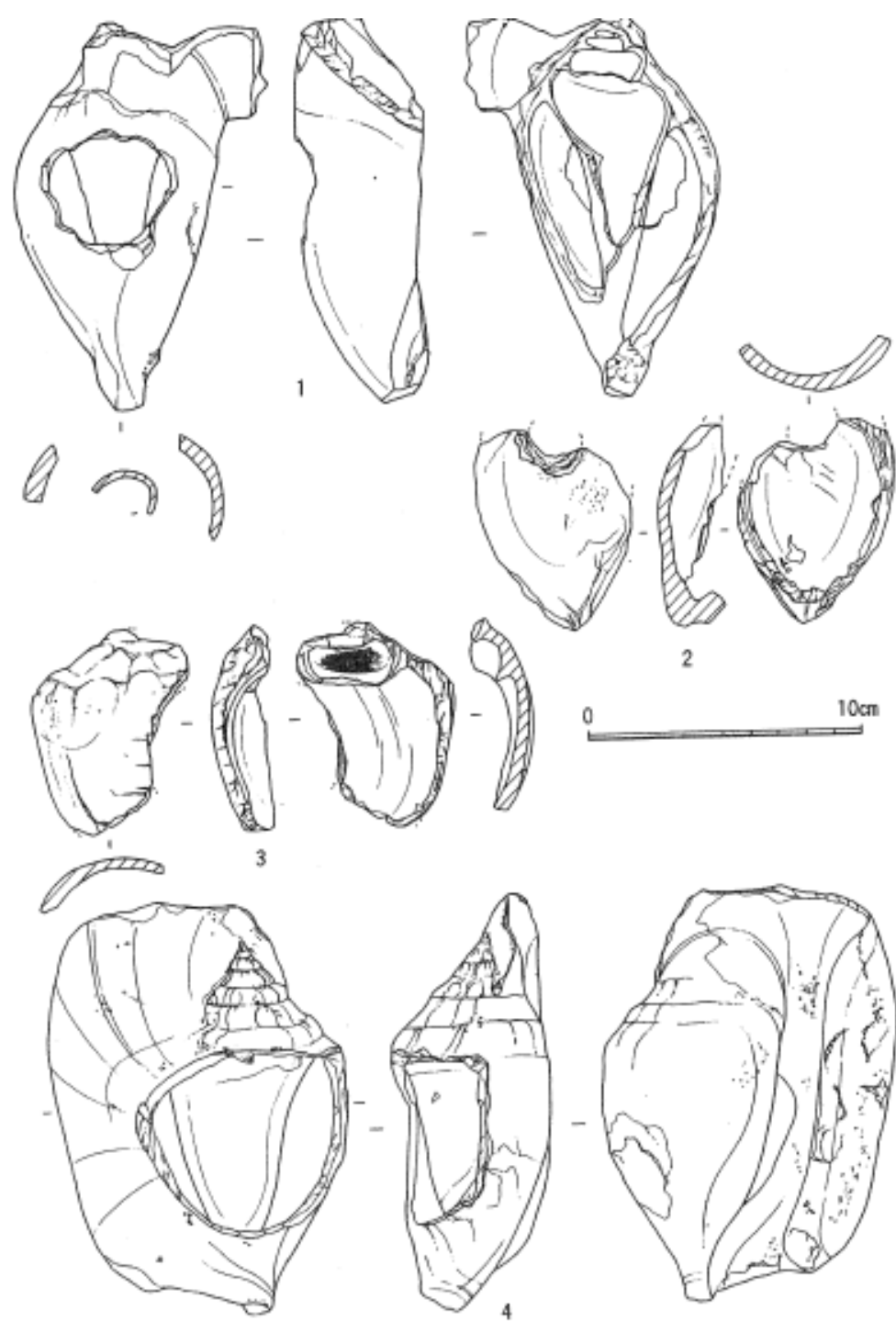


図7 貝輪実測図・2 (ゴホウラ製)

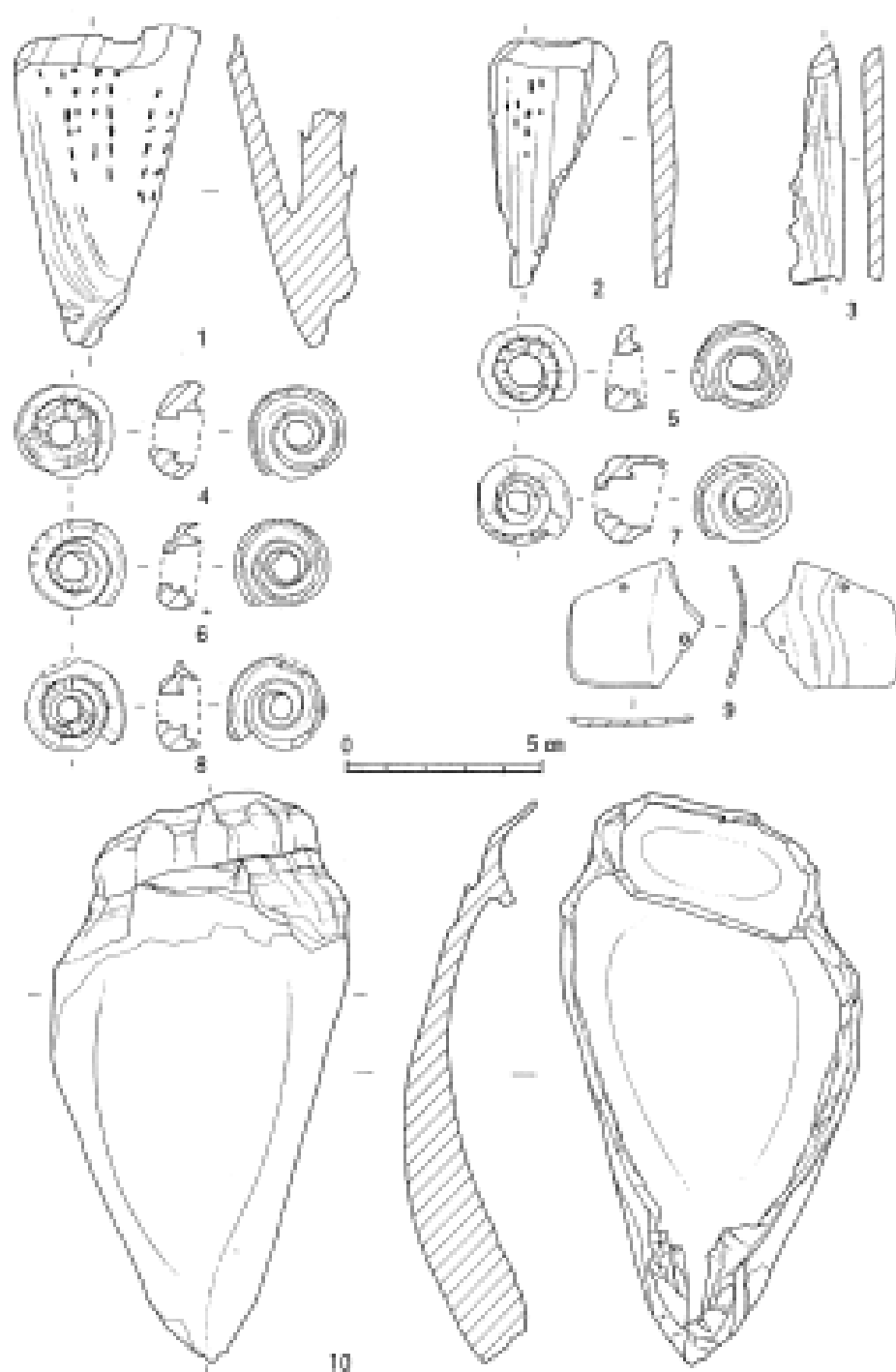


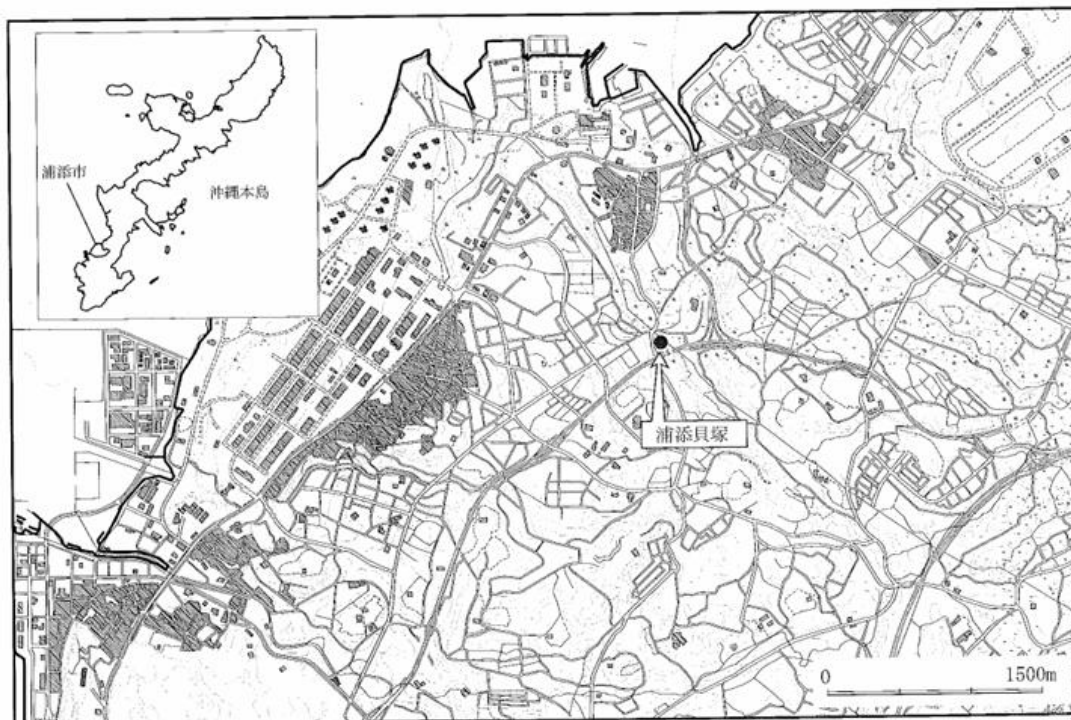
図9 イモガイ科製品、玉（マガキガイ製）、ヤコウガイ製有孔製品、ラクダガイ製品実測図

表2 具志原貝塚出土石器の器種と石質の相関

	石 斧	たたき石	すり石	砥 石	円盤形石器	計
緑 色 片 岩	3	2	1			6
石 英 斑 岩			1			1
礫 岩			1			1
硬 砂 岩		15	1	1	1	18
細 粒 砂 岩				4		4
粘 板 岩	1					1
石 灰 岩		1				1
チャ ー ト		5				5
サ ン ゴ		1				1
合 計	4	24	4	5	1	38

浦添貝塚

また、沖縄本土の浦添貝塚(浦添市)からもさまざまな貝製品が出土しており、沖縄本島においても貝製品が作られていたことが確認された。



第4表 貝製品一覧

No.	種類	製品	状態	サイズ (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地点		注記	図版	対照	
				縦	横	厚			グリッド	レベル(m)			古代文化	南島考古
1	カバミナシ	自然	完形?	5.3	3.1		7.1	外唇付近。殻表は風化気味で周縁摩耗。孔あり。黒住耐二確認。	—	—	U-92	6-8	—	第5図-12
2	ヤコウガイ	自然	破片	4.8	1.4		3.9	体層。殻表あり。周縁は自然の割れ。自然貝の可能性が高い。	—	—	U-297	7-3	—	—
3	メンガイ類	貝輪	破片	7.3			8.5	外輪の幅8mm。外縁。内縁とも摩耗。	—	—	U-2	6-11	—	第5図-3
4	イモガイ	貝札	完形	62	11.7	2.5	3.7	外唇利用。短冊状で研磨顕著。	—	—	U-2	6-3	図版11-14	第5図-7
5	イモガイ	貝札	破片	31	8.2	3.4	2.1	外唇利用。研磨顕著。	—	—	U-22	6-2	図版11-13	第5図-8
6	マガキガイ?	玉	完形	17	18.2	8	2.7	殻頂利用。研磨顕著。殻表にアバタが数個見られる。孔径5.5mm、内→外に穿孔。	—	—	U-2	6-4	図版11-12	第5図-9
7	マガキガイ?	玉	破片	15	—	3	0.5	殻頂利用。表裏面とも研磨顕著。肩部角は明瞭。孔は中央部は自然か。径4.5mm、殻軸の摂理。	—	—	U-97	6-5	—	第5図-5
8	ヤコウガイ	貝縁	破片	△33	19	2.2	1.7	体層利用。研磨顕著で中央は稜をなす。裏面は平らで、基部側は殻口利用。孔径2mm、両面穿孔。	—	—	U-2	6-6	図版11-4	第5図-2
9	クロチョウガイ	貝縁	破片	△22	18	—	1.1	研磨顕著。表面は中央に稜をなし、裏面は平らである。孔は3mm、両面穿孔。	—	—	U-8	6-7	図版11-5	第5図-4
—	クロチョウガイ	貝縁	破片	—	—	—	—	遺物未確認。	—	—	—	—	図版11-6	—
10	サラサバティラ	貝輪	破片	63	12	10.9	8.5	内縁は打割、外縁は研磨顕著。内殻は自然。	1a	105~120	U-25	6-10	—	—
11	ホラガイ	有孔	破片	280	100.4	80	276	体層のみ残。殻全体にアバタ多し。風化著しい。殻頂は円味。孔は内唇側と体層側にあり。孔形は楕円。孔①30×23.2。孔②26.2×21。	—	—	—	7 a-6	—	—
12	ソメワケグリ	有孔	完形	32	33	—	5	右殻。殻全体摩耗。アバタ有。外殻から研磨、穿孔、楕円。孔径3.5×2.8。	4b	105~120	U-467	6-9	—	—
12	メンガイ	有孔	完形	59	59	—	25	左殻。殻全体摩耗。穿孔。孔縁はシャープで自然か。孔径19.8×15.6。内→外。不定形。	3	105~120	U-434	—	—	—
13	イトマキボラ	有孔	完形	157	81	—	158	貝殻の突起を若干破損。体層に穿孔するが、自然の可能性が高いが、何らかの利用の可能性も否定出来ない。孔径18.3×13.3。外→内穿孔。不定形。	—	—	—	7 a-7	—	—
14	メンガイ	有孔	破片	84	—	—	27	左殻。アバタ有、打割2回、製作途中か。孔径40mm、内→外。	—	—	U-462	—	—	—
15	スিজガイ	利器	破片	41.5	16.5	19.0	14.5	突起①を両面研磨。	—	—	—	7 a-2	—	—
16	ヤクシマダカラ	有孔	破片	65.9	—	26.2	19.1	内唇のみ。外唇、外殻にも研磨痕。色残、光沢有。孔は外→内に穿孔。	3	—	U-3	7 a-1	—	—

沖縄県立博物館紀要 (Bull. Okinawa Pref. Mus.), No.31, pp. 13-54, 2005

浦添貝塚

—第一・二次発掘調査のまとめ—

新田重清¹⁾・比嘉賀盛²⁾・島袋春美³⁾・仲座久宜⁴⁾

県指定史跡 浦添貝塚

昭和47年2月25日指定

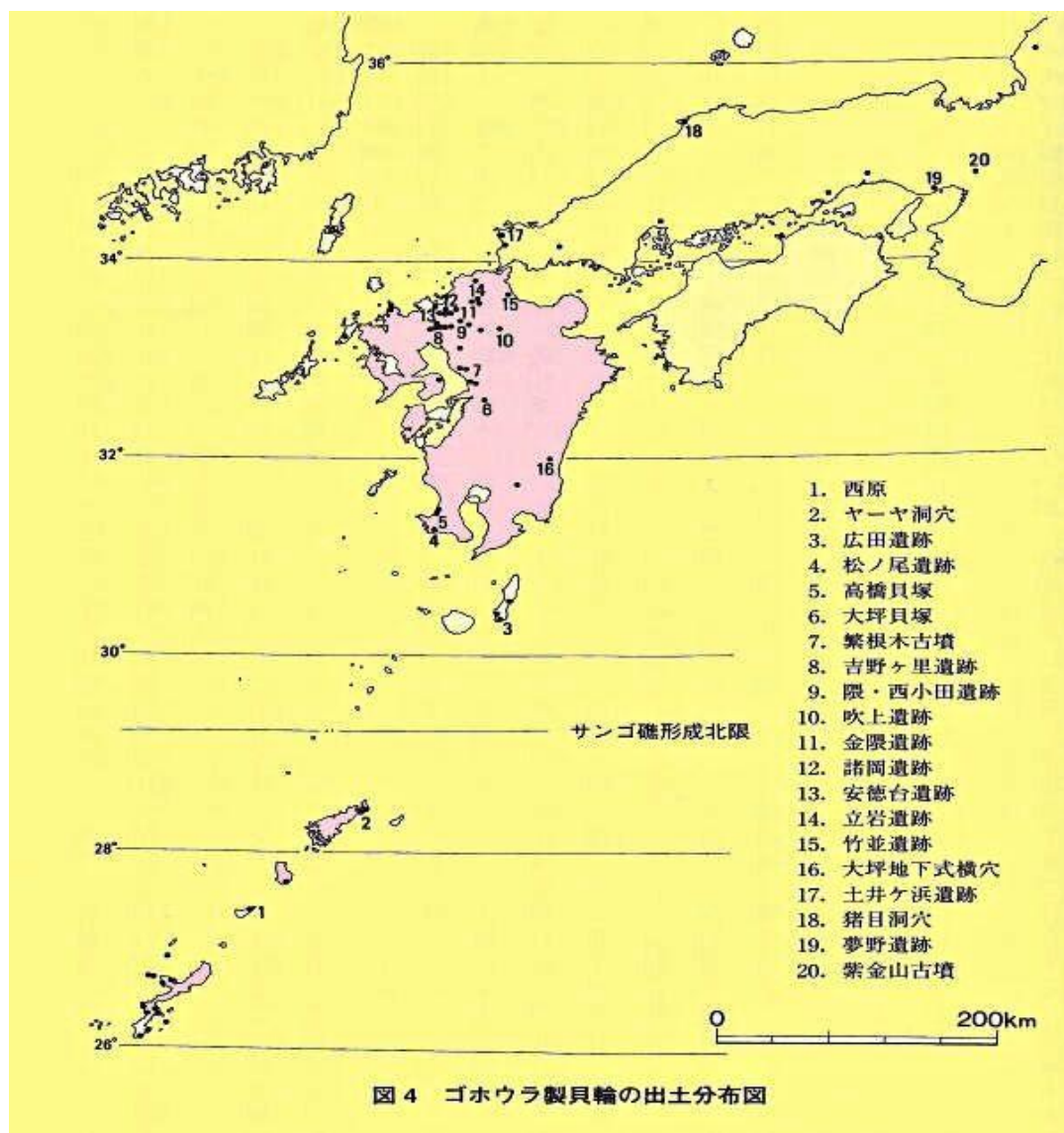
この貝塚は今から3千年余前に住んでいた人々がのこしたものです。貝塚からは石斧、土器、貝の飾りやたくさんの貝がらなどが発見されています。

その頃は山野や海の動植物だけを食糧にして生活する原始社会でした。この貝塚から、九州の縄文時代後期にあたる市来式土器が発見され、また、奄美諸島でよくみられる爪形の文様をもつ土器などもたくさん出土しています。この貝塚は、他の同じ時期の貝塚に比べて、とくに土器の型式が奄美の土器によく似ていることが特色です。このことから、この貝塚をのこした人々の時期や、奄美・九州など北とのつながりのあったことなどがわかります。

なお、この地域において無断で現状を変更することは、条例で禁じられています。

昭和58年3月21日

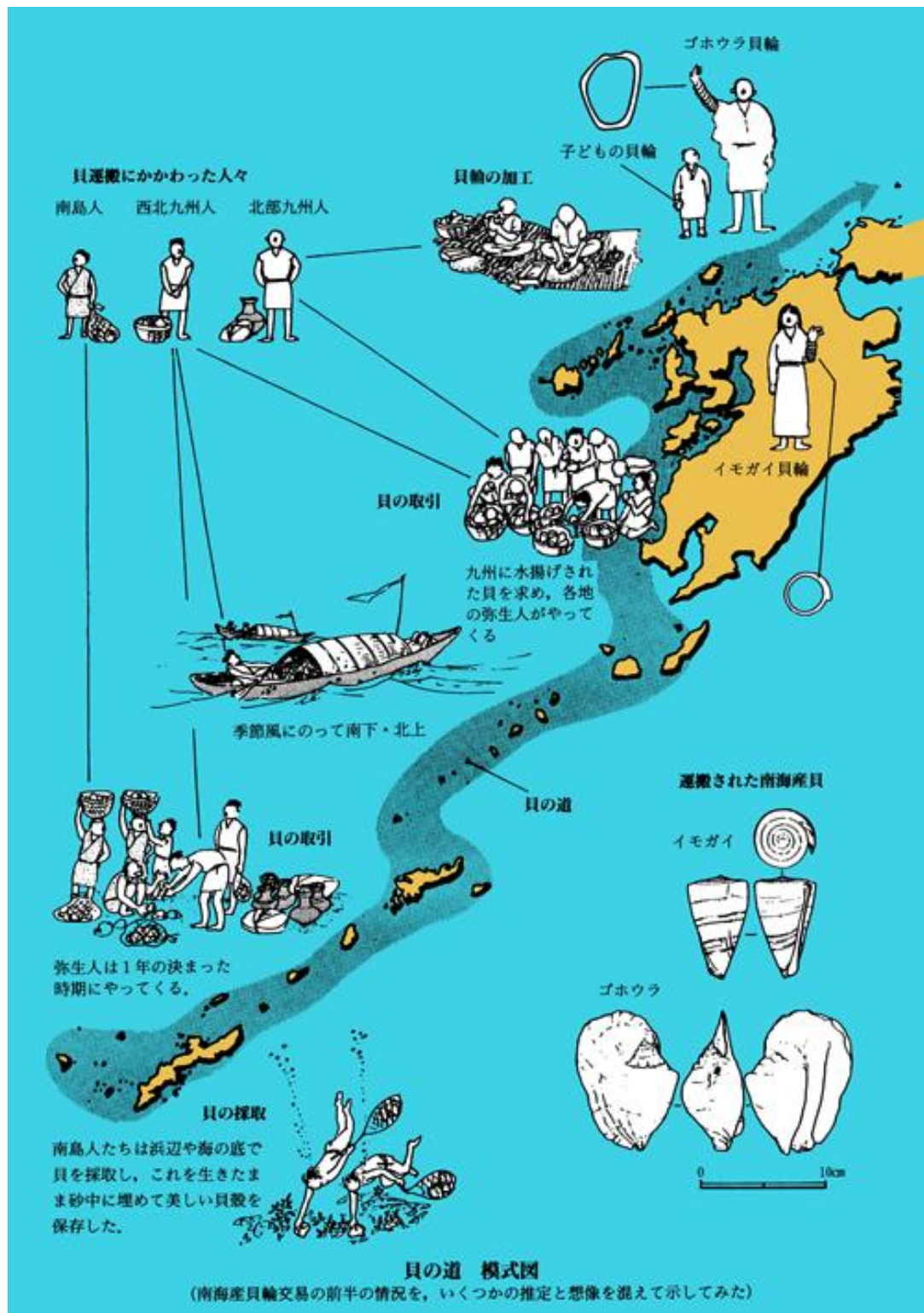
沖縄県教育委員会
浦添市教育委員会



1	西原海岸	鹿児島県	沖永良部島	11	金隈遺跡	福岡県	福岡市博多区
2	ヤーヤ洞穴	鹿児島県	奄美大島	12	諸岡遺跡	福岡県	福岡市博多区
3	広田遺跡	鹿児島県	種子島	13	安徳台遺跡	福岡県	那珂川市
4	松ノ尾遺跡	鹿児島県	枕崎市	14	立岩遺跡	福岡県	飯塚市
5	高橋貝塚	鹿児島県	南さつま市	15	竹並遺跡	福岡県	行橋市
6	大坪貝塚	熊本県	宇城市	16	大坪地下式横穴	宮崎県	東諸県郡国富町
7	繁根本古墳	熊本県	玉名市	17	土井ヶ浜遺跡	山口県	下関市
8	吉野ヶ里遺跡	佐賀県	吉野ヶ里町	18	猪目洞穴	島根県	出雲市
9	隈・西小田遺跡	福岡県	筑紫野市	19	夢野遺跡	兵庫県	神戸市
10	吹上遺跡	大分県	日田市	20	紫金山古墳	大阪府	茨木市



図2-6 南海産貝製腕輪の交易ルート ゴホウラ・イモガイ利用の北琉球圏からの第1の道と、オオツタノハ利用の伊豆諸島からの第2の道が知られている(約2000年前以降)。(小田 2000)



木下尚子「南から見た貝の道—二つの交易路のもたらしたもの—」

『南島貝文化の研究—貝の道の考古学』1996年3月、法政大学出版局所収より

沖縄・南西諸島の旧石器人

沖縄・南西諸島の島々で旧石器時代の化石人骨が発見されている。

石灰岩洞穴(鍾乳洞)から流れ出る地下水が炭酸石灰分を多く含んでおり、人骨を化石化するためである。

出土島	旧石器人	年代	出土人骨	出土年・出土地
伊江島	ゴヘズ洞穴人	2 万年前	アゴの骨・頭蓋骨の破片	1977 年伊江村
	カダ原洞穴人	後期更新世後期	成人男性の左頭頂骨	1962 年伊江村
沖縄本島	山下洞人	3 万 2000 年前	6 歳位の幼児の大腿骨・脛骨	1962 年那覇市
	大山洞穴人	1 万 8000 年前	成人の下アゴ	1966 年宜野湾市
	港川人	1 万 7000 年前	ほぼ完全な人骨 5 体～9 体	1970 年八重瀬町
久米島	下地原洞人	1 万 5000 年前	8～10 か月の乳幼児の大腿骨 や下アゴの右半分など約 50 個	1983 年具志川村
宮古島	ピンザアブ人	2 万 6000 年前	頭蓋骨の破片	1979 年上野村
石垣島	白保洞穴人	2 万年前	頭、脚、腕などの人骨 9 点のほか 1,000 点以上の人骨片	2007 年白保

伊江島のゴヘズ洞穴人

前述した伊江島のゴヘズ洞穴からは、約 2 万年前とみられる旧石器人のアゴの骨や頭蓋骨の破片などが出土しており、伊江ゴヘズ洞穴人と呼ばれている。

伊江島空港の西——ゴヘズ山(標高約 82m)にあり、洞穴は直径 2 メートルの入口から地下へ広がり、複雑に奥へのび、上洞は奥行き 19 メートル、さらに進むと奥行き 35 メートルの下洞と続いている。昭和 50 年からの調査では鹿の化石、叉状骨器、人骨や貝殻などが土出した。

鹿の化石は、リュウキュウジカとリュウキュウムカシキョンという更新世(約 200 万～1 万年)の鹿の種類といわれている。土器は沖縄考古編年後期(約 2200 年～800 年前)と推定されている。



伊江島のカダ原洞穴人

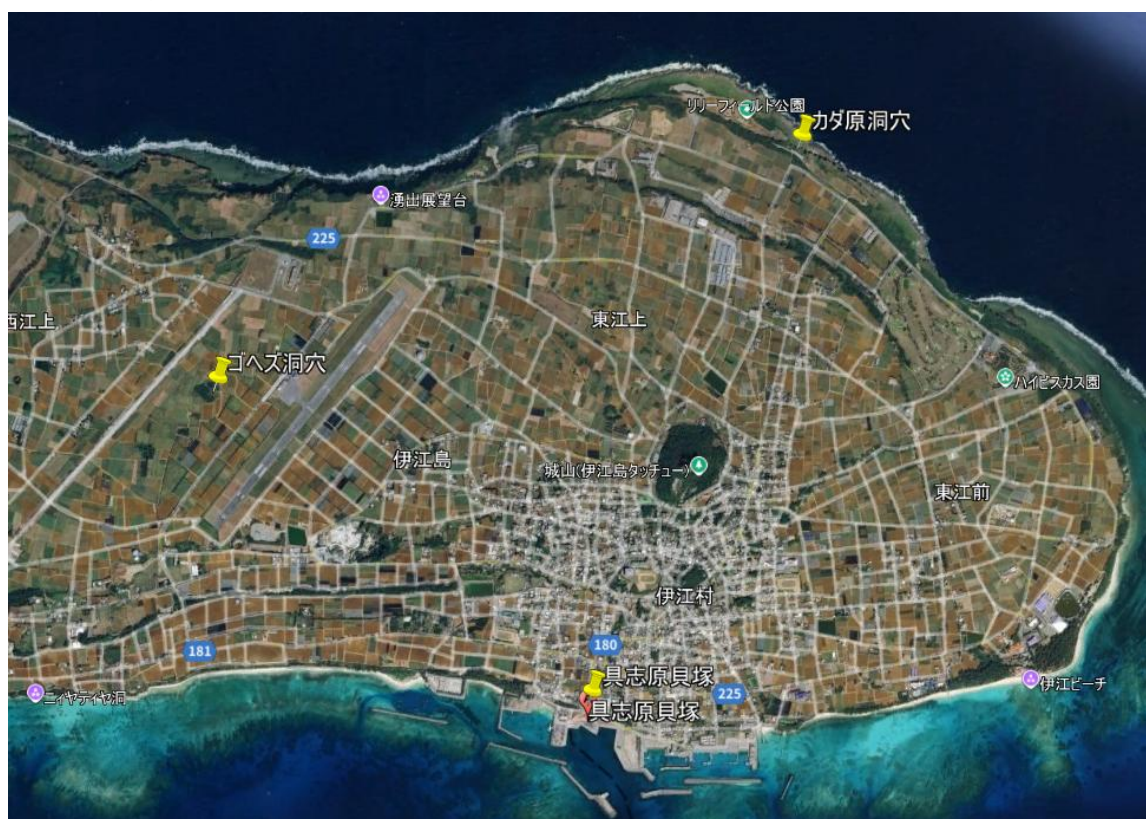
また、伊江島のカダ原洞穴からは成人男性の頭骨片が見つっている。

沖縄の考古学研究家・多和田真淳(1907～1990)は、1962 年(昭和 37)に伊江島のカダ原洞穴を単身で調査し、黒色に炭化した頭骨片 1 点と石器らしい遺物 2 点を発見した。

頭骨片は左頭頂骨片 1 片(矢状径 7cm、最大横径 5.5cm)で、鑑定では成人男性、骨は厚さがあり石灰華(トラバーチン)に被われ黒色を呈し、化石化の程度が著しいとされている(鈴木 1975、檜崎・馬場・松浦・近藤 2000)。

人骨の年代はお茶の水女子大学の田辺義一によりフッ素分析が行われ、0.42%の値であったことから後期更新世後期のものと推定された(鈴木 1975、松浦・近藤 2000)。

石器らしい遺物は洞穴内(第 1・2 号か不明)の岩棚上で発見されたもので、沖縄大学の高宮廣衛(高宮 1965)によると、1 点は右端下半部の 1 か所、2 は左右と前面部及び同裏面部の 4 か所にそれぞれ打裂が認められるという。



伊江島

沖縄本島の旧石器人

沖縄本島の旧石器人は次のとおり。

出土島	旧石器人	年代	出土人骨	出土年・出土地
沖縄本島	山下洞人	3 万 2000 年前	6 歳位の幼児の大腿骨・脛骨	1962 年那覇市
	大山洞穴人	1 万 8000 年前	成人の下アゴ	1966 年宜野湾市
	港川人	1 万 7000 年前	ほぼ完全な人骨 5 体～9 体	1970 年八重瀬町

山下町第一洞窟遺跡の山下洞人

山下洞人(やましたどうじん)は、1968 年に沖縄県那覇市山下町の「山下町第一洞窟遺跡」から発見された旧石器時代(更新世後期)の人骨化石で、放射性炭素年代測定では約 32,000¹⁴C 年前(校正年代で約 36,000 前)とされ、日本国内最古級の人骨とされている。

推定 8 歳程度の女兒の大腿骨・腓骨・肋骨など計 4 本の骨片である。



新 生 代	第 3 紀 更新世	旧石器	新人 ：山下町洞人 (沖縄・3.2万年前) 港川人 (沖縄・1.8万年前) 浜北人 (静岡・1.4万年前)	人骨などの多くは石灰岩地帯(沖縄に多い)で発見されている。石灰分は土質がアルカリ性で骨が残りやすく、化石になりやすいため。
	完新世	新石器	↓	
	港川人骨 (1970発見)		沖縄県。男女9体が出土。保存状態が良く、ほぼ完全な全身骨格。	
	浜北人骨 (1960発見)		静岡県。若い女性の頭骨片などが出土。	

大山洞穴人

大山洞穴(沖縄県宜野湾市大山名利瀬原)から見つかった旧石器人骨である。

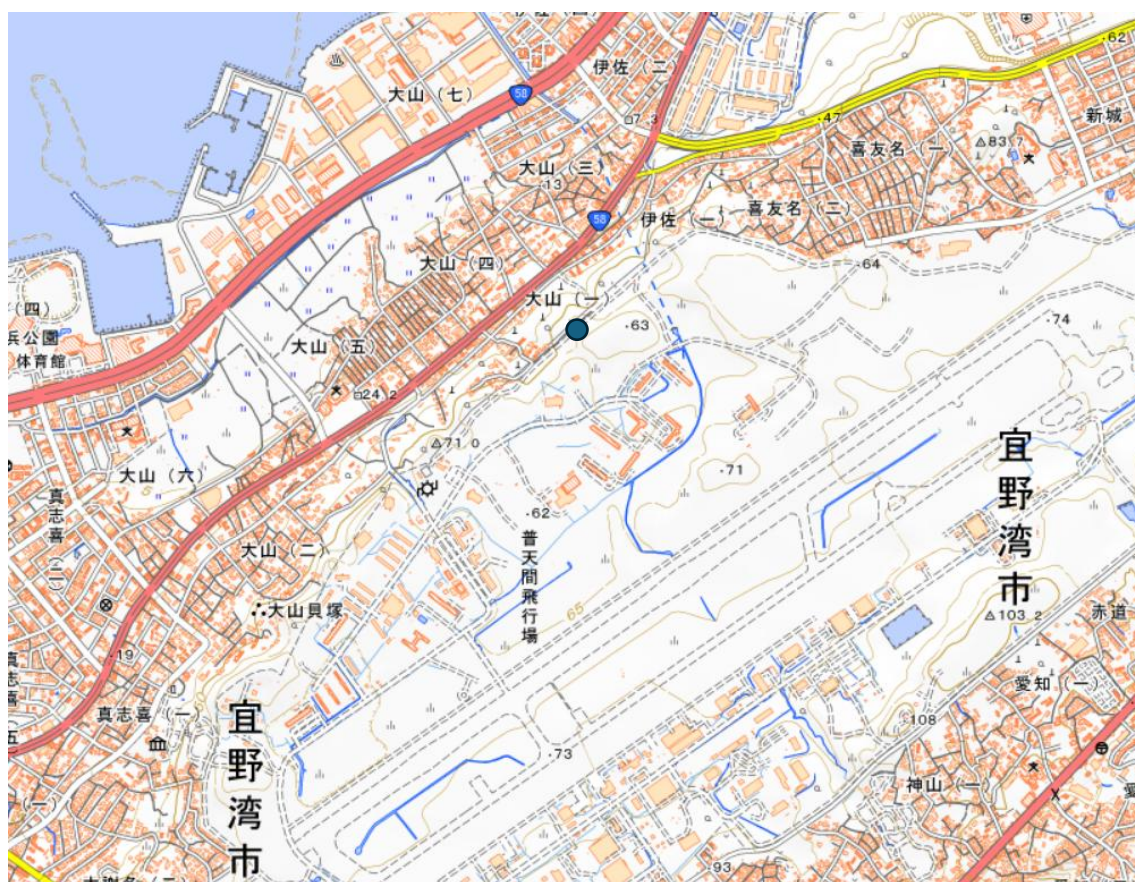
1964 年(昭和 39)、化石好きのアメリカ人小学校 6 年生の少年(ダグラス・J・コムストック)がレストラン建設工事のため洞穴が崩されて石灰岩片が散乱した道路で人骨らしきものを発見して家に持ち帰った。

その話を聞いた沖縄の考古学者の多和田真淳と高宮廣衛は、ダグラス少年の家を訪ねて人骨の提供を申し出たが父親から断られてしまった。その後、粘り強く交渉して、どうにか入手することに成功し、東京大学人類学教室に鑑定を依頼した。

その結果、人骨で下顎骨の右大白歯部(歯 3 本付)であることが判明した。かつ、大白歯の磨耗状況から死亡年齢 20 歳前後の男性で、大白歯に「髓腔症」が認められるなど原始的な特徴を示し、ホモ・サピエンスではあるが現代人ではないと鑑定された(鈴木 1975)。

「髓腔症」とは、ネアンデルタール人などによく見られる原始的な巨大歯髓腔症(タウロドンティズム)状態である(鈴木 1975、檜崎・馬場・松浦・近藤 2000)。

お茶の水女子大学の田辺義一によりフッ素分析が行われ、0.85%の値で、後期更新世の後期と推定された(鈴木 1975、松浦 1997、松浦・近藤 2000)。



ガンガラーの谷

那覇東南 10 キロのところに、ガンガラーの谷(南城市前川)がある。



鍾乳洞が数十万年前に崩壊して谷になり、亜熱帯の樹木が生い茂った森林となっている。。
この地のサキタリ洞(南城市玉城大字前川字浮花原 202)から、約 23,000 年前の世界最古とさ

れる釣針や約 9,000 年前の人骨などが発見された。

○サキタリ洞遺跡(南城市玉城大字前川字浮花原 202)

(1)旧石器時代以降の遺跡

ガンガラーの谷の洞窟遺跡である。

周辺には先史時代の遺跡が多く分布し、東南 1.5 キロには港川人骨が出土した「港川遺跡」がある。

(2)発見の経緯

地権者の島袋林信氏が、洞穴近辺で土器や石器などの遺物を採集したことによる。

(3)人の歯と石器

2010 年 7 月～8 月、縄文時代の遺物を含むフローストーン層(石灰岩の堆積層)の直下から 12,000 年前の人の歯 1 点とともに石英の石器 3 点が発見された。

旧石器時代の人骨と石器がともに発見されるのは日本で初めてである。

(3)土器

2013 年、沖縄県最古の約 8,000 年前の土器が発見された。表面にヘラなどを押し付けて紋様をつける押引文土器とされる。従来、沖縄最古の土器は約 7,000～6,000 年前の無文土器または南島爪形文土器とされてきたが、この発見により 1000 年遡ることになった。

(4)貝器

2014 年 2 月、23,000～20,000 年前の貝製のビーズと道具、人骨が発見された。

旧石器時代の遺跡から貝器が見つかるのは日本で初めてである。

(5)人為的に埋葬

2014 年 12 月、少なくとも 9,000 年以上前の成人の人骨が発見された。人為的に埋葬されたものと考えられている。

(6)世界最古の釣針

2016 年世界最古の釣り針(23,000 年前、貝製)が発見された。また 30,000 年前の幼児人骨も発見された。これは日本国内で山下洞人(32,000 年前)に次いで古いものである。



サキタリ遺跡から出土した世界最古の釣針

港川遺跡

サキタリ遺跡の東南 1.5 キロに、港川遺跡(島尻郡八重瀬町港川字長毛小字トーガマー原)がある。

アメリカ施政権下の 1967 年(昭和 42)11 月、那覇市でガソリンスタンドを経営していたアマチュア考古学研究家の大山盛保氏は、具志頭村(現・八重瀬町)港川の石材店で入手した庭石(栗石=石灰岩)に動物の化石らしきものを見つけ、この石の産地に動物を求めて狩猟をしていた古代人がいたのではないかと推察した。

大山氏はさっそく港川の採石場に赴き、崖の割れ目(フィッシャー)を掘ると 1 万年以上前のイノシシの骨が出土した。

大山氏はイノシシを捕獲した人間の存在を確信したが、賛同する者はなく、唯一考古学者の多和田眞淳(たわだ・しんじゅん、1907～1990)が理解を示したのみであったという。

港川遺跡からは、イノシシのほか、ハブ、ネズミ、カエルなど多種多様な動物の骨が出土したが、人骨は出土せず、大山氏は日が暮れても車のヘッドライトで遺跡を照らしながら発掘を続けたという。

1968 年(昭和 43)1 月 21 日、大山氏はついに人骨を発見する。同年 3 月 19 日、山下町第一洞穴遺跡の発掘のため沖縄を訪れてた東京大学の鈴木尚教授らに連絡を取った。

すると、大山氏が採集していた化石骨のなかに、ヒトの脛骨 2 点、上腕骨 1 点、足の親指、頭骨片などの人骨が確認された。

1968 年(昭和 43)末から 1971 年(昭和 46)にかけて第一次調査が、1974 年(昭和 49)からは本格的発掘調査が行われ、完全に近い全身骨が 5～9 体が出土した。

1968 年 12 月 25 日～1969 年(昭和 44 年)1 月 7 日、東京と沖縄の人類学・考古学者の混成チームによる第一次沖縄洪積世人類発掘調査団発掘調査が行われた。団長は渡邊直経氏(東京大学)。ただし、人骨は発見されなかった。

ところが、1970 年 8 月、大山氏が地下約 20 メートルで完全な化石頭骨と人骨を発見し、渡邊氏が緊急調査を行ったところ、頭骨など約 40 点の人骨片を発見した。

そして、同年 11 月、大山氏はほぼ完全な全身骨格を発掘した。



港川人

港川人は約2万年前(約22,000～20,000 ^{14}C BP)の旧石器時代の現生人類とされている。

上述のとおり、4体分(男性1体・女性3体)が見つかっており、保存状態もきわめて良好である。

骨格の分析から、身長は男性で約155センチ、女性で約144センチと小柄で、下半身が発達していた。

顔立ちは現代日本人や縄文人とは異なり、オーストラリア先住民やニューギニア人に近いという。



2021年、港川1号人骨のミトコンドリアDNA全配列が解読され、ハプログループMに属することが明らかになった。これはアジアに広く分布する系統で、現代日本人にも見られるが、縄文人や弥生人とは異なる特徴を持っており、共通の祖先から枝分かれした別系統と考えられている。

港川人の復元模型やレプリカは、沖縄県立博物館・美術館や八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館で展示されている。



八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館(島尻郡八重瀬町字具志頭 352)

(以下、つづく)

日向王朝の時代⑧ 台湾・フィリピンへの道

河村哲夫

先島諸島

この際、沖縄からさらに南下して、先島諸島(宮古諸島・八重山諸島)および台湾・中国方面、あるいはフィリピン・インドネシア方面についても述べておこう。

下図のとおり、沖縄本島から宮古島への距離は、266 キロもあり、南部九州から台湾に至る航路としては、最長の区間距離である。



慶良間諸島あるいは久米島を迂回するコースをたどれば、多少短くなるが、それでも久米島～宮古島の距離は 210 キロ、慶良間諸島～宮古島の距離は 220 キロもある。

一日 70 キロ程度で計算しても、沖縄～宮古島間は 3 泊 4 日、久米島・慶良間諸島～宮古島間は 2 泊 3 日程度を要するであろう。

いずれにしても、夜間航海必須の危険な航路である。嵐に襲われる確率も高くなる。

風と黒潮に押し戻され、前に進むことができないこともあり得よう。

慶良間諸島

沖縄本島南西に約 40 キロの東シナ海に点在する大小 20 余りの島々の総称である。

沖縄諸島に含まれる。



有人の慶良間諸島

渡嘉敷島 (沖縄県島尻郡渡嘉敷村)	慶良間諸島の東端に位置。 先史時代から人の居住あり。舟越(ヒナクシ)貝塚 琉球王朝時代に代々渡唐船の船頭を務めた根元家跡。
座間味島 (沖縄県島尻郡座間味村)	慶良間諸島のほぼ中央部。 古座間味貝塚から新石器時代の住居跡が出土し、その内部 から土器・石器・貝製品が、住居跡の貯蔵穴からは黒曜石・ゴ ホウラ貝・九州地方の縄文時代晩期の土器片が出土。 古くから琉球王朝と中国諸王朝との貿易の中継地
阿嘉島 (沖縄県島尻郡座間味村)	島の東部の低地に貝塚があり、縄文時代から人が居住してい た。 琉球王朝時代の佐久原城跡あり。
慶留間島 (沖縄県島尻郡座間味村)	阿嘉島・外地島と橋で結ばれている。
前島 (沖縄県島尻郡渡嘉敷村)	「メージマ」。また、慶良間諸島の玄関口として「メーゲラマ」 (前慶良間)とも呼ばれる。北のハテ島・中島を含む 3 島の総 称として用いられることもある。

慶良間諸島の西北 38 キロに久米島(沖縄県島尻郡久米島町)がある。

久米島にも旧石器人の痕跡が残されており、久米島の下地原洞穴遺跡(久米島町字具志川)からは、下地原洞人の人骨が
見つかった。

宮古諸島

慶良間諸島から久米島までは 46 キロ、久米島から宮古島まで 220 キロの距離である。

沖縄から台湾に向かう航路としては、最長の区間距離である。

全島が隆起サンゴ礁で形成され、八つの有人島のうち、宮古島、池間島、大神島、伊良部島、下地島、来間島は行政区分では沖縄県宮古島市に属する。また、多良間島、水納島は宮古郡多良間村に属する。宮古列島の北西には尖閣諸島、西には八重山諸島がある。



宮古島

宮古島 (沖縄県宮古島市)	明代に編纂された『元史』仁宗記や 1605 年の『温州府志』には、1317 年に「波羅公管下密牙古人」が温州永嘉に漂着したとの記載があり、これが文献における宮古島の初出とされる。 『朝鮮王朝実録』には、1477 年(成宗八)に与那国島に漂着した朝鮮人が宮古島を経て帰還したといい、宮古島は「悖羅彌古」「覓高」と記されている。
池間島 (沖縄県宮古島市)	かつては海峡で隔てられた二つの島であったが、16 世紀の初めごろ、狩俣の豪族の四島の主が石橋で島をつないだ。その後石橋は埋もれてしまったが、二つの島はつながったままとなった。 御嶽信仰により、大主神社(ウハルズ御嶽)には池間島民のなかから選ばれた 5 人の司(巫女)がいる。
大神島 (沖縄県宮古島市)	祖神祭(ウヤガン)という秘祭が継承されている。 島の歴史は未解明。
来間島 (沖縄県宮古島市)	「ふふやまじま」、「ふふやまずま」、「ふいまずま」などと呼ばれる。 宮古島と全長 1,690 メートルの来間大橋で結ばれている。
伊良部島 (沖縄県宮古島市)	西に隣接する下地島と一つの島のようにみえる。
下地島 (沖縄県宮古島市)	『朝鮮王朝実録』世祖八年(1463)の条に、宮古島に漂着した朝鮮船の乗員の記録があり、その中に記された「時麻子島」は下地島に比定されている。
多良間島 (沖縄県宮古郡多良間村)	宮古諸島の南西端に位置し、東方の宮古島との距離は約 67 キロ、西方の石垣島との距離は約 35 キロ。
水納島 (沖縄県国頭郡本部町)	かつては無人島で、島全体が「メンナノ御嶽」と呼ばれる聖域であった。

八重山諸島

中心となる石垣島をはじめ、竹富島、小浜島、黒島、新城島(上地島、下地島)、西表島、由布島、鳩間島、波照間島、与那国島の 12 の有人島および多くの無人島からなる島々である。

石垣島から沖縄本島までは約 411 キロメートル、台湾までは約 277 キロメートル。

行政区分では、沖縄県石垣市、八重山郡竹富町及び与那国町の 1 市 2 町からなり、有人島では、石垣島が石垣市、与那国島が与那国町にそれぞれ属し、他の 10 島はすべて竹富町に属する。

有人の八重山諸島

石垣島(石垣市)		石垣空港の白保竿根田原洞穴遺跡から約 2 万年前の人骨が出土
与那国島(八重山郡与那国町)		日本の最西端に位置する島で国境の島と呼ばれる。
八重山郡竹富町	西表島	「表」は石垣島の於茂登岳を指し、於茂登岳の西に位置することから西表島と呼ばれた。古くは「所乃島」や「古見島」。
	波照間島	日本最南端の有人島 波照間島に人が住み始めたのは、西表島に次いで 2 番目とされる。下田原貝塚は 3,700 年前まで遡る遺跡。出土土器は「下田原式土器」。フィリピン文化との関連も指摘されている。 八重山地域は縄文文化の圏外で、南方の台湾・フィリピン・インドネシア方面の影響が濃い。3～12 世紀は空白。
	黒島	石垣島と西表島の間にある。 琉球王朝時代は八重山・宮古島の造船基地
	小浜島	・海垣は干潮時に石垣内に残った魚を獲る石干見の一種 ・カンドウラ石(雷石、霊石)は嘉保根御嶽(カブニワン)内の二つの石で、大岳から転がして雨乞祈願などを行う。 ・節定め石には方角を示す十二支の穴が掘られ、穴と星との位置関係によって農作業の時期などを決める。
	竹富島	日本最南端の町。竹富町役場は石垣島(石垣市)に置かれている。
	新城島(上地)	上地島と下地島は約 420 メートル離れているが、サンゴの岩礁(リーフ)で繋がっており、干潮時には歩いて渡ることができる。
	新城島(下地)	パナリ島——パナリは八重山方言で「離れ」を意味する。
	鳩間島	有人化は 15 世紀ごろ
	嘉弥真島	2022 年 12 月末で住民基本台帳人口は 1 人。無人島に区分されることも多い。
	由布島	砂州を指す方言の「ユブ」に由来。もと無人島で、稲作に不適であった竹富島や黒島の島民は、西表島に水田を開き舟で通って耕作を行っていたが、マラリアの無病地であった由布島に田小屋を仮設したのが有人化の始まりという。

なお、八重山諸島の無人島としては、内離島、外離島、小島、仲御神島、ウ離島、大地離島、平離島、マジパナリ、祖納地崎、鳩離島、赤離島などがある。

与那国島の神話

八重山諸島のうち、与那国島に独特の神話が伝わっているので、それを紹介しよう(池間栄三著『与那国の歴史』(1959)など)。

(一)ティダン・ドゥグル神話

大昔、南の島から陸地を求めてきた男が大海原の中にぽつんと盛り上がった「ドゥニ(島)」を発見した。

その男は南の島から家族を引き連れて、この島に住みついた。そのうちに人間が多くなったため神様にお願いすると草木で覆われた。

ところが、あるとき4か月間も大雨が降り続いたので人々は困窮した。すると一人の老人が現われ、竹がよく燃えることを教えてくれた。おかげで寒さをしのぐことができたが、大雨のおかげで谷や川ができ、島の姿がさらに美しくなった。これが与那国島である。

大雨も降り止み、最初に太陽の光の射したところを「ティダン・ドゥグル」といい、今に至るまで拝所(御嶽)になっている。

(二)ナガマ・スニ神話

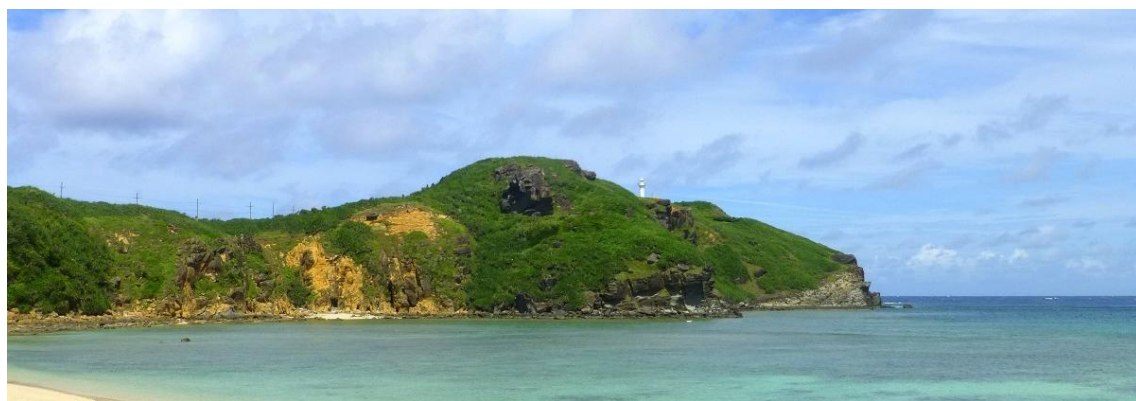
大昔、この島に大津波があり、人や家畜はことごとく死んでしまった。奇跡的に一人の母親と二人の男の子が助かった。

その母親は、自分の子と兄の子を抱えて荒波のなかを漂い、神様に救いを求めた。

すると、「ナガマ・スニ」という丘に漂着した。島の真ん中で、東西から押し寄せる波のぶつかり合うところだった。

ところが、この丘も危なくなつて、子を一人棄てるはめになったが二人の子のうち、どちらを捨てるべきか大いに悩んだ。やむなく母親は自分の実子の手を放した。

すると大津波は静かになり、母親と兄の子(甥)は助かった。島はその2人の子孫から再び栄えていった。



与那国島

(三)ドゥナダ・アブ神話

大昔、島の人々は野山の木の実や蔓の根を探して食べ、海岸に出て魚介類をとって暮らしていた。税金も掬もなかったので、人々は自由な暮らしをしていた。

ある日、青く澄みきった大空が、突然橙色に変わった。やがて赤色に変わり、ついに紅の炎となった。空の色が変わるにつれてどんどん暑くなっていった。人々は泣き叫んで天に向かって祈りを捧げた。

ついに空から火の雨が降ってきて、島のすべてが焼き殺されてしまった。

しかし、神の御心にかなった一家族だけが生き残った。その家族は神の声に従って「ドゥナダ・アブ」に隠れていた。

その子孫は耕すことを知り、また、働いて食糧を蓄えることを知って、島は栄えるようになった。

(四)イヌガン神話

大昔、久米島から特別な船が沖縄本島に向かって出帆した。その船は琉球中山王に奉る貢物を積んでいた。ところが悪天候のため漂流してしまった。

ようやくたどり着いたところが与那国島であった。

上陸すると住み心地のよさそうな島だった。この一行に1人の女と1匹の犬が加わっていた。

ところが男たちが次々と行方不明になって、ついに女と犬だけになった。男たちは犬に噛み殺されたのであった。それから女と犬は「イヌガン」というところで、一緒に暮らしていた。

ある日、隣の小浜島から1人の漁師が小舟に乗って漁に出たが、帰る途中に悪天候に遭って与那国島に漂着した。

あちこち探し回って、ようやく「イヌガン」にたどり着いた。ここで小浜の男は久米島の女に出逢った。驚いた女は「ここには猛犬がいて危険ですから、犬がいない間にこの島から逃げてください」と訴えた。

しかし、男は久米島の女が美人であったため、猛犬を退治しようと決心した。女には島を立ち去るように見せて、道端の大きな木に登った。

腰に刀を差し、手には銚(もり)を持っていた。すると猛犬が現われて、木の上の男に飛びかかってきた。男は犬に銚を打ち込んだが、犬は猛り狂ってなかなか弱らない。そこで木から飛び降りて、刀で斬り殺した。

いつしか二人は夫婦になって、五男二女の子宝に恵まれ、幸せに暮らしていた。

ところが、男は故郷の小浜島を忘れることができなかった。

久しぶりに故郷の小浜島へ帰ってきた小浜男に対して、小浜島の老妻が涙を流して出迎えた。

年月は過ぎ、男は老妻に与那国島に残してきた家族のことを話し、与那国島へ行くことを伝えたところ、老妻は怒ってなかなか聞き入れなかった。男はある夜ひそかに小浜島から逃げ出した。

怒った老妻は「小浜島と与那国島は縁を切った」と叫び、機織機にかけてあった織物を断ち切ってしまった。このことによって、今に至るまで与那国島の旅行者は海上で小浜島の唄を歌わない。

小浜の男は再び与那国島へ帰ってきた。ある夜、男は上機嫌で家族と話していた。すでに子供七人も生まれていることだし、ついつい妻に犬の死骸を埋めた場所を教えた。

その夜、女は家出した。翌朝、男が不審に思って犬を埋めた場所へ行ってみると、女は犬の骨を抱いて死んでいた。

この話から、与那国島のことわざに「子供七人持ってもまだまだ妻に気を許してはいけない」というのがある。この五男二女から与那国島は栄えたのである。

以上が与那国島神話であるが、世界各地の洪水神話などとも共通した国際性が感じられる。とはいえ、歴史を探究するうえで、民俗学的なアプローチは必要不可欠である。柳田國男を凌駕する新進気鋭の研究者の登場が待たれる。

石垣島の白保竿根田原遺跡

石垣島にも旧石器人の痕跡が残されている。

白保竿根田原遺跡(石垣市字盛山)は、旧石器時代から 16 世紀頃までの複合遺跡である。

全身骨格がほぼ残ったものとしては国内最古級の約 2 万 7 千年前の人骨が発見されるとともに、国内で初めての旧石器時代の墓域が確認された。

新石垣空港敷地内にあり、空港建設中の 2007 年に NPO 法人沖縄鍾乳洞協会が行った調査で洞穴内から頭、脚、腕などの人骨 9 点が発見された。また、その後の調査で 1,000 点以上の人骨片が出土している。



○2007 年の調査で発見された人骨

状態のよい 6 点について同協会、沖縄県立埋蔵文化財センター、琉球大学、東京大学等の専門家チームが放射性炭素年代測定を行ったところ、そのうちの 1 点の 20～30 代の男性の頭骨片(左頭頂骨)が国内最古の約 2 万年前、他の 2 点も約 1 万 8 千年前及び約 1 万 5 千年前のものと確認された。

○2010 年までの調査で発見された人骨

国立科学博物館が、2010 年までに出土した人骨 10 点のミトコンドリア DNA を分析した結果、国

内最古の人骨(約2万～1万年前)とされた4点のうち2点はハプログループM7aと呼ばれる南方系由来のDNAタイプであることが明らかとなった。



白保洞穴人の復元図

○2012年度から2016年度の調査で発見された人骨

沖縄県立埋蔵文化財センターが行った調査で19体以上の人骨が発見され、旧石器時代の人骨発掘としては世界的にも最大級と発表された。

人骨のうちの一体(4号人骨)は約2万7千年前(較正年代)のもので、全身骨格がほぼ残った人骨としては国内最古とされる。

4号人骨は、30代から40歳前後の男性のもので、身長は165.2cmと港川人(153cm)より高い。下顎と比較して上顎の歯の摩耗が顕著であり、特殊な歯の使い方をしていただ可能性が指摘されている。仰向けの姿勢で、膝を胸の前に折るとともに、両手が顔の近くになるように肘を曲げられ、地上の岩の間にあった。このため人為的に安置されたと考えられ、風葬の可能性があるといる。



これまで、直接測定による日本国内最古の人骨は、静岡県浜北区の根堅洞窟で発見された浜北人の約1万4千年前であった。なお、人骨そのものではなく、周辺の炭化物などから測定した日本国内最古の人骨は沖縄県那覇市の山下町第一洞穴で発見された山下洞人の約3万2千年前

のものとされている。

沖縄県の旧石器人(再掲)

出土島	旧石器人	年代	出土人骨	出土年・出土地
伊江島	ゴヘズ洞穴人	2 万年前	アゴの骨・頭蓋骨の破片	1977 年伊江村
	カダ原洞穴人	後期更新世後期	成人男性の左頭頂骨	1962 年伊江村
沖縄本島	山下洞人	3 万 2000 年前	6 歳位の幼児の大腿骨・脛骨	1962 年那覇市
	大山洞穴人	1 万 8000 年前	成人の下アゴ	1966 年宜野湾市
	港川人	1 万 7000 年前	ほぼ完全な人骨 5 体～9 体	1970 年八重瀬町
久米島	下地原洞人	1 万 5000 年前	8～10 か月の乳幼児の大腿骨 や下アゴの右半分など約 50 個	1983 年具志川村
宮古島	ピンザアブ人	2 万 6000 年前	頭蓋骨の破片	1979 年上野村
石垣島	白保洞穴人	2 万年前	頭、脚、腕などの人骨 9 点のほ か 1,000 点以上の人骨片	2007 年白保

台湾・中国およびフィリピンへの海上の道

先に、南部九州から沖縄の伊江島までの航海距離をまとめた表を掲載したが、沖縄から宮古島諸島・八重山諸島を経て、台湾・中国およびフィリピンまでの航海距離を継ぎ足せば次のとおりとなる。



南部九州から沖縄までの航海距離(再掲)

(単位:km)

薩摩半島ルート	大隅半島ルート	区間距離	累計距離	区間距離	累計距離	備 考
(A)	(B)	(A)	(A)	(B)	(B)	
野間岬	志布志湾	0	0	0	0	土橋遺跡
長崎鼻	佐多岬	70	70	75	75	高橋貝塚
竹島・硫黄島	馬毛島	40	110	27	102	
口永良部島	種子島	30	140	8	110	
屋久島		10	150	16	126	
口之島		54	204	54	180	
中之島		10	214	10	190	
諏訪之瀬島		19	233	19	209	
悪石島		14	247	14	223	
小宝島		33	280	33	256	
宝島		11	291	11	267	
上ノ根島・横当島		37	328	37	304	
奄美大島		55	383	55	359	
徳之島		32	415	32	391	
沖永良部島		32	447	32	423	
与論島		30	477	30	453	
沖縄本島		25	502	25	478	
伊江島		44	546	44	522	

沖縄から台湾・中国までの航海距離

(単位:km)

経由地	区間距離	累計距離	備 考
伊江島	0	0	
沖縄那覇	44	44	
慶良間諸島	27	71	
久米島	46	117	
宮古島	220	337	最長区間
多良間島	44	381	
石垣島	31	412	
西表島	23	435	
与那国島	70	505	
台湾北端	133	638	
中国東岸	170	808	

台湾

与那国島から台湾まで 133 キロ。

大陸と台湾が陸続きであった数万年前に旧石器文化を持った長浜人(台東縣長浜郷)が台湾に登場した。

彼らは洞窟や岩陰などに住み、動物や魚介類などの狩猟と木の実などを採取して暮らした。

5,000 年前くらいから新石器時代が始まり、いわゆる大坌坑(だいふんこう)文化が台湾全土に広がった。

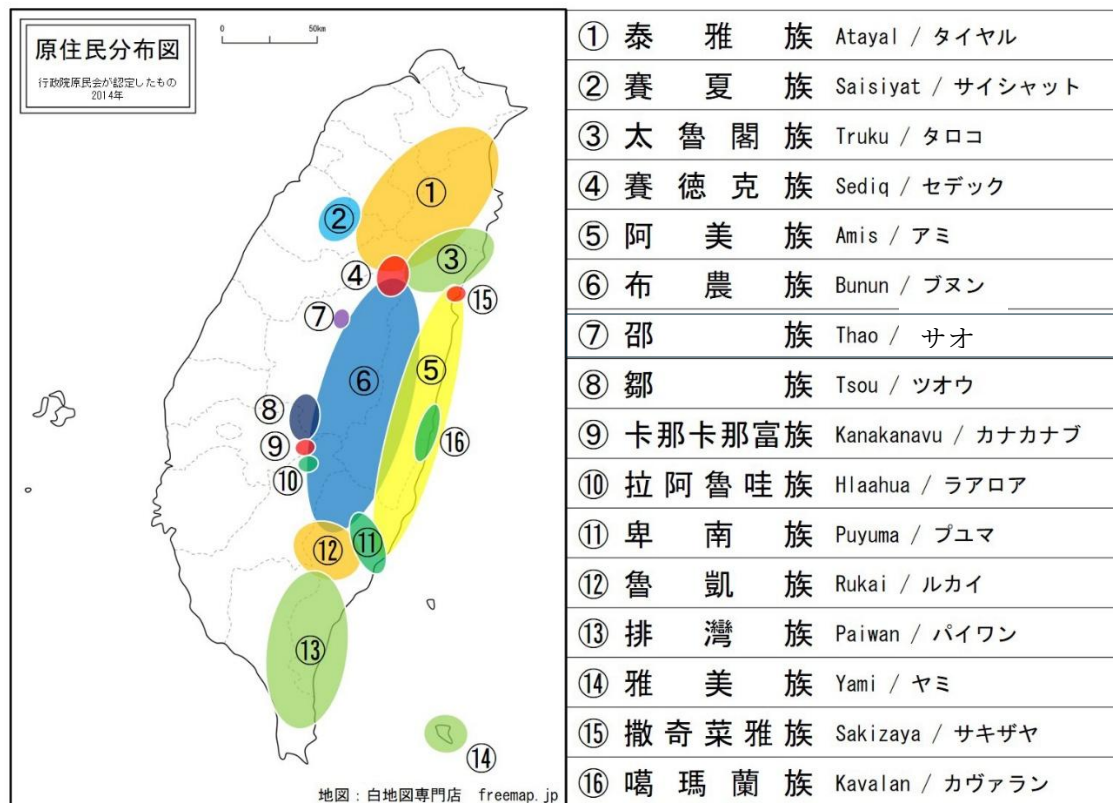
稲作は新石器時代中期(4500～3500BP)から始まり、鉄器時代は 500 年 BP ごろから始まる。

そしてフィリピン・インドネシア・オセアニア方面のオーストロネシア語族のルーツの島であった可能性すら指摘されている(「台湾先史時代遺跡から出土した古人骨と近代ブヌン人骨における炭素・窒素同位体分析」米田穰、向井人史、蔡錫圭・平成 20)

そういう意味において、北方日本との関係においても、南方のフィリピン・インドネシア方面との関係においても、人類史を解明するうえで極めて重要に位置を占めているのが、台湾の特性といってもいい。台湾は、太平洋における要衝の島なのである。

台湾原住民の分類

台湾の原住民について、日本統治時代の台湾総督府は、7 族に分類していたが、2018 年現在では 16 族に分類されている。



呉密察ほか『臺灣歴史地図』国立臺灣歴史博物館、远流出版公司、2018. p. 11 をもとに作成

1	タイヤル族 (Tayal、泰雅族)	・台湾北部から中部にかけての脊梁山脈地域に居住 ・タイヤル族からタロコ族とセデック族が分離 ・固有の文字なし ・首狩り族
2	サイシャット族 (SaySiyat、賽夏族)	・台湾の西部の新竹県と苗栗県の境界に居住 ・北系(山岳地帯の新竹県五峰郷)・南系(苗栗県高地の南庄郷と獅潭郷) ・サイシャット語
3	タロコ族 (Truku、太魯閣族)	・台湾東部・花蓮県北部の秀林郷、卓溪郷を中心に分布 ・日本統治時代はタイヤル族の支族とされていた。 ・もとタロコ溪谷流域に居住していた。
4	セデック族 (Sediq、賽徳克族)	・台湾中部の南投県と花蓮県の境界にまたがって居住 ・日本統治時代はタイヤル族の支族とされていた。 ・南投県から花蓮県に移住したセデック族の末裔は現在タロコ族と呼ばれている。
5	アミ族 (Amis、阿美族)	・台湾東部一帯の花蓮県・台東県・屏東県など ・平地集落 ・稲作・畜産・漁業 ・花蓮県瑞穗郷の舞鶴には石器時代の遺跡があり、二本の石柱はアミ族発祥神話
6	ブヌン族 (布農族)	・中央山脈の両側——南投県信義郷、仁愛郷、花蓮県卓溪郷、万榮郷など ・長老制度による父系氏族大家族社会 ・山岳系種族 ・独自のブヌン文字の伝承
7	サオ族 (Thao、邵族)	・日月潭周辺の土地に居住 ・日本統治時代に水力発電所の建設工事に伴いサオ族の居住地域が水没 ・現在は伊達邵を中心に居住 ・漢民族による迫害および先生媽(女祭司)の死去等によって独自の習俗はほぼ消滅
8	ツオウ族 (Tsou、鄒族)	・新高山(玉山)一帯 ・厳格な父系社会と・長老による合議制
9	カナカナブ族 (Kanakanavu、 卡那卡那富族)	・高雄市那瑪夏区に約 200 人余が居住 ・独自のカナカナブ語(オーストロネシア語族)
10	ラアロア族 (Hla'alua、 拉阿魯哇族)	・高雄市桃源区的高中里と桃源里、那瑪夏区の瑪雅里に居住 ・独自のラアロア語 ・以前は南ツオウ族と呼ばれていた。

11	プユマ族 (Pinuyumayan、 卑南族)	・台湾東部に1万人以下 ・独自のプユマ語(オーストロネシア語族) ・ただし次世代への継承は絶望的
12	ルカイ族 (Rukai、魯凱族)	・台東県、屏東県、高雄市に約12,000人が居住 ・独自のルカイ語 ・パイワン族と類似した貴族制度を有し、会所制度を有する父系社会
13	パイワン族 (Payuan、排湾族)	・台湾南部 ・オーストロネシア語族 ・北部山地のルカイ族、北東部平地のプユマ族
14	ヤミ族 (Yami、雅美族)	・唯一島嶼部(台湾本島の南東沖の蘭嶼)に居住する民族。タオ族ともいう。 ・フィリピンのバタン諸島に暮らすイヴァタン族のイヴァターヌン語と極めて類似しており、通訳なしでコミュニケーションが可能といわれる。 ・男は編み笠とふんどし、独特のベスト ・女性は腰巻き ・円錐形の金属の兜 ・魔避けの刀 ・半地下式の壁の低い木造家屋に居住 ・チヌリ克蘭などと呼ぶ漁船は海岸近くに半地下の小屋を作り収納

※ アミ族・パイワン族・タイヤル族・ブヌン族・プユマ族・ルカイ族・ツォウ族・サイシャット族・タオ族の9民族は「高山族」と総称されることもある。

ツォウ族の天降り神話と洪水神話

ついでながら紹介すれば、No8のツォウ族には、次のような神話が伝わっている。

「人類の祖先のニヴヌという女神が玉山の山頂に降り立った。その後で大洪水が起きたが、玉山にいた人たちや動物は生き残り、台湾各地に移り住んだ。ある兄弟は別れる際に弓を二つに分けてそれぞれ持って別れ、弟は南西の山麓へ降り、兄は北東へ旅立ってマーヤというものになった」天降り神話と洪水神話である。

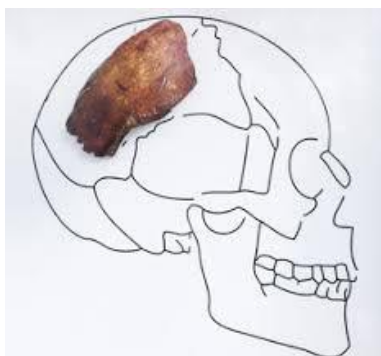
ツォウ族は、北東に旅立った兄のマーヤが日本人のルーツとする。

日本が台湾を統治することになり、日本人たちが大挙して「北東」の方角から台湾に渡来してきたとき、ツォウ族は兄の系統の「マーヤが帰ってきた」といって喜んだという。そのこともあって、ツォウ族は日本人を「マーヤ」と呼ぶなど、対日感情が特別良好な部族として知られている。

台湾における旧石器人

台湾の台南市左鎮区から左鎮人の頭蓋骨の一部が出土している。

約 2 万年～3 万年前と推定されており、台湾でもっとも早期に出現した先史時代における「長浜文化」の担い手であった可能性が指摘されている。



ちなみに、台湾における時代区分は、次のとおりとされている(宋 1980)。。

1	先史時代	先陶時代	約 1 万 5,000～5,000 年前	旧石器時代
2		新石器時代	約 5,000～1,500 年前	
3		鉄器時代	約 1,500～400 年前	
4	歴史時代		400 年前以降	

上記 1～3 の先史時代における台湾島の文化圏は、西海岸北部、中部、南部地区と東海岸地区という 4 つの圏域に区分できるという(宋 1980、黄 1986、国分 1999)。

1	北部地区	大坌坑文化、円山文化、芝山岩文化、植物園文化、十三行文化
2	中部地区	牛罵頭文化、營埔文化、番仔園文化、大邱園文化
3	南部地区	大坌坑文化、牛稠子文化、墾丁文化、鳳鼻頭文化、大湖文化、蔦松文化
4	東部地区	長浜文化、麒麟文化、卑南文化、アミ文化

なお、台湾における旧石器遺跡は次のとおり。

1	乾元洞 (台東県長浜郷)	石器は礫器、剥片石器、剥片、石質は砂岩、石英、フリント。 年代は炭化物片の C-14 年代測定で、「>15,000B.P. (NTU-136)」(宋 1969)。
2	海雷洞 (台東県長浜郷)	石器は礫器、剥片石器、剥片、石質は砂岩、石英、フリント。また獸類の長骨片を 1 点発見(宋 1969)。
3	潮音洞 (台東県長浜郷)	石器は礫器、スクレイパー、尖頭器、不定形剥片石器、チップ多数、石質は砂岩、石英、玉髓。魚骨も多く出土し、イソマグロ、ハリセンボン、ミナミクロダイなど。また骨角器も発見され、漁撈用のヤス、単式釣針など(宋 1969)。

		年代は炭化物片の C-14 年代測定で、 $5,240 \pm 260$ B.P. か $3,290 \pm 260$ B.C. (NTU-69)、 $5,340 \pm 260$ B.P. か $3,370 \pm 260$ B.C. (NTU-70)、 $4,970 \pm 250$ B.P. か $3,020 \pm 250$ B.C. (NTU-71)、 $4,870 \pm 3000$ B.P. か $2,920 \pm 300$ B.C. (Y-2638) (宋 1969)。
4	崑崙洞 (台東県長浜郷)	洞穴の最下部から出土。石器は礫器、剥片石器、剥片、石質は砂岩、石英、フリント(宋 1969)。
5	鵝鑾鼻遺跡(からんび) (台湾最南端の恒春半島)	文化層 I は有文土器文化(約 2,500 年前) 文化層 II は彩文土器文化(約 3,000 年前) 文化層 III は縄文紅色土器文化(約 4,000 年前)、 文化層 IV は先土器文化(約 5,000 年前) 石器は片刃礫器 1、剥片石器 3、凹石 2 点。石質は砂岩。骨製品はイノシシの犬歯製の錐 1 点、シカの長骨製の尖頭器 1 点。 貝製品はヤコウガイの蓋製の貝製削器(貝削器) 109 点。貝殻はサザエが 90% 近く存在。 獣骨はイノシシ、シカが主。魚骨はイルカ。亀甲が大量に出土。 年代はヤコウガイの殻で C-14 測定を行い、$4,820 \pm 100$ B.P. (Beta-6159)、$4,790 \pm 120$ B.P. (Beta-6727) (李 1983)。 約 5,000 年前に先史人(先土器時代人)の渡来があり、その後 2,500 年前頃まで継続的に先史人(新石器時代人)の活動が行われていた。海岸までは 200m 足らずの距離で漁労中心の生活(李 2003)。
6	龍坑遺跡 (墾丁国家公園内)	石器は剥片石器、碎片。骨製品は骨錐、骨スクレイパー。貝製品は、貝スクレイパー。また、多量の貝殻、亀甲、獣骨が出土(李 1984)。
7	小馬洞穴 (台東県小馬)	海岸から離れた山麓の 10 数ヵ所の石灰岩洞穴群。 石器は砂岩製の礫器、剥片石器、石英製の不定形剥片石器類。貝類、魚骨、獣骨が出土。年代は貝殻で C-14 測定を行った結果、$5,770 \pm 50$ B.P.、$5,730 \pm 50$ B.P. (黄 1991)。
8	芝山巖遺跡 (台北市士林区)	大規模な新石器時代の貝塚・包含層(圓山文化、粗縄文陶文化)。 最下層部から片面加工の「礫器」1 点。この礫器は近くの旧石器時代包含層から崩落して再堆積したもので、石器の表面にフジツボの貝殻が付着していることから、この石器が堆積した時期この場所は汽水域であったと判明。年代は 1 万～7,000 年前より古いと推定(劉・素 2000)。
9	圓山遺跡 (台北市中山区)	大規模な新石器文化(圓山文化、大坌坑文化)の遺跡として有名。 1992 年地表下 120～100cm の黄褐色土層中から、先陶文化の石器群を発見。石器は剥片石器 17、スクレイパー 3、尖頭器 1、碎片 13 点。石質は砂岩、水晶、フリント。年代は 1 万～6,000 年前の間と推定され、続先陶文化とされる(劉・素 2000)。

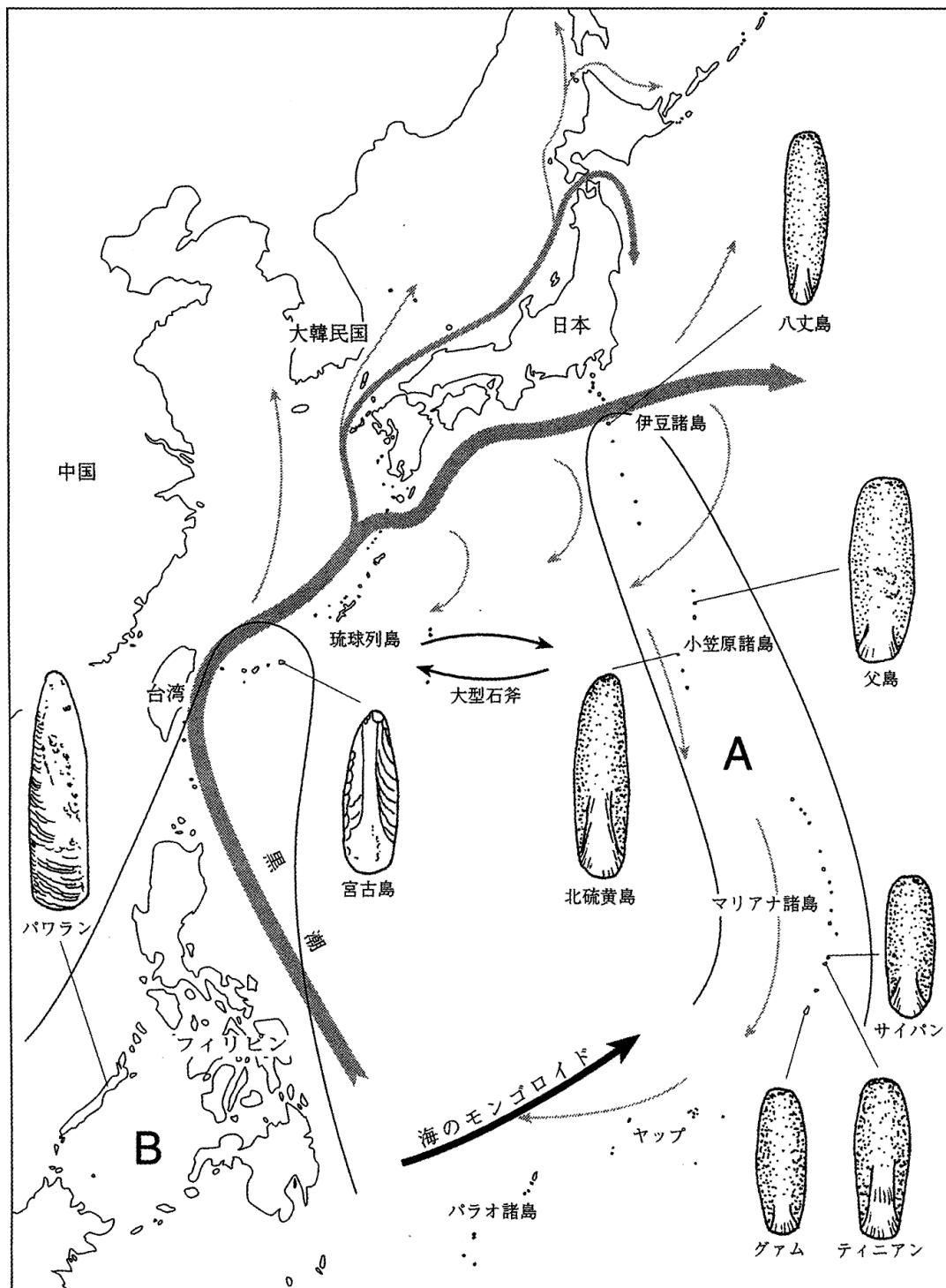


図2 斧の来た道 (A: マリアナ円筒石斧文化圏、B: フィリピン貝斧文化圏)

台湾からフィリピンまでの航海距離

台湾からフィリピンまでの航海距離についても紹介しておこう。



台湾北端から台湾東南端の白沙鼻まで約 360 キロメートル。そこから東南方向マニラ島約 153 キロメートル。そこからイットバヤット島やマハタオ島、シナカン島、サブタン島、ハブヤン諸島のフガ島に到着すれば、28 キロ先に横たわっているのがルソン島である。

多様な民族

フィリピンは、100 以上から一説には 200 近いとまでいわれる多民族国家である。

現在のフィリピン人の大多数はマレー系であるが、インド、中国、アラビア、スペインなどからの移民を祖先とする人々や、彼らとの混血も含め、多様な民族がフィリピン社会を構成している。

フィリピンで最も古い民族は、25,000～30,000 年前の旧石器時代に渡来してきたネグリティ族 (Negrito) といわれている。

Negrito はスペイン語で「小柄で黒い人」という意味である。ネグリートともいう。

東南アジア系で、フィリピンのアエタ族・アティ族・バタク族・ママンワ族なども同族である。

フィリピンのほか、インド・ミャンマのアンダマン諸島の 10 民族やマレーシアのセマン族、タイのマニ族などもネグリティ族といわれている。

次に新石器文化を持った原始マレー族と棚田水田農耕を持った古マレー族が渡来してきた。

フィリピンの主な人種構成

タガログ族	フィリピンの主要民族。ルソン島を中心に居住。推定人口は 2,000 万～2,500 万人。タガログ族はフィリピンの公用語。 「タガイログ(Tagalog)」は河の民や河岸に住む人々を意味する。
セブアノ族	ビサヤ族の主要な民族。人口は約 1,200 万人。タガログ族に次ぐ勢力。セブ島を中心にネグロス島、レイテ島、マスバテ島、ミンダナオ島の一部に居住。言語はセブアノ語。セブは浅瀬を歩いて渡ることを意味する。
イカノ族	主にルソン島北西部の低地や沿岸地域に居住。人口は約 800 万人。イカノ語を母語。野菜の栽培、家畜の飼育、およびタバコの生産。
ビサヤ族	ビサヤ諸島に居住。人口は約 681 万人 セブアノ族、ヒリガイノン族、ワライ族など多くの部族に分かれている。
パンパンガ族	古代にパンパンガ川の下流に居住していた。ルソン島中部に居住。パンパンガ語を母語。人口は約 300 万人。大規模な水田耕作。
ビコラノ族	ルソン島東南部のビコール半島などに居住。ビコール語はタガログ語に近い。ビコラノ美人。人口は約 600 万人。主たる産業は農業。
ワライ族	サマール、東レイテ、ビリランなどに居住。人口は約 310 万人。 かつてはラオンという神やアニミズムを信仰していた。稲作と漁業。
ヒリガイノン族	パナイ島、西ネグロス、南ミンドロなどの島々に居住。人口は約 700 万人。 ヒリガイノン＝沿岸部に住む人々。イロンゴ族(Ilonggo)とも呼ばれる。
パンガシナン族	パンガシナン＝塩を産する地域。人口は約 116 万。ルソン島のイロコス地方や中部ルソン地方に居住。イカノ族との混血が進んでおり、パンガシナン族と他の民族を区別することが難しいとされている。
モロ族	スールー諸島、パラワン島、ミンダナオ島などに居住するイスラム教徒の総称。バジャウ族、ヤカン人、タウズク人、サマル人、マラナオ人などのサブグループに分かれている。人口は約 250 万人。スペインとの戦争により衰退。
イゴロット族	ルソン島北部のコルディラ・セントラル山脈の地域に居住するマレー系民族の総称。イゴロット＝山の人。棚田稲作を行う高地イゴロット族と陸稲栽培を移動耕作する低地イゴロット族。 自然界の精霊や神々を崇拝する精霊信仰。自然に対する畏敬の念。
イフガオ族	少数民族。北部のイフガオ州に居住。「バナウェ棚田」は 1995 年に世界遺産に登録。
ボントック族	ルソン島北部に居住。人口は約 5,000 人。かつては首狩り族、頭蓋崇拜、生贄など。
イバロイ族	山岳系のイゴロット族の一部。自然環境との調和や伝統的社会の重視。
イスナゴ族	山岳系のイゴロット族の一部。伝統的な農耕と祭・儀式。
カリンガ族	カリンガ州に居住。主にイゴロット族に属する。

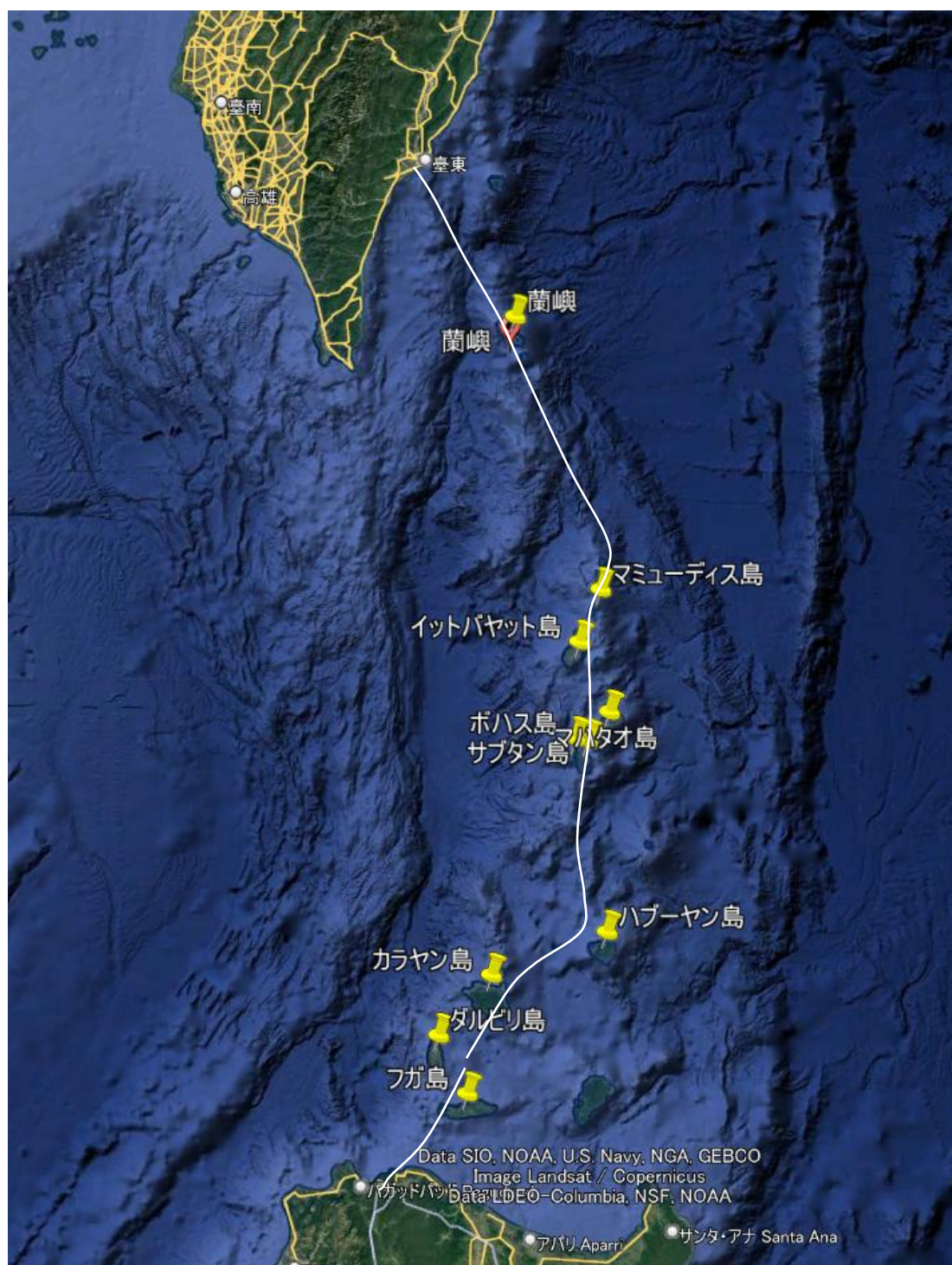
	伝統的な刺青「カリंगा・タトゥー」。男性は胸や腕にタトゥーを入れる。 農耕や狩猟、織物、伝統的音楽や舞踏、祭り。
カンカナイ族	ベンゲット州北部に居住するイゴロット族の一部。 男性と女性はそれぞれ別々の「寮」に住む。 女性寮で行われる「言い寄り」という習慣。男性が女性寮に訪れ、女性に対して求婚を行うなど、独自の文化と伝統を維持している。
華人	中国系移民。経済や貿易、流通の分野で大きな影響力を有している。福建省を中心に起源を有し、19 世紀中盤以降、政治的な不安定や経済的な機会を求めて移住が増加した。
メスティーソ	中国人、スペイン人、日本人、アメリカ人などとの混血を総称する言葉。 スペイン統治時代の軍港・サンボアングはスペイン人との混血率が高い。

台湾からフィリピンまでの航海距離

(単位:km)

経由地	区間距離	累計距離	備 考
台湾北端	0	0	
臺東	250	250	
蘭嶼	80	330	
マムーデイス島	110	448	最長距離
イトバヤット島	10	450	
マハタオ島	30	480	
サブタン島	4	484	
バブヤン島	77	561	
カラヤン島	43	626	
ダルピリ島	22	648	
フガ島	15	663	
ルソン島	27	690	





台湾からフィリピンまでの島々

マビューデイス島	Mavudis 島はフィリピンのバタネス諸島にある最北端の島。 イヴァタン語で「低い」という意味。イヴァタン語の「北」を意味する Dihami とも呼ばれる。マンゴーとヤシの島。現在無人島。
イトバヤット島	Itbayat 島はバタン諸島の島の一つで、フィリピン最北端の有人島。 主な産物はニンニク、パイナップル、ヤシ。ヤシガニの生息地。
マハタオ島	Mahatao 島。2020 年の国勢調査では人口 1,703 人。 小さな火山島で、海に面した断崖と緑の丘陵が連なる海岸線が魅力的。「マールボロ・ヒルズ」と呼ばれる草原と一年を通じた穏やかな気候。
サブタン島	Sabtang 島は)ルソン島北部のバタン諸島の島。噴火によって形成された島で、土地は急峻。2000 年の時点で人口が 1,678 人。言語はイヴァターヌン語。
バブヤン島	Babuyan 島はルソン海峡に位置するバブヤン諸島最北端の島。バブヤン・クラロ(Babuyan Claro)とも呼ばれる。 人口は 2010 年の国勢調査で 1423 人。休火山の島。
カラヤン島	Calayan 島はバブヤン海峡に浮かぶバブヤン諸島の島。2007 年の時点では人口が 8919 人
ダルピリ島	Dalupiri 島はルソン海峡に位置するバブヤン諸島の一つ。 2007 年の時点で人口 606 人。平坦な丘陵の島。熱帯雨林で河岸にはパンダナスが生える。島内最大の動物はフィリピン水牛カラバオ。鳥類ではハシブトゴイやムナオビクイナなど。爬虫類ではミンドロワニの小集団が生息。最大の爬虫類はミズオオトカゲ。
フガ島	Fuga 島はバブヤン諸島の島の一つ。2000 年の国勢調査では人口 1,786 人。珊瑚礁に囲まれる。 2019 年 4 月、島を所有する企業と中華人民共和国企業が 20 億ドルを投資して島にスマートシティを建設する計画に合意した。フィリピン政府はこの計画に対して強い警戒感を抱いている。
ルソン島	Luzon 島はフィリピン諸島のうちで最も面積の大きな島。首都マニラがあり、フィリピンの政治・経済の中心地。人口は約 4,622 万人で、フィリピンの総面積の 35%、総人口の 52%を占める。世界で 17 番目に大きな島で、世界で 5 番目に人口が多い島。



これまで述べたことを要約すれば、次のとおりとなる。

【南部九州から沖縄に至るコース】

上ノ根島・横当島と奄美大島との間の 55 キロが最長距離であるが、それでも一日の航海で渡ることができる。島伝いに目的の島を目視しながら進むことができる割と安全なコースである。

九州の古代人がゴホフラ貝やイモガイなどを求めて沖縄に渡ったことも十分に理解できる。

【沖縄から台湾・中国に至るコース】

久米島と宮古島の間が最長で 220 キロの距離で、最低でも2泊3日の夜間航海が必要であろう。しかも、与那国島から台湾北端までの距離も 133 キロ、台湾から中国東岸までは 170 キロの台湾海峡を横断しなければならない。

古代人が日常的に航海するコースとしては、かなり厳しいというべきであろう。

【沖縄から台湾・フィリピンに至るコース】

台湾北部から東岸に沿って南下すれば、最長区間は台湾南端の蘭嶼からマニラ島に渡る 110 キロの距離で波が荒いが、このコースを越えることができれば、あとは島伝いにわりと安全にルソン島まで進むことができる。

そして、フィリピンの島々を南下していけば、そのまま東南アジアの島々にも渡ることができる。

このコースは、台湾・中国に至るコースよりもはるかに安全である。

逆にいえば、倭人の南方からの渡来ルートとしては、中国・台湾コースよりも、東南アジア・フィリピン・台湾コースの方がメインルートであった可能性が高い。

ただし、以上紹介した島々は、基本的に 2000 年前から現代にかけての地勢もとに述べたもので、はるか 4 万年前の地勢に基づくものではない。

日本地質学会会員高山信紀氏の「旧石器人の琉球列島への航海」によると、4 万年前の島々と現在とは大きく異なっている。

7,300 年前に鬼界カルデラが大噴火したからである。噴火以前は、巨大な火山が海上にそびえ立ち、奄美大島以南は 6 つの大きな島々で構成されていたという。

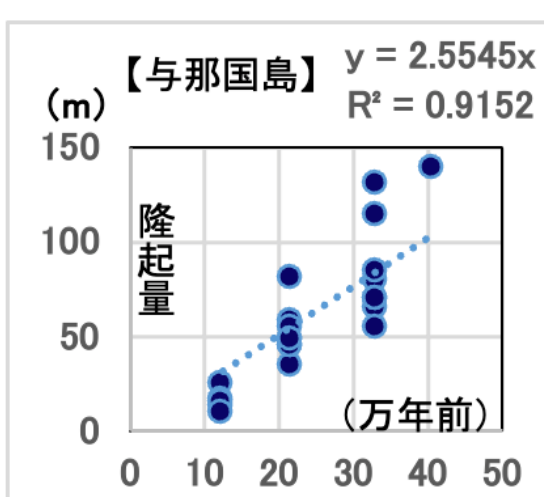
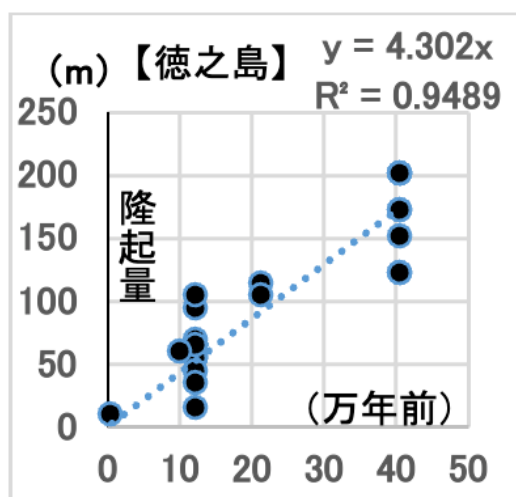
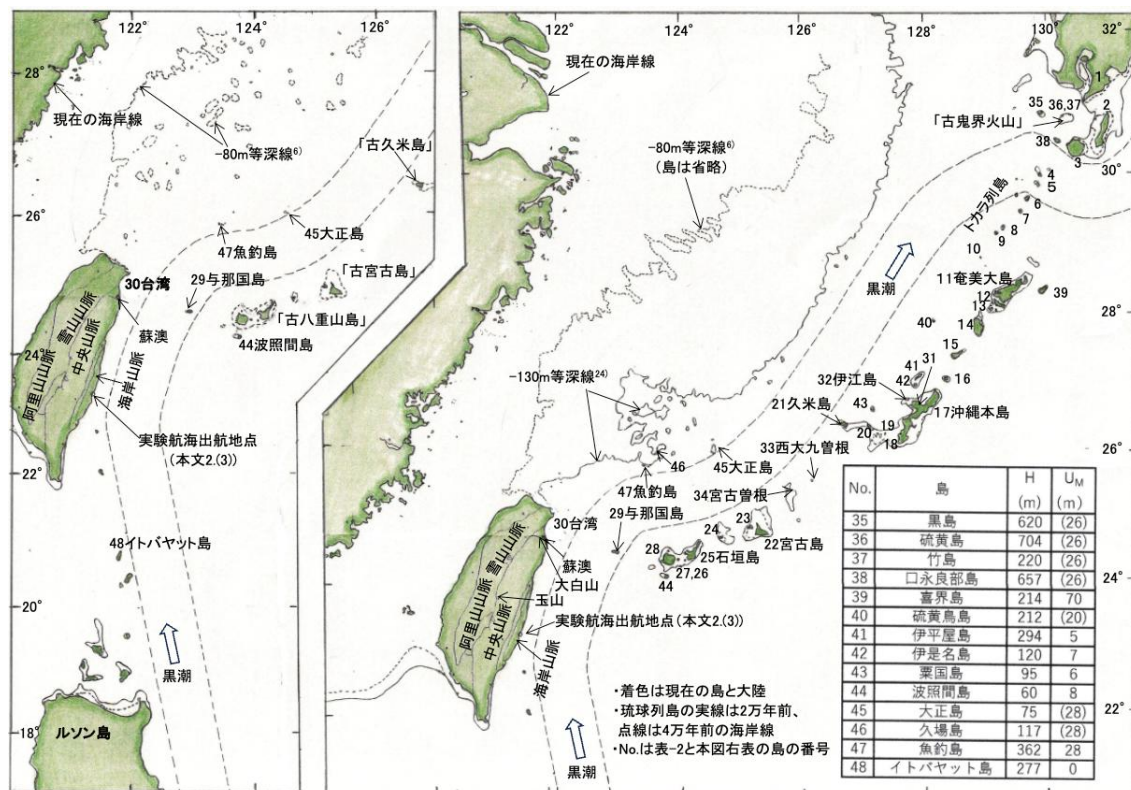
	噴火前	噴火後
1	古奄美大島	奄美大島, 加計呂麻島, 与路島
2	古沖縄島	沖縄本島, 伊江島, 古宇利島, 渡喜敷島, 座間味島
3	古久米島	渡名島, 喜島, 久米島
4	古宮古島	宮古島, 伊良部島, 下地島
5	古八重山島	石垣島, 竹富島, 小浜島, 西表島
6	古宮古曾根島	宮古島東方の宮古曾根島(現在は海没)

4 万年前の台湾についても、西側は大陸とつながっていたが、東側は海で与那国島と隔てられ

ていたという。

そして、2 万年前になると、種子島と屋久島が九州と陸続きになり(「古南九州半島」、4 万年前の「古沖縄島」と「古久米島」が一つの島(「古沖縄・久米島」)になり、久米島南西の西大九曾根島(「古西大九曾根島」)が海上に現われたという。

2 万年前の台湾は、海水準が 130m 低下したにもかかわらず、与那国島とは海で隔てられていたという。



点線は隆起速度が一定とした場合←

No.	現在		4 万年前					2 万年前	
	島名	高さ H (m)	隆起量 U _M (m)	高さ H _M (m)	海上 距離 (km)	L (km)	可視	海上 距離 (km)	可視
1	大隅半島	959	3	1036	—	128	—	—	—
2	種子島	282	16	346	25	76	〇〇		
3	屋久島	1936	26	1990	5	176	〇〇		
4	口之島	628	(15)	693	53	106	〇〇	50	〇〇
5	中之島	979	(15)	1044	8	129	〇〇	8	〇〇
6	諏訪之瀬島	796	(15)	861	18	117	〇〇	17	〇〇
7	悪石島	584	(15)	649	15	102	〇〇	15	〇〇
8	小宝島	103	(15)	168	31	54	〇〇	29	〇〇
9	宝島	292	15	357	9	77	〇〇	3	〇〇
10	横当島	495	(15)	560	40	96	〇〇	40	〇〇
11	奄美大島	694	12	762	55	111	〇〇	55	〇〇
12	加計呂麻島	326	(12)						
13	与路島	297	(12)	365		78			
14	徳之島	645	20	705	15	107	〇〇	7	〇〇
15	沖永良部	240	(16)	304	31	72	〇〇	29	〇〇
16	与論島	97	11	166	29	54	〇〇	29	〇〇
17	沖縄本島北 同 南	503 —	4 8	579	20	97	〇〇	19	〇〇
31	古宇利島	107	12						
32	伊江島	172	10	230	15	63	〇〇		
18	渡喜敷島	227	11						
19	座間味島	161	(11)	243	15	65 79	〇〇		
20	渡名喜島	179	(16)	374					
21	久米島	310	16						
33	西大九曾根	-100	(5)	—	—	—	—	97	▲▲
34	宮古曾根	-24	(5)	51	140	32	★★	30	○△
22	宮古島	115	5	190	58	58	△△	35	○△
23	伊良部島・ 下地島	89	6			54			
24	多良間島	34	4	110	30	45	〇〇	12	〇〇
25	石垣島	526	18	588	30	98	〇〇	25	〇〇
26	竹富島	21	15						
27	小浜島	99	14	531		93			
28	西表島	469	18						
29	与那国島	231	6	305	64	72	〇〇	62	〇〇
30	台湾	1369	164	1285	108	142	○△	107	○△

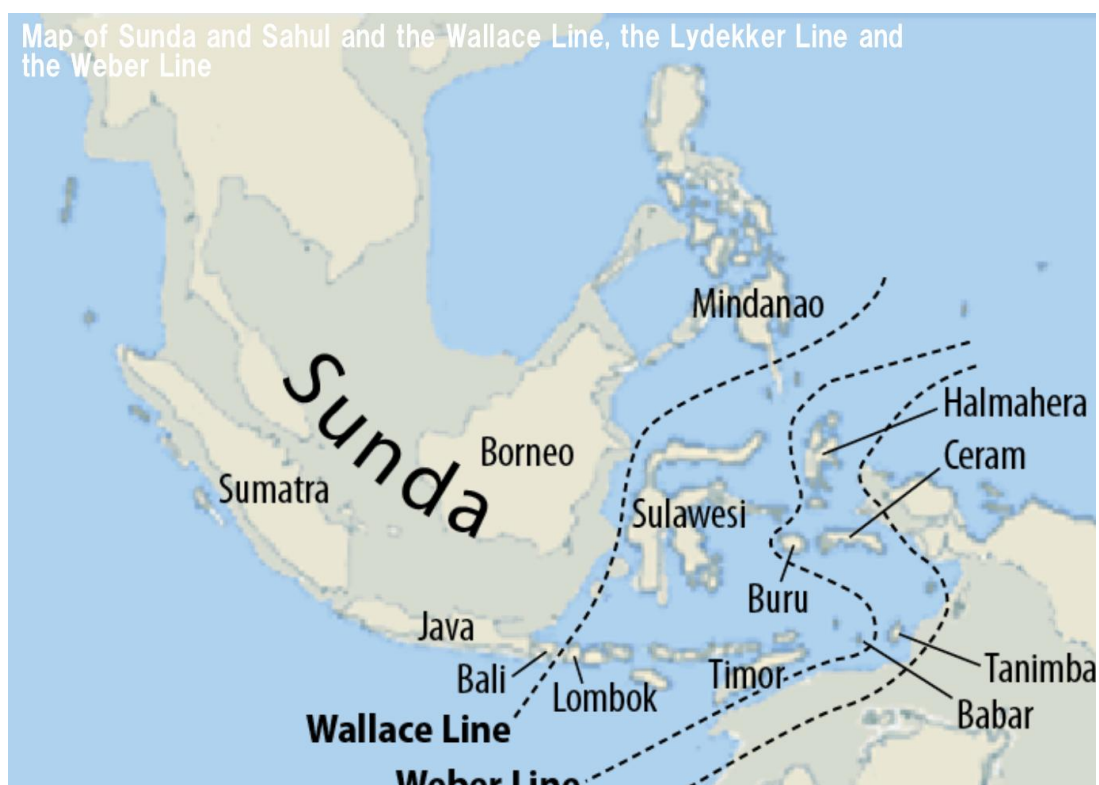
(註)

- ・「高さ H」は現在の最高点標高、ただし宮古曾根は其中最浅の 重宝曾根の水深 15)、台湾は与那国島対岸付近の大白山の標高。
- ・「隆起量 UM」は 4 万年前以降の隆起量、() は近傍の島より推測。
- ・「高さ HM」は 4 万年前の海面からの高さ。
- ・「海上距離」は島と島の間の距離。
- ・「L」は当該の島の最高点が海上の舟から見える最大距離。(本文 2.(3))
- ・「可視」の左側の○, △, ▲, ★は九州から台湾方面へ向かう航海のとき、右側はその逆の航海のときに目指す島が見えるか否かを示す。○は出航時の舟から見える。△は出航時の舟からは見えないが、島の最高点から見える。▲は島の最高点からは見えないが、出航した島が見える範囲内の海上の舟から見える。★は上述の全ての所から見えない。

本稿においては、九州から沖縄までの貝の道をたどりつつ、旧石器時代の遺跡や現世人類の痕跡を求めて、沖縄・宮古諸島・八重山諸島から台湾・フィリピンに到着した。

フィリピンまでくれば、東南アジアは目と鼻の先である。

日本人の祖先は東南アジアの「スンダランド(Sundaland)」から北上した現世人類が、琉球列島や日本に移住・拡散した「南方起源」(DNA 分析)の可能性が指摘されている(佐々木 2003、篠田 2007、溝口 2011)。スンダランドとは、マレー半島からインドネシア諸島、カリマンタン島などが陸地でつながり、広大な大陸を形成していたとみる説である。



小田静夫氏も「考古学からみた新・海上の道」のなかで、

「現在、確認される日本列島最古の人類遺跡は、約 4 万～3 万 5,000 年前頃の琉球列島と古本州島(九州・四国・本州)に発見される旧石器文化である。その石器群様相は『礫器・磨石・不定形剥片石器』にその特徴を示し、それらはスダンランドの旧石器文化と共通した石器群様相である。この事実は、東南アジアの旧石器人集団が、約 4 万年前頃に「黒潮」(日本海流)を利用して、フィリピン諸島、台湾、琉球列島を経由して、日本列島の太平洋沿岸地域に移住・拡散したことの証左と考えられるものであった(NHK スペシャル「日本人」プロジェクト編 2001、小田 2014)」

とされている。

もちろん、日本人は太平洋地域からの流入に加えて、朝鮮半島方面とオホーツク海方面から流入しているが、日本人の伝統的な文化と温和な性格のなかに、南方的な要素を感じるのは決して筆者ばかりではなかろう。

フィリピンまできたので、このまま東南アジアからチェスの発祥地・インドを経て、人類発祥の地・アフリカに向かいたい気持ちもあるが、それはまた別の機会に譲り、このあたりで日本へ引き返した方が無難であろう。

(次号へ、つづく)

河村哲夫(かわむら・てつお)

福岡県柳川市生まれ

九州大学法学部卒

歴史作家

福岡県文化団体連合会顧問

ふくおかアジア文化塾代表

立花壱岐研究会会員

元『季刊邪馬台国』編纂委員長

西日本新聞 TNC 文化サークル講師・朝日カルチャーセンター講師

大野城市山城塾講師



〈おもな著作〉

『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全5巻)』(1995年海鳥社)

『小楠と立花壱岐』(1998年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)

『立花宗茂』(1999年、西日本新聞社)

『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999年角川書店)

『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001年西日本新聞社)

『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003年海鳥社)

『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)

『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年11月梓書院)

『北部九州における神功皇后伝承』(2008年、『季刊邪馬台国』97号、98号)

『九州における景行天皇伝承』(2008年、『季刊邪馬台国』99号)

『『季刊邪馬台国』100号への軌跡』(2008年、『季刊邪馬台国』100号)

『小楠と立花壱岐』(2009年11月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)

『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010年3月海鳥社)

『小楠の後継者、立花壱岐』(2011年1月、『環』藤原書店)

『天草の豪商石本平兵衛』(2012年8月藤原書店)

『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013年12月原書房)

『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014年6月原書房)

『法頭の旅・ブッダへの道』(2012～2016年『季刊邪馬台国』114号～124号に連載)

『日本古代通史』第1巻～第4巻(2024年11月Amazon・kindle版)

『日本古代通史』第5巻(2025年1月Amazon・kindle版)

(テレビ・ラジオ出演)

平成31年1月NHK「日本人のおなまえっ! 金栗の由来・ルーツ」出演

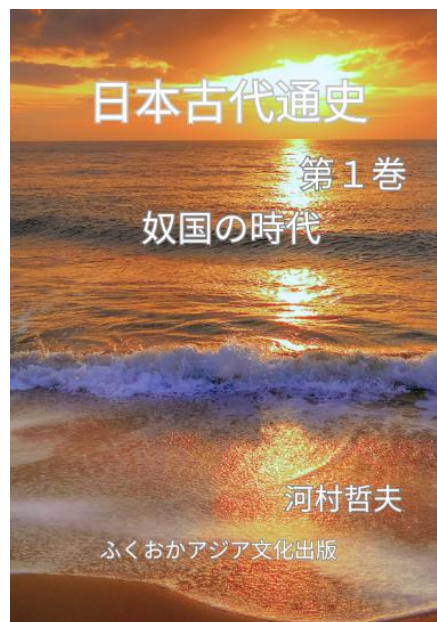
平成28年よりRKBラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演

令和6年4月よりYouTube番組「河村哲夫の古代史チャンネル」に出演中

河村哲夫の『日本古代通史』

第1巻～第5巻

・ご購入は、Amazon(アマゾン)の通販サイトから直接お願いします。
書店では、お取り扱いいたしておりません。



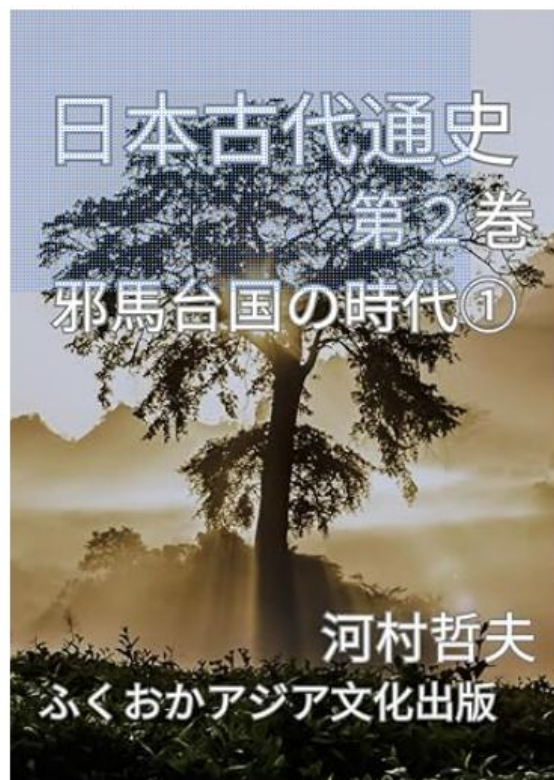
『日本古代通史』第1巻 奴国の時代(令和4年11月刊行)

河村哲夫

¥2,750(消費税含)

『後漢書』『三国遺事』『日本書紀』など中国・朝鮮・日本文献を総合的に活用しつつ、考古学的な成果などを織り交ぜながら、奴国の実像に迫る渾身の古代ドキュメント——ライフワークを飾るその第1巻

第1巻 目次
【Ⅰ】卑弥呼の鏡
【Ⅱ】天照大神の鏡
【Ⅰ】邪馬台国前史としての奴国
【Ⅱ】高天原の神々
朝鮮半島南部の倭人の痕跡
北部九州のクニグニ
奴国の神々



『日本古代通史』第2巻 邪馬台国の時代①(令和4年11月刊行)

河村哲夫

¥2,750(消費税含)

『魏志倭人伝』と『古事記』『日本書紀』など日中の文献を総合的に分析しつつ、当時の東アジア情勢のなかでの邪馬台国と「卑弥呼＝天照大神」の外交手腕について具体的に述べる。また、帯方郡から邪馬台国へ至るクニグニの状況を明らかにする。

第2巻 目次
卑弥呼の登場
卑弥呼の外交①
卑弥呼の外交②
【邪馬台国への道】
三韓諸国
対馬と壱岐
末盧国と西海の島々
末盧国から伊都国へ
伊都国から奴国へ



『日本古代通史』第3巻 邪馬台国の時代②(令和4年11月刊行)

河村哲夫

¥3,300(消費税含)

筑紫平野における邪馬台国最後の道をたどり、卑弥呼の死と天照大神の天の岩戸および247年の日食との関係を明らかにし、投馬国と狗奴国の所在地を明示する。そして、新たな女王台与が登場する。

第3巻 目次
夜須をゆく
朝倉をゆく
日田をゆく
投馬国は豊の国
狗奴国は肥の国
狗奴国と卑弥呼の死
卑弥呼と台与



『日本古代通史』第4巻 後期・邪馬台国の時代①(令和4年11月刊行)

河村哲夫

¥2,750(消費税含)

卑弥呼の死後、邪馬台国は筑紫平野から英彦山を越えて、京都平野や彦山川・遠賀川流域方面へと勢力を拡大させていく。その一方で、高天原を追放されたスサノオは息子の五十猛らとともに出雲に向かう。『魏志倭人伝』・『古事記』・『日本書紀』・『風土記』などの徹底的な読み込みはもとより、考古学的成果や地域伝承などを踏まえた驚愕の古代ドキュメント

第4巻 目次
英彦山と京都平野
神夏磯媛と豊比売命
英彦山と宗像
ニギハヤヒ
スサノオと五十猛命
出雲の神々
スサノオとクシナダヒメ

○『日本古代通史』第5巻「後期・邪馬台国の時代②」



『日本古代通史』第5巻 後期・邪馬台国の時代②(令和5年1月刊行)

河村哲夫

¥3,300(消費税含)

出雲神話に対する抜本的な見直しを求める書である。『古事記』『日本書紀』『風土記』とともに、地域伝承を活用し、さらには近年の考古学的発見を基に、邪馬台国論との融合を試みた新たな出雲論を提起している。また、ニギハヤヒと丹波との関係を精密に分析しつつ、天日槍に関する意欲的な新説を提起する。

第5巻 目次	
隠岐の島	出雲の銅鐸
大国主命	出雲の銅剣・銅矛・銅戈
大国主命の国づくり	出雲の古代文化
出雲の国譲り①	ニギハヤヒと丹波
出雲の国譲り②	天日槍と但馬